

宮城県多賀城市を 中心とした板倉の 形態と技法

東北工業大学 工学研究科 建築学専攻

渡邊 亮

THE FORMATION
AND TECHNIQUES
OF ITAKURA IN
TAGAJI CITY
MIYAGI
PREFECTURE

宮城県多賀城市を中心とした板倉の形態と技法

目次

序論	1
第1章 風土と歴史	2
1. 位置と風土	
2. 歴史	
第2章 研究概要	6
1. 研究背景	
2. 板倉の研究について	
第3章 調査概要	9
1. 調査日程	
2. 調査方法	
第4章 遺構の解説	12
1. 板倉の解説	
(1) S 家住宅板倉	
(2) E 家住宅板倉	
(3) K 家住宅板倉	
(4) K 家住宅板倉	
(5) A 家住宅板倉	
(6) I 家住宅板倉	
(7) M 家住宅板倉	
(8) I 家住宅板倉	
(9) K 家住宅板倉(北棟)	
(10) I 家住宅板倉(南棟)	

- (11) Y 家住宅板倉
- (12) K 家住宅板倉
- (13) I 家住宅板倉
- (14) S 家住宅板倉(北棟)
- (15) A 家住宅板倉
- (16) I 家住宅板倉
- (17) G 家住宅板倉
- (18) S 家住宅板倉
- (19) T 家住宅板倉
- (20) T 家住宅板倉
- (21) I 家住宅板倉
- (22) K 家住宅板倉(東棟)
- (23) K 家住宅板倉(西棟)
- (24) E 家住宅板倉
- (25) K 家住宅板倉
- (26) S 家住宅板倉(南棟)
- (27) S 家住宅板倉(北棟)
- (28) I 家住宅板倉(北棟)
- (29) S 家住宅板倉
- (30) S 家住宅板倉(南棟)
- (31) S 家住宅板倉(北棟)
- (32) O 家住宅板倉
- (33) T 家住宅板倉
- (34) T 家住宅板倉
- (35) O 家住宅板倉
- (36) K 家住宅板倉
- (37) K 家住宅板倉
- (38) S 家住宅板倉
- (39) K 家住宅板倉(南棟)
- (40) S 家住宅板倉(南棟)
- (41) W 家住宅板倉

- (42) T 家住宅板倉
- (43) G 家住宅板倉(恩賜郷倉)
- (44) M 家住宅板倉
- (45) T 家住宅板倉
- (46) S 家住宅板倉
- (47) S 家住宅板倉
- (48) T 家住宅板倉
- (49) S 家住宅板倉
- (50) S 家住宅板倉
- (51) S 家住宅板倉
- (52) T 家住宅板倉

第5章 多賀城の板倉の特徴と他地域との比較 64

- 1. 多賀城の板倉の特徴
 - (1) 配置
 - (2) 柱間隔と類型
 - (3) 壁組
 - (4) 屋根と小屋組み
 - (5) 庇と装飾
 - (6) 大工との関わり
- 2. 郷倉と基本形
- 3. 他地域の板倉との比較

結論 80

注釈・参考文献 82

謝辞

巻末付録 調査図面

序論

宮城県多賀城市において、東北地方太平洋沖地震で被害を受けた板倉・土蔵・石倉の大規模な調査を行った。維持管理が困難な事から解体を余儀なくされている対象も多々あり、一方で、その文化的な価値から移築を検討している対象もあった。

多賀城市には神亀元年（724）から 10 世紀頃まで国府が所在していたこともあり、市内には縄文時代から近世に至る歴史の中で 41 カ所の遺跡が存在している。これらは、江戸時代以来続く保護活動により、特別史跡や歌枕などの歴史的環境が良好な状態で現在に伝えられており、平成 23 年 12 月 6 日に農林水産大臣、文部科学大臣及び国土交通大臣は、多賀城市から認定申請があった「歴史的風致維持向上計画の認定」を受理した。本研究はこの計画の重点区域における施策事業の一環である、板倉等調査・保存・活用事業に関わる調査の依頼を受けた経緯が成り立ちである。

4 年を通してのべ 68 棟(うち板倉 52 棟)の調査を行い、実測図を作成した。我が国で、局地においてこれだけ多くの「倉(蔵)」に重点をおいて研究を行った記録は皆無と言っていい。本研究ではこの好条件の調査対象を活かし、多賀城市における板倉の形態と技法を考察し、変遷を探ることや今後の維持管理に結び付ける事を主とする。

1 章では多賀城市の風土と歴史を、2 章では「研究概要」として研究背景と我が国での板倉研究の不足点と意義を、3 章・4 章では調査概要と各板倉の解説を構成している。5 章では多賀城の板倉の特徴と傾向、郷倉や他の地域との比較を述べていく。

第 1 章 風土と歴史

1.位置と風土、2.歴史

1. 位置と風土

多賀城は、宮城県のほぼ中央に位置し、西に七北川を境に仙台市宮城野区、北西は加瀬沼を隔てて利府町、北東は塩釜市と隣り合っており、佐田山運河を隔てて七ヶ宿町と隣接している。

多賀城市の情報は、平成 25 年度版統計書によれば下記の通りである(多賀城市 HP <http://www.city.tagajo.miyagi.jp/shimin-power/shise/toke/tokesho/h25> より)。

【多賀城市の概要】

- ・ 気温平均 12.7 度、最高 35.6 度、最低-5.8 度
- ・ 日照時間 1,879.5 時間 (1 日平均 5.1 時間)
- ・ 平均湿度 71 パーセント
- ・ 降水量 1,111.5 ミリメートル (1 日平均 3.0 ミリメートル最大日量 75.0 ミリメートル)
- ・ 最深積雪 20 センチメートル
- ・ 世帯数は 25,842 世帯
- ・ 人口は 62,413 人 (男 31,152 人、女 31,261 人) である(2016 年 1 月 1 日現在)。
- ・ 農家数 334 戸 (販売農家 243 戸、自給的農家 91 戸) ※2010 年農林業センサス
- ・ 農業産出額 5 億 1 千万円 ※平成 18 年宮城農林水産統計年報

年平均温度は 12.7℃と全国的に見ると涼しく、最高・最低も下からほぼ 3 分の 1 の順位になっている。年間降水量は全国平均値と比べて少ない方であり、年間日照時間も全国と比べると順位が半分程の位置にある。年間平均湿度はやや多湿ではあるが、東北地方においては雨も雪も多すぎない穏和な気候である。農業産出額はそれほど高くないものの、その約半分が稲作で占められており、倉の用途が明確に分かったもののほとんどが米蔵であることから、古くからこれが盛んであることがわかる。

仙台市中心部から交通の便が良いことや、仙台港の後背地が多賀城市域にあたることから、財政や物流などの面で豊かといえる。

2. 歴史

市名の由来は古代国府の「多賀城」よりとっている。多賀城の歴史は古く、多賀城市史¹⁾や歴史的風致維持向上計画²⁾が記載されているが、奈良時代頃から下記の出来事があることが分かっている。

●奈良時代

724 年(神亀元年)仙台平野を望む松島丘陵の先端に、大野東人によって築かれる。多賀城は陸奥国を治める国府として陸奥・出羽両国を統括し、さらに東北地方北部の蝦夷の地を国内に取り込む役割も担ったとされていて、その規模は約 900m 四方である。奈良時代には鎮守府も併せ置かれ、名実共に東北地方の政治・軍事の中心地であった。780 年(宝亀 11 年)に起きた伊治公皆麻呂の乱による炎上をきっかけに、多賀城外に道路で区画された町並みが整備された。

時の朝廷は都である奈良平城京を中心に西に大宰府、東に多賀城の三都市で国家を形作っていた。この縁で現在奈良県奈良市、並びに福岡県太宰府市とは友好都市の関係を結んでいる。

●室町(南北朝)時代

南北朝時代には、後醍醐天皇の建武の新政において陸奥守に任じられた北畠顕家、父の北畠親房らが義良親王(後の村上天皇)を奉じて多賀城へ赴き、多賀城に東北地方、および北関東を支配する東北地方の新政府、陸奥将軍府が誕生。

しかし、鎌倉時代後期には蝦夷の蜂起や安藤氏の乱などの内乱が続き、鎌倉幕府も平定のために兵を派遣し、幕府の権威が動揺する原因になったとされる。その後、後に室町幕府初代征夷大將軍となる足利尊氏が鎮守府將軍に任命された事をきっかけに、南北朝と足利氏の勢力争いの中で陸奥将軍府はその実を失ってしまったとされている。最終的には 14 世紀末多賀城国府は消滅した。

●安土桃山時代～江戸時代

1600 年(慶長 5 年)の関ヶ原の戦いの後、陸奥国における伊達政宗の所領が定まり、仙台城の普請縄張りとは城下町の建設を始めた。

仙台藩の制度においての特徴といわれているのが「地方知行制」で、これは家臣に知行地として土地を与え、そこから入る年貢を家臣の収入とするものであった。この頃に阿武隈川、名取川、北上川などの大規模な改修や開削を行い、新田開発が著しく進んだ。1640 年に行われた寛永検地をもとに仙台藩の村高をまとめた「正保郷帳」によれば、多賀城市域は耕地面積の 85.8%が水田だったという。

多賀城市域には全部で 13 の村があったとされているが、その中の最大規模の家臣は八幡に在所拝領していた仙台藩準一家天童氏であった。

1584 年、最上義光との合戦に敗れた 10 代城主天童頼久は、母方の実家であった国分氏を頼り、家臣たちと現在の多賀城市八幡地区へと移り住んだ。その後、天童氏は伊達政宗に厚遇され、多賀城一帯で最大の家臣になりました。山形県天童市との縁は、この経緯が

あり、現在は友好都市締結に繋がっている。

この頃の多賀城は八幡地区を中心に仙台から塩竈に抜ける街道に沿った村々で構成されていた。城下町仙台と塩竈神社を結ぶ街道沿いではあるが、仙台・塩釜間は 1 日足らずの道のりであるため、多賀城の村々は通過するのみであった。このため奥州街道沿いの村々ほど賑わわず、他地域の人々が居住する事もない落ち着いた村であったとされる。

●明治時代

明治 17 年（1884 年）5 月、連合町村区域構成が行われ、戸長公選は廃止。県令の任命制度となる。宮城郡の戸長役場は 32 ヲ所から 15 ヲ所と 2 分の 1 に減少。この連合町村区域構成により、多賀城は先駆けて一つの村に統一される。しかしこの統一は境界線の変更などがない旧 13 村の統合であり、旧村名はそのまま大字として残された。行政区域は笠神のごく一部が漁業権に関係し塩釜に編入された事と、戦後の耕地整理の関係で仙台市の一部と境界線の変更があった事以外はほとんど変更がなく、村から町、そして市へと成長発展している。

下表は多賀城市における大まかな出来事をまとめたものである(表 1-1)。

表 1-1 多賀城年表

年表・できごと			
紀元前1万年前	縄文時代	海岸部に近い市東部に縄文晩期の貝塚が発見されている	集落が形成されていたと推察
～			
紀元前4世紀			
紀元前3世紀	弥生時代	柵形囲貝塚が存在	
紀元前2世紀			
紀元前1世紀			
1世紀			
2世紀	古墳時代		
3世紀			
4世紀		丸山岡古墳群と稲荷殿古墳群が存在	
5世紀	飛鳥時代		
6世紀		陸奥国の成立	
7世紀	奈良時代	国府の創設	都市基盤の建設(河川の整備・東西大路・区画化)
8世紀	平安時代		
9世紀		藤原氏との合戦の拠点にも用いられた	
10世紀			
11世紀	鎌倉時代		
12世紀		南北朝の争いの後、多賀城国府の消滅	
13世紀	室町時代	留守氏から伊達氏へ勢力が変わる	
14世紀			
15世紀	安土桃山時代		
16世紀			
17世紀	江戸時代	関ヶ原の合戦後、仙台藩として所領が再確定	地方知行制により、水田の開発が大きく進む
18世紀			
19世紀	明治時代		近代化の波の中、江戸時代と変わらない農村地帯
20世紀	大正・昭和時代	第二次世界大戦の影響を受け、多賀城海軍工廠の建設	一時市の1/4が工場に
21世紀		市町村合併、現在に至る	仙台港の後背地、仙台のベッドタウンとして恩恵を受け発展
平成			

以上のことから、農業が可能な気候や恵まれた立地と、江戸時代に敷かれた仙台藩の政策とが合間って稲作が盛んになったこと背景が分かる。

○地震の被害

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本太平洋沖地震(地震規模マグニチュード 9.0、最大震度 7)においては甚大な被害を受けた。

東日本大震災の概要と、多賀城市の被害状況は以下のとおりである(宮城県 HP 震災・復興 <http://www.pref.miyagi.jp/site/ej-earthquake> より)。

【地震の被害】

- ・震源地：三陸沖 宮城県牡鹿半島の東南東約 130km 付近
- ・震度：5 強
- ・津波：仙台港において 7m、市内において 2～4m
- ・浸水面積：662 ヘクタール(市域の約 33.7%)
- ・被災世帯：約 6,500 世帯
- ・被災者数：約 15,000 人
- ・避難者：約 10,000 人
- ・死者数：188 人
- ・行方不明者：1 人

市自体が沿岸から近い距離に位置することから、津波の被害が大きい。更に、砂押川を逆流したことにより南側の堤防が決壊し水が流れ込んだため、津波による被害が海から遠い地域にも及んでいる。結果として市域の 1/3 が水没し、その地域の工場地帯と住宅が壊滅的な被害を受けた。

過去には、平安時代前期の貞観 11 年(869)の貞観地震、江戸時代中期の寛政 5 年(1793)の寛政地震、昭和 53 年(1978)に発生した、日本の宮城県東方沖を震源とする宮城県沖地震と、いずれも M7 以上の地震の被害に遭っている地域でもある³⁾。

今回の調査対象の内、最も古いもので江戸時代後期(1727～1861)の板倉、1835 年の板倉、1847 年の板倉であるから、少なくとも貞観地震との関連性は無く、寛政地震においてもその影響は薄いと推察できる。一方で、対象の中で最も新しい建設年が 1948 年なので、全ての対象が宮城県沖地震を乗り越えたと判断でき、一定の耐震性を備えているといえるだろう。

第 2 章 研究概要

1.研究背景、2.板倉研究について

1. 研究背景

調査を行った多賀城市では、平成に 23 年に国土交通省が定める「歴史的風致維持向上計画」の認定^{注1)}を受け、その計画内の「板倉等調査・保存・活用事業に関わる調査」の依頼を受けたことが本研究の決起となった(図 2-1)。また、依頼を受けた調査はその後、東日本大震災で被害を受けた為、保存や文化的な価値と認識と活用という点においてもその比重は一層高まった。

前章で示したように、多賀城市は豊富な文化的資源に恵まれており、同計画内でも、「古代多賀城」、「塩竈街道」、「農村集落」、「貞山運河」のそれぞれの歴史的風致の保全と維持向上に取り組んでいる。

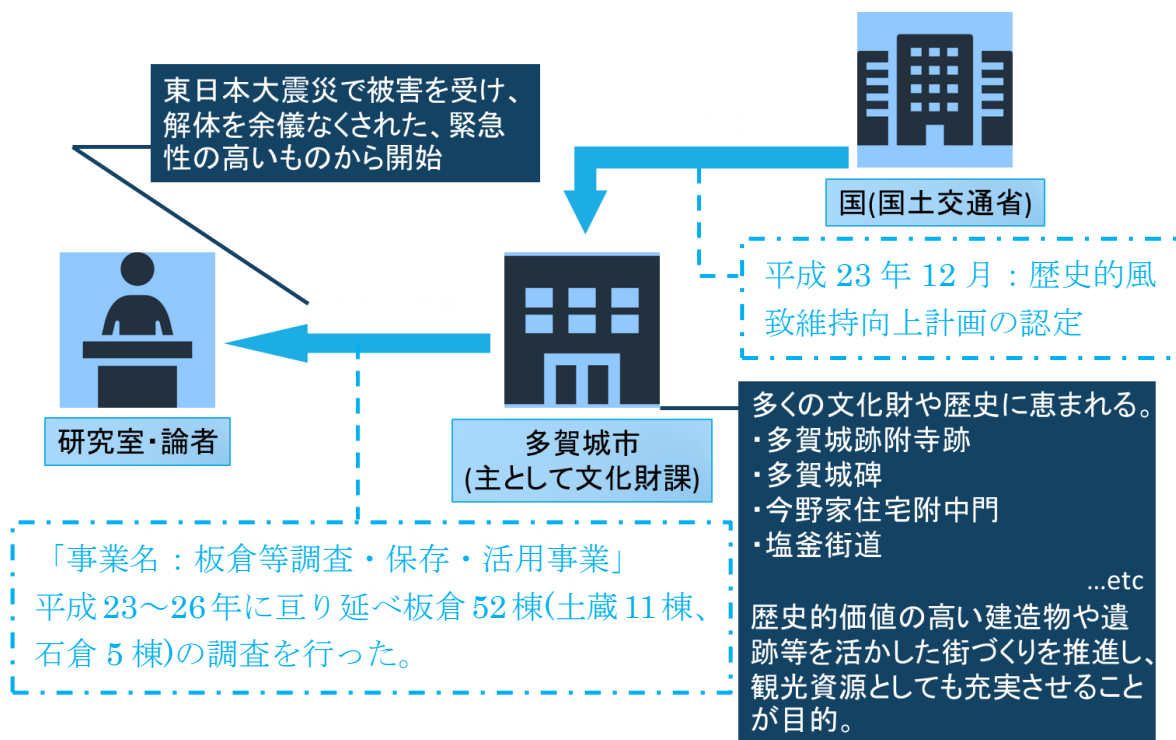


図 2-1 調査依頼の流れ

2. 板倉研究について

板倉には大きく分けて、木材を井桁に組んで積み上げた「井籠倉」、柱に溝を掘り、そこに厚板を落とし込んだ「落とし板倉」、柱間に溝を入れ、板をはめ込み、貫を組んだ「はめ板倉(羽目板倉)」が存在するが、宮城県のそして多賀城市では、主に粃の貯蔵の目的で「は

め板倉」が広く分布している(写真 2-1)。明確な定義はないものの、この「はめ板倉」のうち柱が密に並んでいるものを「繁柱形式」と仮称しており、多賀城市でもこの繁柱^{注2)}が目された(写真 2-2)。



写真 2-1 調査を行った多賀城の羽目板倉

写真 2-2 調査を行った多賀城の繁柱の板倉

一方で板倉の調査研究は、選定した地域内における少数の倉に着目したものや、農家との関わり、粃米の流通といった内容に関連するものはあるが、一地域内で数多くの倉の技法を考察したものやその形態に言及した論文は決して多くない。主屋に比べて調査研究が進んでいない実態があり、下記に列挙した既存の蔵(倉)の研究の問題点があると考えられる。

【問題点】

- ・調査された棟数も少なく、その為類型が定かでない
- ・基礎研究となる図面資料の少なさ
- ・大工の技術や工夫に着眼した研究報告がない
- ・年代ごとの分類や変遷が定かでない

宮城県においては唯一、当地域より北東に位置する北上川流域の繁柱形式の板倉について、黒坂貴裕氏をはじめとした「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」の論文^{注3)}があり、江戸期から明治期の特徴と変遷として、次の 5 項目にまとめることができる。①柱間寸法が 1 尺前後まで狭くなり、半柱が消える。②入口・底下の装飾が増す。③置き屋根形式も採用される。④気仙大工の関わりが認められる。⑤宮城県 の繁柱形式は繁柱と一枚板の縦張りの板壁を特徴としている。尚、同論文では今後の課題として、宮城県における「はめ板倉」の基本形式の検討を進める必要がある、と述べている^{注4)}。

そこで、当論文では、多賀城における 52 棟の実測調査と、引いては宮城県全域に渡る調査活動を通して、その形態と技法を明らかにし、また、大工職人との関係も考察しようとするものである。

考察においては技法・状況・形態の3点を軸に当論文の考察を展開している(図2-2)。技法においては柱の間隔や半柱や本柱の違い、壁や小屋組を含め、こういった大工技術が用いられており、こういった種類があるのかを5章第1節を中心に考察している。状況のキーワードは当時の大工の状況や棟札から判明したことをこちらで5章第1節で、形態のキーワードは宮城県の板倉の基本形と県内にどのような板倉の分布があるかを5章第2節と第3節でまとめている。

これらを踏まえて、当論文は宮城県の板倉の傾向と分布を解明し、加えて国内の板倉建築の基礎研究に寄与するものである。

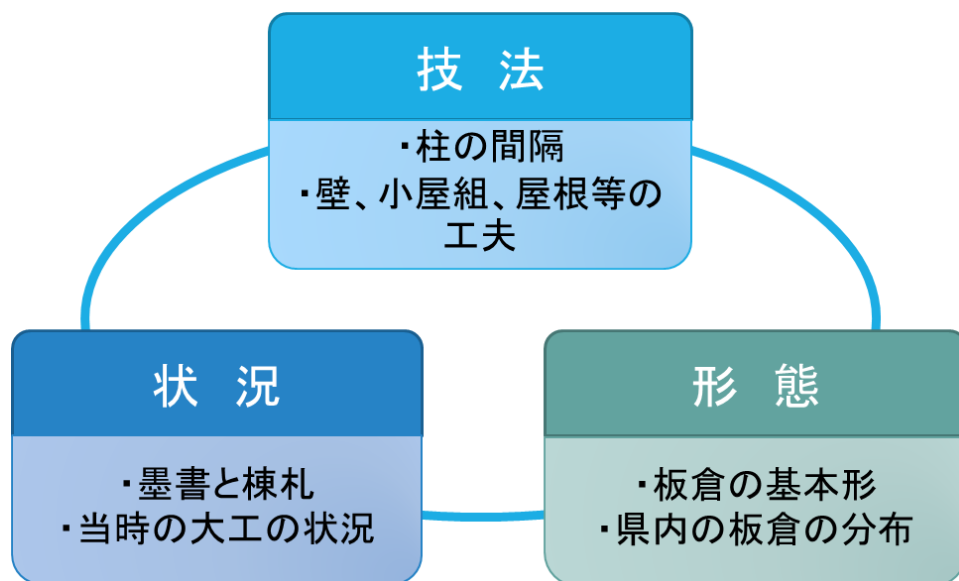


図2-2 考察の要点

第 3 章 調査概要

1.調査日程、2.調査方法

1. 調査日程

調査地域は、八幡、市川、南宮、浮島、高橋、高崎、山王、新田の 8 地区と市域の広範囲に渡る(図 3-1)。

多賀城市文化財課によれば、調査前の段階で市域内に 135 棟の板倉があることが確認されている。そのうち、状態が良く且つ調査が了承された倉の実測調査を行った。

調査対象は計 67 棟にのぼり、うち板倉 52 棟、土蔵 10 棟、石倉 5 棟である。それぞれの遺構と現地調査日程は、次の表の通りである(表 3-1)。

特に損傷が酷く、解体することが決定している対象については平成 23 年に、それ以外のものは平成 24 年以降に調査を行った。八幡地区は津波の被害を受け、初年度に調査を行った対象がほとんどだった。

表 3-1 調査年別の遺構一覧

	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	計 (棟)
	8/9～8/12、9/6～9/8	/8、8/27～29、9/24～2	5/28、8/9、8/22～23、 8/30、9/6	8/28	
板倉	No. 11 Y家住宅板倉	No. 6 I家住宅板倉	No. 42 T家住宅板倉	No. 40 S(南棟)家住宅板倉	52
	No. 3 K家住宅板倉	No. 16 I家住宅板倉	No. 41 W家住宅板倉	No. 14 S(北棟)家住宅板倉	
	No. 47 S家住宅板倉	No. 32 O家住宅板倉	No. 34 T家住宅板倉		
	No. 1 S家住宅板倉	No. 17 G家住宅板倉	No. 7 M家住宅板倉		
	No. 8 I家住宅板倉	No. 18 S家住宅板倉	No. 26 S(南棟)家住宅板倉		
	No. 44 M家住宅板倉	No. 50 S家住宅板倉	No. 27 S(北棟)家住宅板倉		
	No. 43 G家住宅板倉	No. 19 T家住宅板倉	No. 52 T家住宅板倉		
	No. 2 E家住宅板倉	No. 20 T家住宅板倉	No. 48 T家住宅板倉		
	No. 24 E家住宅板倉	No. 25 K家住宅板倉	No. 10 I(南棟)家住宅板倉		
	No. 36 K家住宅板倉	No. 22 K(東棟)家住宅板倉	No. 28 I(北棟)家住宅板倉		
	No. 5 A家住宅板倉	No. 23 K(西棟)家住宅板倉	No. 35 O家住宅板倉		
	No. 37 K家住宅板倉	No. 46 S家住宅板倉	No. 38 S家住宅板倉		
	No. 15 A家住宅板倉	No. 29 S家住宅板倉	No. 4 K家住宅板倉		
	No. 12 K家住宅板倉	No. 21 I家住宅板倉	No. 9 K(北棟)家住宅板倉		
		No. 45 T家住宅板倉	No. 39 K(南棟)家住宅板倉		
		No. 13 I家住宅板倉	No. 51 S家住宅板倉		
			No. 49 S家住宅板倉		
			No. 30 S(南棟)家住宅板倉		
			No. 31 S(北棟)家住宅板倉		
			No. 33 T家住宅板倉		
土蔵	K家住宅土蔵(1)	I家住宅土蔵(No. 6と同じ)			11
	K家住宅土蔵(2)	O家住宅土蔵(No. 31と同じ)			
	A家住宅土蔵	K家住宅土蔵			
	E家住宅土蔵	K家住宅土蔵(No. 25と同じ)			
	G家住宅土蔵	Y家住宅土蔵(No. 11と同じ)			
	B家住宅土蔵				
石倉	H家住宅石倉	K家住宅土蔵			5
	K家住宅石倉				
	S家住宅石倉				
	S家住宅石倉				
計 (棟)	24	22	20	2	68

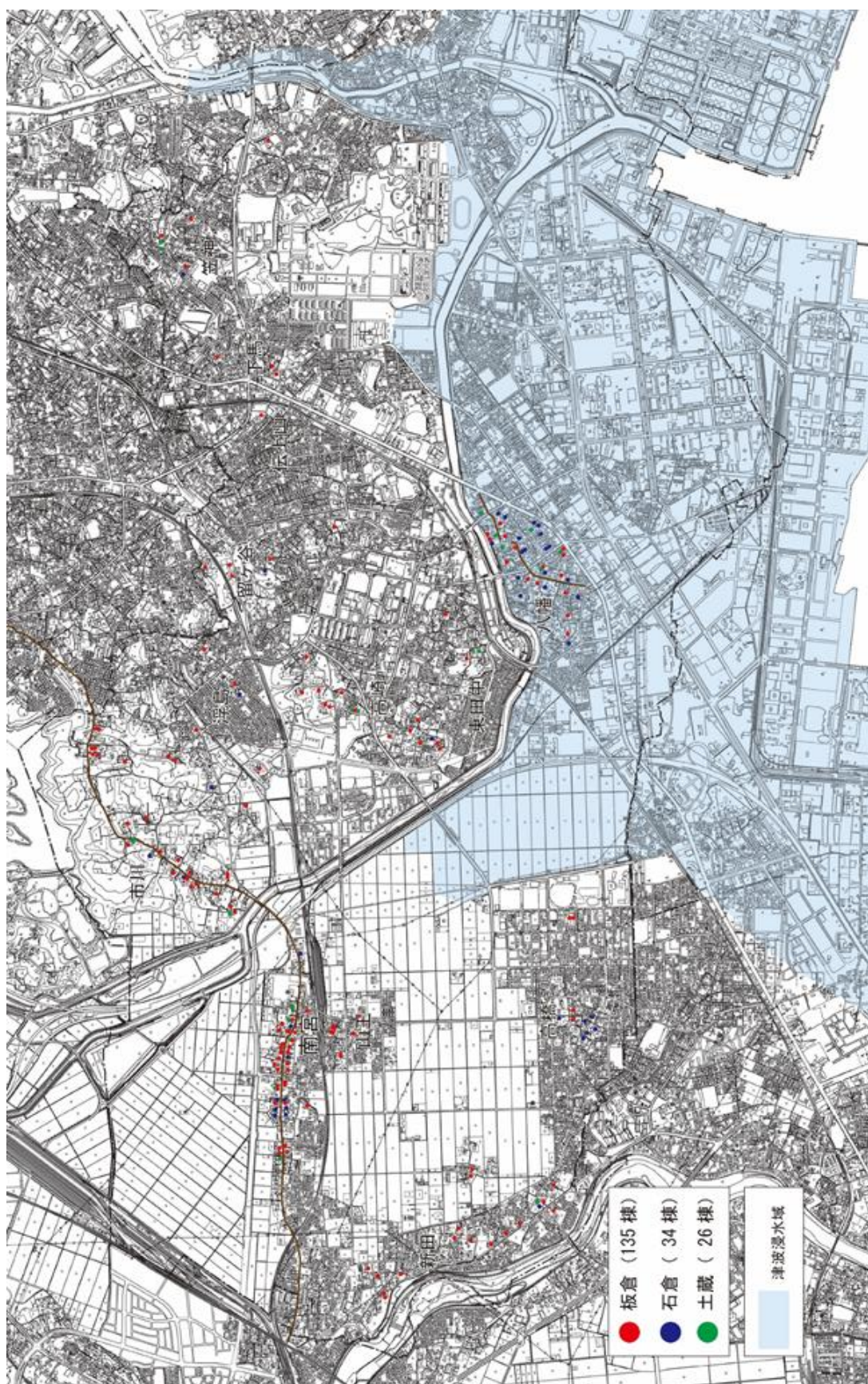


図 3-1 調査地域の地図

2. 調査方法

調査は、多賀城市文化財課により、事前に遺構の調査依頼や解体の有無などの聞き取り調査を行い、その後、配置図・平面図・立面図・断面図を野帳用紙に作図する実測調査を行っている。

作図を行うために、画板・野帳用紙・メジャー・計測竿・レーザー測定器、デジタルカメラ・筆記用具を用いている。作図方法は、配置図の場合、方位と主屋と遺構の関係がわかりやすいように、他に建築物である倉庫や井戸などがある場合は記入した。今回の調査では、敷地の正確な測量は行っていない為、敷地面積は不明である。平面図の場合、柱の本数の把握、柱の太さや柱間隔、壁厚は適当に記入し、さらに寸法の計測により倉の規模を明確にした。その他、床板の向きや壁組等の詳細部分も記入している。立面図の場合平面図と同様に、土台や柱の本数及び梁を適当に記入している。入り口や開口部は組み物や彫り物等の装飾があるため部分詳細図も作図した例もある。また、瓦の列と段の枚数は明確に記入している。断面図も同様に記入し、天井高、梁の寸法や高さを計測し明確にする。特に断面図と妻側の立面図との整合性に注意を払った。計測方法は、部材の長さや高さは計測竿や測定器を用いて計測し、床高・桁までの高さ・棟木までの高さ、貫の高さや間隔を記入している。

作図を行う上で、前述した装飾等や家紋や鬼瓦の模様他、特徴的な箇所は見落とさないよう注意を払い、メモを残し、細かい寸法、詳細図や写真を撮るなどをして補填している。また、遺構の全体の写真や内部の写真も撮り、正確に図面に記せるよう努めた。調査後、野帳や調査票、写真を元に CAD による製図を行った。

次章からは調査した各板倉の解説を行う。またその際作図した図面資料の縮小版は付録として巻末に掲載し、そちらと照らし合わせて解説と考察を行うこととする。

第 4 章 板倉の解説

1. 板倉の解説

1. 板倉の解説

(1) S家住宅板倉

所在：市川立石

S家住宅板倉は、桁行 5.4m、梁行 3.6m、1 階床面積 19.44 m²で 5.9 坪程度である。江戸時代の天保 6 年(1836)初夏に、当時の市川村大工棟梁であった齋三郎氏により建築されたもので、正確に建設年の判明している倉の中では最も古い。もともと家主は現住所から 500 mほど離れた作貫という土地に住んでいたが、昭和 49 年(1974)に移転する際、倉も移築された。柱は 140mm 角の柱と半柱を交互に 310mm 間隔で配置している。室内は、1 階と 2 階共に板張りで、米や粃などを貯蔵していた。

入口が平入、和小屋を基本とした小屋組で基礎の形式は不明である。

また、災害とは別に現在地が遺跡公園用地のため移転を求められており、次回移転する際には、これを期に移築はされず解体する予定である。



写真 4-1 正面



写真 4-2 側面



写真 4-3 内部の小屋組

(2) E 家住宅板倉

所在：新田字南関合

桁行 5.49m、梁行 3.66m、床面積 20.09 m²の板倉。

建立年代は江戸時代安政 5 年(1858)と記録が残っていて歴史の深い板倉である。また平成 3 年頃に西側に位置していたものを現在の南側の配置に移築されている、年代不明であるが瓦の葺き替えも行われている。

入口は平入、小屋組み形式は和小屋組・合掌組で基礎形式は布基礎となっている。屋根形式は切妻屋根で二重屋根であり、当初は木羽葺きであったが現在は瓦葺き屋根となっている。また、壁厚は 32 mm と非常に厚く、複数枚の壁板を用いた手法である可能性が高い。

東日本大震災による被害や津波浸水は受けていない。また、解体の予定は無い。



写真 4-4 正面



写真 4-5 側面



写真 4-6 壁に記された墨書

(3) K家住宅板倉

所在：市川字坂下

このK家住宅板倉は敷地の西側にあり、主屋と向かい合って近い位置に建っており、周辺の植栽が多い。桁行 4.65m、梁行 3.16m の床面積 14.69 m²で、調査した遺構の中でも比較的小規模なものであった。建立年代は江戸時代文久 3 年(1863)4 月と記録が残っており、平成 20 年に瓦葺き替えの改築がなされている。移築が確認されていない遺構の中では最も古い。また墨書きも見つかっている。

入口は平入、小屋組み形式は和小屋組と合掌組、基礎形式は玉石基礎。建設年は古いながらも、地震の被害は全くと言っていいほど受けていなかった。



写真 4-7 正面



写真 4-8 内部の小屋組



写真 4-9 壁に記された墨書

(4) K家住宅板倉

所在：市川地区

この板倉の建立年代は安政6年(1859)とされており、補強されている部分はみられるものの、倉自体に大きな破損はみられなかった。菊地家の敷地は広く、主屋や板倉の周りはL字型の畑に囲まれている。入口が北側にあり、敷地北西側に主屋、主屋の隣に少し離れて板倉が位置している。また、板倉は大小2つの倉庫に挟まれており、以上の他に車庫、納屋、ビニールハウス、井戸がある。板倉と隣り合った倉庫は左右ともに増設したような形で一体化しており隙間は無いが、内部での繋がりは見られない。

板倉の主な用途は、墨書により小豆や大豆を保管していたと思われるが、現在では1階、中2階とも畑仕事の道具等が置かれる物置として使われていた。

規模は、桁行4.54m、梁行3.02mであり、中2階はあり、床は板張りとなっている。床面積は13.71㎡、最高高さ4.97m、壁厚が15mmと比較的薄く、板壁の枚数は1枚だった。柱の本数は20本、半柱が16本あり、それぞれが交互に入れられてあるのではなく、北側壁面の2カ所のみ、半柱が入る個所に本柱が入っている。柱幅は125mm前後となっており、柱間隔は桁行が330mm前後であるのに対し、梁間は250mm前後だった。貫は3本、合決りは有りだった。

基礎は玉石を使用しており、GLから床面までの高さは550mmあるため、東側にある入口前には118mmと268mmの高さの石段が2列並べて設置されていた。入口の戸は木製の引戸で引き手部分は金属で装飾されており、仕組みのある鍵穴が付いている。周りには大きく広がった庇と鼠返しがあった。屋根形式は切妻造の二重屋根であり、屋根の仕上げは瓦葺き、庇の仕上げはトタンとなっていた。破風板には金属板を使用していた。鬼瓦は正面と背面の両面に同じものが設けられており、種類は「覆輪角張鬼瓦」と思われる。



写真 4-10 正面と屋根



写真 4-11 壁に記された墨書

(5) A家住宅板倉

所在：山王字東町浦

この倉は、敷地の西の中央に位置し、両妻側の軒下に垂れ下がっているギザギザな板の壁が特徴的である。規模は桁行 5.13m、梁行 3.42m、面積 17.5 m²。江戸時代の文久 4 年(1864)に建築され、当時は、現住所から東に直線距離で 1.5km 離れている留ヶ谷にあったが、昭和 21 年 (1946) に現在所へ移築された。室内は、1 階と 2 階共に板張りで、1 階は米を貯蔵し、2 階は農具を貯蔵していた。また、向かって、左側の屋根と柱の吹きさらしの空間は、増築された部分で時期は不明だが、馬車を収納するスペースだった。

入口は平入、小屋組は和小屋組と合掌組の複合、基礎に関しては不明だった。また、入口の木製戸には古い施錠があった。柱の間隔は 16 mm とかなり狭い。

今回の東日本大震災を受けて、倉の被害状況は、外傷は特に見られなかったが、維持管理の問題もあり解体する予定である。



写真 4-12 正面



写真 4-13 側面の日除け



写真 4-14 戸の様子

(6) I 家住宅板倉

所在：八幡 3 丁目

板倉は、現在は主屋が取り壊されており、その敷地奥に建っている。規模は桁行方向 5.34m、梁間方向 3.55m で、面積は 18.96 m²である。詳しい年代は不明だが江戸時代後期に建てられたことが判明しているので、平成 24 年に調査した遺構の中では最古の板倉である可能性が高い。主にもう使用することのない家具の物置として利用している模様。

入口は平入、小屋組は合掌組、基礎は不明である。一般的な切妻瓦葺の屋根だが、桁側の片方に広い庇の屋根が掛けられている。

震災による壁のひび割れなどの破壊はほとんど見られず原型を留めていた。



写真 4-15 正面



写真 4-16 側面



写真 4-17 内部

(7) M家住宅板倉

所在：八幡地区

この板倉の建立年代は江戸時代後期(1761 年~1867 年)とされており、平成 25 年に調査した中では最も古い倉だったが、板倉壁面に損傷がみられたものの倉自体に大きな破損はみられず、木製の破風板の建築装飾部分もきれいな状態で残って。また、板倉背面の壁には金属系の外装材が貼られていた為、損傷の有無は確認出来なかった。M家の敷地には、入口は南側中央にあり、敷地北西側に主屋、主屋正面に庭がある。板倉は主屋から離れた敷地南東側に位置している。また、板倉の他に倉庫(2 つ)、車庫、祠、井戸がある。板倉と隣り合った倉庫とは、人の肩幅ほどの隙間があり簡易な物置のような形で利用されていた。板倉の主な用途は、当時は米倉として使われていたようだが、現在では主屋が新築工事中であるため 1 階、中 2 階とも物置として使われていた。

桁行 4.53m、梁行 3.64m であり、形は長方形、中 2 階はあった。床面は板張りとなっている。床面積は 16.49 m²、最高高さ 5.90m、壁厚が 22 mm で板壁の枚数は 1 枚だった。柱の本数は 28 本で、柱幅は桁行、梁間共に 130 mm~140 mm、角と扉部分のみ 150 mm~155 mm となっており、柱間隔は桁行、梁間共に 308 mm~323 mm だった。貫は 5 本、合決りは無かった。

基礎は礎石、G L から床面までの高さは 550 mm ある為、西側にある妻入前には 360 mm の高さの石段が 1 段設置されていた。妻入は倉の中心からわずかに右側にあり、戸は 2 枚扉になっていた。外側の戸は木製の引戸で、引き手部分は金属で装飾されており、戸の左側の柱には鍵穴が付いていた。周りには細かい装飾が施された庇はあったが、鼠返しは無かった。屋根形式は切妻造の二重屋根だが、当初は平入りだった可能性があり、屋根の仕上げは石瓦葺き、庇の仕上げはトタンとなっていた。鬼瓦は正面と裏面の両面に設けられており、種類は三州瓦系の「雲型覆輪付跨鬼」だと思われ、「久」の文字が刻まれてた。



写真 4-18 正面



写真 4-19 内部の小屋組

(8) I 家住宅板倉

所在:八幡 3 丁目

波型トタンの庇が付いている、妻側 3.04m、桁側 4.56mの規模の小さい倉である。正確な年代は不明だったが、農具置きとして建てられ、明治元年(1968)に移築を行っていることが聞き取り調査で分かった為、江戸時代後期とみて間違いないであろう。

入口形式は妻入、小屋組み形式は和小屋組と合掌組の複合、基礎は玉石基礎。
内部の壁や天井にアルミの鉄板で補修されている。

八幡地区は近くの砂押川が逆流して津波が押し寄せた為、1.5m程度波に浸かり壁と柱が白く変色しているのが見て取れる。一方で、瓦の落下は一枚もなかったことから、地震の被害よりも津波の被害の方が大きかったようだ。



写真 4-20 正面と側面



写真 4-21 内部



写真 4-22 内部の小屋組

(9) K家住宅板倉(北棟)

所在：南宮地区

このK家住宅板倉は南宮地区にあり、J R陸前山王駅から北西に位置している。近くの道路は、車の通りは少なく静かである。

印象的であったのは、同敷地内の南棟に比べてかなり小規模な板倉であり、基礎が玉置であったことである。この板倉の年代は不明である。倉自体に大きな破損はみられないが、板の壁に隙間が数カ所みられる。用途としては、生活用具の保管等に使われている。

K家の配置は、板倉の他に、主屋・倉庫・庭・ビニールハウスがある。敷地面積の算出は出来ていない。

板倉の規模は、桁行 4.54m であり、梁行が 2.28m、最高高さ 4.09m となっている。建物の床面積は、1 階床面積 11.93 m²、2 階部分はない為 1 階床面積が延べ床面積になる。

壁は 1 枚板であり、板壁厚が 20 mm、張り方は横張りである。壁板の繋ぎ目は合決りとなっていた。入口部分に関しては、建物正面の右側にあり、木製の引戸である。戸に家紋があり、鴨居の溝は 2 本、扉は板戸が 2 枚入っていた。鍵は無いが柱の左側に鍵穴が有る。基礎は玉石基礎で G L から床面の高さは 530 mm ある為、妻入前には 200 mm の石段と 380 mm、150 mm の石段が設置されてある。屋根は瓦葺きであり、二重屋根はあり、雪止めは付いてなく、鍵や窓は無い。

使用されていた柱は 120 mm から 148 mm 角の材が用いられていた。入口部分の柱と倉の 4 隅に約 145 mm 角の柱が使われていた。柱の間隔は、桁側が約 325 mm、妻側が約 327 mm であった。貫の本数は 0 本である。



写真 4-23 正面



写真 4-24 内部

(10) I 家住宅板倉(南棟)

所在：南宮地区

この板倉の建立年代は明治6年(1873)とされており、倉の道路側の面には金属板が貼ってあったが、北棟とは異なり内部には貼られていなかった。板倉の外観には目立った破損等は見られなかったが、倉内部から観察すると、補強されている個所や、壁面の板のずれや割れが多くみられた。板倉の主な用途は、当時は米倉として使われていたようだが、現在は物置として使われていた。平成14年頃より前までは、現主屋の場所に板倉があったといふことだが、主屋を建てるため板倉を180°回転させた上で移築させたとのことだった。

規模は、桁行5.44m、梁行3.63mであり、形は長方形、中2階は無かった。床面は板張りとなっている。床面積は19.75㎡、最高高さ5.45m、壁厚が23mmで壁の枚数は1枚だった。柱の本数は40本で、柱幅は桁行、梁行共に125mm～135mmとなっており、柱間隔は桁行、梁行共に315mm～327mmだった。貫は4本、合決りは有りだった。

土台はコンクリートの基礎に乗せられており、GLから床面までの高さは615mmあるため、東側の平入にある戸の前には、95mm、161mmの高さの石段が2段に重ねて設けられていた。戸は倉の中心より左側にあり、素材は木製の引戸で引き手部分は金属で装飾されていた。周りには庇や鼠返しは無かった。

屋根形式は切妻造で、屋根の仕上げは瓦葺きとなっていた。鬼瓦は正面と裏面の両面に設けられており、種類は「鬘付雲付丸立鬼」だと思われる。しかし南棟付近に破損した鬼面の鬼瓦が置いてあったため、以前に使用していたことが推測される。

北側の板倉と比較すると、南側の板倉の方が小規模であり、開口部や鍵穴の存在は見られなかった。また柱の本数は北棟の方が20本多く有り、柱間隔は南棟の方が150mmほど多く開いている。



写真 4-25 正面



写真 4-26 内部

(11) Y 家住宅板倉

所在：市川字五万崎

他の板倉より棟が高く、大きな庇屋根と入口の建具に貼られている大國主神のお札が特徴的な建物である。規模は桁行 6.44m、梁行 4.55m と板倉の中では最大級だった。この板倉は明治 22 年(1889)10 月に米蔵として、高橋稔氏によって建立された。1889 年～2011 年の 122 年間の間で移築されたかは不明であるが、昭和 52 年(1977)に、瓦は葺き替えたそうである。

入口は平入、小屋組形式は和小屋組と合掌組の複合、基礎は玉石基礎、また屋根形式は切妻置き屋根である。桁側の広い屋根と玄関まわりの組物が特徴的。

地震被害を受けたが、倉自体に大きな破損は見受けられず、瓦も落下していなかったことから、被害は軽微だったと言えるだろう。



写真 4-27 正面



写真 4-28 内部の小屋組



写真 4-29 入口付近の装飾

(12) K家住宅板倉

所在：高橋 5 丁目

K家では、主屋のほかに同敷地内で、『みそらの郷』という梅干しや多賀城味噌を販売している店舗がある。桁行方向 4.7m、梁間方向 3.76m のため正方形に近い。面積は 17.61 m²。板倉の年代は、明治 9 年(1876)、鈴木松蔵氏により建てられた。建立当時は西向きだったが、平成 10 年の宮城県沖地震の影響で屋根の瓦葺き替えを行った際に東向きに移築した。用途は米蔵として使用している。

入口形式は妻入で、小屋組は和小屋だが端部のみ合掌の面影がある。基礎形式は布基礎であり、礫とモルタルで構成されている。

K家の板倉は、地震被害があったものの影響が少なく、解体は考えていないとのことである。



写真 4-30 正面



写真 4-31 内部の小屋組



写真 4-32 入口付近の装飾

(13) I 家住宅板倉

所在：南宮字町

トタン屋根の深い庇と朱色の戸が特徴で、土蔵と板倉が隣同士に並んでいる。桁行 5.52m、梁間 3.65m、面積 20.15 m²と板倉の中では平均的な規模。明治末（1900～1911）に建設されたもので、改築、移築は今までになく、ほとんど当時の状態のまま現在は物置として利用されている。

入口は妻入、小屋組は和小屋組、基礎は不明である。貫が 4 本、鼠返し、合決り、雪止め、持ち送りはすべて付いており、窓は東向きに開いていた。また、壁面の一部に筋交のような補強が見られる。



写真 4-33 正面



写真 4-34 内部の小屋組



写真 4-35 壁面の柱の様子

(14) S 家住宅板倉 (北棟)

所在：高崎一丁目

同敷地内に後述する No.40 板倉もあるが、そのうちの北倉である。桁行 5.6m、梁行 3.8m、面積 21.28 m²と規模はほぼ同等といえる。年代の詳細は不明だが、明治以降であると聞き取り調査で判明している。米や靱などを貯蔵している他、苗や農具を保管していた。

こちらも入口が平入、和小屋を基本とした小屋組で、基礎はコンクリートにしている為、移築されていると推測できる。土台は柱面から突出し、銅色で被覆されている。南棟と違い中 2 階が設けられており、壁に打ち付けた角材に足を掛けて登ることができる。内部は合掌組の登り梁であり、全体的に保存状態は良いようだ。

S 家の二棟は柱間隔が狭く、柱の中心間で約 1 尺である。違いは扉の取手口や瓦の色、庇の反りなどが挙げられる。



写真 4-36 正面



写真 4-37 側面



写真 4-38 内部の小屋組

(15) A家住宅板倉

所在：南宮字町

A家住宅の敷地内には板倉の他にも、土蔵や納屋などの付属屋が多数存在した。板倉の規模は、桁行 6.6m、梁行 3.81m で一階床面積は 21.34 m²である。板倉は、明治時代の建立で、米蔵として利用していた。建設者は不明で、改築・移築はしていない。

入口は平入、小屋組は和小屋組・合掌組、基礎は布基礎である。屋根は切妻置き屋根の二重屋根である為、かなり大きく見える。入口には鼠返しがあった。

今回の震災で地震被害があったものの、解体する予定は無い。



写真 4-39 正面



写真 4-40 内部



写真 4-41 隣に並ぶ土蔵

(16) I 家住宅板倉

所在：南宮字町

桁行 5.44m、梁間 3.63m で面積は 19.75 m²である。建設年代は明治時期で、改築が平成 19 年頃にあり、シロアリの被害により柱・板ともに修復を行った。ただ、移築を行ったどうかは不明である。用途は米蔵、座布団・生活用具を収納するのに使用されている。

入口形式は妻入で、小屋組は和小屋組、基礎は布基礎である。朱色の戸と、入口の下部に鼠返しを設置するための受け材があったことも特徴的であった。屋根は切妻屋根に瓦葺だが、昭和 53 年の宮城県沖地震の際に被害を受け、屋根瓦を葺き替えている。

今回の震災でも被害は軽微であり、解体の予定はない。



写真 4-42 正面



写真 4-43 内部の小屋組



写真 4-44 入口下部

(17) G家住宅板倉

所在：南宮字町

敷地に入って井戸の先にある、桁行 5.57m、梁間 3.77m、面積 21.0 m²のかなりきれいな状態の板倉である。建設年代は明治(1868～1912)時期で、倉の移築は行っていない。

入口は平入で大きな段差がある。小屋組は和小屋組、基礎は玉石基礎。棟木に緩やかに曲がった丸太を使っているのも特徴的である。また、屋根形式は切妻屋根のスレート葺きで庇もスレート葺きになっているが、以前は瓦葺きであり、その年代は不明である。この明治時代頃の板倉には板壁に合決りが特に多く確認されており、この板倉にも該当する。



写真 4-45 正面



写真 4-46 内部の小屋組



写真 4-47 壁の合決りの様子

(18) S 家住宅板倉

所在：南宮字町

どっしりした構えから頑強な印象が強く、北側に面する壁には腰板張りになっている。桁行 5.51m、梁間 4.11m、面積 22.65 m²で比較的大きい。明治時代に本家の斎藤長治氏により建てられたとされている。主な用途としては、米の備蓄や生活用具の保管に使用している。昭和 50 年には改築がなされている。その際には、瓦をセメント瓦から現在の瓦に葺き替えがされている。

入口は平入、小屋組は合掌組、基礎は布基礎であり地盤面からの高低差がある。そのこともあり、棟木の下面までの高さが 4.75m と板倉の中で最高である。壁の合決り、瓦の雪止めともに存在する。また、繊細な庇の肘木の組物も特徴的である。



写真 4-48 正面



写真 4-49 内部



写真 4-50 入口庇の様子

(19) T 家住宅板倉

所在：南宮字町

板倉の周辺には松等の植栽があり、囲むような形でなされていたのが印象的である。桁行 4.64m、梁間 3.11m で面積は 14.43 m² と狭小である。現代の 5 代目にあたる当主が管理し、倉自体は明治時代に建立されたもので、移築の有無は不明だが改築は行っている。破風などは改修した模様。主な用途としては、米の備蓄や生活用具、人形の保管に使用されている。

入口は平入、小屋組は合掌組、基礎は布基礎である。屋根は瓦葺であり、雪止めが付いている。内側の壁には補修の為に金属板が張り付けてある為、内部から柱の様子などは見ることが出来ない。柱の間隔は狭いところで 120 mm 程度と、柱の幅とほとんど変わらない。鼠返しの受け材もある。



写真 4-51 正面



写真 4-52 側面



写真 4-53 内部の小屋組

(20) T 家住宅板倉

所在：南宮字町

板倉の南面には、近年張られたであろう、外壁材が目立つ。桁行 5.54m、梁間 3.67m で面積は 20.0 m²と平均的。この板倉は、明治時代に建立され、用途は米の貯蔵や生活用具の保管等に使われている。

入口は平入、小屋組は和小屋と合掌、基礎は布基礎。この倉の特徴は平入側に半柱が確認できることである。その為柱間隔が 120 mm程度と相当狭く、柱一本分の幅しかない。これは、他の壁面に入っていないことから、意匠の目的で設けられている可能性が高い。他に、屋根の瓦には雪止めが設けられていることや、室内側の壁に筋違いが取り付けられていることも挙げられる。



写真 4-54 正面



写真 4-55 内部の小屋組

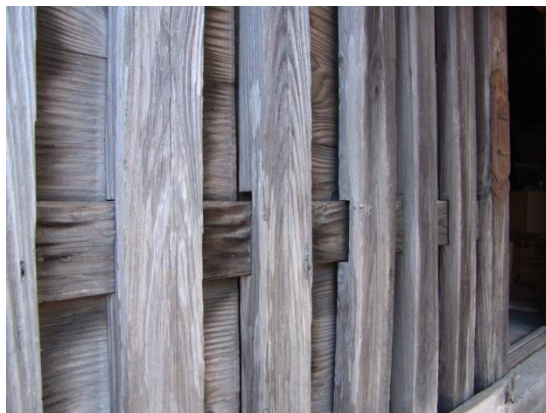


写真 4-56 半柱の様子

(21) I 家住宅板倉

所在：山王字東町浦

屋根の最上部の瓦が崩れたようで、その対策として青いビニールシートで覆われていた。桁行 5.45m、梁間 3.67m、面積 20.0 m²である。I 家住宅板倉は明治時代(1868～1911)に建てられた。改築に関しての年代は不明だが、中 2 階の後付けや、現在は撤去されたが庇を前に出す工事が行われた。また、移築はされていない。この板倉の用途は、米や豆などの食料や、生活用具を保管するのに使用されている。

入口は平入、小屋組は典型的な合掌組、基礎は布基礎である。板倉の入口は倉の正面やや左にあり、戸は木製の引き戸で右開き、鼠返しを設置するための受け材があった。

前述した瓦の被害はあったが、解体の予定などはない。



写真 4-57 正面



写真 4-58 側面と隣接した付属屋



写真 4-59 内部の小屋組

(22) K家住宅板倉（1）（東棟）

所在：市川字丸山

K家住宅板倉は、2 棟が並んで建ち、壁が繋がれてひとつの建築物の様相を呈している。そのうち、向かって左手である東棟は、桁行 5.41m、梁間 3.59m、面積 19.42 m²である。建設年は明治時代、移築の有無は不明。また、二つの倉の間の空間も室となり、資材を置く物置として利用されている。これらの板倉は明治初期に米などの穀物を保存する目的で建てられた。現在は家具や、農業用品などの生活用品の倉庫として利用している。

入口は妻入、小屋組は和小屋組、基礎は玉石基礎である。柱の幅は 150～180 mmと比較的太めで、壁厚 25 mm、棟木下面までの高さは 4.51m であり、この数値は西棟とほとんど同じである。



写真 4-60 正面



写真 4-61 内部の小屋組(和小屋組)



写真 4-62 2 棟の間の室空間

(23) K家住宅板倉（2）（西棟）

所在：市川字丸山

No.22 のK家住宅板倉(東棟)と隣接する、向かって左手側が西棟である。桁行 5.43m、梁間 4.33m、面積 23.51 m²で、梁間方向が長い分西棟の方が規模はやや大きい。

入口は妻入、基礎は玉石と、形式はほぼ東棟と同様である。しかし、小屋組が合掌組である。また柱の間隔が東棟 30 cmであるのに対して、西倉は 22 cmと狭い。こういったことから、2 つの倉が完全に別の建物であると判断できる。2 棟とも状態の良い瓦が並ぶ庇と、二重屋根で覆われている。



写真 4-63 内部の小屋組(合掌組)



写真 4-64 正面



写真 4-65 二棟の屋根と軒先

(24) E 家住宅板倉

所在：新田字北関合

桁行 5.46m、梁行 3.67m で面積は 20.04 m²で、平均的な規模だった。用途は主に、農具や使わなくなった生活用品の収納として使われている。建立年代は明治 25 年(1892)であり、過去に瓦の葺き替え、移築は行っていたが、こちらの年代は不明である。鬼瓦は健在であり、足付きの装飾であった。

妻入の板倉で、小屋組は和小屋組と合掌組、基礎は布基礎である。地震の被害と直結しているかは不明だが、解体予定がある。



写真 4-66 正面



写真 4-67 正面と側面



写真 4-68 内部

(25) K家住宅板倉

所在：市川字城前

主屋の下屋を抜けた先に建っていて、二重屋根なので背が高く感じる板倉である。規模は桁行 5.43m、梁間 3.66m、面積は 19.87 m²である。移築はしておらず、現在は、タンスや長持などの家具類、桶などの生活用具などの保管の場所として使用している。

入口は妻入、小屋組は合掌組、基礎は不明。この板倉も、2枚の引き戸で、そのうち1枚は格子を組んだ見た目の通風を確保できる戸、加えて施錠を二カ所設置している。瓦葺きの底は懷が広く、二重屋根と相まって非常に状態の外観となっている。



写真 4-69 正面・側面



写真 4-70 内部



写真 4-71 入口付近の様子

(26) S 家住宅板倉(南棟)

所在：南宮地区

この板倉の建立年代は大正7年(1918)とされており、倉自体に大きな破損、損傷はみられないが金属で補強されている所があり、壁面の板に大きなずれはみられなかった。S家の配置は、北東と南西の2カ所に入口があり、敷地西側に主屋がある。板倉は主屋の正面に2つ並んで位置している。また、板倉の他に納屋、庭、畑(2つ)、ビニールハウスがある。板倉の主な用途は、当時は米倉として使用されていたが、現在では1階、中二階とも物置として使われていた。

規模は、桁行5.39m、梁行3.63mであり、形は北東から南西に伸びる長方形。床面積は19.57㎡、最高高さ5.33m、壁厚が20mmで壁の枚数は1枚だった。柱の本数は50本で、柱幅は桁行、梁間共に101mm~111mm、角や戸の周辺の柱幅のみ121mm~133mmとなっており、柱間隔は桁行、梁間共に244mm~266mmだった。貫は4本、合決りは有りだった。また、南西側の土台部分の木材は地形に合わせたような形で曲げられており、基礎には玉石とコンクリートが利用されていた。

GLから床面までの高さは540mmあるため、西側にある平入前には105mm、196mmの高さの石段が重ねて2段設置されていた。妻入は倉の中心から左側にあり、戸は木製の引き戸で引き手部分は金属で装飾され、戸の左側の柱には鍵穴が取り付けられていたが金属板で塞がれていた。周りにはトタン屋根の庇があったが、鼠返しは無かった。

屋根形式は切妻造、屋根の仕上げは瓦葺きとなっており、鬼瓦は正面と裏面の両面に設けられており、種類は「跨鬼」だと思われる。



写真 4-72 正面



写真 4-73 内部

(27) S 家住宅板倉(北棟)

所在：南宮地区

この板倉の建立年代は大正7年(1918)であり、倉自体に大きな破損、損傷はみられない。

板倉の主な用途は、当時は味噌倉として使用されており、現在でも1階、中2階とも味噌樽の保管がされていたが、物置としても使用されていた。

規模は、桁行3.03m、梁行3.65mであり、形は北東から南西に伸びる長方形。床面は土間となっており、隣接して板張りの倉庫が設けられている。床面積は11.06㎡、最高高さ4.30m、壁厚が25mmで板壁の枚数は1枚だった。柱の本数は44本で、柱幅は桁行では130mm前後と整っているが、梁行では126mm~168mmまで大小様々で規則性はない。柱間隔は桁行が170mm前後であるのに対し、梁行は140mm~185mmと規則性はない。貫は4本、合決りは有りだった。

土間であるためG Lからの段差はほとんどなく、鴨居の高さも115mmと高くないため、段の設置はされていなかった。平入の入口は倉の中心より左側にあり、戸は木製の引戸で引き手部分は金属で装飾されていた。周りにはトタン屋根の庇があったが、鼠返しは無かった。屋根形式は切妻造、屋根の仕上げは瓦葺きとなっており、鬼瓦は正面と裏面の両面に設けられており、種類は「跨鬼」だと思われる。



写真 4-74 正面(左側)



写真 4-75 内部

(28) I 家住宅板倉(北棟)

所在：南宮地区

この板倉の建立年代は明治6年(1873)とされており、倉自体には大きな破損はみられないが、側面の板壁にはズレがみられた。I家の配置は、入口は南側と北側に2つにあり、敷地北東側に主屋、主屋正面に庭がある。板倉は主屋から離れた敷地南西側に2つ並んで位置している。また、以上の他に納屋、物置、井戸がある。2つの並んだ板倉の間には1.5mほどの隙間があり2段の物置のようになっていた。屋根の間は隙間があつたが、内側に屋根があり中は濡れないようになっていた。また、倉の北側壁面には開口部がみられた。

板倉の主な用途は、当時は米倉として使われていたようだが、それは現在も変わらぬようで、米と味噌桶等が保管されており、倉内部の壁面には金属板が貼られていた。

規模は、桁行5.45m、梁行3.64mであり、形は長方形、中2階はあつた。床面は板張りとなっている。床面積は19.84㎡、最高高さ5.70m、壁厚が23mmで板壁の枚数は1枚だった。柱の本数は60本で、柱幅は桁行、梁行共に121mm~160mmの間で疎らであるが、各4角は150mmで統一されており、柱間隔は桁行、梁行共に153mm~183mmでほとんどが170mm前後となっていた。貫は5本、合決りは有りだった。

基礎は礎石、GLから床面までの高さは650mmあるため、西側にある平入前には273mmの高さの石段が1段設置されていた。平入の戸は倉の中心より左側にあり、戸は木製の引戸で引き手部分は金属で装飾され、戸の右側の柱には鍵穴が付いていた。周りには庇、鼠返しはなかった。

屋根形式は切妻造、屋根の仕上げは瓦葺きとなっていた。鬼瓦は正面と裏面の両面に設けられており、種類は「鬘付雲付丸立鬼」だと思われる。



写真 4-76 正面



写真 4-77 内部

(29) S 家住宅板倉

所在：市川字坂下

主屋と距離が近く、緑青の瓦の苔と赤みを帯びた柱壁が印象的な板倉である。桁行 5.44m、梁間 3.61m、面積 19.64 m²。建立年代や改築の有無は不明である。ただし、昭和 16 年頃に同市浮島地区の蜂谷家の板倉を移築したものだというのが分かった為、それ以前である明治期に建てられたと推定している。用途は家財道具の保管場所である。

入口は妻入、小屋組は和小屋、基礎は布基礎である。高さは低いが二重屋根がある為そう感じにくい。戸は 1 枚戸(板戸)の引き戸で左開き、入口の下部には鼠返しがあった。また、軒桁と小屋梁の組み方が折置組と呼ばれるもので、柱の上に小屋梁、その上に軒桁、垂木と重なる。この方法自体は比較的古くからあり他の倉にも見られたが、今回の調査した板倉のうち全棟でその有無を把握するには至らなかった。



写真 4-78 正面



写真 4-79 内部の小屋組



写真 4-80 軒桁の様子

(30) S 家住宅板倉 (南棟)

所在：市川地区

この板倉の建立年代は不明とされており、壁面の板が少々ずれているようだったが、外観からは目立つ破損は無かった。しかし、倉内部から確認すると壁面の上方に大きく破損している個所があり、金属板による補強がされていた。破風板には木材が使用されている。S家の敷地は入口が北側と南側の2カ所にあり、敷地西側に主屋、主屋の正面に板倉の西棟が位置している。そこから南側に納屋を挟んで板倉南棟がある。以上の他に車庫、庭、ビニールハウス、畑、池がある。2つの板倉に挟まれた納屋は、増設されたような形で南棟の屋根部分と接着していた。

板倉の主な用途は、現在では1階、中2階とも物置として使用されていた。

規模は、桁行 4.99m、梁行 3.11mであり、形は長方形、小さい面積の中二階もあった。床面は板張りとなっている。床面積は 15.52 m²、最高高さは 4.82m、壁厚が 15 mmで壁の枚数は1枚だった。柱の本数は18本で、半柱が48本、柱の間隔を埋めるように配置されており、頑丈な倉にみせる為の工夫なのだと推測出来る。柱幅は桁行、梁間ともに 110 mm~135 mm、となっており、柱間隔は桁行、梁間共に 120 mm前後だった。また、戸の左側の柱からの柱間隔のみ 25 mmと極端に狭かった。貫は3本で合決りは有りだった。

基礎にはコンクリートが使用されており、G Lから床面までの高さは 600 mmあるため、北側にある入口前には 185 mmの高さのU字溝が設置されていた。また、入口は倉の右端にあり、戸は木製の引戸で引き手部分は金属で装飾されていた。周りには庇や、鼠返しは無かった。

屋根形式は切妻造の二重屋根であり、屋根の仕上げは石瓦葺きで傾きは小さかった。鬼瓦は正面と裏面の両面に設けられており、種類は「跨鬼」だと思われる。



写真 4-81 正面の異なる柱間隔



写真 4-82 内部

(31) S 家住宅板倉(北棟)

所在：市川地区

この板倉の建立年代は不明とされており、倉内部は多少の損傷はみられたが、外観からは目立つ破損が無かった。破風板には木材が使用されていた。2つの板倉に挟まれた納屋は、増設されたような形で北棟の壁面部分とも密着していた。板倉の主な用途は、物置である。

規模は、桁行 4.99m、梁行 3.11mであり、形は長方形、倉の角にはわずかに中2階もあった。床面は桁行方向に二枚を並べた板張りとなっている。床面積は 10.41 m²、最高高さは 4.05m、壁厚が 15 mmで壁の枚数は 1 枚だった。柱の本数は 14 本で、柱の間隔を埋めるように 36 本の半柱が配置されており、倉を頑丈にみせるための工夫なのだと推測出来る。柱幅は桁行、梁行共に 110 mm前後となっており、柱間隔は桁行が 110 mm前後であるのに対し、梁行は 130 mm前後だった。貫は 3 本で相決りは有りだった。

北棟側の地盤が傾いているせいか、基礎にはコンクリートと玉石が使用されており、G Lから床面までの高さは 490 mmあるため、北側にある入口前には 172 mmの高さの石段が 2 つ横に並べて設置されていた。入口は倉の中心よりわずかに左側にあり、戸は木製の引き戸で引き手部分は金属で装飾されていた。周りには庇や、鼠返しは無かった。

屋根形式は切妻造の二重屋根であり、屋根の仕上げは石瓦葺きで傾きが小さいという特徴がみられた。鬼瓦は正面と裏面の両面に設けられていたが、片方は倒れかけており、種類は「跨鬼」だと思われる。

以上を南棟の板倉と比較すると、北棟の方が小規模だということや、構造や部材に同じものが使用されていることから、同年代に建立されたこと、北棟の入口が西方向に有るのに対し、南棟の入口が北方向にあることから、倉の位置は変更せずに納屋を増設したことが推測される。



写真 4-83 正面



写真 4-84 内観

(32) O家住宅板倉

所在：南宮字町

O家には敷地内に板倉の他に土蔵があり、敷地の中心には主屋の解体跡があった。板倉の規模は、桁行 5.44m、梁間 3.64m、面積が 19.8 m²である。明治 45 年(1912)以前に建てられた板倉で、当時は米や酒などの保存に利用されていたが現在は物置として利用されている。また 1920 年の地震の際に瓦は葺き替えられていて、90 年以上建っても状態は良い。

入口は平入、小屋組は合掌組、基礎は玉石基礎で、屋根形式は切妻置き屋根であった。また中 2 階はなく平屋である。柱は黒っぽくくすみ風合いがあり、二重になっている内戸の状態が良いこと等が、特徴的である。



写真 4-85 正面



写真 4-86 内部の小屋組



写真 4-87 戸の様子

(33) T 家住宅板倉

所在：高崎 2 丁目

規模は桁行 5.38m、梁間 3.76m、面積 20.23 m²と平均よりやや大きめだが、正面左側に下屋が設けられており、広がりを感じる。

正確な建設年は不明だが、100 年以上前ということで、大正時代かそれ以前に該当すると思われる。入口は妻入り、側面は和小屋組と内部は合掌組、中二階はあり、基礎はコンクリートのものに替わっている。屋根は二重屋根で、破風も綺麗なまま残っており、調査した遺構の中では特に手本とすることに適した屋根組みである。屋根瓦、庇瓦は改修されており、柱の腐食も無く、状態もかなり良いと言える。

入口と対面する位置に窓が設けられており、その窓の庇は垂木・持ち送り・カーブのある破風などから、装飾の高さが窺える。



写真 4-88 正面



写真 4-89 内部



写真 4-90 窓の庇の様子

(34) T 家住宅板倉

所在：八幡地区

T家は、J R 多賀城駅から南西に位置している。近くにある道路は車通りが少なく、住宅街にあるので静かである。

この板倉の年代は昭和 4 年（1929）旧 7 月頃に建てられ、改築は行われていないが同一敷地内に移築あり、大正 6 年頃の火災後に建設された。倉自体は大きな破損はないが、側面の壁の板にずれや隙間がみられる。現在では、1 階、中 2 階ともに物置として使用されている。用途としては、生活用具の保管である。

T家の配置は、板倉の他に、主屋・石倉・庭・畑がある。板倉の規模は、桁行 5.02m であり、梁行が 3.63m、最高高さ 5.02m となっている。建物の床面積は、1 階床面積 11.93 m²、2 階部分は無い為 1 階床面積が延べ床面積になる。

壁は、板の 1 枚壁であり、板壁厚が 23 mm、張り方は横張りである。壁板の繋ぎ目は合決りとなっていた。入口部分に関しては、建物正面の中心にあり、平入り、戸には鍵は無く、鴨居の溝は 1 本、板戸が 1 枚入っていた。基礎はコンクリートで G L から床面の高さは 530 mmある為、妻入前には 170 mmの石段 180 mmの石段が設置されている。屋根は切妻屋根の瓦葺きで、二重屋根ではなく、雪止めは付いていない。戸の上部にある庇の組は、平成 25 年に調査した倉の中でも特に複雑である。また正面右側には、竹で出来た袖垣が植栽と板倉を分ける境界になっている。

使用されていた柱は 121 mm角から 140 mm角の材であり、入口部分の柱と倉の 4 隅に 130 mm角の柱が使われていた。柱の間隔は、桁行が約 325 mm、梁行が約 335 mmであった。貫の本数は 4 本である。



写真 4-91 側面



写真 4-92 内部

(35) O家住宅板倉

所在：南宮地区

O家は南宮地区にあり、J R陸前山王駅から北西に位置している。近くの道路は、車の通りが多いが静かである。

この板倉は大正14年頃に建てられた。1階、中2階ともに生活用具の保管等に使われている。高床であるが、ネズミの被害に悩まされている。また、移築をして主屋の向かい側に位置している。

O家の配置は、板倉の他に、主屋・倉庫・庭・畑がある。畑部分の敷地境界線がはっきりしていない為、敷地面積の算出は出来ていない。

板倉の規模は、桁行5.64mであり、梁行が3.65m、最高高さは5.86mとなっている。建物の床面積は、1階床面積20.00㎡、中2階部分は面積が14.96㎡延べ床面積34.96㎡になる。壁は板の2枚壁であり、板壁厚が20mm、張り方は横張りである。壁板の繋ぎ目は合決りが無い。入口部分は、建物正面の左側にあり、木製の引戸である。戸に家紋があり、鍵は無く、鴨居の溝は2本、扉は板戸が2枚入っていた。基礎はコンクリートでGLから床面の高さは600mmあるため、平入前には200mmの石段と210mmの石段が設置されている。屋根は瓦葺きで二重屋根ではなく、雪止めは付いている。窓と鍵は無い。

使用されていた柱は100mm角から120mm角の材であり、入口部分の柱と倉の四隅に120mm角の柱が使われていた。柱の間隔は、桁行が約350mm、梁行が約250mmであった。貫の本数は4本である。



写真 4-93 正面



写真 4-94 内部

(36) K家住宅板倉

所在：山王字中山王

梁間方向は 3.18m、桁行方向は 4.44m、面積は 14.12 m²で、かなり小規模な板倉である。板倉の建設年代は大正 7 年。時期は不明だが移築されており、その際に基礎をコンクリートの布基礎にされたと思われる。板倉の用途は不明だが、現在は農具を中心とした物置として利用されている。

入口は妻入、小屋組は和小屋と合掌の複合、屋根形式は切妻置き屋根で瓦葺の二重屋根、基礎は上記のような布基礎である。また、桁行方向に後付と思われる筋交とハメ込み窓がある。地震被害で瓦はほとんど崩れ落ちてしまい、枚数は片側縦方向の 15 枚しか確認できない。



写真 4-95 正面・側面



写真 4-96 内部



写真 4-97 入口付近の様子

(37) K家住宅板倉

所在：南宮字町

この倉は敷地の南に位置し、周囲は木々が生い茂っていたので入るのが困難だった。規模は、桁行 5.4m、梁行 3.6m、1 階床面積 19.44 m²

今回の東日本大震災で受けた倉の被害状況は、外傷は特に見られず、中にあった貯蔵物が散乱している程度であった。しかし、外傷は少ないがこれを期に解体する予定である。建設年、移築の有無など多くが不明である。現在は衣類を所蔵。

入口は妻入、小屋組は和小屋と合掌の複合、基礎は不明。二階に壁板を外した小さい開口が並ぶが窓ではない模様。入口庇の下部をトタンで覆い、その内にある扉は木製で観音開きと珍しかった。



写真 4-98 側面



写真 4-99 内部(一階)



写真 4-100 内部の小屋組(二階)

(38) S 家住宅板倉

所在：南宮地区

この板倉の建立年代は不明であり、倉の柱部分には所々ひび割れがみられる。また外観の壁の破損はみられなかったが、内部は数カ所補強されている部分があった。破風板には幅の広い金属板が使用されていた。S家の敷地は西東方向に長く伸びており、配置は入口が東側と西側の2つ、敷地東側に主屋がある。板倉は南側に位置している。また、板倉の他に倉庫、納屋、車庫、ビニールハウス(2つ)がある。板倉と隣り合った車庫との間には1mほどの隙間があり簡易な物置のような形で利用されていた。板倉の主な用途は、当時は米倉の他に飼料や大豆等の保管で、現在では1階、中2階とも物置として使われていた。

規模は、桁行5.45m、梁行3.65mであり、形は長方形、中2階は僅かではあるが存在した。床面は板張りとなっている。床面積は19.89㎡、最高高さ5.20m、壁厚が20mmで壁の枚数は1枚だった。柱の本数は60本で、柱幅は桁行、梁間共に135mm前後だが、角と扉部分のみ150mm台となっており、柱間隔は梁間側にある戸の左側のみ130mm前後だが、他の部分は桁行、梁間ともに165mm前後だった。貫は5本、合決りは有りだった。

土台はコンクリートと礎石の上に置かれており、GLから床面までの高さは455mmあるため、北側にある入口前には210mm、300mmの高さの石段が2列並べて設置されていた。入口は倉の中心から向かってわずかに左側にあり、戸は木製の引戸で引き手部分は金属で装飾され「庄」の家紋が刻まれていた。戸のすぐ右側の柱には鍵穴が付いていたが、現在では鉄板で塞がれており使用していないようだった。周りには庇と鼠返しがあった。

屋根形式は切妻造で、屋根の仕上げは瓦葺き、庇の仕上げはトタンとなっており建築装飾に拘りがみられた。鬼瓦は正面と裏面の両面に設けられており、種類は三州瓦系の「跨鬼」だと思われる。



写真 4-101 正面



写真 4-102 内部の小屋組

(39) K家住宅板倉(南棟)

所在：南宮地区

K家は南宮地区にあり、J R陸前山王駅から北西に位置している。近くの道路は、車の通りは少なく静かである。

この板倉の年代は不明であるが改築、移築は今までなく、ほとんど当時のままで現在は物置として利用されている。倉自体に大きな破損はみられないが、壁の板に隙間などが数カ所みられる。内部は1階だけであり、用途としては、畑に使用する道具などの保管である。板倉の他に、主屋・倉庫・庭・ビニールハウスがある。

板倉の規模は、桁行 5.47m であり、梁行が 3.66m、最高高さは 5.24m となっている。建物の床面積は、1 階床面積 11.93 m²、2 階部分はない為 1 階床面積が延べ床面積になる。壁は板の 3 枚壁であり、板壁厚が 20 mm、張り方は横張りである。壁板の繋ぎ目は合決りが施されていた。入口部分に関しては、建物正面向かって右側にあり、木製の引戸である。戸に家紋があり、鴨居の溝は 2 本、扉は板戸が 2 枚入っていた。鍵は無いが柱の左側に鍵穴が有る。基礎はコンクリートで G L から床面の高さは 530 mmある為、妻入前には 180 mm の石段と 210 mm の石段が設置されてある。屋根は瓦葺きであり、二重屋根ではなく、雪止めと窓は無い。側面の立面には板壁が張られている。

使用されていた柱は 120 mm から 148 mm 角の材が用いられていた。入口部分の柱と倉の四隅に約 145 mm 角の柱が使われていた。柱の間隔は、桁行が約 325 mm、梁行が約 327 mm であった。貫の本数は 5 本である。



写真 4-103 側面

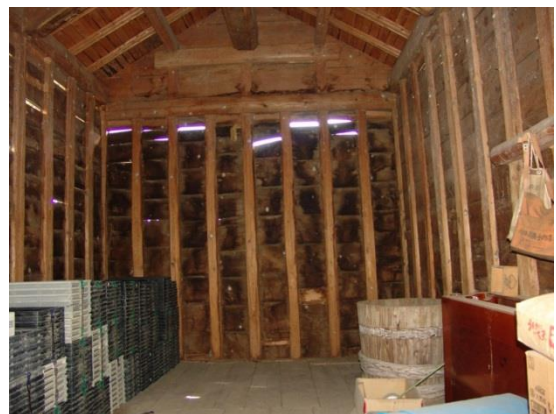


写真 4-104 内部

(40) S 家住宅板倉 (南棟)

所在：高崎一丁目

生垣で囲われたアプローチから、主屋を奥にした左手前側に見える。同敷地内にもう一棟板倉があり、そのうちの南側に建つ方である。現在は米の所蔵と材木の保管が主な用途である。桁行 5.54m、梁行 3.78mで、面積は 20.94 m²。入り口付近に昭和 3 年 11 月と記してある為、これが有力な建設年代と見られる。

入口は平入、小屋組は合掌組、移築した際にコンクリートの基礎と踏み石が設けられたものと思われる。状態は非常に良く、柱間隔は比較的狭く二重屋根も優美であり、震災による被害はない模様。貫と柱が楔で固く締められている。また、入口上部の庇は飛燕垂木と呼ばれる二段の垂木で構成されており、斗組、雲形肘木、持ち送りの彫り物と合わせて寺社建築を彷彿とさせる。北棟と合わせて、この S 家の二棟は柱間隔が狭く、柱の中心間で約 1 尺である。違いは扉の取手口や瓦の色、庇の反りなどが挙げられる。



写真 4-105 正面



写真 4-106 垂木と肘木と斗組



写真 4-107 側面と二重屋根

(41) W家住宅板倉

所在：八幡地区

この板倉の建立年代は昭和4年(1929)旧7月とされており、倉自体に大きな破損等は見られないが、側面の貫は多少歪みがあり、壁の板にずれや隙間も数カ所に生じていた。和田家の配置は、敷地南側に主屋があり、板倉は主屋から最も遠い敷地北側に位置している。また、板倉の他に倉庫(3つ)、車庫(2つ)、畑、ビニールハウス、井戸がある。板倉南側は隣の倉庫と隣接していたが、内部での繋がりはない。しかし、板倉内部の南側には開口部がみられたため、以前は倉庫と隣接していなかったものだと推測できる。

板倉の主な用途は、現在では1階、中2階とも物置である。

規模は、桁行3.65m、梁行3.19mであり、形としては正方形に近く、中2階はあるが、平成25年に調査した中では最も小規模な板倉だった。床面が板張りとなっている。床面積は11.64㎡、最高高さ4.60m、壁厚が20mmで壁の枚数は1枚だった。柱の本数は30本で、柱幅は桁行、梁間共に108mm～117mmとなっており、柱間隔は桁行が平均345.75mmであるのに対し、梁間は平均288.40mmと差がでた。貫は4本、合決りがあった。GLから床面までの高さは475mmあるため、西側にある妻入前には210mmの高さの石段が1段設置されていた。妻入は倉の中心から向かってわずかに左側にあり、戸は木製の引き戸で引き手部分は金属で装飾されており、周囲には庇と鼠返しがあった。屋根形式は切妻造、屋根と庇の仕上げは瓦葺きとなっており、鬼瓦は正面と裏面の両面に設けられており、種類は「跨鬼」だと思われる。



写真 4-108 正面



写真 4-109 内部

(42) T 家住宅板倉

所在：八幡地区

T家は八幡地区にあり、J R多賀城駅から南西に位置している。周りは住宅街で、車通りはあまりなく静かである。敷地はコンクリートブロックに囲まれており、外から内部をみることはできない。植栽などが多くきれいに整理されている。

この板倉の建設年代は昭和11年（1936）4月であり、改築や移築は行われていない。倉自体に大きな破損はなく、現在は1階、中2階とも物置として使用されている。生活用具の保管等に使われている。T家の敷地は、板倉の他に、主屋・倉庫・庭がある。敷地面積の算出は出来ていない。

板倉の規模は、桁行3.66mであり、梁行が2.73m、最高高さ4.05mとなっている。建物の床面積は、1階床面積9.96㎡、中2階部分3.30㎡あり、延べ床面積は13.26㎡になる。壁は板の2枚壁であり、板壁厚が30mm、張り方は横張りである。入口部分に関しては、建物正面の中心にあり、木製の引戸である。戸に鍵はなく、鴨居の溝は2本、扉は板戸が2枚入っていた。基礎は、コンクリートでGLから床面の高さは730mmあるため、妻入前には240mmの石段と200mmの石段、120mmの木段が1段設置されてある。屋根は、切妻屋根で瓦葺きであり、二重屋根はなし、雪止めは付いていない。

使用されていた柱は97mmから118mm角の材が用いられており、入口部分の柱と倉の4隅に97mm角の柱が使われていた。柱の間隔は、桁行が約500mm、梁行が約510mmであった。貫の本数は3本である。



写真 4-110 正面



写真 4-111 側面

(43) G家住宅板倉

所在：八幡2丁目

昭和9年に東北地方を襲った大規模な冷害に対し、天皇からの義捐金によって建てられた、「恩賜郷倉」の倉である。調査した遺構の中で唯一の郷倉であり、希少価値も高いと考えられる。

板倉は平屋で板床と壁を挟んで土間で構成されている。土間部を除いた桁行は 5.45m、梁行は 3.63m、床面積は 19.78 m²、土間部は 7.18 m²。過去に板倉が移築されたがことは分かったが、それらの年代は不明である。以前は味噌部屋として使用していたが、現在は来客用の生活用具などを収納している。

入口は平入、小屋組は和小屋、基礎は玉石基礎で石材と木材を組み合わせたものになっている。地震による被害状況は不明だが、津波により海水に浸かった。解体の予定は不明である。



写真 4-112 側面



写真 4-113 内部



写真 4-114 「恩賜郷蔵」の棟札

(44) M家住宅板倉

所在：八幡3丁目

規模は、梁間方向約 3.0m、桁行方向約 4.5m の長方形で、床面積は約 13.46 m²で比較的小さい倉である。建立年代は不明であるが、70 年以上前に建てられたことが分かっている。本報告では 1942 年以前ということで昭和初期の遺構と同じ位置の並びにしているが、基礎に用いられている石の状況などから、大正や明治期の可能性もある。

入口形式は妻入で、小屋組は和小屋組と合掌組の複合、基礎形式は玉石基礎となっており、一部の石は四角く加工されている。採光用の嵌め込み窓が設けられている。

今回の震災で主屋と離れも含めて津波の被害を受け、家主は避難しているため、現在は使われていない。このことから解体される予定である。



写真 4-115 正面



写真 4-116 側面



写真 4-117 内部の小屋組

(45) T 家住宅板倉

所在：八幡 3 丁目

T 氏は、現在の山形県から伊達藩に移り住んだ家系である。倉の規模は桁行 5.5m、梁間 3.65m、面積 20.08 m²。詳しい建立年代は不明である。移築は行っていないが、改築は 10 年前の平成 14 年（2002 年）に玉石基礎を布基礎に変更した。その時に、屋根瓦の葺き替えを行った。主な用途は、1 階には米、調度品、中 2 階は不明である。納屋には、農器具類を入れていた。戦後農地改革で水田は小作人の所有となる。

入口は平入、小屋組は和小屋と合掌の複合、基礎は改築をして布基礎である。この天童勲家住宅板倉にも合決り、そして鬼瓦といった工法と技術が見受けられた。管理が行き届いており、かなり状態が良い板倉のひとつである。



写真 4-118 正面



写真 4-119 側面・背面



写真 4-120 内部の小屋組

(46) S 家住宅板倉

所在：市川字大畑家

妻側が広く、庇も大規模である。桁行 5.73m、梁間 4.53m、面積 25.96 m²と、規模は大きく、正方形に近い形状である。この板倉の、建設年代は不明で、現在は米蔵として使用されている。昭和 16 年頃祖父の代に新田から市川に板倉の半分が移築されており、今までに改築はないという。

入口は妻入、小屋組は和小屋を基本としたもので、丸太材を用いた太い小屋梁が特徴的である。基礎の形式は不明。棟木下面までの高さが 4.73m と高く、合掌の挟み小屋に似た組み方の上に二重屋根がある為、迫力がある。合決りが施されていた。



写真 4-121 正面



写真 4-122 側面



写真 4-123 内部の小屋組

(47) S 家住宅板倉

所在：市川字奏社

板倉は隣の納屋と屋根をつなげており、入口前は車庫として使用されている。用途は農具置きで現在も農具を収納している。敷地内にはもう 1 つ、比較的小規模な板倉がある。桁行 4.92m、梁間 3.17m とかなり細長い。建築の年代は不明だが、経年劣化が少なく、昭和初期のものと推定した。

入口形式は平入、小屋組は合掌組、礎形式は玉石基礎だが、敷地の傾斜に合わせて桁行方向の片側にしか玉石がみられなかった。



写真 4-124 側面



写真 4-125 正面



写真 4-126 内部の小屋組

(48) T 家住宅板倉

所在：南宮地区

この板倉の建築年代は不明であり、改築や移築は今までなく、ほとんど当時の状態のまま現在は物置として利用されている。倉自体に大きな破損はなく、1階、中2階、中3階とも物置として使用されている。用途としては、生活用具の保管である。

T家の敷地は、板倉の他に、主屋・倉庫・庭・物置・ビニールハウスがある。敷地面積の算出は出来ていない。

板倉の規模は、桁行 7.65m であり、梁行が 3.68m、最高高さは 5.73m となっている。建物の床面積は、1階床面積 19.95 m²、中2階部分は 10.20 m²、中3階は 6.85 m²で延べ床面積 37.00 m²になる。

壁は板の1枚壁であり、板壁厚が 20 mm、張り方は横張りである。壁板の繋ぎ目は合決りとなっていた。入口部分に関しては、建物正面の左側にあり、木製の引戸で、鼠返しがある。戸に家紋があり、鴨居の溝は 2 本、扉は板戸が 2 枚入っていた。鍵は有り、鍵穴は正面入口から向かって右側にある。基礎は玉石基礎で G L から床面の高さは 470 mm あるため、平入前には 120 mm の石段と 180 mm の石段が設置されてある。屋根は、切妻屋根の瓦葺きで、雪止めは付いているが二重屋根ではない。

使用されていた柱は 122 mm から 144 mm 角の材であり、入口部分の柱と倉の 4 隅に 140 mm 角の柱が使われていた。柱の間隔は、桁行が約 170 mm、梁行が約 170 mm であった。貫の本数は 3 本である。貫の間の板の枚数は 4 枚である。



写真 4-127 正面



写真 4-128 側面・正面

(49) S 家住宅板倉

所在：市川地区

この板倉の建築年は不明で、家主によると築 100 年以上経過しているかもしれないとのことだったが、倉自体に大きな破損等はみられなく、きれいな状態であった。用途は生活用品の保管である。敷地や私道は木で囲まれており、植栽も豊かである。

配置は、主屋や板倉、納屋、井戸、駐車場がある。

板倉の規模は、桁行が 5.47m であり、梁行 4.08m、板倉の最高高さは、6.7m である。1 階床面積 23.90 m²、中 2 階床面積は 4.89 m²で、延べ床面積は 28.7 m²である。柱幅は 140 mm、柱間 320 mm であった。平成 25 年に調査した中でも最も大きい板倉である。

壁は板の 1 枚壁であり、壁厚は 20 mm である。壁板の繋ぎ目は合決りとなっていた。入口部分に関しては、鴨居の溝は 2 本、扉は板戸が 2 枚入っていた。屋根は瓦葺で、雪止めが付いている。基礎はコンクリートで G L から床面の高さは 660 mm ある為、妻入前に 190 mm の石段が設置されてある。屋根は切妻屋根であり、屋根瓦は葺き替えられてある。

使用された柱は 130 mm から 150 mm 角の材が用いられた。また、入口部分の柱には 140 mm、倉の四隅には 155 mm 角の柱が使われていた。柱の間隔は、約 315 mm、梁行が約 315 mm であった。貫の本数は 5 本である。



写真 4-129 正面



写真 4-130 内部

(50) S 家住宅板倉

所在：南宮字町

奥行きのある形状と、密着している片流れの付属屋が印象的な遺構である。規模は桁行 5.47m、梁間 3.65m、床面積 19.97 m²。板倉は昭和 23 年(1948)に所有者の S 氏によって建てられ、その記録が建物内の木材に書かれている。よって板倉 52 棟の中ではかなり新しい部類だと位置づけることが出来る。改築に関しては、今から 10 年位前に瓦葺き替えが行われている。倉の現在の用途は、生活用具や米の保管である。

入口は妻入、小屋組は合掌組、基礎の種別は確認できなかった。この板倉にも引き戸が 2 枚引きで、鼠返しの受け材が設けられている。



写真 4-131 正面



写真 4-132 内部の小屋組



写真 4-133 壁に記された墨書

(51) S 家住宅板倉

所在：市川地区

S 家は市川地区にあり、J R 陸前山王駅から北東に位置している。車の通りは少なく静かである。

印象的であったのは、周囲は木が生い茂っているところである。庇の屋根には近年張られていただろう、塩ビのトタン屋根が使用されていた。また、板倉の後ろ側は、畑などのスペースになっていた。倉自体に大きな破損は見られなく、内観もきれいである。

この板倉の昭和 23 年(1948)に建てられ、改築や移築はない。用途としては、食材の貯蔵や生活用具の保管等に使われている。また、板倉正面の右側に土蔵があったが震災後の損傷がひどく解体された。

S 家の配置は、板倉の他に、主屋・倉庫・庭・畑がある。畑部分の敷地境界線がはっきりしていない為、敷地面積の算出はできていない。

板倉の規模は、桁行 5.276m であり、梁行が 3.259m、最高高さは 4.690m となっており、小規模な板倉である。建物の床面積 11.93 m²だった。

壁は板の 1 枚壁であり、板壁厚が 23 mm、張り方は横張りである。壁板の繋ぎ目は合決りとなっていた。入口部分に関しては、建物正面の中心にあり、木製の引戸である。戸に家紋があり、鍵は無く、鴨居の溝は 2 本、扉は板戸が 2 枚入っていた。屋根は瓦葺きであり、二重屋根ではなく、雪止めは付いていない。

使用されていた柱は 100 mm から 120 mm 角の材が用いられていた。入口部分の柱と倉の 4 隅に 120 mm 角の柱が使われていた。柱の間隔は、桁行が約 350 mm、梁行が約 250 mm であった。貫の本数は 2 本である。



写真 4-134 側面



写真 4-135 内部

(52) T 家住宅板倉

所在：南宮地区

この板倉の建築年は昭和 46 年(1971)であり、改築や移築は行われていない。その為、最も新しい板倉である。倉自体に大きな破損はみられないが、側面に数カ所に隙間があったが、板で補修し塞いでいる。用途としては、1 階、中 2 階とも物置であり、食材の貯蔵や生活用具の保管等にも使われている。

T 家の敷地は、板倉の他に、主屋・倉庫・庭・ビニールハウス・納屋がある。

板倉の規模は、桁行 5.79m であり、梁行が 3.79m、最高高さは 5.48m となっている。建物の床面積は、1 階床面積 20.98 m²、中 2 階床面積 13.33 m²であり、延べ床面積は 34.31 m²になる。

壁は板の 1 枚壁であり、板壁厚が 20 mm、張り方は横張りである。壁板の繋ぎ目は合決りが施されていた。入口部分は、建物正面の中心から向かって左側にあり、木製の引き戸である。戸に家紋が有り、上の文字がみえる。鍵は無く、鴨居の溝は 2 本、扉は板戸が 2 枚入っていた。基礎は玉石基礎で G L から床面の高さは 470 mmあるため、平入前には 120 mm の石段と 180 mm の石段が設置されてある。屋根は切妻屋根の瓦葺きで、二重屋根は有り、雪止めは付いている。板倉の正面からみて後ろ側に窓がある。

使用されていた柱は 125 mm から 160 mm 角の材が用いられており、入口部分の柱と倉の 4 隅に 160 mm 角の柱が使われていた。柱の間隔は、桁行が約 180 mm、梁行が約 165 mm であった。貫の本数は 5 本である。



写真 4-136 正面



写真 4-137 側面

第5章 多賀城の板倉の特徴 と他地域との比較

1. 多賀城の板倉の特徴、2. 郷倉と基本形、3. 他地域の板倉との比較

表 5-1 調査板倉一覧表

板倉 番号	所有者	住所	間 敷地	建設年	建設年補綴	推定含む建 設年(西暦)	移築の 有無	入口	風返し	桁行き (m)	梁行き (m)	面積 (㎡)	縦横比 (1:α)	棟木高 さ(m)	貫木数 (本)	柱の幅 (cm)	柱名間隔 (cm)	合決り	壁板向 き	壁厚 (cm)	半柱	梁柱	中二階	内部小部屋	倉倉 屋根
1	S	市川字立石		江戸 (天保8年)	墨書	1835	有り	平入		5.40	3.60	19.44	1.50	4.12	3	13~14	44	-	横	2	○		○	和(二段)	
2	E	新田字南関合		江戸 (弘化4年)	墨書	1847	有り	平入	○	5.49	3.66	20.09	1.50	4.10	3	12~13.5	60	-	横	3			○	和(一段)	○
3	K	市川字坂下		江戸 (文久3年)	棟札	1863	無し	平入	○	4.65	3.16	14.69	1.47	3.81	3	12~14	37	-	横	2.5				和(一段)	
4	K	市川字金堀		江戸 (安政6年)	墨書	1859	-	妻入	○	4.54	3.02	13.71	1.50	4.00	4	12.5	37.5	○	横	1.5	○		○	和(二段)	○
5	A	山王字東町浦		江戸 (文久4年)	墨書	1864	有り	平入	○	5.59	3.89	21.75	1.44	4.28	3	15	31	-	横	2	○	○	○	和(一段)	○
6	I	八幡3丁目		江戸時代後期	間取り	1761~1867	有り	平入		5.34	3.55	18.96	1.50	4.50	5	13.5	36.5	○	横	4.3			○	和(一段)	
7	M	八幡2丁目		江戸時代後期	間取り	1761~1867	有り	妻入	○	4.53	3.64	16.49	1.24	4.00	4	14	45	無し	横	2.2			○	合掌	○
8	I	八幡3丁目		不明	推定	1868~1911	無し	妻入	○	4.56	3.04	13.86	1.50	3.74	3	10~11	43	-	横	1	○			和(一段)	
9	K(北棟)	市川字五万崎	39	不明	推定	1868~1911	無し	平入		4.54	2.28	10.35	1.99	3.40	0	11	46	○	横	2	○			和(簡易)	○
10	I(南棟)	南宮字町	28	明治6年	墨書	1874	有り	平入	-	5.44	3.63	19.75	1.50	4.80	4	13	45	○	横	2.3				和(一段)	
11	Y	市川字五万崎		明治22年	墨書	1889	無し	平入	○	6.44	4.55	29.30	1.42	4.46	4	16	46	-	横	3			○	和(二段)	
12	K	高橋5丁目		明治25年	墨書	1892	有り	妻入	○	4.70	3.76	17.67	1.25	4.35	3	13~14.5	47	-	横	2				和(一段)	
13	I	南宮字町		明治末	間取り	1900~1911	-	妻入	○	5.52	3.65	20.15	1.51	4.31	4	12	30.5	○	横	2		○	○	和(二段)	○
14	S(北棟)	高崎一丁目	40	明治以前	間取り	~1911	有り	平入	○	5.60	3.80	21.28	1.47	4.60	5	13~16	27	○	横	2		○	○	和(一段)	○
15	A	南宮字町		明治	間取り	1868~1911	無し	平入	○	4.92	3.64	17.91	1.35	4.47	4	13	30	二枚板	横	2		○		合掌	○
16	I	南宮字町		明治	間取り	1868~1911	-	妻入	○	5.44	3.63	19.75	1.50	4.26	5	13.5	30	二枚板	横	3		○	○	和(一段)	
17	G	南宮字町		明治	間取り	1868~1911	無し	平入	○	5.57	3.77	21.00	1.48	4.36	5	12~14	30.5	○	横	2.5		○	○	和(一段)	
18	S	南宮字町		明治	間取り	1868~1911	-	平入		5.51	4.11	22.65	1.34	4.75	4	11~13	35	○	横	2			○	合掌	
19	T	南宮字町		明治	間取り	1868~1911	-	平入	○	4.64	3.11	14.43	1.49	3.92	4	11.5~13.5	29.5	○	横	2		○	○	合掌	
20	T	南宮字町		明治	間取り	1868~1911	無し	平入	○	5.65	3.62	20.45	1.56	4.20	4	11~15	23	二枚板	横	2	○正面	○	○	合掌	○
21	I	山王字東町浦		明治	間取り	1868~1911	無し	平入	○	5.45	3.67	20.00	1.49	4.16	4	13	42	○	横	3			○	合掌	
22	S(東棟)	市川字丸山	23	明治	間取り	1868~1911	無し	妻入	○	5.41	3.59	19.42	1.51	4.51	4	15~18	45	○	横	2.5				和(二段)	○
23	S(西棟)	市川字丸山	22	明治 (22の数年後)	間取り	1868~1911	無し	妻入	○	5.43	4.33	23.51	1.25	4.61	4	15~18	37	○	横	2.5			○	合掌	○
24	E	新田字北関合		明治	間取り	1868~1911	有り	妻入		5.46	3.67	20.04	1.49	4.10	3	13~14.5	45	-	横	2			○	和(三段)	
25	K	市川字城前		明治	間取り	1868~1911	無し	妻入		5.43	3.66	19.87	1.48	4.26	5	12~14	29	○	横	2		○	○	和(一段)	
26	S(南棟)	南宮字町	27	明治	間取り	1868~1911	無し	平入		5.39	3.63	19.57	1.48	4.30	3	11	36	無し	横	2			○	合掌	
27	S(北棟)	南宮字町	26	明治	間取り	1868~1911	無し	平入		3.65	3.16	11.53	1.16	3.80	4	13	30	○	横	2.5		○	○	合掌	
28	I(北棟)	南宮字町	10	不明	推定	1868~1911	有り	平入		5.45	3.64	19.84	1.50	4.70	5	13.5	30.5	○	横	2.3		○	○	和(一段)	
29	S	市川字坂下		不明	推定	1868~1911	無し	妻入	○	5.44	3.61	19.64	1.51	3.82	4	12	42	○	横	2			○	和(一段)	
30	S(南棟)	市川字美社	31	不明	推定	1868~1911	-	妻入		4.99	3.11	15.52	1.60	4.10	3	13	24	○	横	1.5	○	○	○	和(二段)	○
31	S(北棟)	市川字美社	30	不明	推定	1868~1911	-	妻入		3.64	2.86	10.41	1.27	3.40	3	11	23.5	○	横	1.5	○	○		和(一段)	
32	O	南宮字町		100年以上	間取り	~1912	-	平入		5.44	3.64	19.80	1.49	4.65	5	13~16	30	○	横	2		○		合掌	
33	T	高崎2丁目		100年位前	間取り	1912	無し	妻入		5.38	3.76	20.23	1.43	3.82	4	13	29	○	横	3		○	○	合掌	○
34	T	八幡2丁目		大正7年頃	間取り	1918	-	平入	○	5.01	3.62	18.14	1.38	4.00	4	12.5	45.5	○	横	3			○	和(一段)	
35	O	南宮字町		大正14年	墨書	1925	有り	平入		5.48	3.65	20.00	1.50	5.60	5	14	32	無し	横	2		○	○	合掌	
36	K	山王字中山王		大正	間取り	1912~1925	有り	妻入		4.44	3.18	14.12	1.40	3.89	3	12.5~14.5	30.5	-	縦	1.8		○	○	合掌	○
37	K	南宮字町		不明	推定	1912~1925	-	妻入	-	5.40	3.60	19.44	1.50	4.04	4	13	30	二枚板	横	3		○	○	和(一段)	
38	S	南宮字町		不明	推定	1912~1925	無し	平入	○	5.45	3.65	19.89	1.49	4.40	5	14	30.5	○	横	2		○	○	合掌	
39	K(南棟)	市川字五万崎	9	不明	推定	1912~1925	無し	妻入	○	5.47	3.66	20.02	1.49	4.10	5	13.5	46.5	○	横	2				合掌	
40	S(南棟)	高崎一丁目	14	昭和3年旧11月	墨書	1928	無し	平入	○	5.45	3.71	20.22	1.47	4.30	4	13.5~16	30.5	○	横	2		○		合掌	○
41	W	八幡2丁目		昭和4年旧7月	墨書	1929	-	妻入	○	3.65	3.19	11.64	1.14	3.70	4	11	43.5	○	横	2			○	合掌	
42	T	八幡2丁目		昭和11年4月	間取り	1936	-	妻入		3.65	2.73	9.96	1.34	3.60	3	10	60.5	無し	横	3			○	和(二段)	
43	G(恩賜 邸舎)	八幡2丁目		昭和初め	間取り	~1936	有り	平入		5.45	3.63	19.78	1.50	3.88	4	11~12	60	-	横	2				和(三段)	
44	M	八幡3丁目		70年以上	間取り	~1942	-	妻入	○	4.50	2.99	13.46	1.51	4.29	4	11~12	29	-	横	3		○	○	和(二段)	
45	T	八幡3丁目		不明	推定	1926~1945	無し	妻入	○	5.50	3.65	20.08	1.51	4.63	4	12~13	35	○	横	1			○	和(二段)	○
46	S	市川字大畑		不明	推定	1926~1945	有り	妻入	○	5.73	4.53	25.96	1.26	4.73	4	14	33	○	横	2		○		和(一段)	○
47	S	市川字美社		不明	推定	1926~1945	-	平入	○	4.92	3.17	15.60	1.55	3.83	4	12~13	44	-	横	2.3			○	和(二段)	
48	T	南宮字町		不明	推定	1926~1945	-	平入	○	5.42	3.68	19.95	1.47	4.50	5	13	30	○	横	2		○	○	合掌	
49	S	市川字大畑		不明	推定	1926~1945	無し	妻入	○	5.47	4.08	22.32	1.34	4.70	5	14	46	○	横	2			○	和(一段)	○
50	S	南宮字町		昭和23年	墨書	1948	-	妻入	○	5.47	3.65	19.97	1.50	4.48	4	12	30	無し	横	3		○		合掌	
51	S	市川字丸山		昭和23年	間取り	1948	有り	妻入	○	3.65	3.03	11.06	1.20	3.70	3	11	39	○	横	2.3				合掌	
52	T	南宮字町		昭和46年	間取り	1971	有り	平入	○	5.78	3.63	20.98	1.59	4.40	5	13	30	○	横	2		○	○	合掌	

※○は該当有り、空欄は該当無し、-は不明のもの

1. 多賀城の板倉の特徴

本章では、1 節(1)で配置の分類、(2)～(5)では用いられている技法の考察、(6)では棟札や墨書から判明した大工職人の状況、2 節では郷倉の分析、3 節では宮城県全域における傾向と多賀城の板倉との比較から位置づけを行う。

表 5-1 は、所在や寸法、各機能の有無を遺構ごとに記載し年代が古いものから序列している^{注5)}。本章ではこの板倉(遺構)番号に従い、文中で No. と表記することとする。

(1) 配置

倉には命を繋ぐ食糧と重要な家財類が収納されており、いかなる災害時においても守らなければならない最後の砦であった為、暮らしの中で倉のもつ比重は高かった。しかし板倉は、土蔵や石倉に比べて火災に弱いという最大の弱点がある。そこで板倉 52 棟を主屋の入口を正面とした場合、敷地内のどこに板倉があるかを図 1 のような 3 パターンに分類した。次に、主屋の入口と板倉の入口の位置がどのような関係になっているのかをこちらも図 2 のような 3 パターンに分類した(図 5-1, 5-2)。

主屋の入口を正面とした場合敷地内のどこに板倉があるか

タイプ A・・・主屋の正面に対して板倉が対面するもの。

タイプ B・・・主屋の正面に対して板倉が左右に並列するもの。

タイプ C・・・主屋の正面に対して板倉が裏面にあるもの。

主屋の入口と板倉の入口の関係

タイプ X・・・主屋の入口と板倉の入口が向かい合うもの。

タイプ Y・・・主屋の入口と板倉の入口が垂直になるもの。

タイプ Z・・・主屋の入口と板倉の入口が同じ向きであるもの。

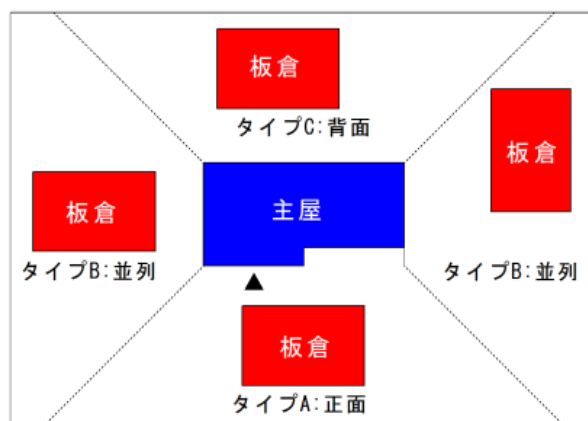


図 5-1 倉の配置と主屋

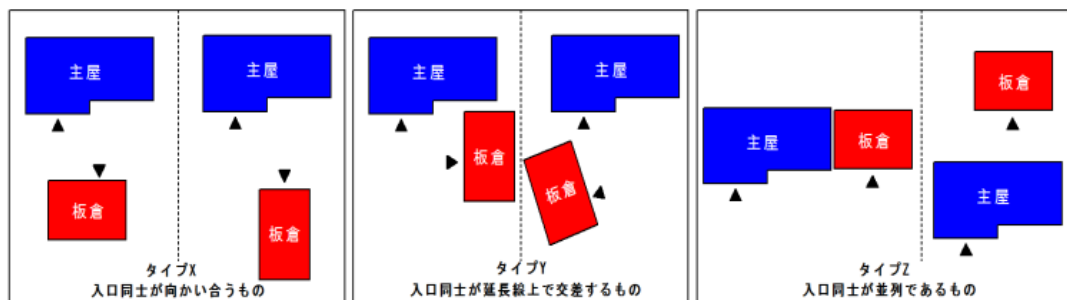


図 5-2 入口の向きと主屋

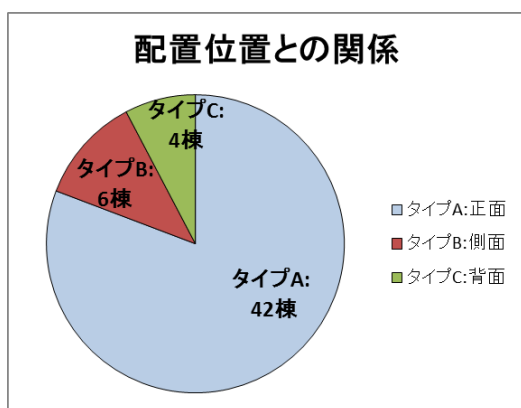


図 5-3 配置タイプ

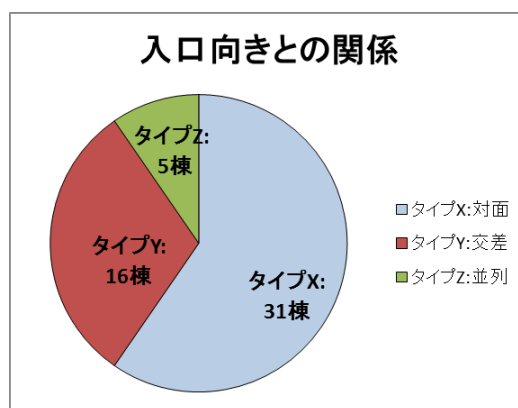


図 5-4 入口タイプ

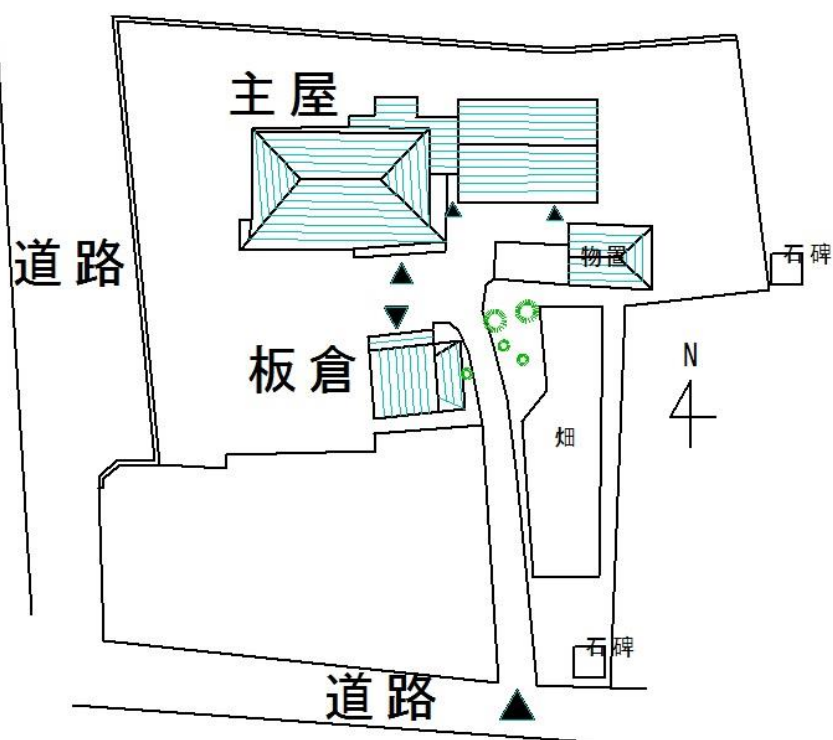


図 5-5 配置図 (No. 33)

パターン分けの結果は図 5-3、図 5-4 の円グラフで示している。配置位置はタイプ A の正面に配する形式が 42 棟と全体の 8 割を占め、入口と向きの関係においては 6 割がタイプ X:対面という結果であった。この入口向きがタイプ X となる倉 31 棟のうち、位置がタイプ A 配置となる組み合わせは 21 棟であり、全 52 棟のおよそ 4 割に達することを考えると、この地域の一般的な配置の一つと言える(図 5-5)。この組み合わせが多いことについては、玄関から倉の入口までの動線が短いため利便性が高いこと、倉に貯蔵している穀物を守る為主屋から視認性の高いことで定着した配置と考えられる。

また、地区ごとでも相違があり、南宮の地形は大きな街道沿いに左右に住宅が密集している、典型的な街道を起点にした町並みである。その為、敷地の形状は、間口が狭く、細長くなり、主屋と倉への影響も大きいと考えられる。同様に、八幡地区も L 字に曲がった街道が続く、それに沿い左右に住宅が並ぶ。市川地区には、急な上り坂を進む山道に近い通りが多く、ここでは B 直角型が多い。

板倉に関しては、土蔵・石倉とは異なり移築が比較的容易なことがあり、向きを変えた倉も複数確認できた。しかし、現段階の結果として、付属屋とその入口の向きも街道又は道路の影響を大きく受けることがみとめられる結果となった。

(2) 柱間隔と類型

柱の形式では本柱のみの形式と、本柱と半柱を用いて構成された形式とに区分ができる(図 5-6)。

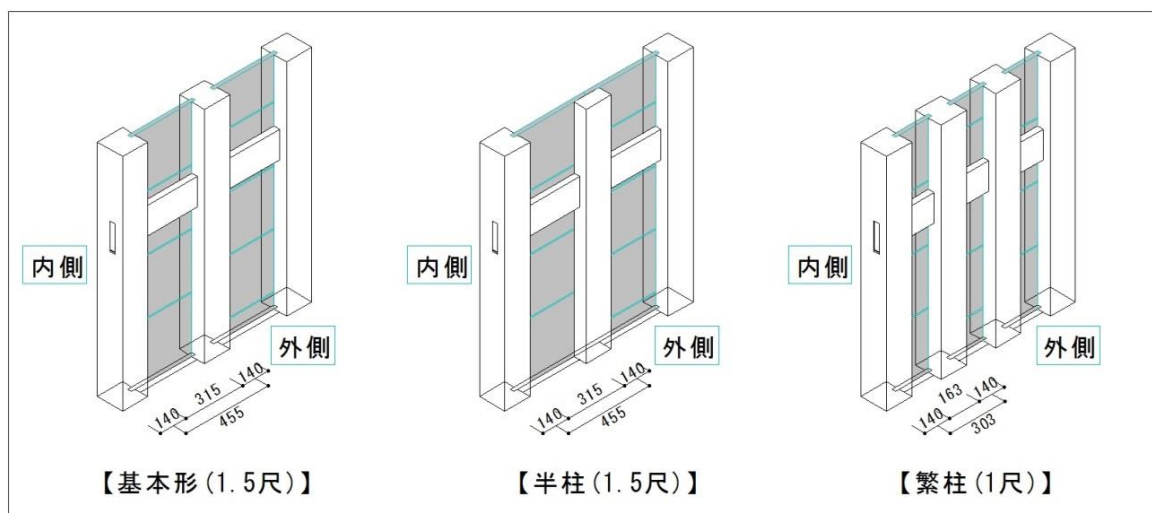


図 5-6 柱の形式の類型

半柱を用いている 7 棟の倉のうち、3 棟が江戸時代後期の建設年代であることが判明している。残りの倉も風蝕具合や聞き取り調査などから比較的古いものと推定できる。また、

半柱を用いている板倉の面積は平均で 15.01 m²、棟木の高さの平均は 3.86mと規模が小さく、簡素化、簡略化した板倉といえるが、柱間隔だけは狭く見えるようにしたものと考えられる。その後、明治時代頃から本柱の配置が目立ち、半柱を用いることはなくなった。No.20、同一敷地内の No.30、No.31 では半柱を用いながらも柱間隔が芯・芯 23～24cm と大変狭く、同様の柱構成で間隔の狭い No.5 を合わせると、明治時代の中期以降には本柱形式のみへと移行したものと考えられる(図 5-7)。柱間隔は概ね等間隔で、次節で掲載する郷倉平面図の 1.5 尺よりも極端に狭いものもあるが、尺貫法における 2 尺(610 mm)、1.5 尺(455 mm)、1 尺(303 mm)のそれぞれの値に集中している (図 5-8)。そこで、本報告でも繁柱は柱間隔が芯々で 1 尺(303 mm)程度か、それ以下のものであると提案したい^{注6)}。繁柱が定着した理由は、①柱となる木材の材料が入手しやすくなった、又はコストが下がったこと、②豪華な外観になる為、他家に対する見栄えの意識の高まり、③板が割られても、人や害獣が侵入されにくいことから、防犯意識の高まりなどが挙げられる。

繁柱の定着を含め、本柱が増える、又は柱間隔が狭くなることは壁板の面積の減少に繋がり、結果として板倉の性能の向上が目的と考えることが出来る。

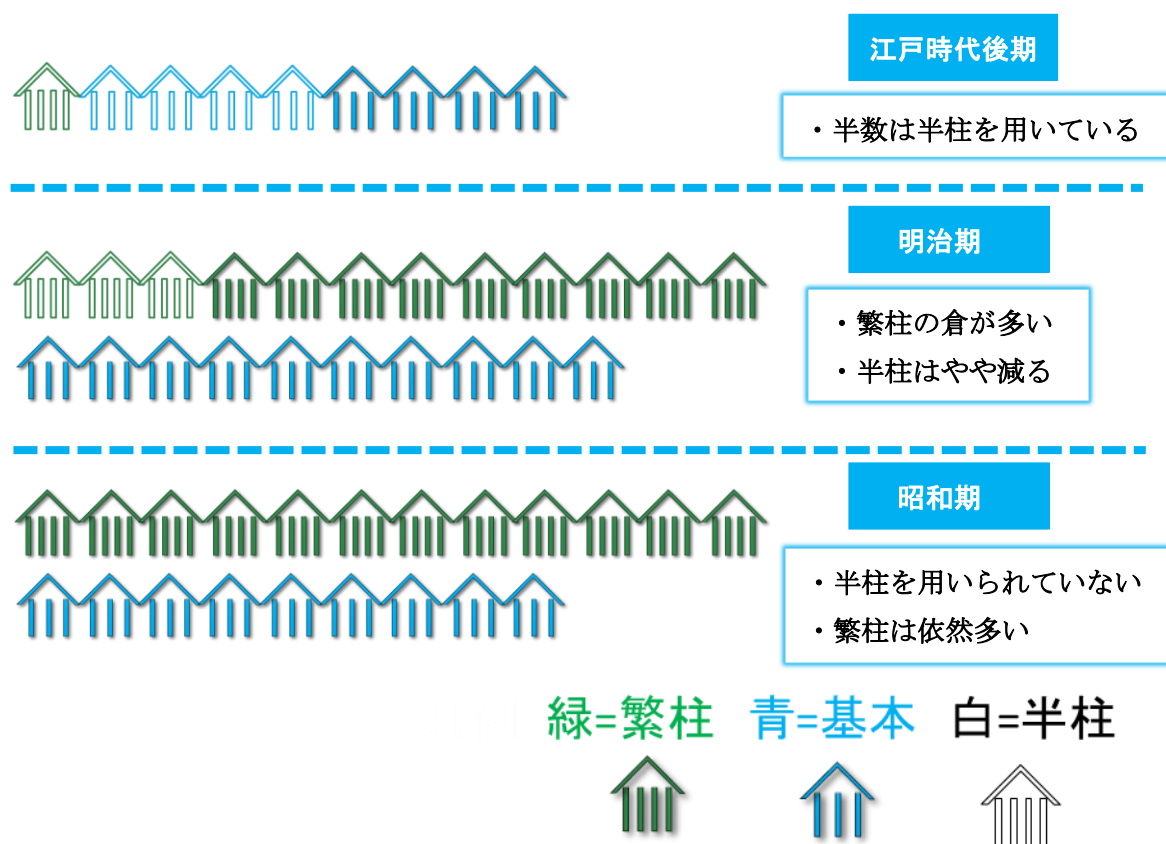


図 5-7 柱の類型と時代の推移

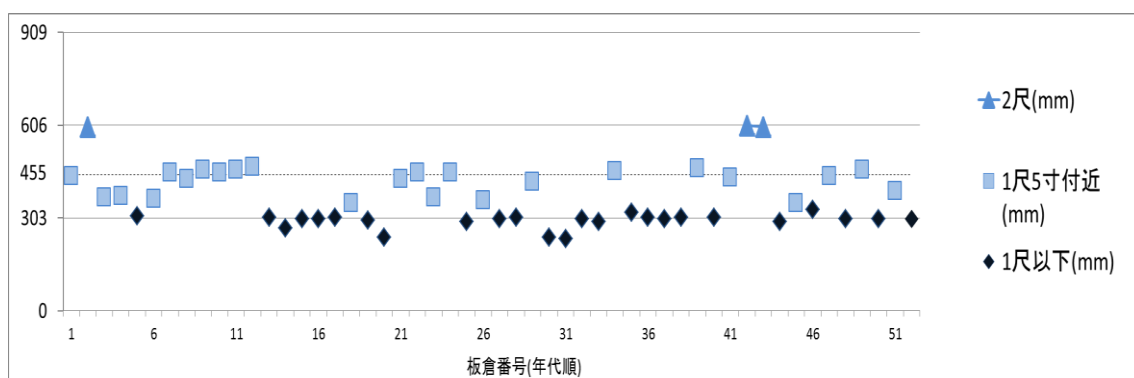


図 5-8 柱間隔の数値

中でも No.20 では、半柱を用いているものの正面方向のみに留まり、両側面・背面は本柱で構成された繁柱の倉である(図 5-9)。このことから、半柱・繁柱の双方とも構造面の強化に用いたのではなく、柱が密に並ぶ形式が見栄えが良いとされ、一種の威厳を示す効果があったものと推測できる。よって半柱においても、①侵入を防ぐ防犯、②柱が多く豪勢に見せる役割を担っていたと考えられる。以上のことから、多賀城市では江戸時代後期は 1.5 尺程度の柱間隔が主流であり、その中で半柱も用いていた。その後、繁柱の技法が採

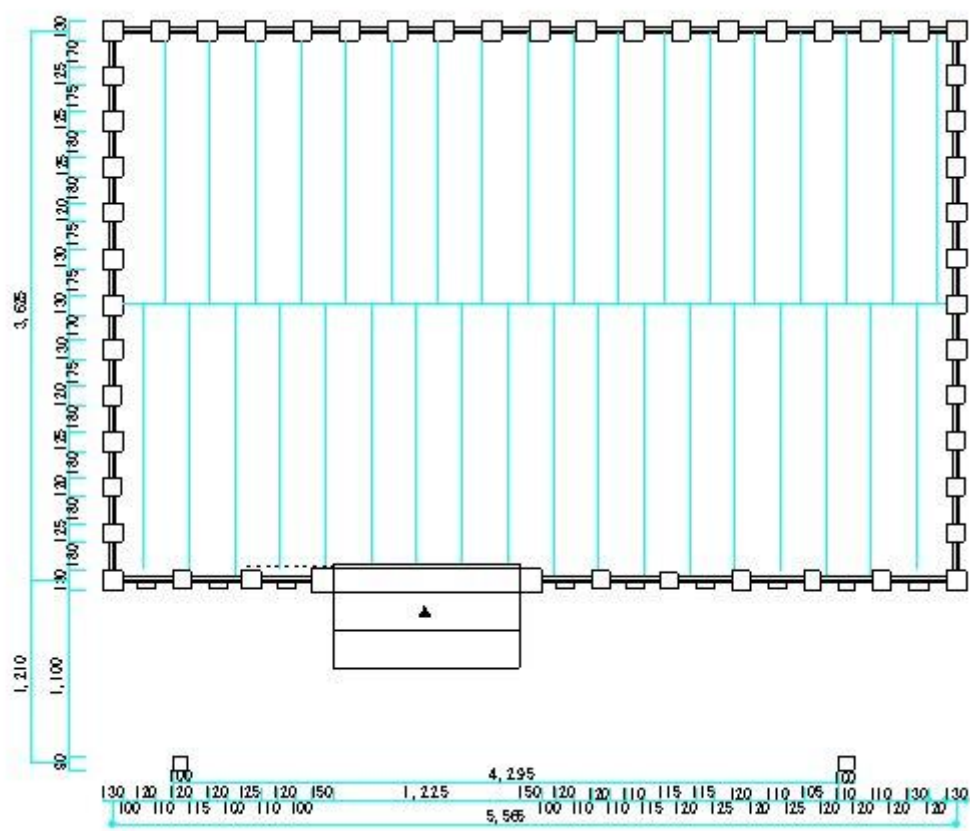


図 5-9 平面図 (No. 20)

用され明治時代には一定数定着したが、依然として 1.5 尺程度の間隔の一般的な倉も半数程度建設されてきた。

(3) 壁組と貫

板壁には縦張りと横張りの違いがあるが、多賀城市においては 52 棟中 51 棟が板を横向きに落とし込んだ横張りである。一方で、気仙沼市や石巻市などを中心とした北部沿岸地域では、縦張りが広く分布しており、この板壁の張り方の相違は顕著に表れた。

壁自体は、厚さ 2.0cm 程の板を落とし込み、板同士が噛み合った合決り(あいじゃくり)と呼ばれる加工で隙間が無いよう張られている^{注7)}。また、No.15、No.16、No.20 の板倉は二枚板壁で、その接合部はそれぞれずらして組んでいた(写真 5-1)。特に、No.16 I 家住宅板倉は注目され、二枚の板の間に棧を入れて、空気層を作っている(図 5-10)。



写真 5-1 合決りの詳細

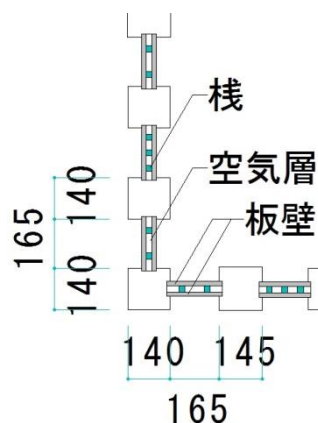


図 5-10 空気層を設けた二枚板壁 (No. 16)

これらの技法は、室内の気密性や断熱性の向上を図った技法であると考えて間違いないであろう。柱間隔が狭くなれば縦向きの板を一枚入れる方が施工の手間が省けることを考えれば、繁柱で横入れの板壁に該当するものは、より手間がかかり上質であるとも言える。一方、修理の観点からみれば、横向きに一枚ずつはめ込む場合は部分的な修復も可能である。

壁組のうちもう一つ特徴的なのは貫の位置である。貫は極端に規模の小さい No.9 の板倉には無かったが、唯一縦張りの No.36 の板倉を除く全ての板倉で外側に組まれ、70cm 程度の間隔で 3~5 本の貫を配している。調査対象の中では、多賀城市に分布する横張り板壁の場合は貫を外側に、対して北部沿岸地域に分布する縦張り板壁では内側に入る傾向が認められる。梁間が狭いものには貫の本数が少ない例がいくつかみられ、同様に、梁間が狭く

なれば棟木の高さも低くなる例がいくつか確認出来た（図 5-11）。また、前節で記した柱の間隔は強度の向上を目的にしたものではなく、板倉の強度は貫が重要であったことが確認される。

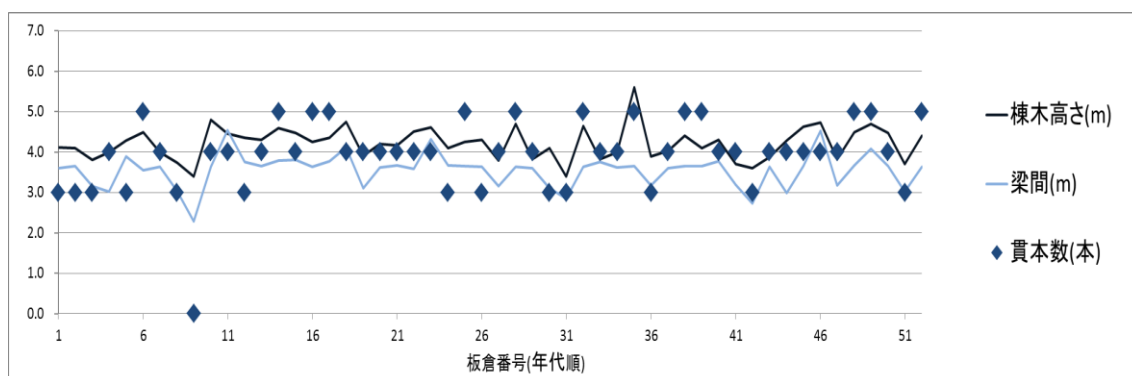


図 5-11 棟木高さ・梁間・貫本数

(4) 屋根と小屋組み

構造形式では主に、立面や断面の情報から高さ関係や屋根の造りに着目して考察したが、平面形式同様に年代における数値等の明確な変化はなかった。

小屋組は、全ての倉で妻側に和小屋を組み、小屋梁が 1～3 段で構成されている。一方で内部では、梁や束を要しない合掌組(登り梁)を用いた倉が多く、全体で約半数が内部に合掌組を用いた造りであった。これらは中二階を設置している倉が多く、広いスペースの確保や作業効率の向上の目的から普及したと考えられる。二棟が隣接して並んだ No.22、No.23 では、互いに建設年が明治期であり、柱幅や桁行、床高や屋根が酷似しているものの、小屋組が和小屋組と合掌組とで異なる(図 5-12)。このことから、当時から二通りの組み方のうちどちらかを選択することが可能だったといえる。

屋根組みでは一般的な切妻屋根と切妻置き屋根(二重屋根)が確認できた。置き屋根とは、既存の野地板の上にさらに小屋束を立て、通気性を確保した上でもう一段屋根を被せる構法である(写真 5-2)。土蔵の屋根に多いが、板倉でも断熱効果が期待でき下層の屋根を風雨から守る機能もある。

窓を設けている板倉は 9 棟と少なく、そのいずれも開閉はできない採光を目的としたものだった。柱を密に立てるとい平面形式の特徴や壁の工法と同様に、気密性を高める為に不要な開口は極力減らしている。



図 5-12 隣接する合掌組と和小屋組 (No. 22, 23)



写真 5-2 切妻置き屋根 (No. 33)

(5) 庇と装飾

多くの戸の施錠に設けられていたのは、かき出し錠と呼ばれる細長い形状の鍵と錠である。かき出し錠では、シリンダーの役割を持つ錠の部分に、ひっかき棒を掛けて抜く手順で開錠できる。100 年以上経った今でも現役で使用されている程精巧な造りであった(写真

5-3)。戸は鴨井や敷居の溝の数から二枚戸が一般的であり、多くの板倉では板戸の内側に通気性の確保した格子状の内戸が設けられている(写真 5-4)。



写真 5-3 掻き出し錠 (No. 49)



写真 5-4 内戸 (No. 32)

庇周りには多くの装飾や組み物が確認できた。写真 5-5 の持ち送りは柱を立てずに庇を伸ばす場合に多く見られ、簡素なものから繊細な彫り物まで多彩である。他にも、飛燕垂木と呼ばれる二重に伸ばした垂木(写真 5-6)や、束の役割を持つ墓股(写真 5-7)、2 間近くもある連子(写真 5-8)等がある。斗組もいくつかの板倉で見られ、当然ながら大工職人に木造建築の高度な知識が備わっていたことが分かる(写真 5-9)。

これらの装飾は多くの板倉に散りばめられており、寺社建築を彷彿させる高い技術が用いられていた。特に視線が集まる入口付近を豪勢にすることで、個人の財力を誇示したいという気持ちや大工の高い技術を披露したいという気持ちがあったのだと思われる。

鼠返しが設けられている板倉、あるいはその留め板が設けられている板倉は過半数を占めており、これも貯穀の機能を果たすもののひとつである^{注8)}。貯穀の目的を果たすうえで、



写真 5-5 持ち送り (No. 18)



写真 5-6 飛檐垂木 (No. 7)



写真 5-7 墓股 (No. 13)



写真 5-8 連子 (No. 29)



写真 5-9 斗組 (No. 34)



写真 10 ねずみ返し (No. 38)

害虫の侵入を防ぐことは重要な要素の一つであることは間違いなく、現在は設置されていない倉においても、大半の板倉では過去に設置していた可能性が高い(写真 5-10)。

屋根瓦は改修され新しくなっている板倉も多く、地域の気候を考慮し雪止めを設けている倉もある(写真 5-11)。写真 12 のように鬼瓦は各家で違う様相を呈し、家紋や漢字、草花のモチーフが模されていた。



写真 11 雪止め瓦 (No. 4)



写真 12 鬼瓦 (No. 40)

(6) 大工の関わり

安政 3 年(1856)の「宮城郡村々諸職人渡世之者職道に付請書」^{注9)}によると、多賀城周辺の職人の状況は表 5-2 の通りであり、そのうち市川村などの今回の調査対象地の大工とその氏名をまとめたものが表 5-3 である。板倉の墨書に記されている、No.1 板倉(市川・1835 年建設)の『才三郎』、No.3 板倉(市川・1863 年建設)の『高橋栄治』の両名は、付請書の記載と同名^{注10)}であり年代や居住地もほぼ一致していることから、同一人物である可能性が高い(表 5-4)。この二名の関わったと見られる板倉が判明したことは今回の調査の大きな成果のひとつと言える。

黒坂貴裕氏の論文^{注11)}によれば、繁柱形式の宮城県北上川流域の板倉は気仙大工に関わりがあると述べているが、江戸時代後期頃の多賀城では、装飾等に高い大工技術が見て取れるものの、今のところ気仙大工の関わりを示す記録は見られなかった^{注12)}。

表 5-2 安政 3 年の宮城郡の職種とその人数

[illegible]

表 5-3 安政 3 年の多賀城地区の大工職などの職人名

地域・地区名	新田村	山王村	南宮村	市川村	高橋村	八幡村
役職:名前	大工:長之助	屋根葺き:久助	屋根葺き:萬助	大工:栄治	大工:松蔵	大工:長田利右衛門
		木挽:長蔵	大工:丈助	大工:才三郎		大工:今野要八郎
			大工:久太郎			大工:太蔵
						屋根葺き:幡治
						屋根葺き:権十郎
						屋根葺き:善吉

表 5-4 調査対象板倉の墨書や棟札から判明した職人名と普請年月日

板倉番号	所有者	記載内容	年月日
1	S	市川巴 大工棟梁:齋三郎	天保六年 初夏
2	E	(かし粃覚え書)…粃の貸し借り記録	弘化四年
3	K	棟梁:高橋栄治	文久三年 四月
4	K	棟梁:加藤円之助 (戸前の修理)…大工への賃金	明治四拾四年 旧十月十九日着手
5	A		文久四年
10	I		明治六年 十二月
11	Y	大工棟梁:高橋栄之助、及び工賃	明治二十二年 十月
12	K	(鼠まつり)…行事等の記載※他数件	明治四十五年 旧一月十四日
35	O	齋藤長之助	大正拾四年 旧七月二十三日
41	W	棟梁:鈴木太郎	昭和四年 旧七月
50	S		昭和二十三年 四月二十五日

2. 郷倉と基本形

県内の板倉の基本形を見るため昭和 11 年(1936)に発刊された「宮城縣郷倉誌」^{注 13)}を検討した。宮城県では昭和 9 年に東北凶作に遭い、共同運営を目的とした郷倉の重要性が再認識された。調査した対象では No.43 が恩賜郷倉であり、当時は宮城郡多賀城村の八幡地区の組合で運営されたものと思われる。恩賜郷倉とは、昭和 9 年の東北地方の凶作を機会に、御下賜金を基礎として建てた郷倉を指して呼称している。巻末の郷倉建築設計図では標準的な平面図、立面図、断面詳細図が掲載され、その平面図から規模は 2.5 間×4 間、柱間は芯々 1.5 尺(455 mm)である(図 5-13, 5-14)。したがって、郷倉の図面資料としては唯一のものであるという希少性と、郷倉自体が県内の広い地域に分布していた事をも含め、この形態をここでは板倉の基本形と考えたい。

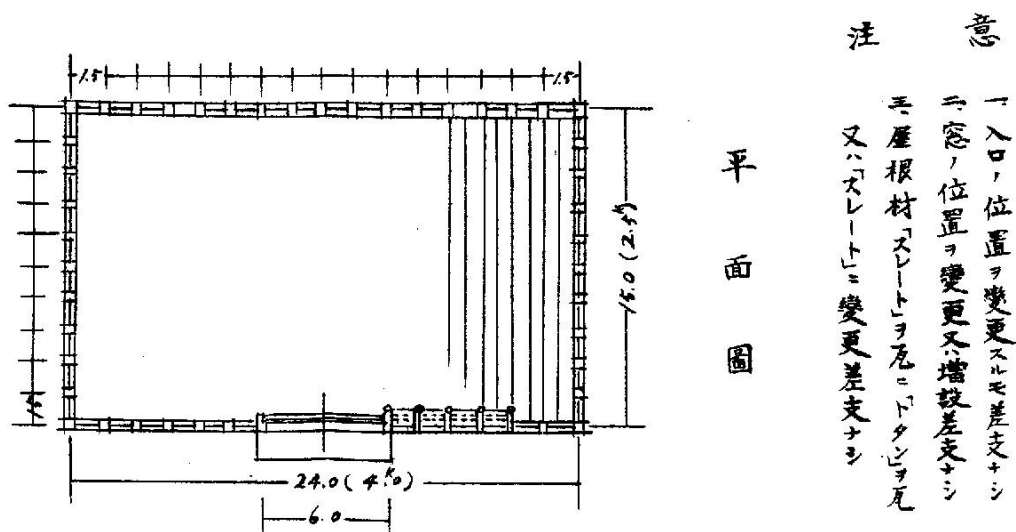


図 5-13 郷倉平面図と注意書き

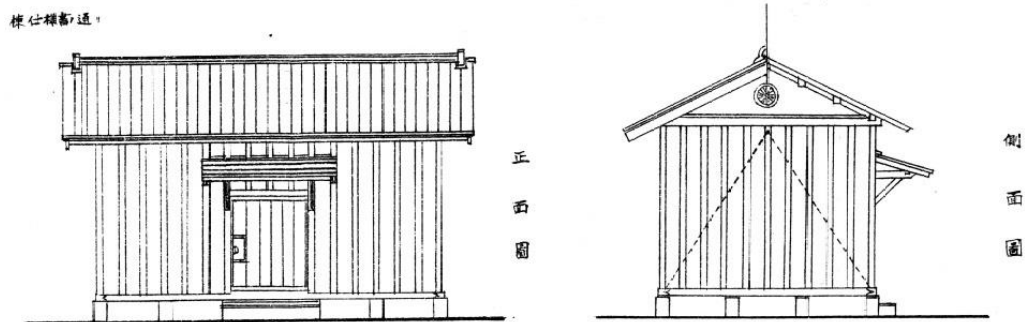


図 5-14 郷倉立面図(正面・側面)

倉の規模は大小様々であるものの、この柱間 1.5 尺の数値は、前節図 5-8 においてもその数値が集中しており、図 5-15 をはじめとした半柱や繁柱を除く多数を占める板倉が郷倉平面図に近似していると言える。また、後述するその他の地域の板倉とも関係性が見受けられた。

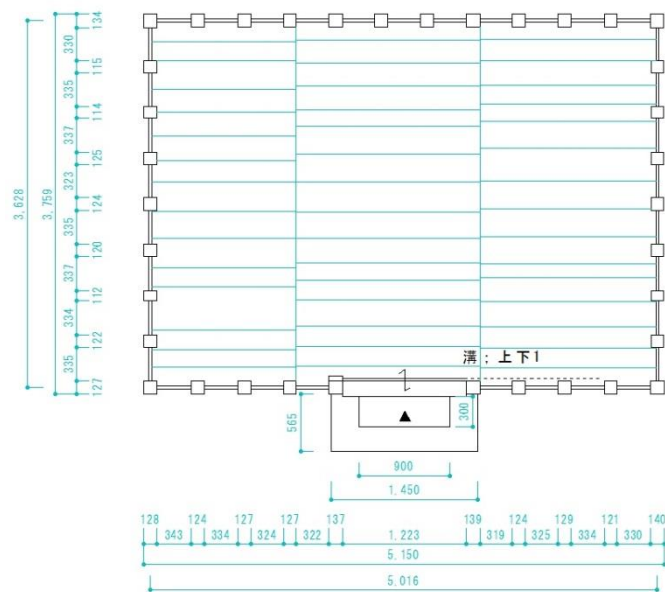


図 5-15 多賀城の板倉 (No. 34)

3. 他地域の板倉との比較

県内 13 の市町村で 50 棟の板倉外観調査を行った他、参考資料として 4 つの報告集^{注14)} を加えて、宮城県内の対象 80 棟の板倉 (加えて岩手県一関市より 1 棟) を柱間隔と板壁の張り

方の区分を地図に示した(図 5-16)。仙台市、多賀城市、大郷町、利府町、松島町では横板

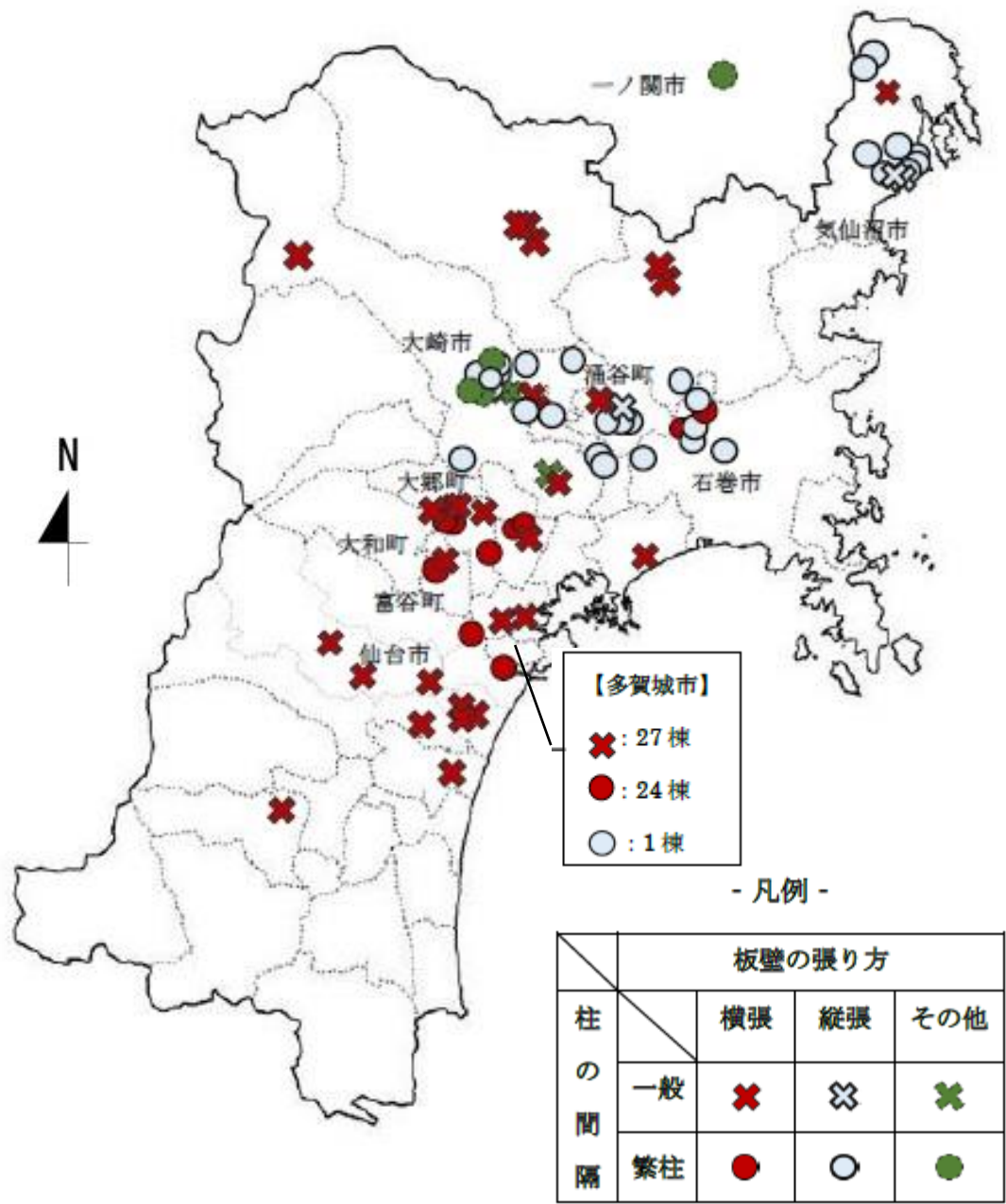


図 5-16 板張りと柱間隔の分布

張りの板壁が、気仙沼市、石巻市、涌谷町、大崎市には縦板張りの板壁が目立ち、両者は明確に区分される。大崎市古川には漆喰塗された板倉が(写真 5-13)、更に岩手県一関市に板壁の内部に砂を入れた板倉が存在する^{注15)}。これら二つの板倉の発生の順序は明確ではないが、両者とも柱が密に並び、前者では板壁外側に木舞を組みその上に下塗りと上塗りを施す技法であり、後者は板壁の間に砂を充填した技法で、両技法とも縦板張りの流れを汲

み、更なる気密性の向上を目的に発案されたものと考えられる。柱間隔では繁柱の 1 尺以下と、一般的な間隔として 1.5 尺程度か又はそれ以上のものにと分類している。縦板張りの壁の場合、繁柱が多い為柱間隔が狭くなれば一枚ずつ落とし入れる横板張りは適さず、縦に 1 枚で納める方が適している。中でも、実測調査を行った石巻市河北町 S 家住宅板倉においては柱間隔が芯-芯 23 cm (内法で 8 cm) の繁柱、一枚の板を縦に入れた壁、貫は内側であり、多賀城市を始めとした宮城県中部とは対照的であった(写真 5-14, 図 5-17)。



写真 5-13 大崎市古川の漆喰塗り板倉



写真 5-14 石巻市河北町の板倉

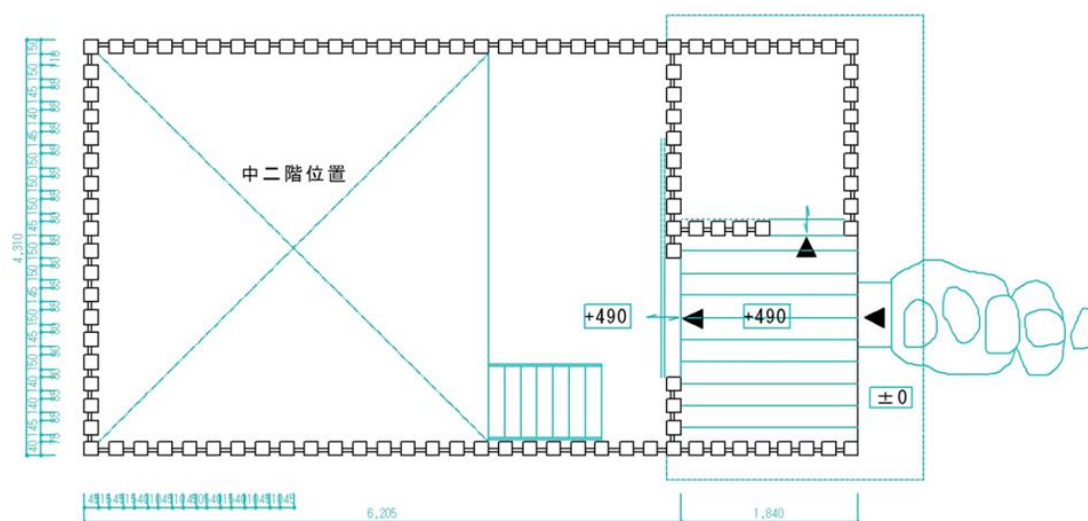


図 5-17 石巻市河北町の板倉

結論・参考文献・謝辞

結論

前章で解説したように、一定の類型や地域性を見出すことができたが、それぞれの倉において非常に多様な技法や装飾を見ることが出来る。特に板倉の柱や壁組みにおいては一定の結論付けを行うことが出来た為、下記に記す。

多賀城市の板倉の特徴は、①板壁を横張りとした「はめ板倉」、②板壁の接合の多くは合決り、③板壁外側に貫を用いる、④小屋組は和小屋組と合掌組の複合形、である。中でも、横板張りの板壁のまま 1 尺程度まで柱間隔を狭くしている繁柱や、二枚板張りの技法、置き屋根を採用している例が認められる。これらの技法が導入されている板倉は上質であると考えられ、基本形の技法と比較したものが下表である。

表 6-1 横板張り板倉における基本形の技法と上質な技法の比較

	基本形の板倉	上質な板倉	
柱間隔 (数値)	1尺5寸程度 (455mm前後)	1尺未満 (303mm以下)	
繁柱の柱	(該当なし)	本柱と半柱で構成	本柱のみで構成
壁組	一枚板つき合わせ	合決り・二枚板	
屋根	切妻屋根	切妻置き屋根(二重屋根)	
入口装飾	簡素	斗組や持ち送り、彫り物等	

県内全体で見れば、①1.5 尺程度の柱間隔、②これらの柱を横張りの板壁で組む、③貫が外側に組まれ、これが大部分を占める基本形式であると言える。一方で、気仙沼市や石巻市をはじめとした北部沿岸地域で行った調査の結果からは、④1 尺以下の繁柱、⑤縦張りの板壁、貫は内側に組む形式が浸透していることが判明している。そのうち多賀城市の板倉は、郷倉の図面や他地域との比較から基本形式とそれに近い形式も少なくないが、半数近くは横板張りの繁柱形式が定着していた。繁柱の中でも、柱幅よりも狭く並ぶものも確認でき、板壁の面積が更に小さくなり断熱性・気密性を上げること、また木材をふんだんに使うことで財力を示すことがその背景にあったと考えることができる。

以上のことからこの地域を中心とした「はめ板倉」には、大工職人による板倉の多様な技法が確認できたが、それらは一様に土蔵に近い気密性を求めているのものであったと考察できる。また、多賀城市の板倉は、No.1 から No.52 までの約 140 年間、規模の範囲が広く、

妻入・平入も約半数ずつであるが、梁間と桁行の比などはほぼ同じ数値で推移しており、大きな変化はなかった。しかし、庇周辺の彫り物等の装飾をはじめ、繁柱や半柱、板壁の張り方などに技法上のランクの差を認めることができた。

付属屋は主屋と比べてその地位が低いものとされがちではあるが、置き屋根や大工技術を披露した装飾が多数確認できることから、家主や施主が食料を保管するだけという認識のみではなかったことが分かる。それは一家としての威厳であったり、生活を守る最後の砦であったり、当時の暮らしや文化・地域を守ってきた存在だと言えるだろう。

注釈

注 1)「板倉等調査・保存・活用事業に関わる調査」とは、多賀城市が国から認定を受けた「多賀城市歴史風致維持向上計画(平成 23 年 11 月)」における施策のひとつである。同計画の各項目は、歴史的風致を維持及び向上させ、魅力あるまちづくりに寄与することを目的としている。

注 2)「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(黒坂貴裕、安藤邦廣、沖本太一、刈内一博 日本建築学会計画系論文集 第 576 号, pp.45～52, 2004.2)pp.45 及び pp.52 によると、繁柱の仮称について「羽目板倉の内、柱もしくは半柱を細かく配置することで、半柱を含んだ柱間寸法(芯々)が 1 尺前後まで狭くなるものを「繁柱の板倉」と仮称し」とある。

注 3) 注釈 2 前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(pp.51)

注 4) 注釈 2 前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(pp.52)

注 5)「宮城県多賀城市における板倉の形態」(渡邊亮、高橋恒夫 日本建築学会東北支部研究報告集 計画系第 77 号, pp.153～156, 2014.6)で一部を報告している。

注 6) 注釈 2 前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(pp.45 及び pp.52)

注 7)合決りを用いている板倉は 31 棟と半数以上あり、5 棟は用いられておらず、12 棟は不明であった。

注 8)鼠返しが設けられている板倉、あるいはその留め板が設けられている板倉は 34 棟と過半数を占めている。

注 9)「宮城郡村々諸職人渡世之者職道に付請書」(多賀城市史 5 歴史史料(二)五 生活・文化, pp.573～576)とは、宮城郡の大工や棟梁をはじめとした職人の名簿である。

注 10)同じ「さいさぶろう」の読みであることで同一人物と考えられる。

注 11)注釈 2 前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(pp.50)

注 12)「近世在方集住大工の研究」(高橋恒夫 中央公論美術出版, 九章 民家普請の出稼ぎと大工系統)pp.213 によれば、気仙大工の主要な出稼ぎ先は、南は仙台城下付近までと考えられており、当時の多賀城もその範囲内にある。

注 13)「宮城県北と岩手県南の板倉」(東北工業大学工学部建築学科高橋研究室, 平成 18 年度卒業論文)並びに前掲「近世在方集住大工の研究」(pp.233～241)に記載の対象より 8 棟、「宮城県の国登録文化財一覧」(<http://www.pref.miyagi.jp/site/sitei/touroku-index.html>)に登録の板倉より 10 棟、前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」に記載されている対象より 12 棟。

注 14)「宮城懸郷倉誌」(宮城県経済部 1936)は、国内と宮城県下における備荒施設の沿革概要や郷倉制度の状況を記載したものである。また、昭和 9 年の東北地方の凶作を機会に、御下賜金を基礎として建てた郷倉について恩賜郷倉と呼んでいる。

注 15)注釈 13 前掲「近世在方集住大工の研究」(pp.233～241)

参考文献

- 1) 多賀城市史 (多賀城市史編纂委員会)
- 2) 多賀城市 歴史的風致維持向上計画
- 3) 多賀城市史跡サークル定期勉強会資料「多賀城と貞観地震」
- 4) 多賀城町誌 (多賀城市史編纂委員会)
- 5) 繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化 (黒坂貴裕、安藤邦廣、沖本太一、刈内一博 日本建築学会計画系論文集 第 576 号, pp.45～52, 2004.2)
で一部を報告している。
- 6) 宮城懸郷倉誌 (宮城県経済部 1936)
- 7) 宮城郡村々諸職人渡世之者職道に付請書 (多賀城市史 5 歴史史料(二)五 生活・文化, pp.573～576 遠藤貫一氏所蔵)
- 8) 近世在方集住大工の研究 (高橋恒夫 中央公論美術出版, 九章 民家普請の出稼ぎと大工系統)
- 9) 宮城県北と岩手県南の板倉 (東北工業大学工学部建築学科高橋研究室, 平成 18 年度卒業論文)
- 10) 小屋と倉・干す・仕舞う・守る・木組みのかたち (安藤邦廣+筑波大学安藤邦廣研究室, 建築資料研究社, 2010.5)
- 11) 総合日本民族語彙 (民俗學研究所, 下中彌三郎, 平凡社, 1955.6)
- 12) -世界の住まいにみる-工匠たちの技と知恵 (太田邦夫学芸出版社 2007)
- 13) 食と建築土木 (後藤治, 二村悟, 小野吉彦, LIXIL 出版, 2013)
- 14) 宮城県多賀城市における板倉の形態 (渡邊亮、高橋恒夫 日本建築学会東北支部研究報告集 計画系第 77 号, pp.153～156, 2014.6)
- 15) 宮城県多賀城市における板倉の形態 -その 2- (渡邊亮、高橋恒夫 日本建築学会東北支部研究報告集 計画系第 78 号, pp.99～102, 2015.6)
- 16) 多賀城市文化財調査報告書 110 集 文化財レスキュー活動報告書
- 17) 宮城県多賀城市を中心とした板倉の形態と技法 (日本建築学会技術報告集 第 22 巻 第 50 号, pp.335-340, 2016.2)

謝辞

板倉を中心に多数の遺構を調査出来たことは大変有意義であり、貴重な機会を頂いたのだと改めて実感している。それは「歴史的風致維持向上計画の認定」を受けたことを始め、行政や家主の方々が歴史的建造物の保護に積極的であったことが何よりの推進力となっていたのだと言える。この事業では「東日本大震災の影響による板倉の滅失を防ぎ、積極的な保存を奨励し、価値付けと文化財の保存につなげる」ことに寄与する目的があるが、まさしくその礎になり、広く全国の板倉の再認識に繋がればと思う次第である。

最後に、5年を通しての調査にあたり、御協力くださった遺構の所有者の方々、高倉敏明様・鈴木孝行様を始め多賀城市職員の方々、ご指導ご鞭撻を頂いた高橋恒夫教授と卒業した高橋研究室の一同に厚く御礼申し上げると共にこの論文の結びとしたい。

2016年1月18日

卷末付録

調査図面

巻末付録

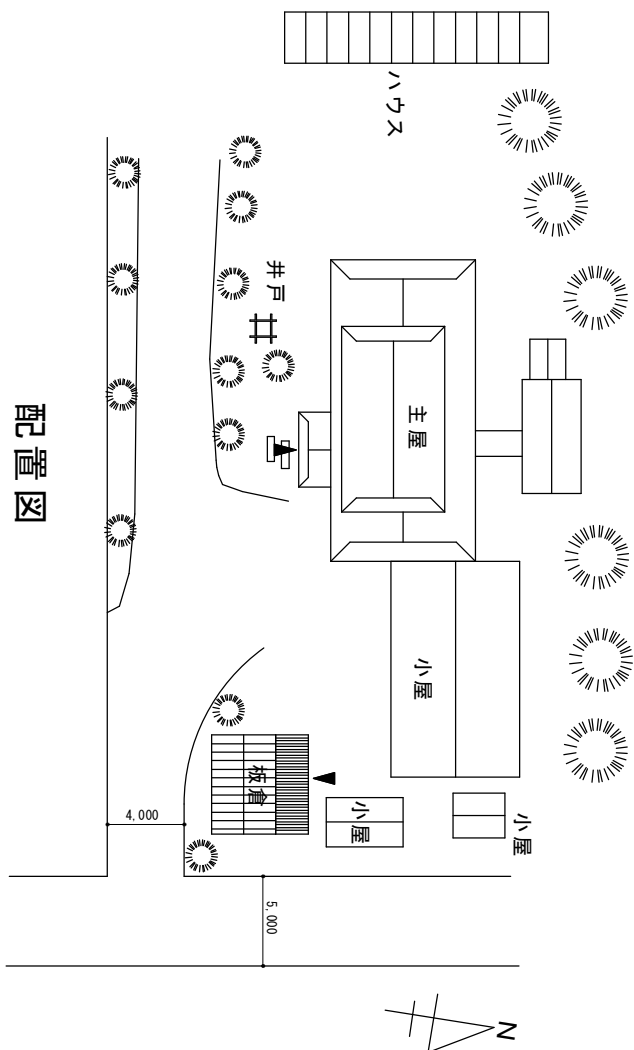
4 章で解説した各遺構の調査図面を掲載する。

調査は 3 章の手順で行い各記載している図面は下記の通りである。

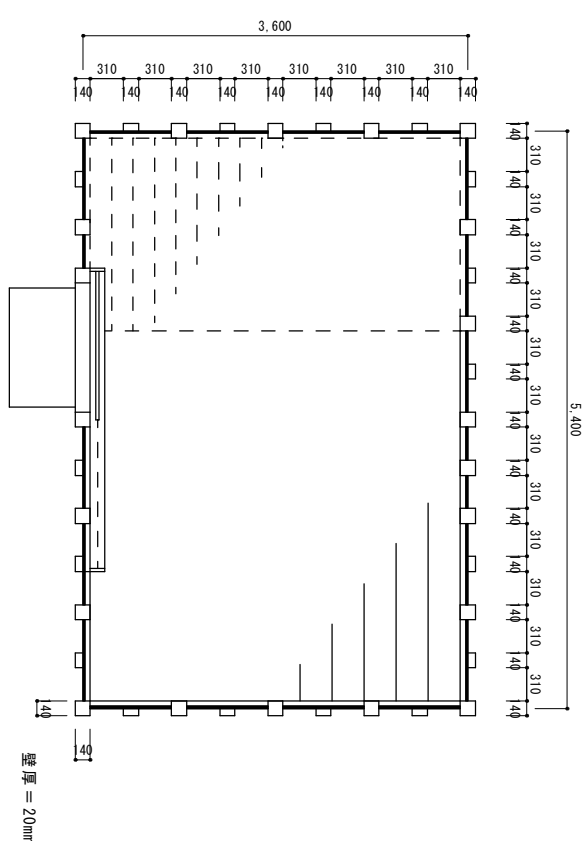
- ・ 平面図(中二階平面図も含む)
- ・ 正面立面図(入口がある側)
- ・ 側面立面図
- ・ 断面図(妻側方向)
- ・ 配置図

また、調査では配置図を除く図面を 1/50 の縮尺で作図したが、掲載している図面は縮小されたものである。

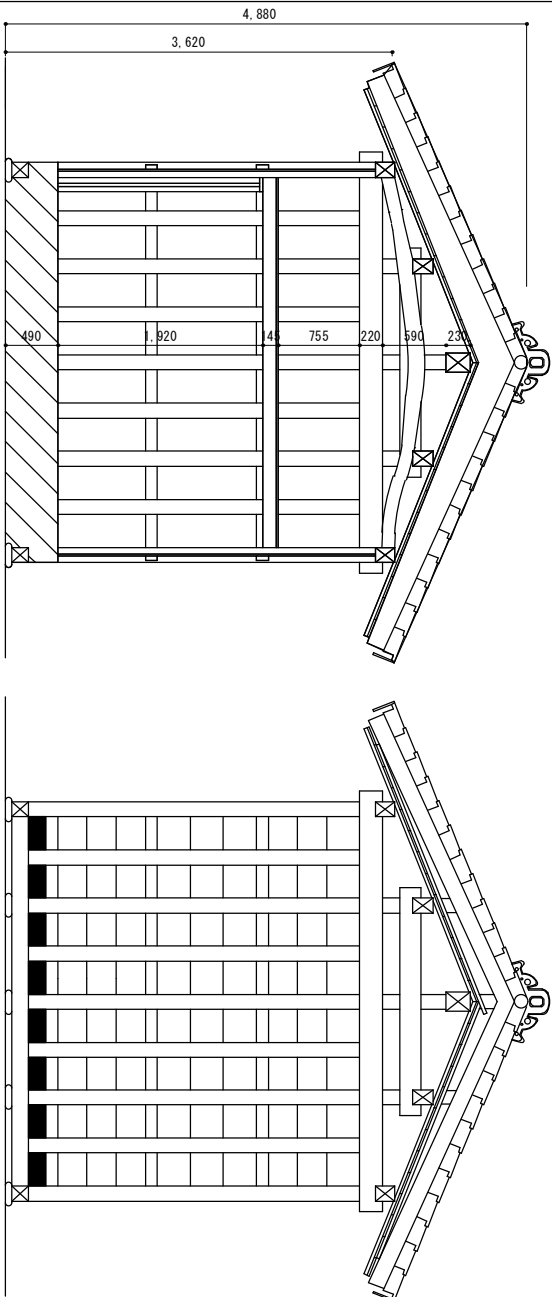
No. 22, No. 23 に関してのみ 2 棟が結合されている構造上、1 枚の図面で表記している。



配置図

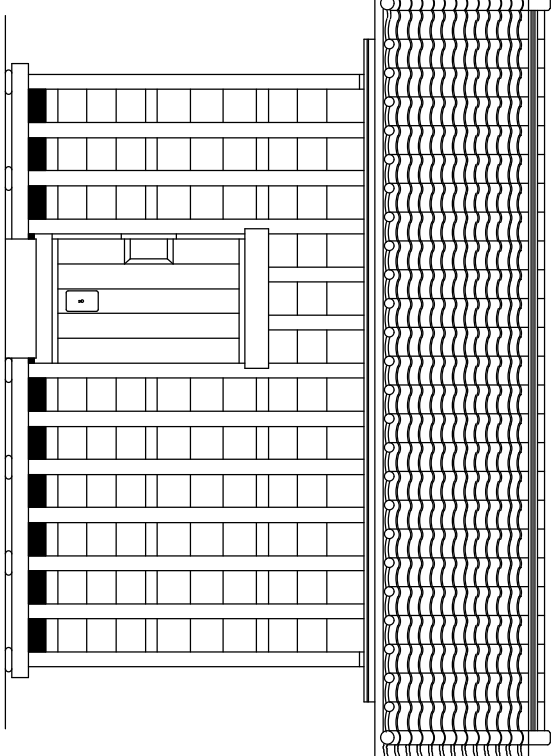


▲ 平面図 1/50



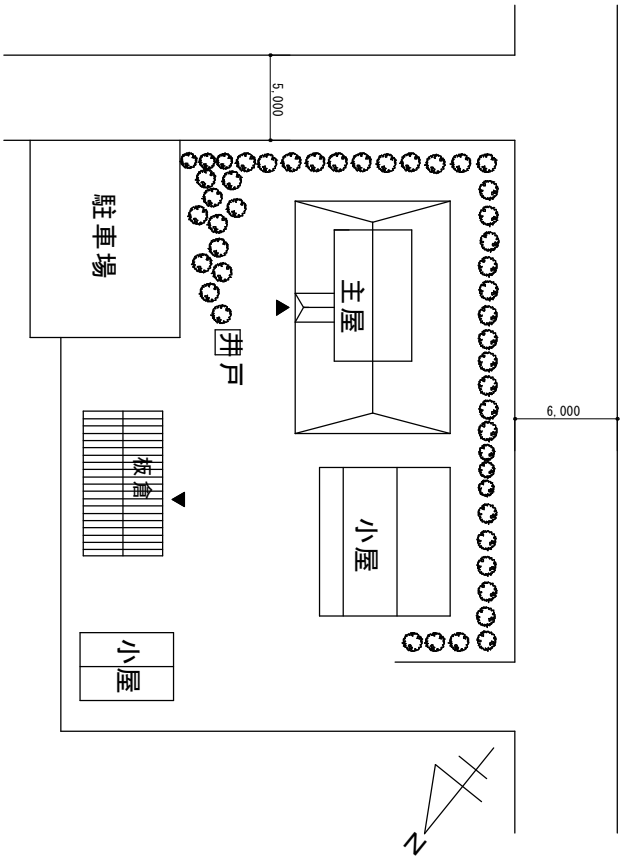
断面図 1/50

側面図 1/50

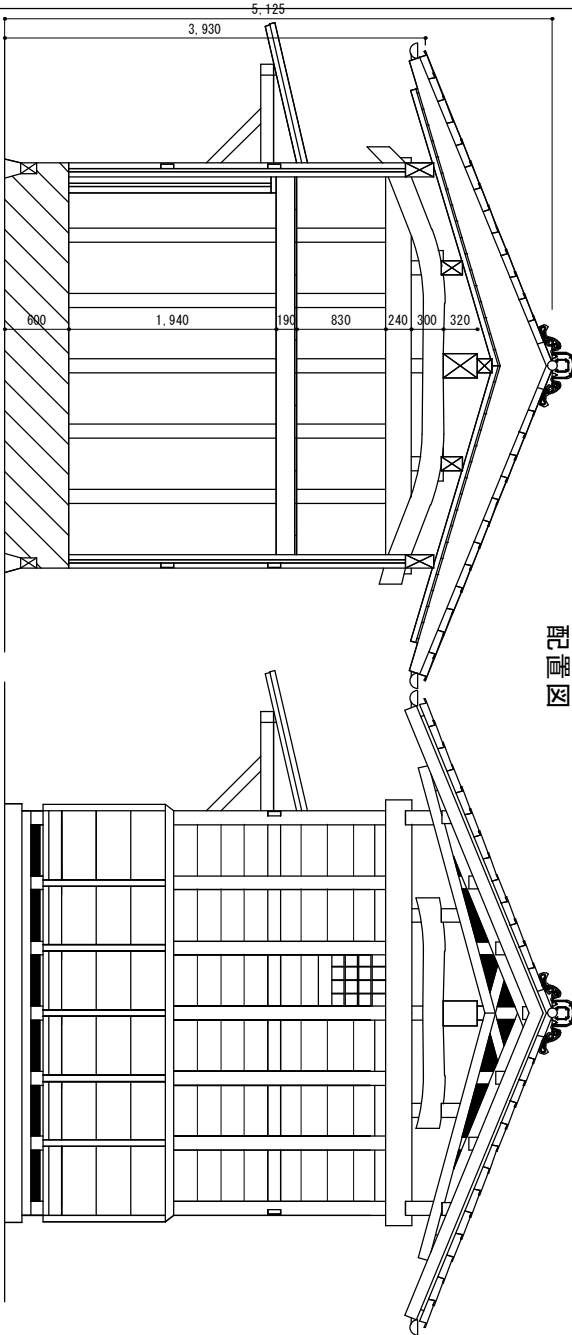


正面図 1/50

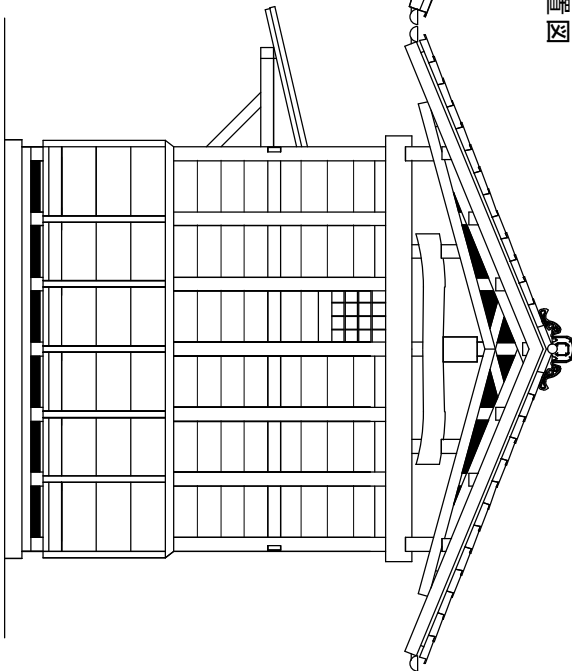
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構、所有者名	No.1 S 家住宅拓倉
図名	平面図、断面図、正面図、側面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年 9月 6日
調査者	國根
	東北工業大学建築史研究室



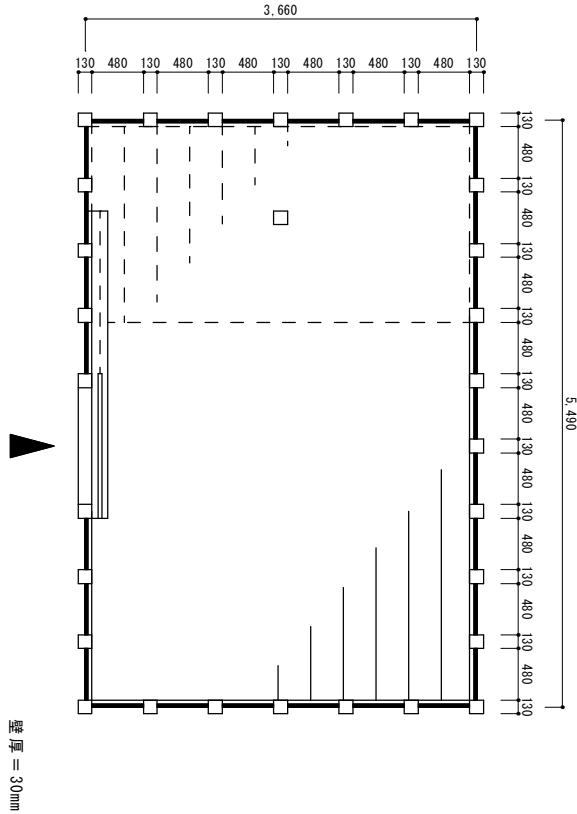
配置図



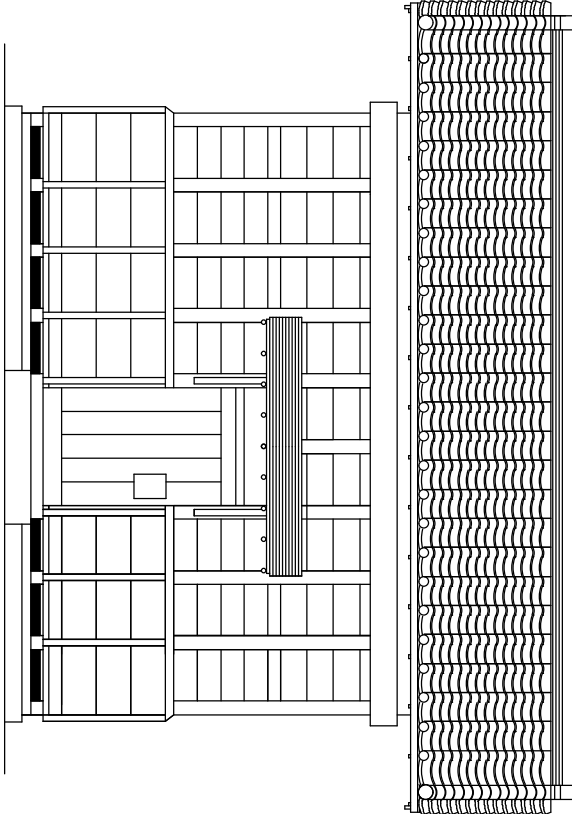
断面図 1/50



側面図 1/50

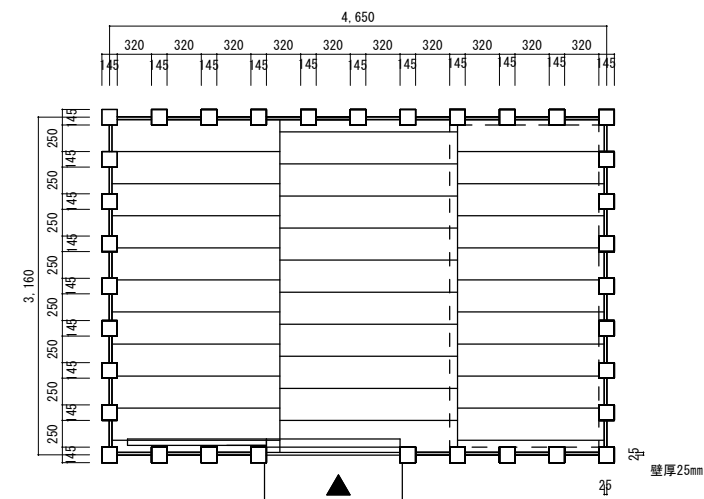
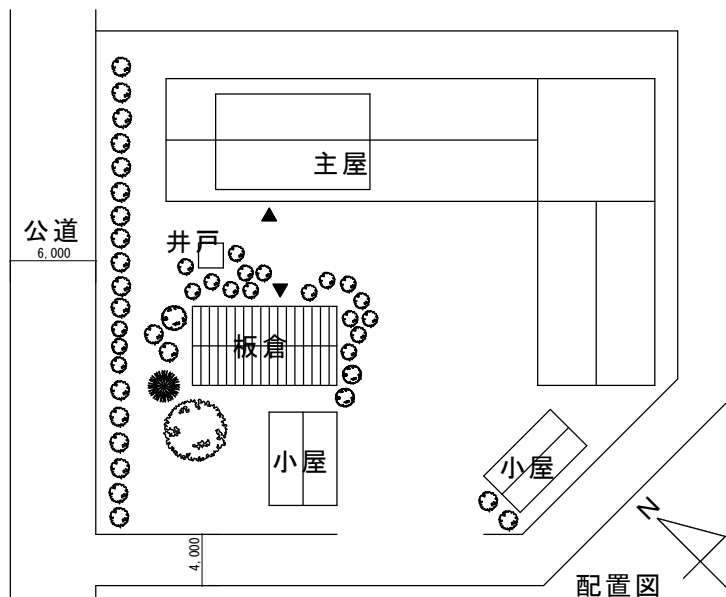


平面図 1/50

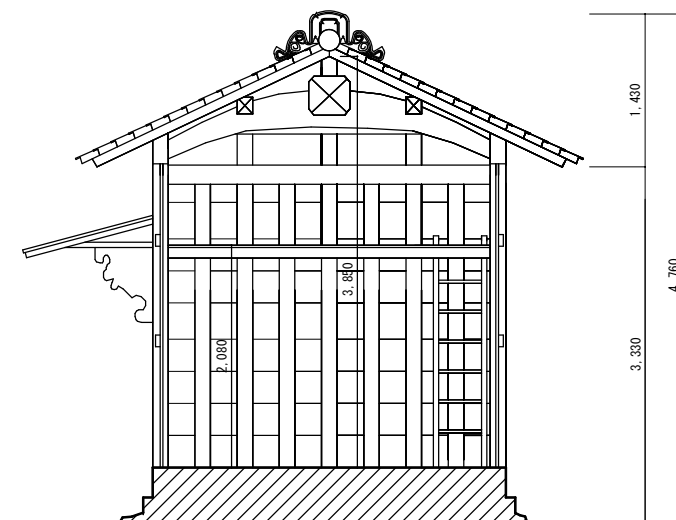


正面図 1/50

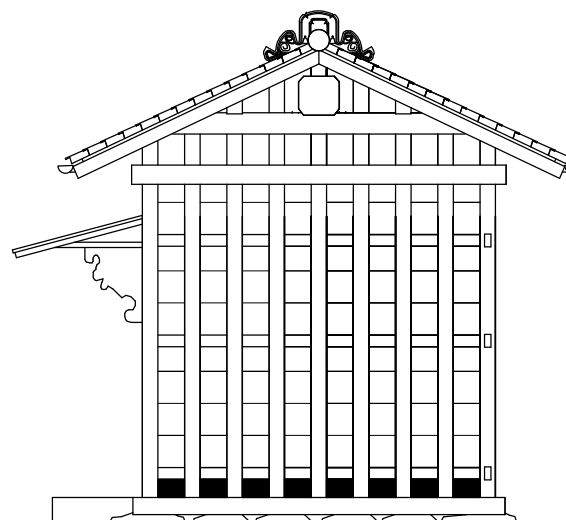
所在地	宮城県多賀城市新田
建構, 所有者	No.2 E 家住宅共済
図 名	平面図、断面図、正面図、側面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年9月7日
調査者	園根、新林
	東北工業大学建築史研究室



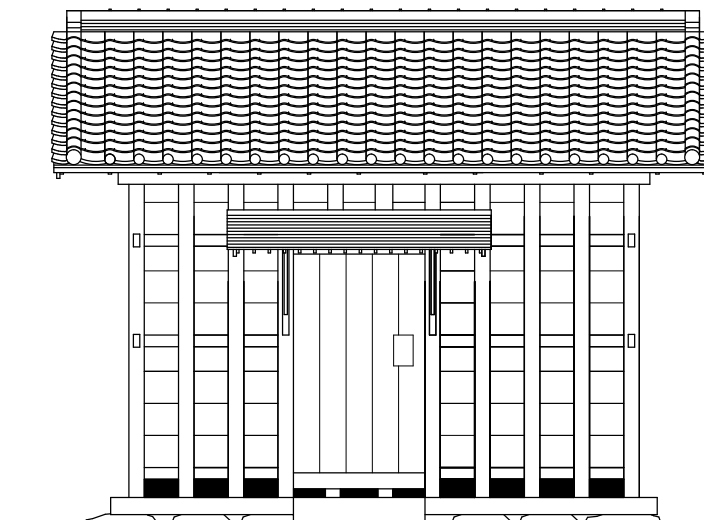
平面図



断面図



側面図

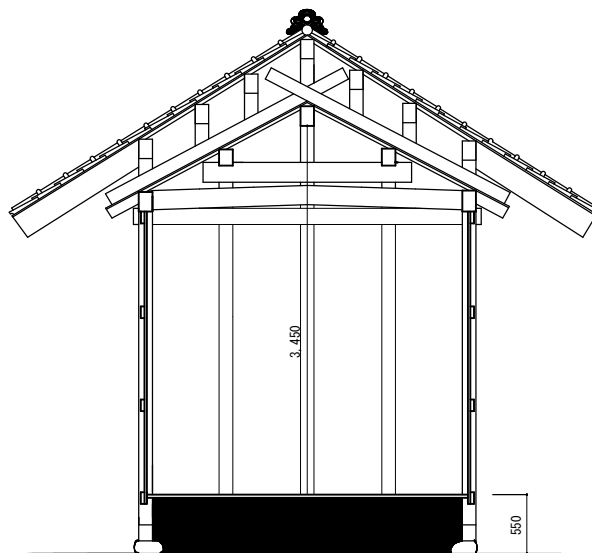


正面図

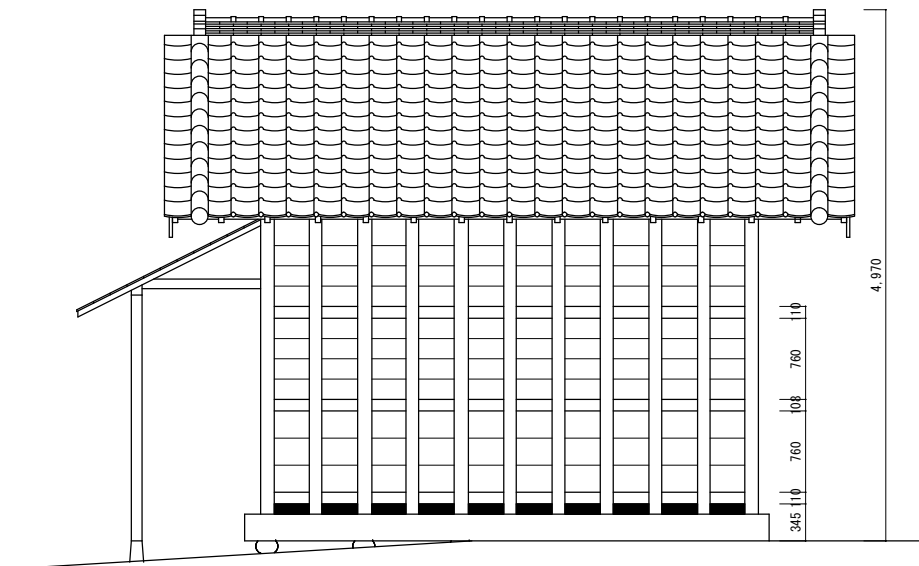
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構、所有名	No. 3 K家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正面図・側面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年 9月 6日
調査者	新林
東北工業大学建築史研究室	



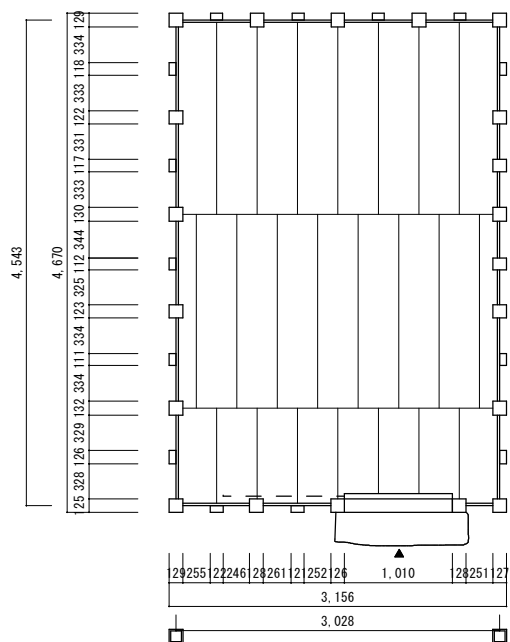
正面立面図



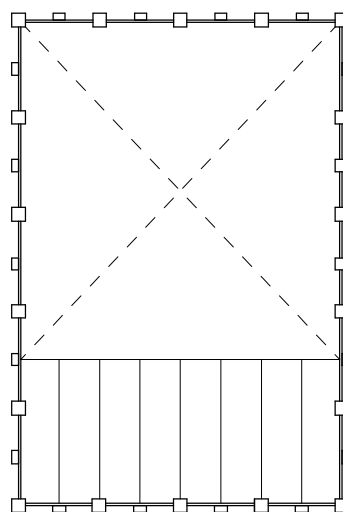
断面図



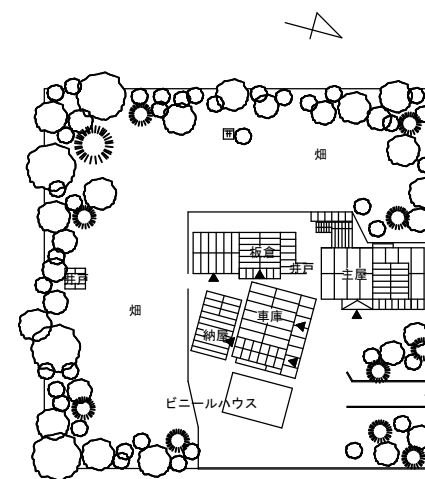
側面立面図



壁厚: 1.5cm

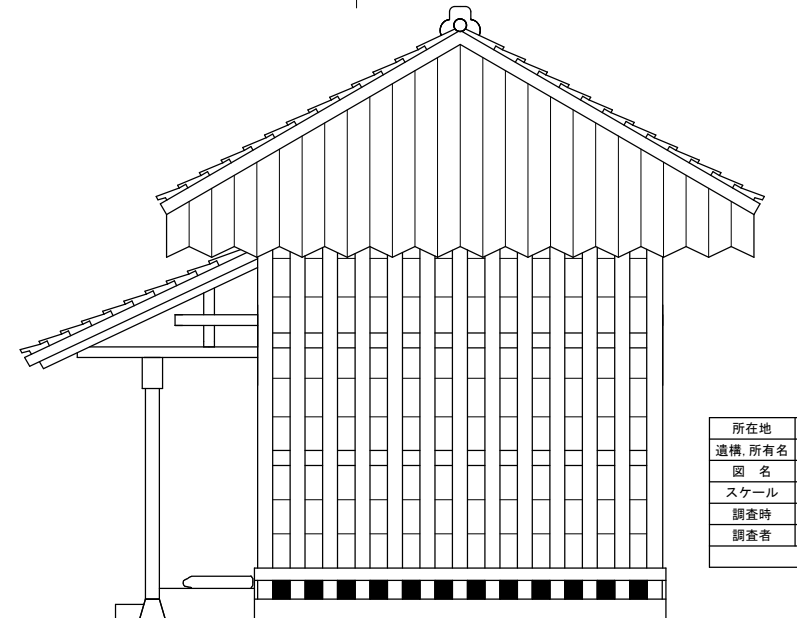
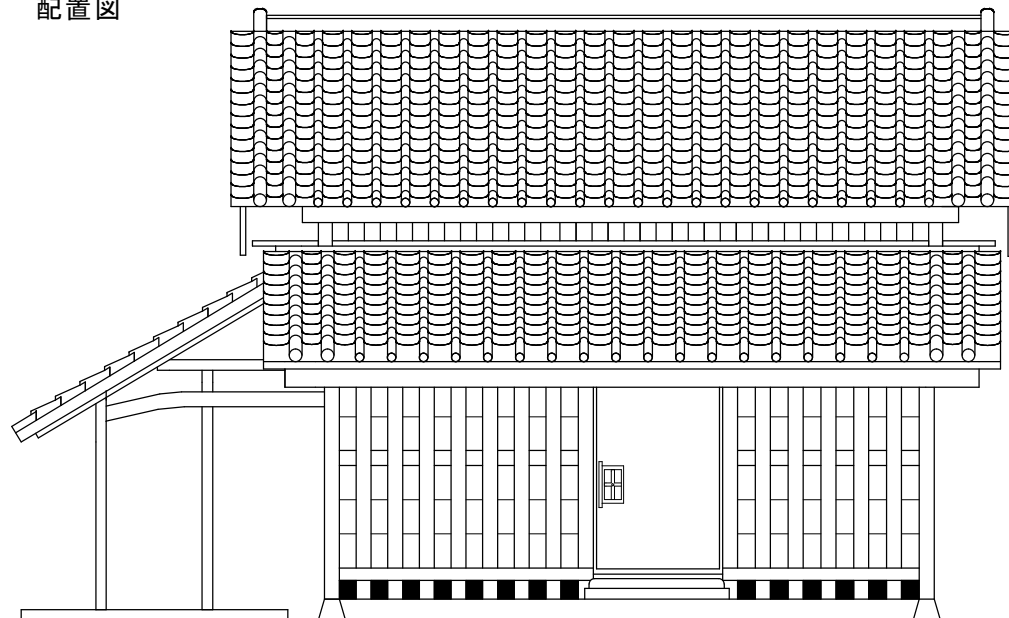
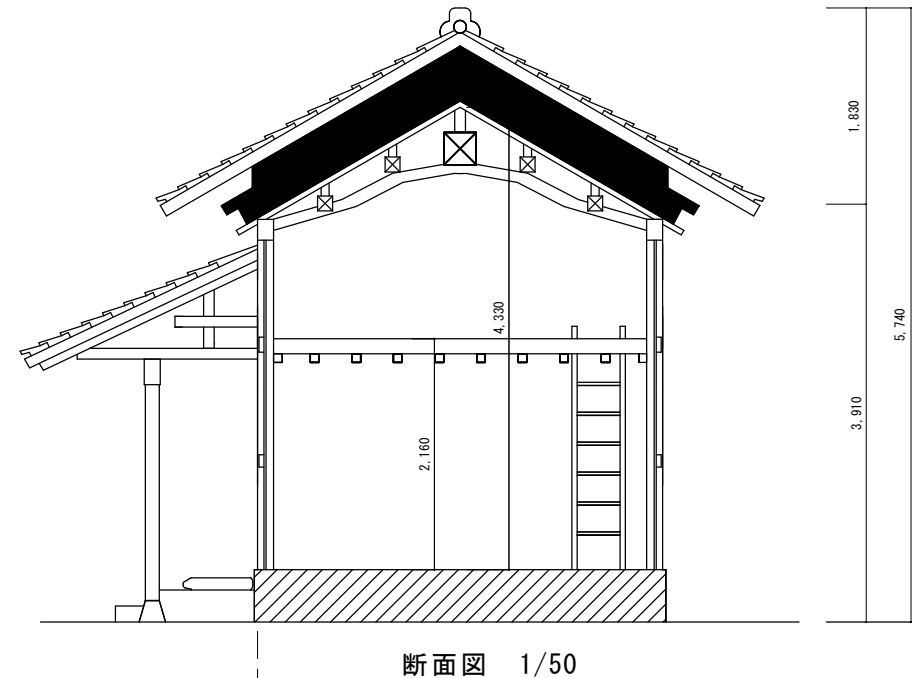
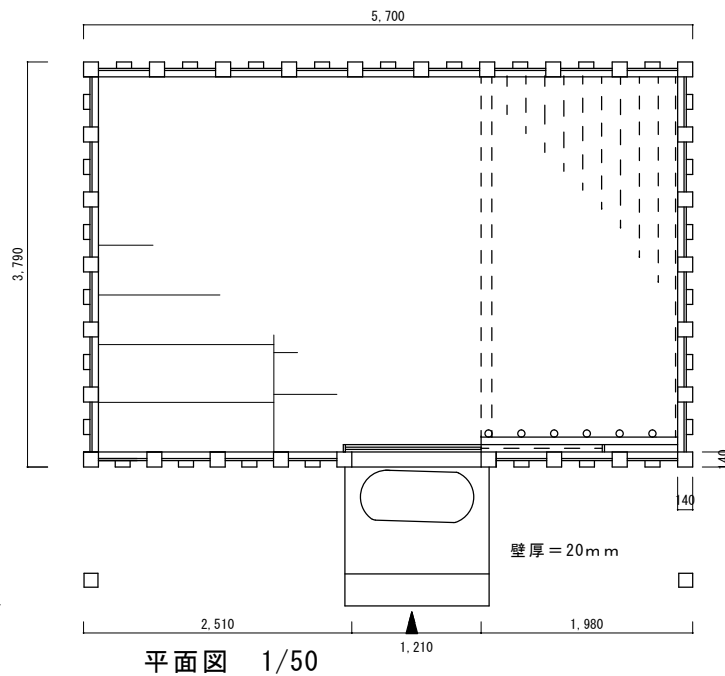
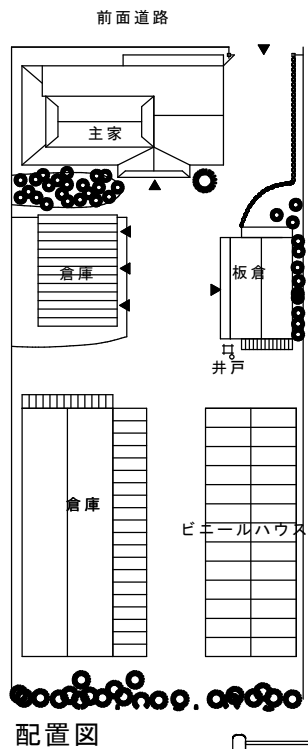


中2階平面図

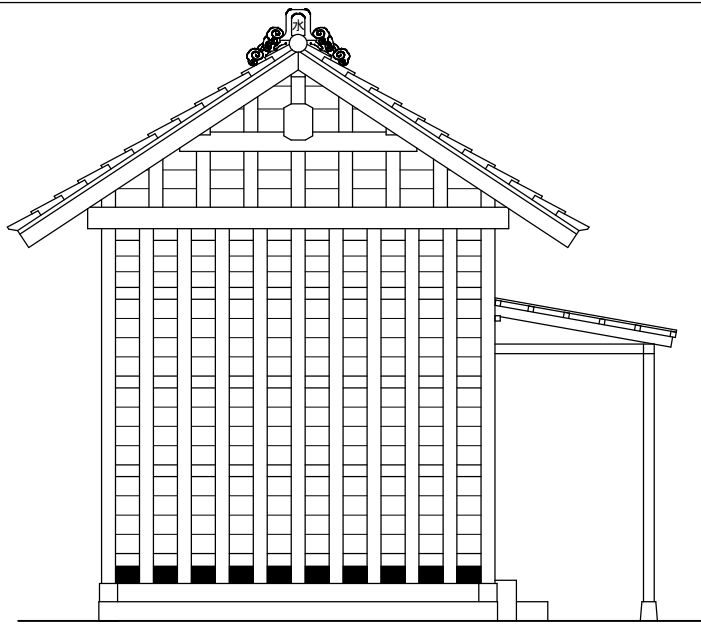


配置図

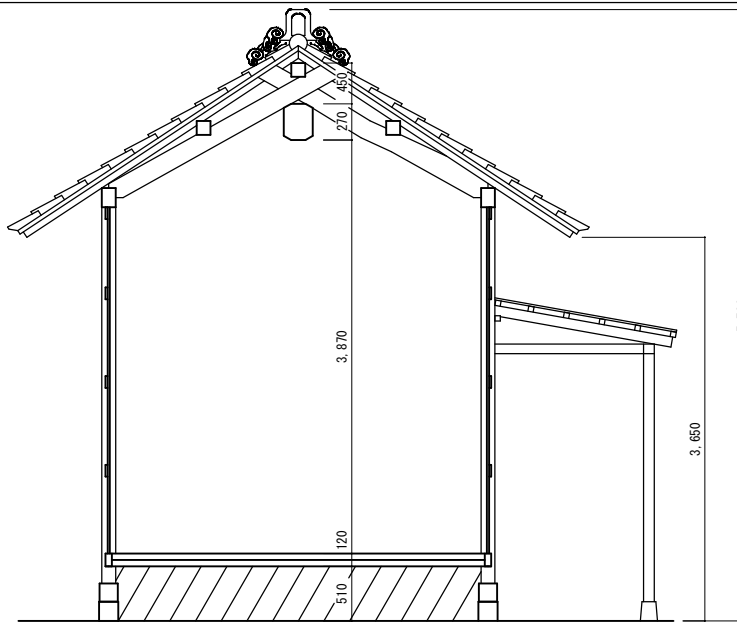
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構、所有名	No. 4 K家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月30日
調査者	関、石崎、小西、山形
東北工業大学建築史研究室	



所在地	宮城県多賀城市山王
構・所有名	No. 5 A家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年8月10日
調査者	佐々木、大友、関根、新林
東北工業大学建築史研究室	

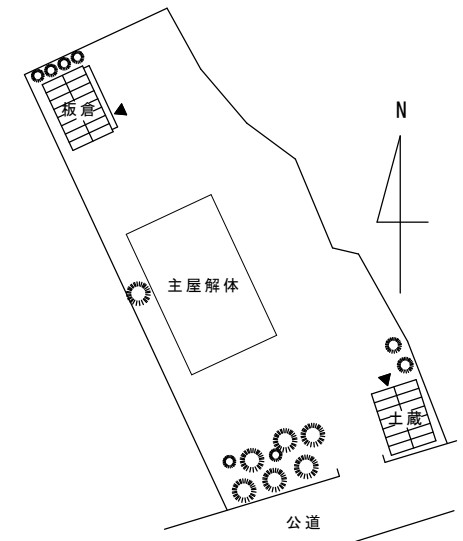


側面図 1/50

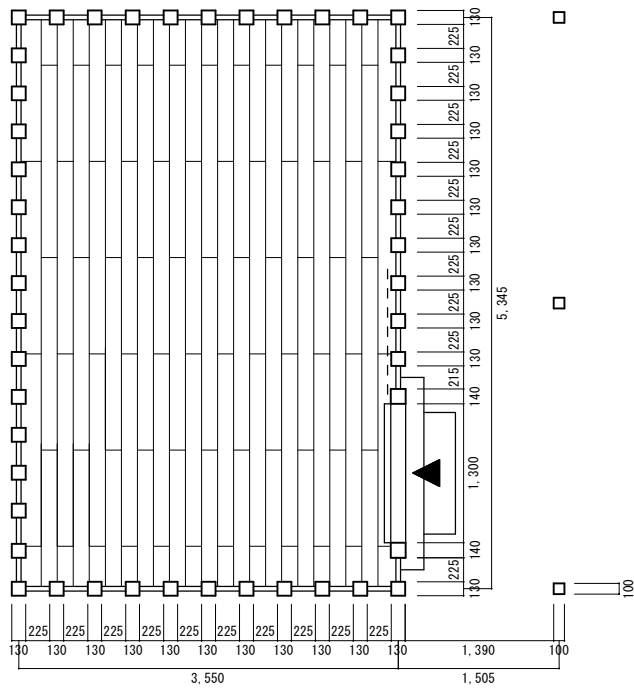


板壁厚20mm

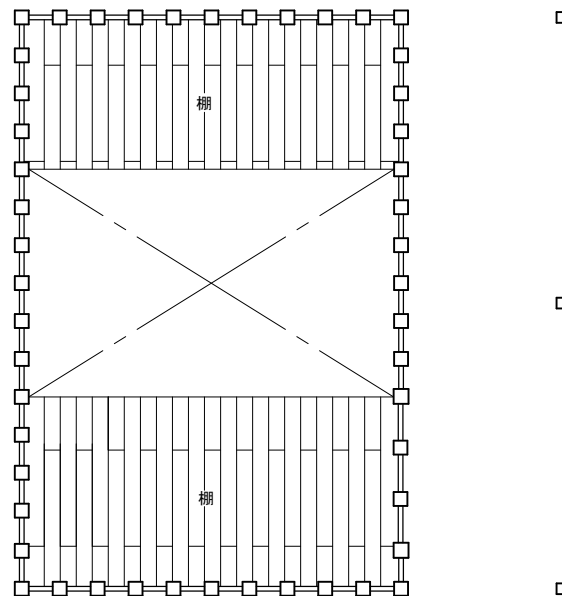
断面図 1/50



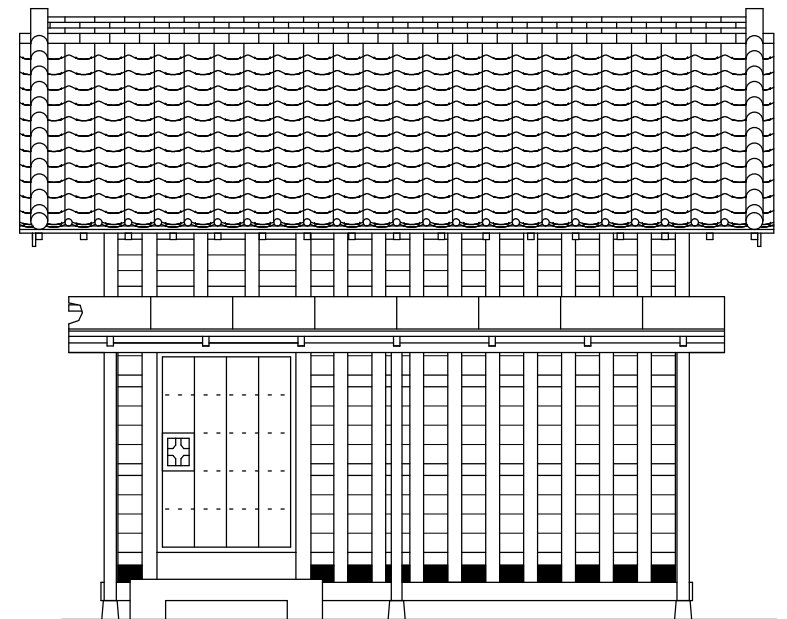
配置図



1階平面図 1/50

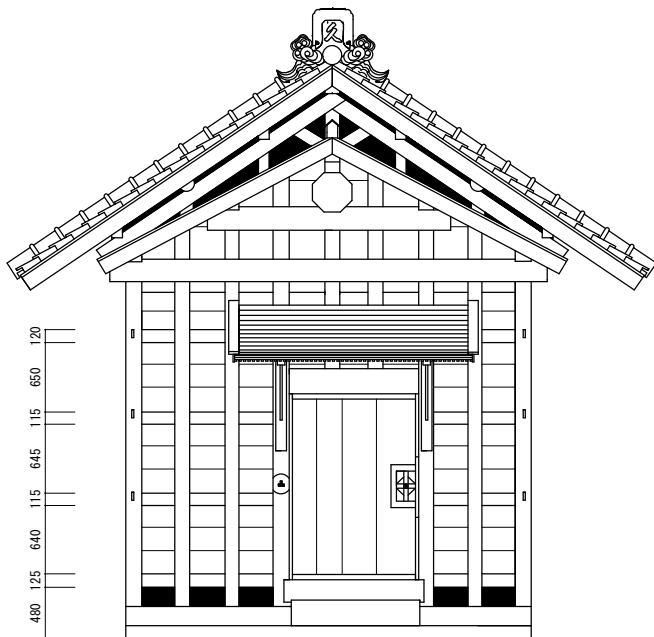


中2階棚平面図 1/50

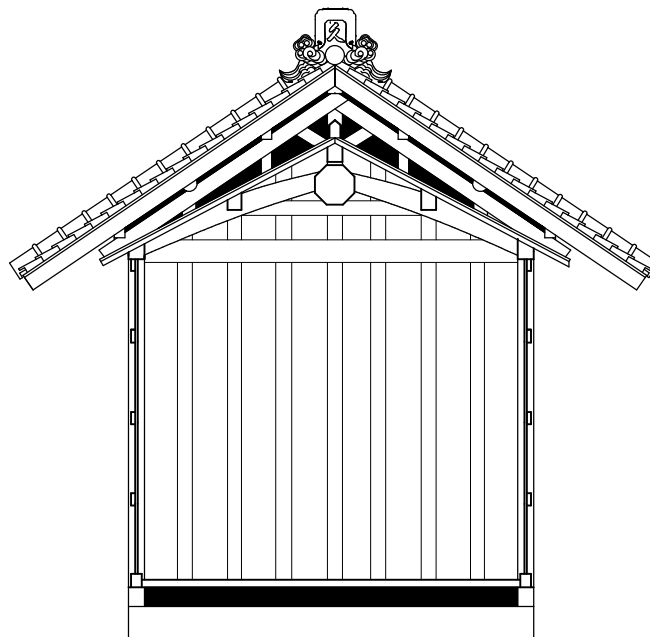


正面図 1/50

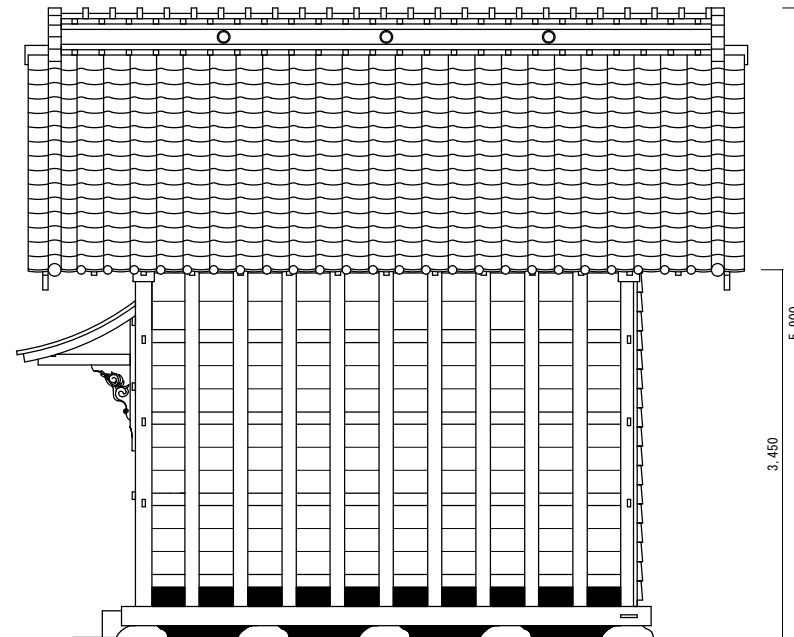
所在地	宮城県多賀城市八幡
遺構, 所有名	No. 6 I 家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月8日
調査者	加藤、斉藤、渡邊、渡邊
東北工業大学建築史研究室	



正面立面図

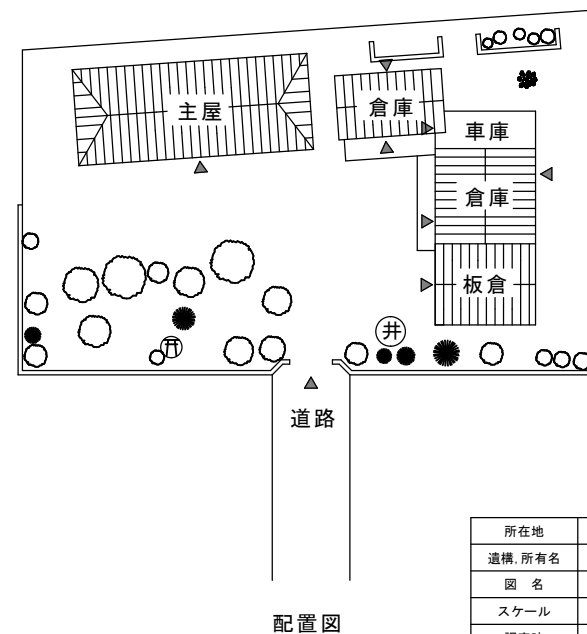
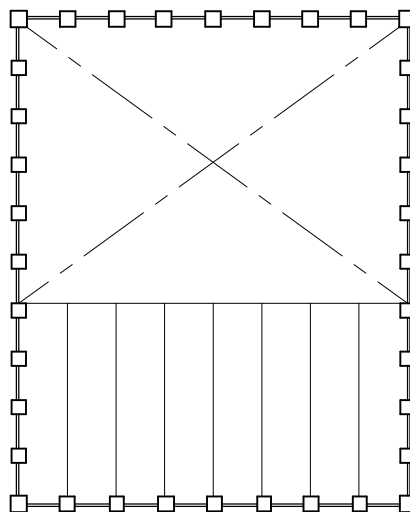
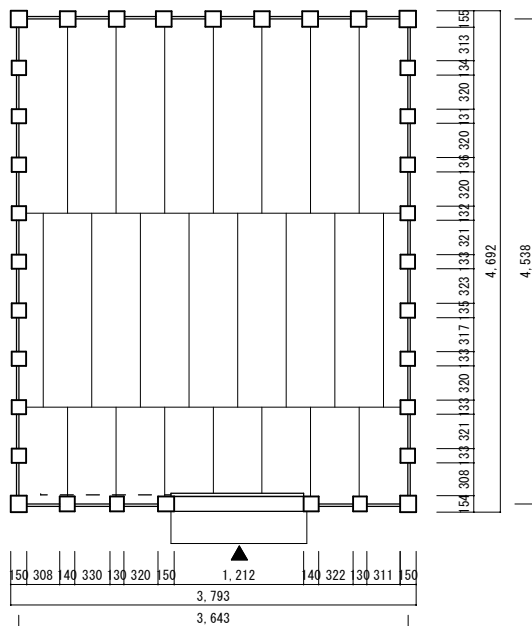


断面図



側面立面図

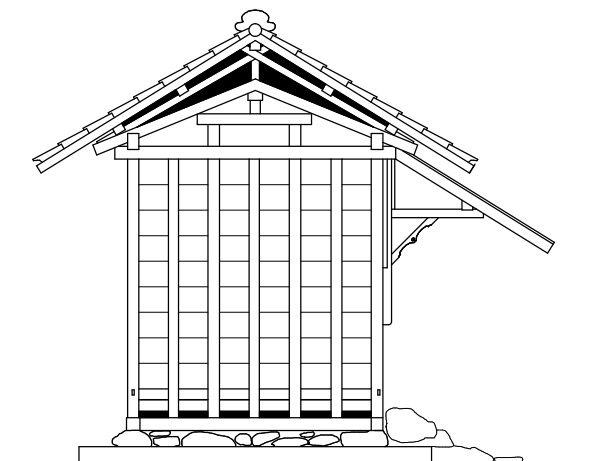
壁厚: 2.2cm



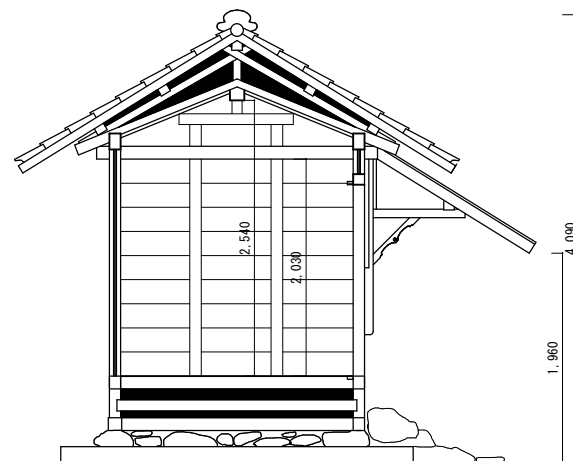
所在地	宮城県多賀城市八幡
遺構, 所有名	No. 7 M家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月9日
調査者	関、石崎、小西、山形
東北工業大学建築史研究室	



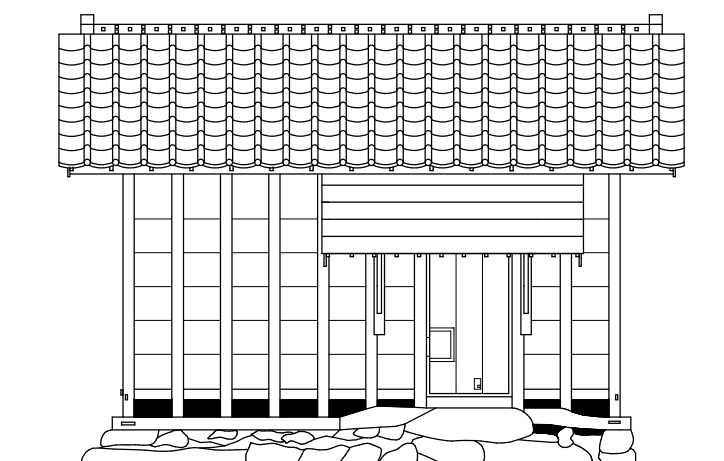
所在地	宮城県多賀城市八幡
遺構、所有名	No.8 I 家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正・側面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年8月10日
調査者	高橋、日野
東北工業大学建築史研究室	



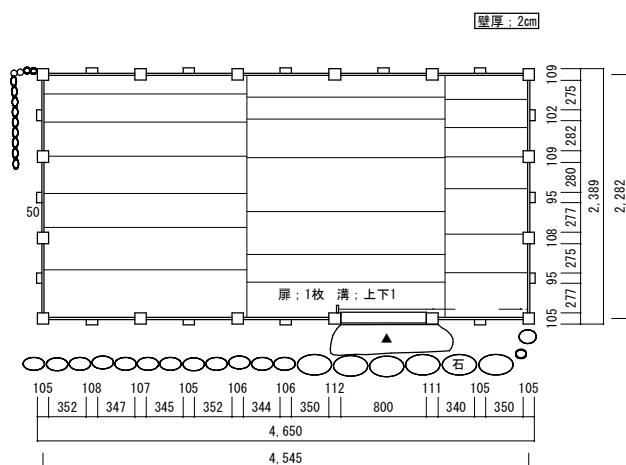
側面立面図



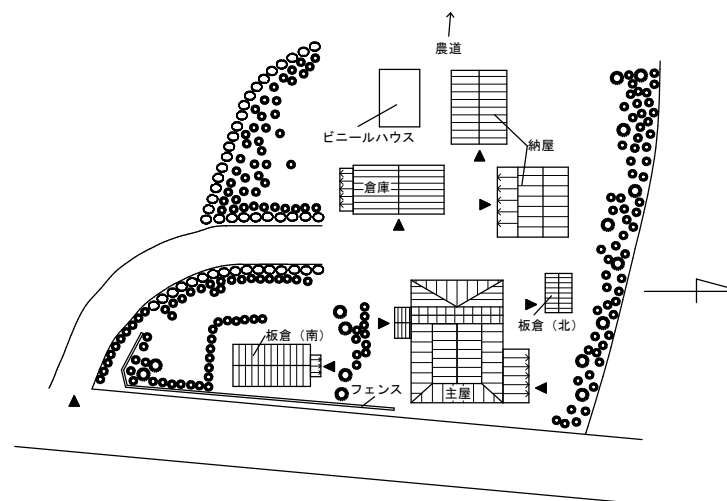
断面図



正面立面図

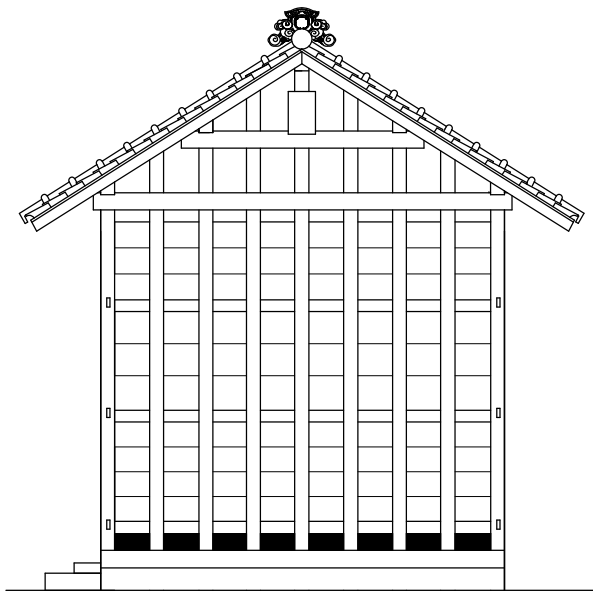


平面図

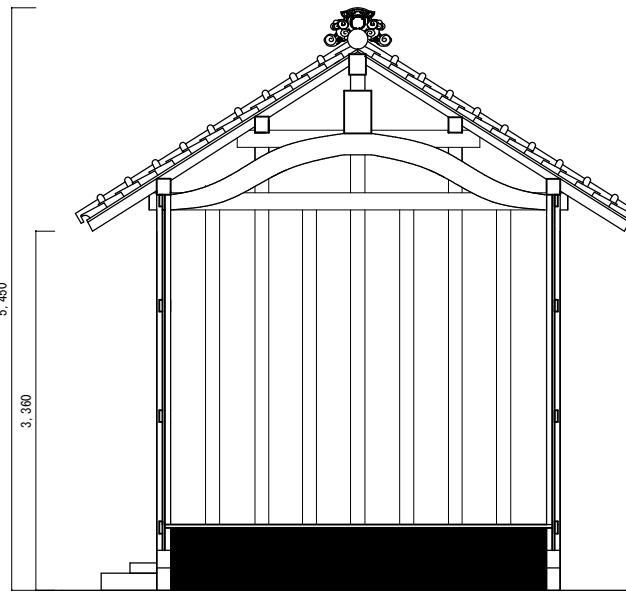


配置図

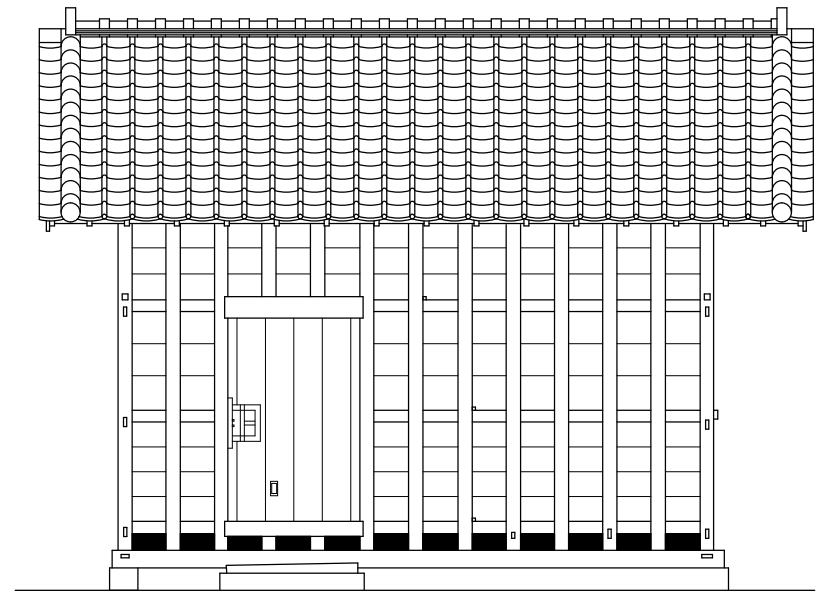
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 9 K家住宅板倉 (北棟)
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月30日
調査者	渡邊、間藤、久米
東北工業大学建築史研究室	



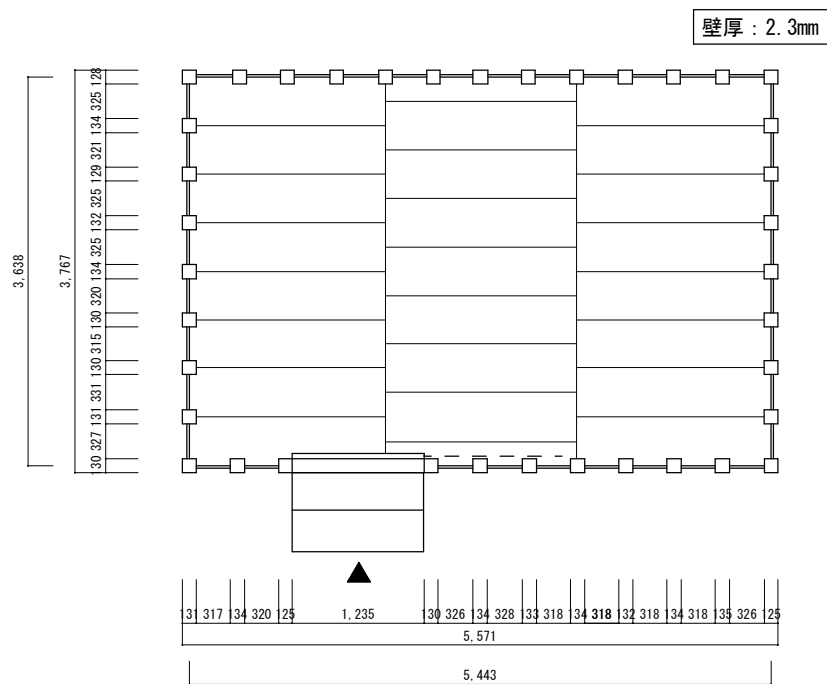
側面立面図



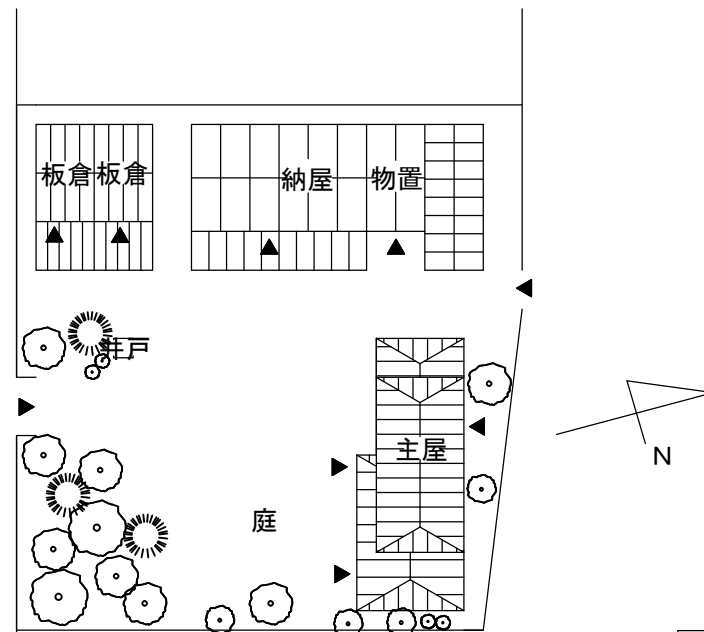
断面図



正面立面図

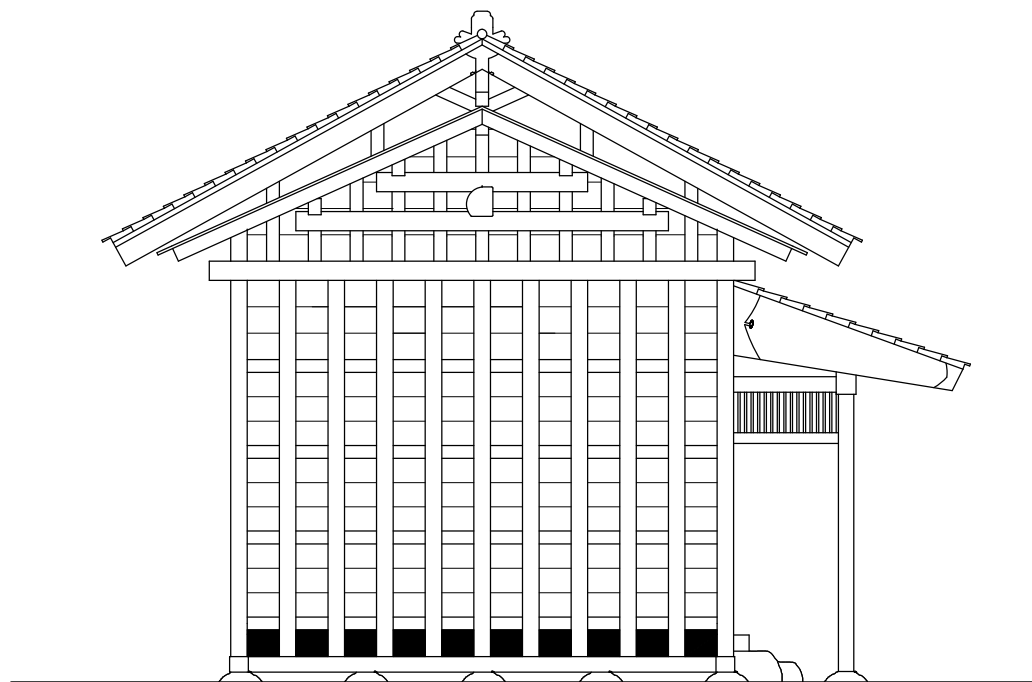


平面図

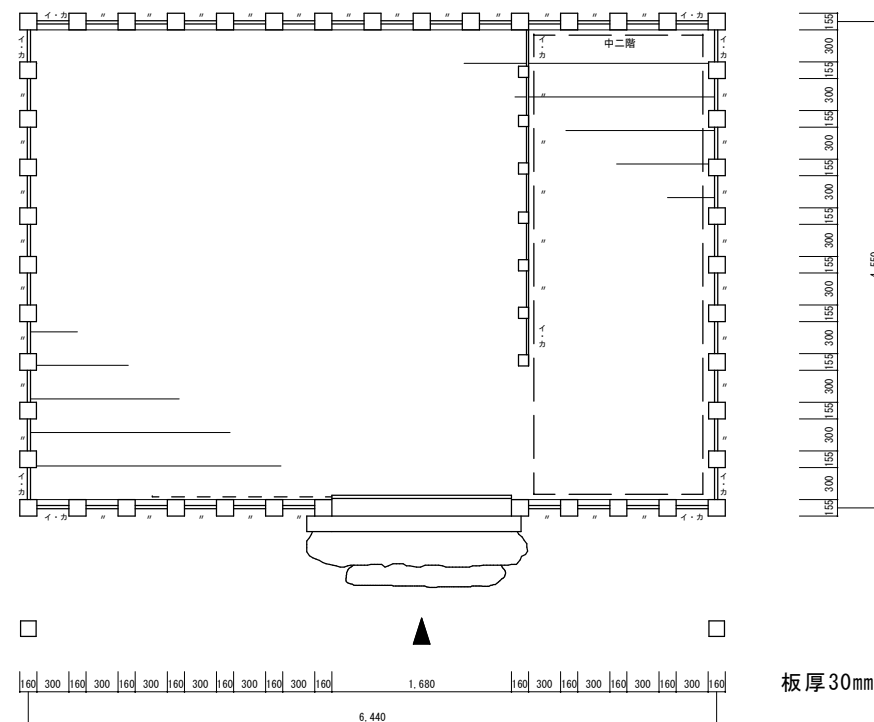


配置図

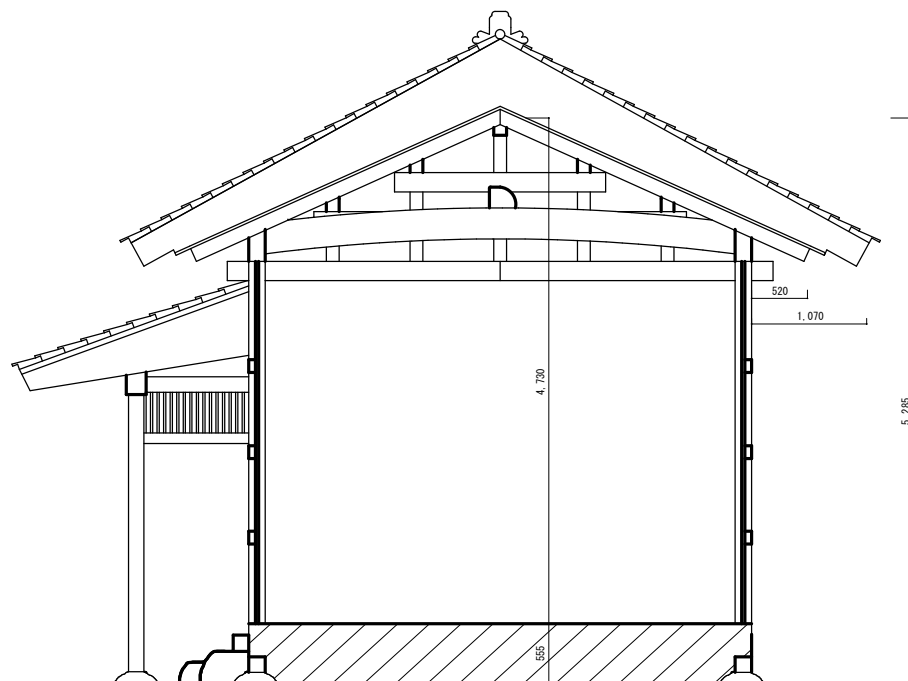
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 10 1 家住宅板倉 (南棟)
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月23日
調査者	関・石崎・小西・山形
東北工業大学建築史研究室	



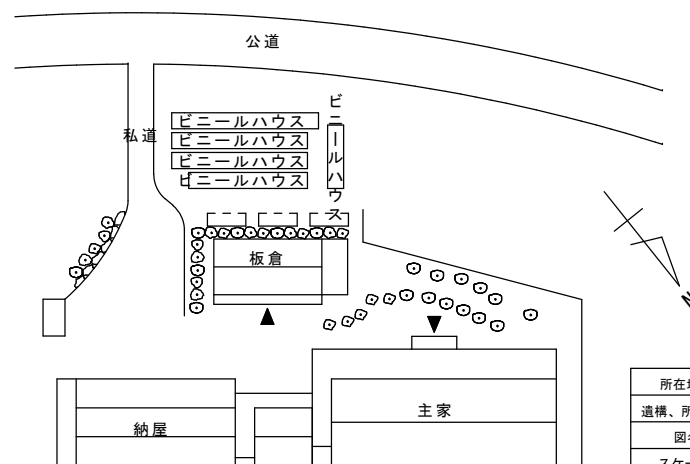
側面図 1/50



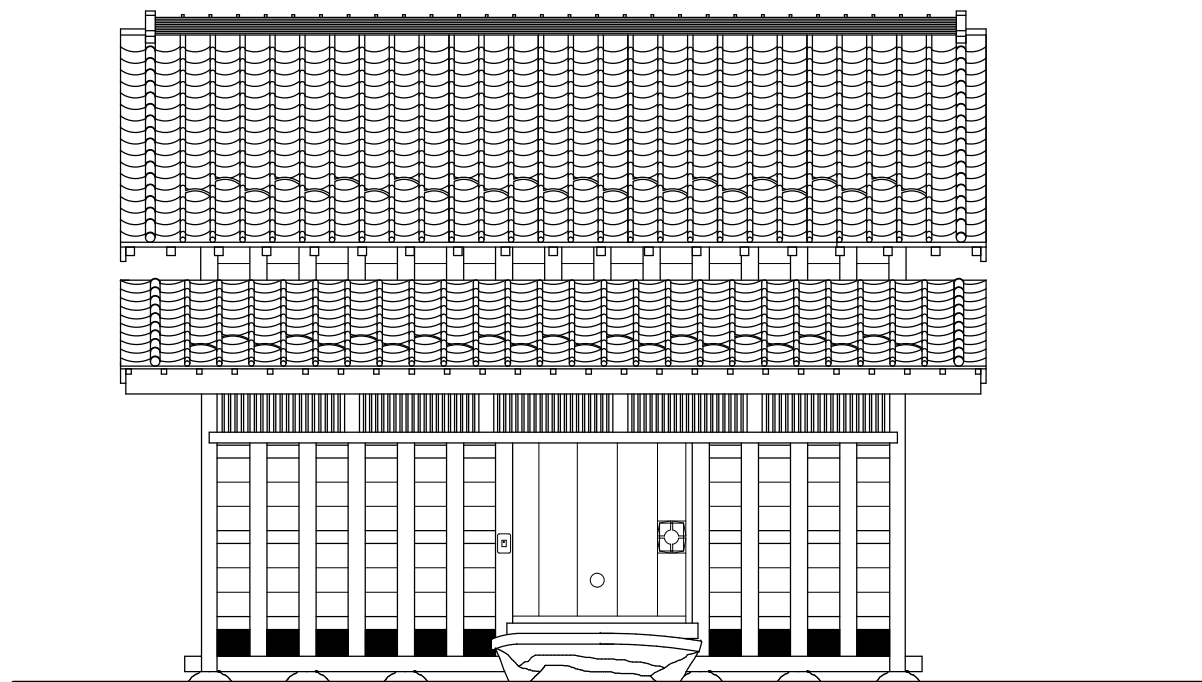
平面図 1/50



断面図 1/50

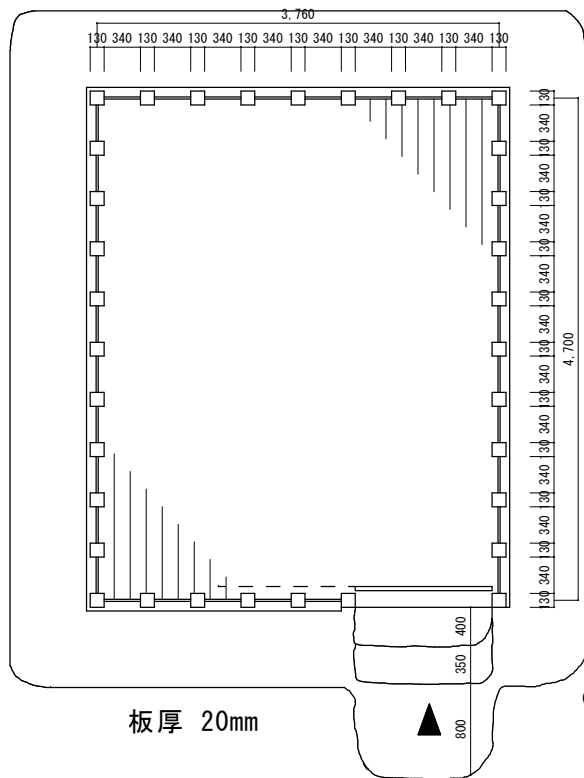


所在地	宮城県多賀城市市川
遺構、所有名	No. 11 Y家住宅板倉
図名	平面図、断面図、側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年9月6日
調査者	高橋
東北工業大学建築史研究室	

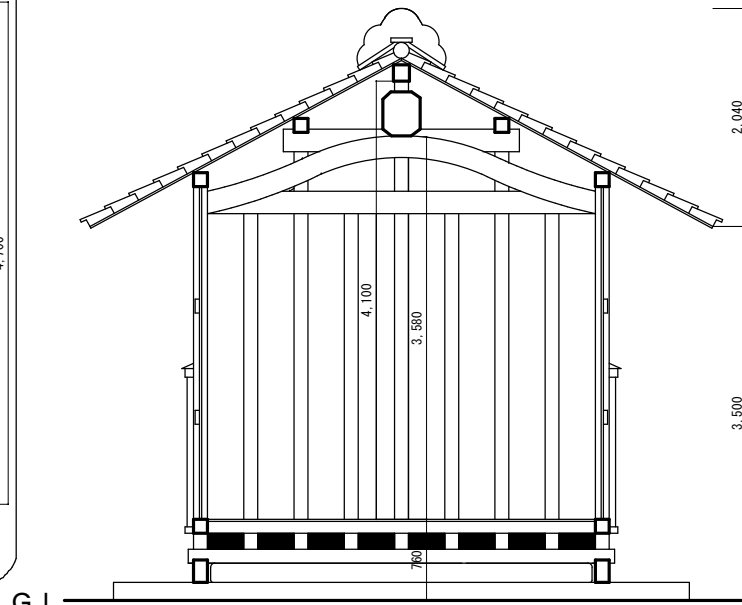


正面図 1/50

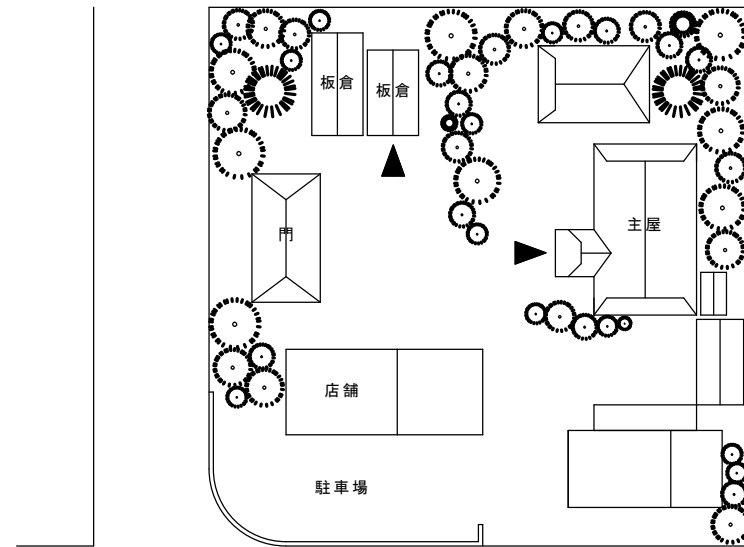
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構、所有名	No.11 Y家住宅板倉
図名	正面側立面図
スケール	1/50
調査時	2011年9月6日
調査者	高橋
東北工業大学建築史研究室	



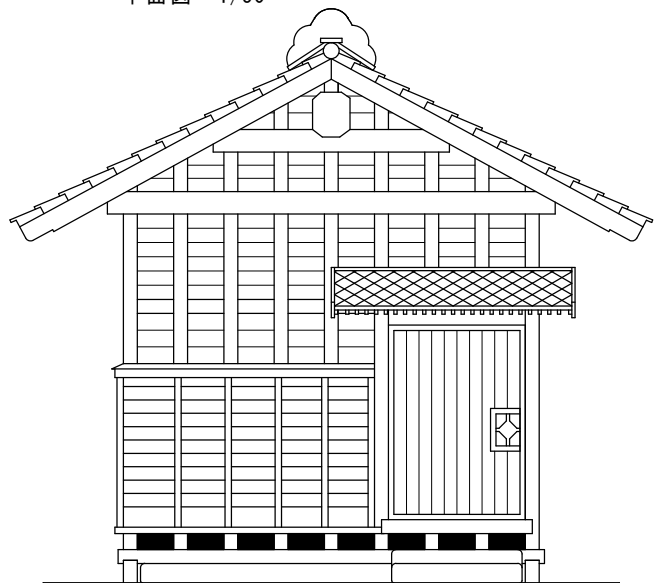
平面図 1/50



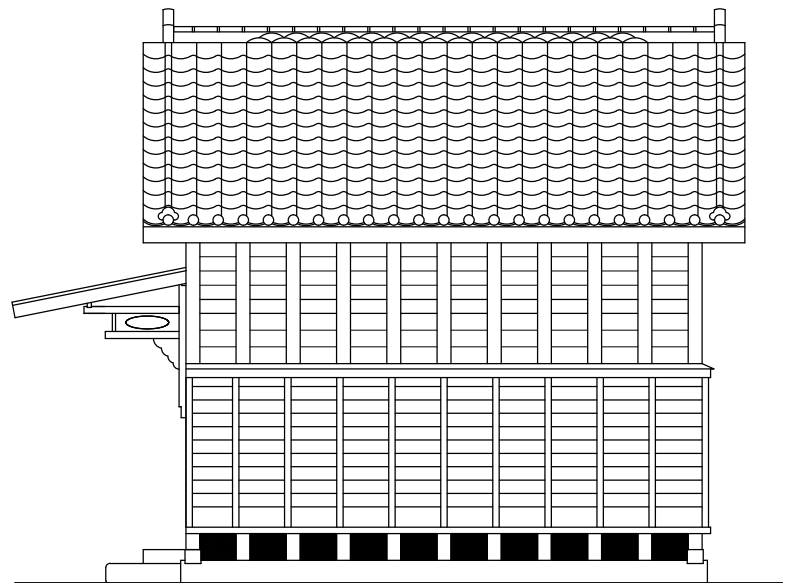
断面図 1/50



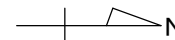
公道



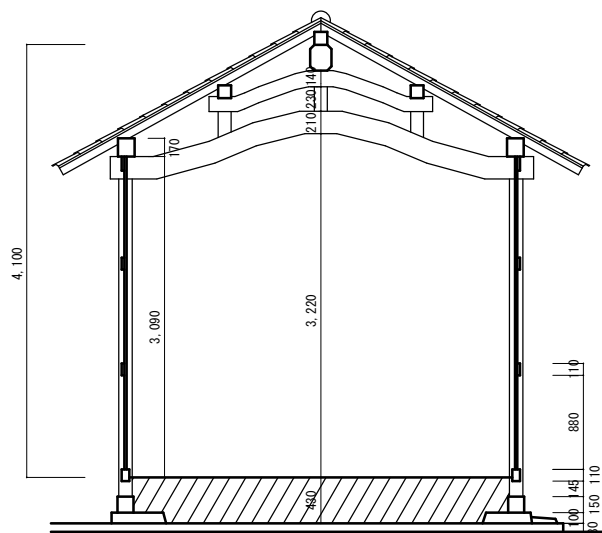
正面図 1/50



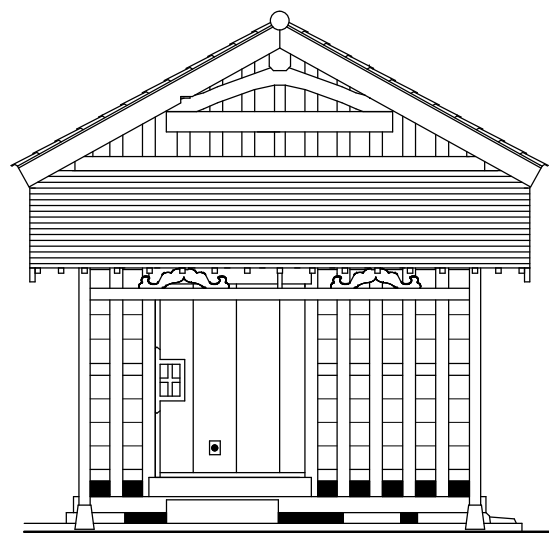
側面図 1/50



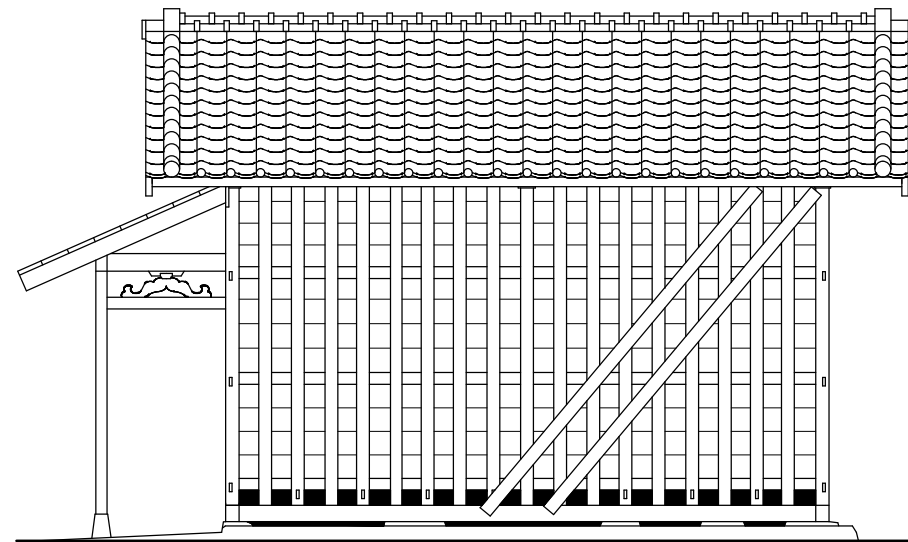
所在地	宮城県多賀城市高橋
遺構, 所有名	No. 12 K家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正面図・側面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年9月8日
調査者	大友、渡邊、橋本
東北工業大学建築史研究室	



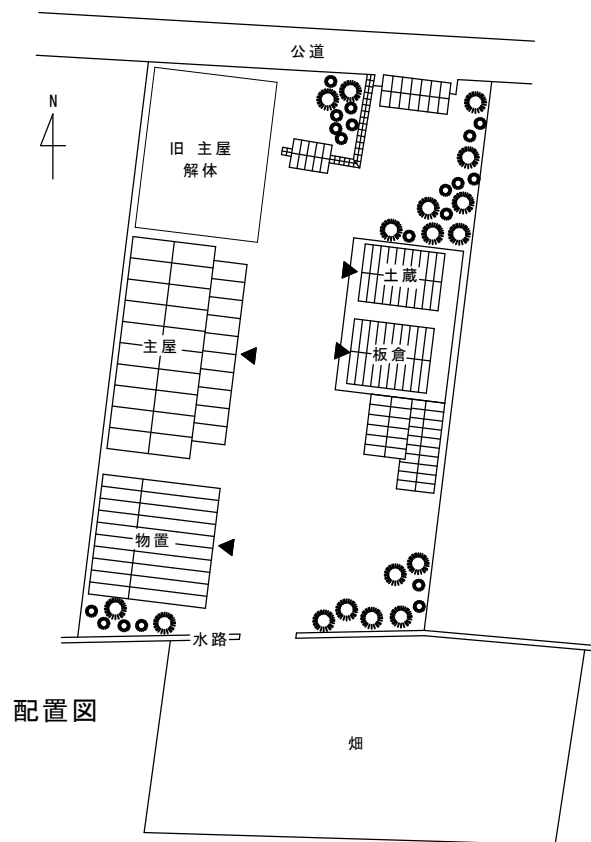
断面図1/50 板壁厚20mm



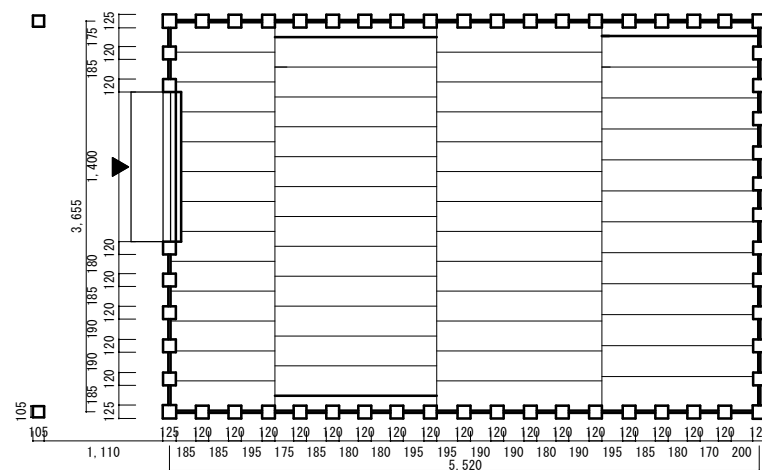
正面図1/50



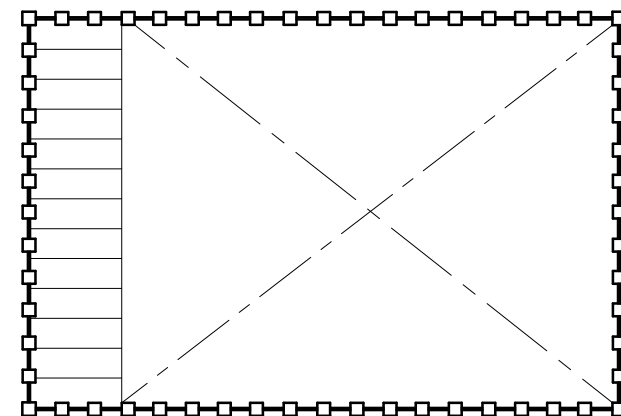
側面図1/50



配置図

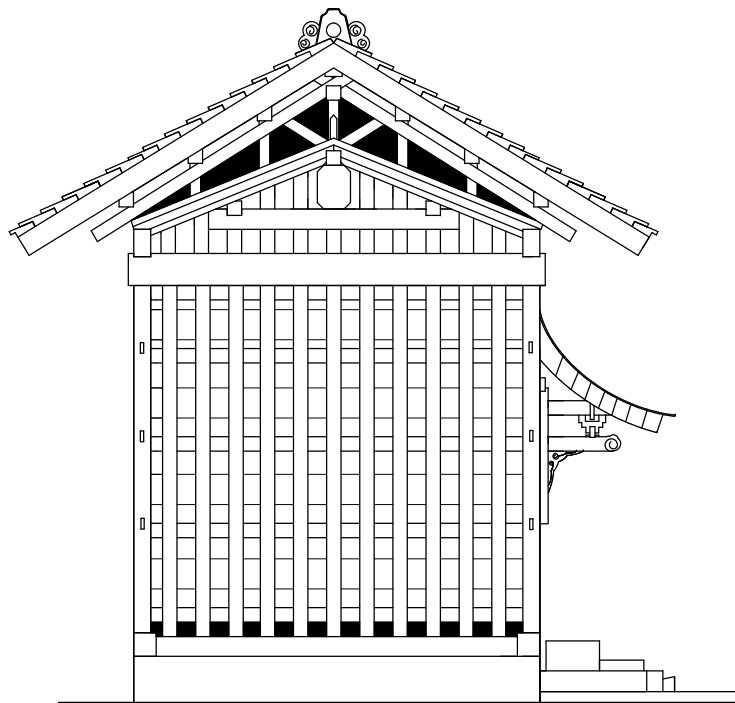


1階平面図1/50

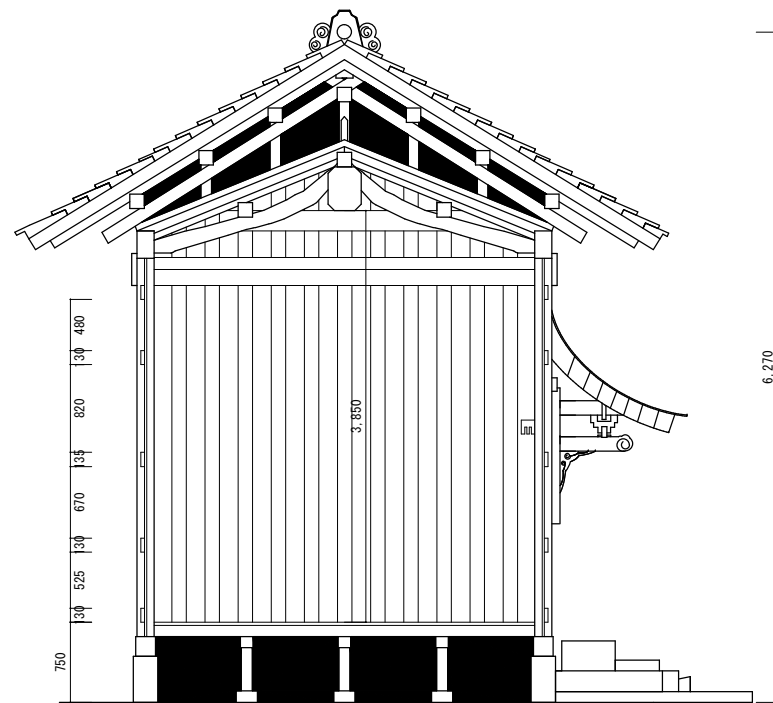


棚平面図1/50

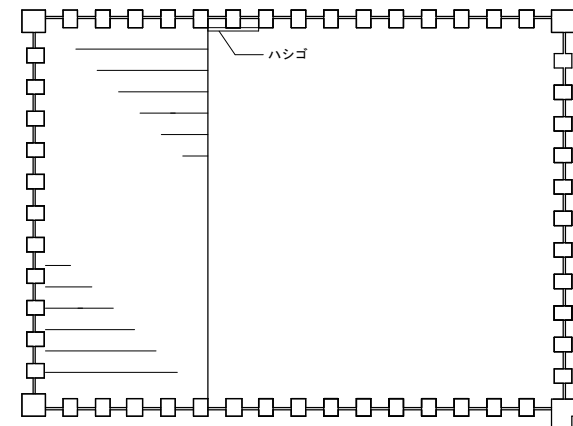
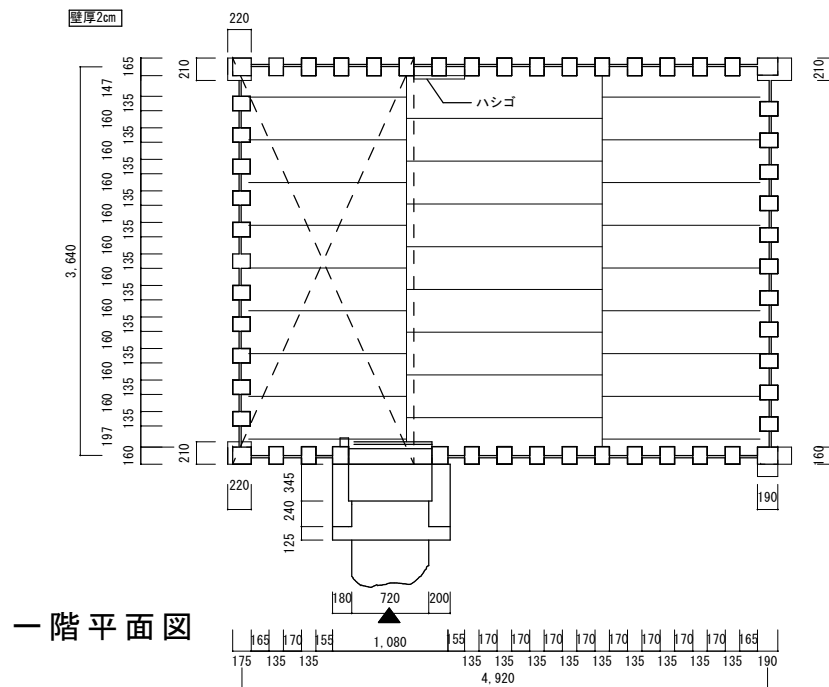
所在地	宮城県多賀城市山王
遺構, 所有名	No13 1 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年9月24日
調査者	熊谷、田尻、斉藤、渡邊
東北工業大学建築史研究室	



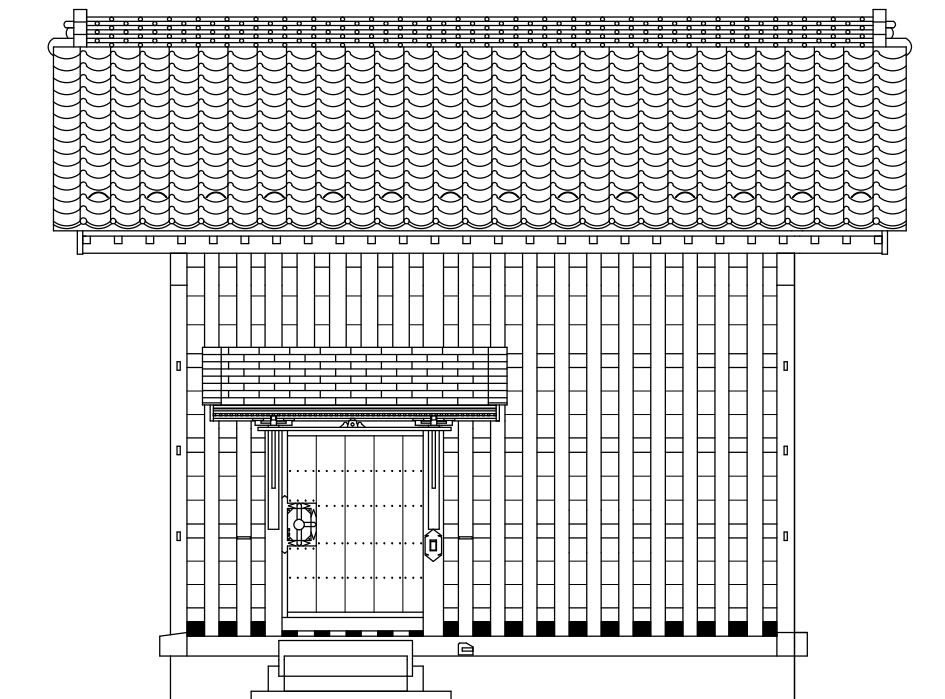
北立面図



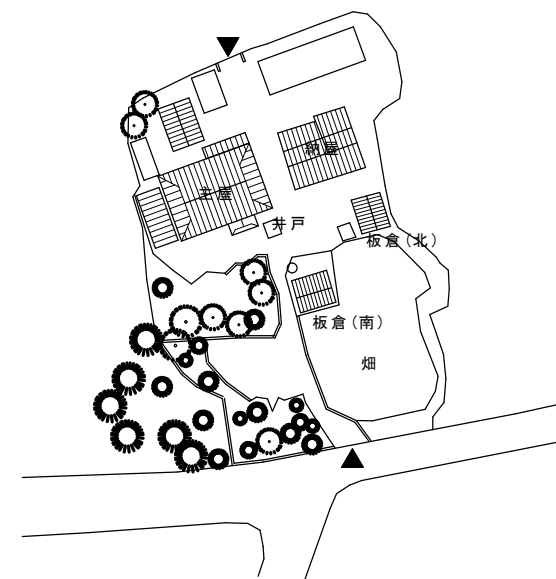
断面図



所在地	宮城県多賀城市高崎
遺構, 所有名	No. 14 S 住宅板倉 (北棟)
図 名	平面図、断面図、側面側立面図
スケール	1/50
調査時	2014年8月28日
調査者	小西・浅沼・鈴木・松野
東北工業大学建築史研究室	

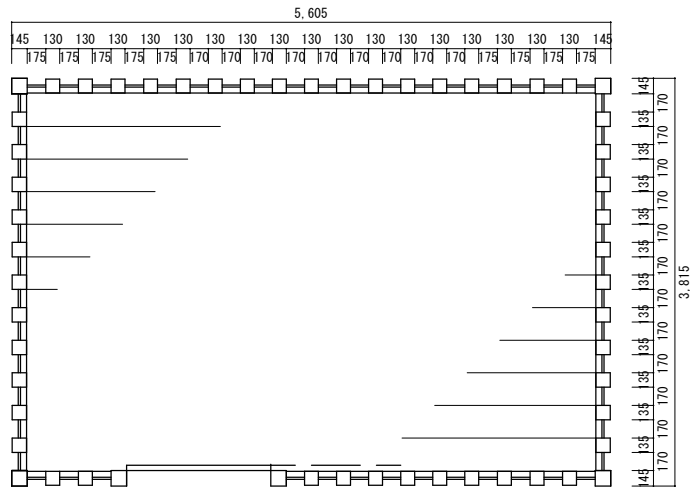


西立面図

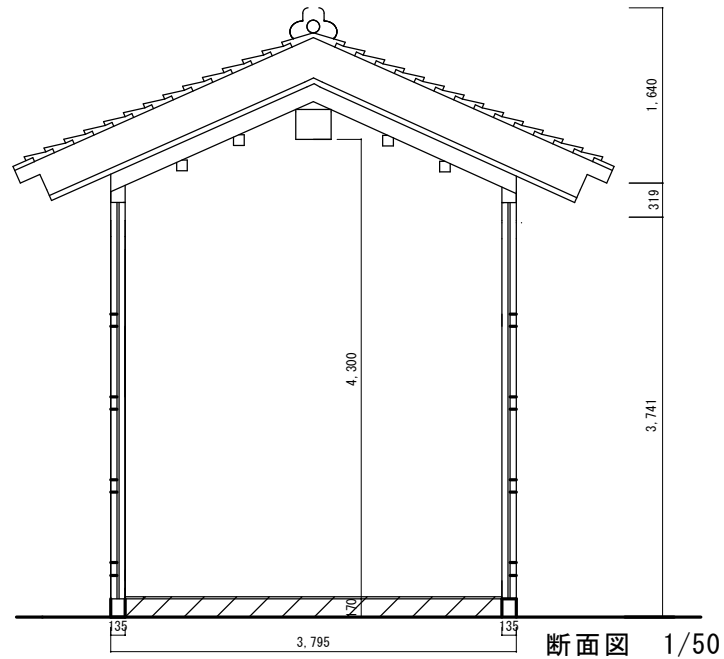


配置図

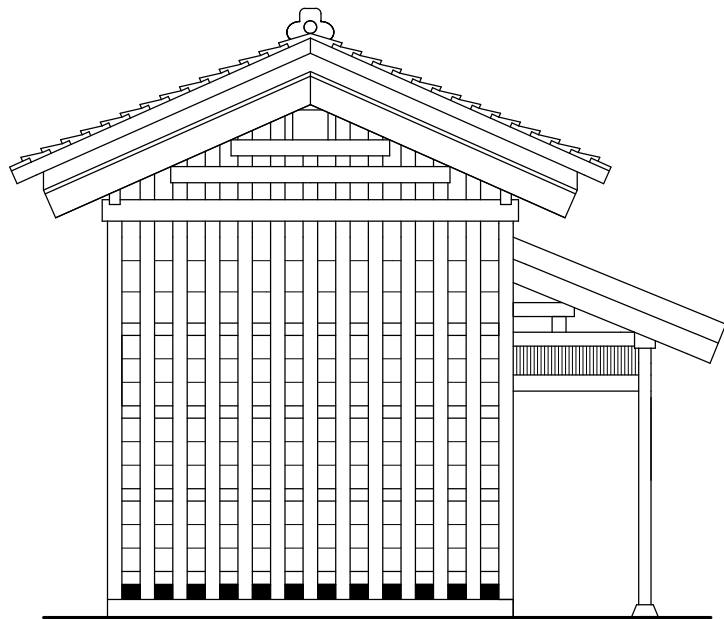
所在地	宮城県多賀城市高崎
遺構, 所有名	No. 14 S 住宅板倉(北棟)
図 名	正面立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2014年8月28日
調査者	小西・浅沼・鈴木・松野
東北工業大学建築史研究室	



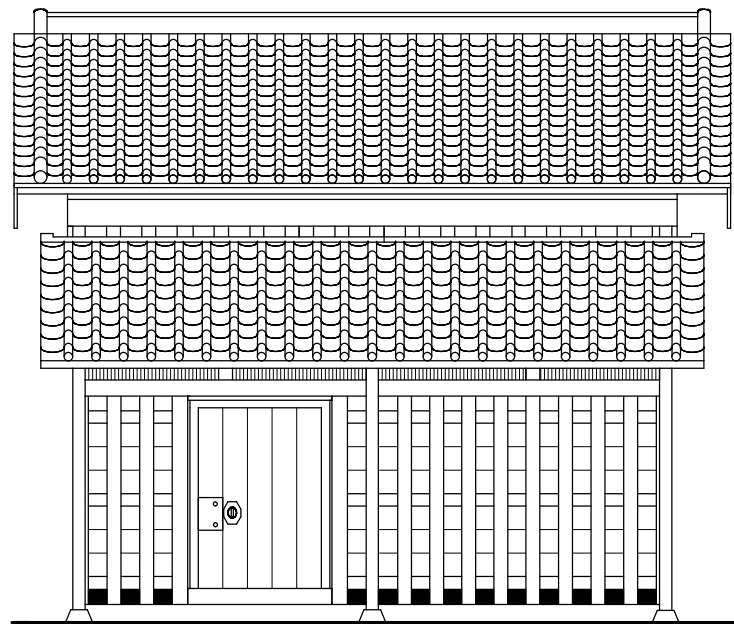
板厚 = 20mm



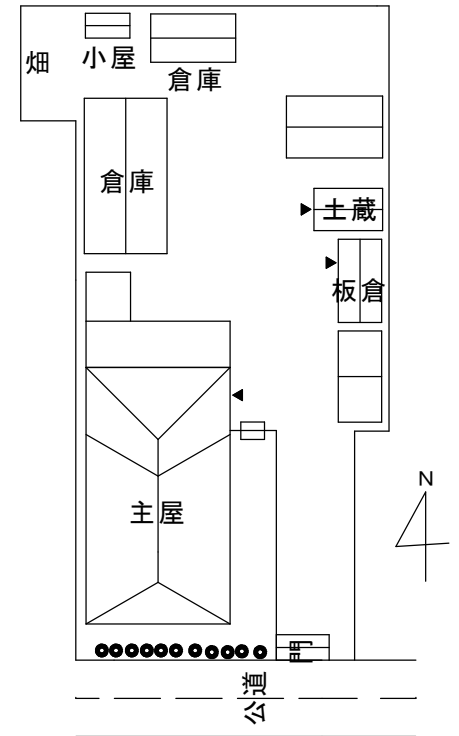
断面図 1/50



立面図 側面 1/50

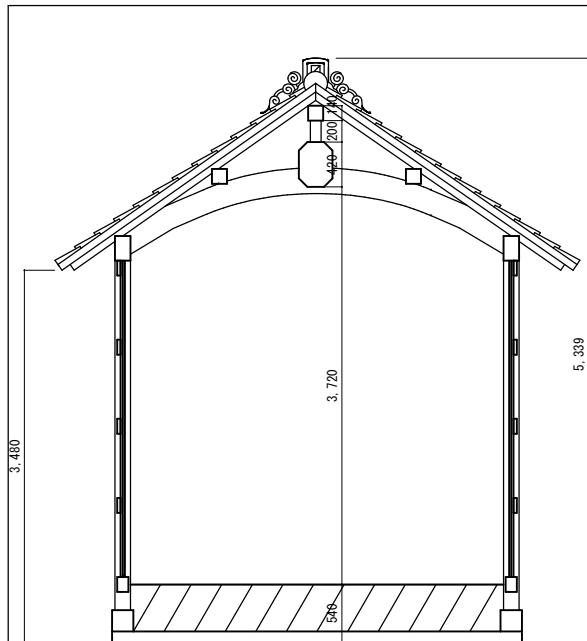


立面図 正面 1/50



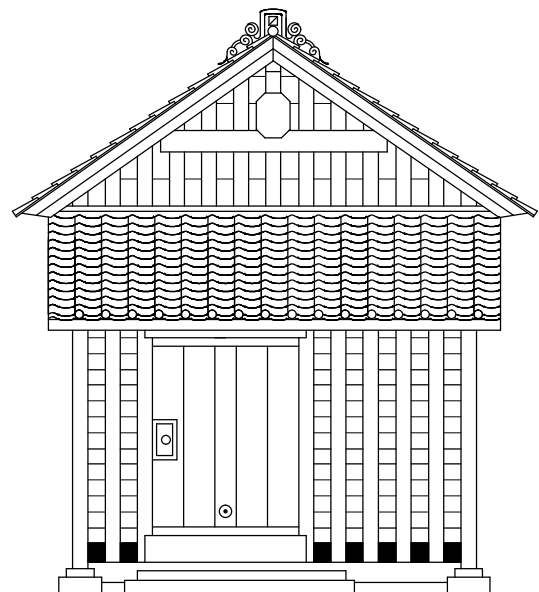
配置図

所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 15 A 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年9月7日
調査者	大友
東北工業大学建築史研究室	

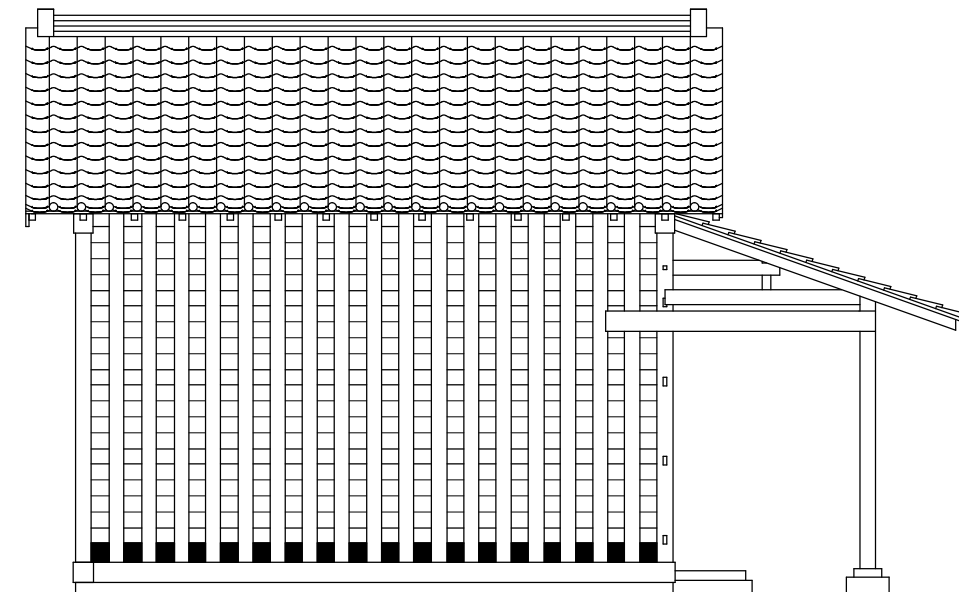


断面図 1/50

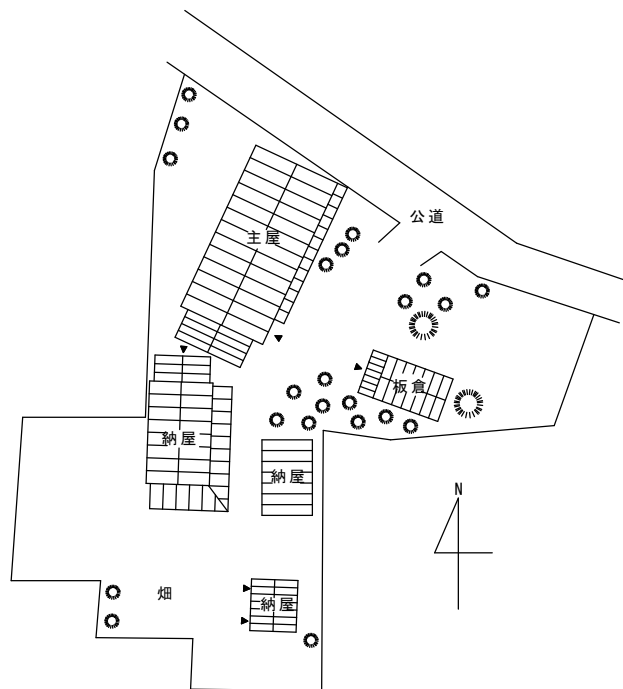
板壁厚 15mm+15mm=30mm
板壁2枚



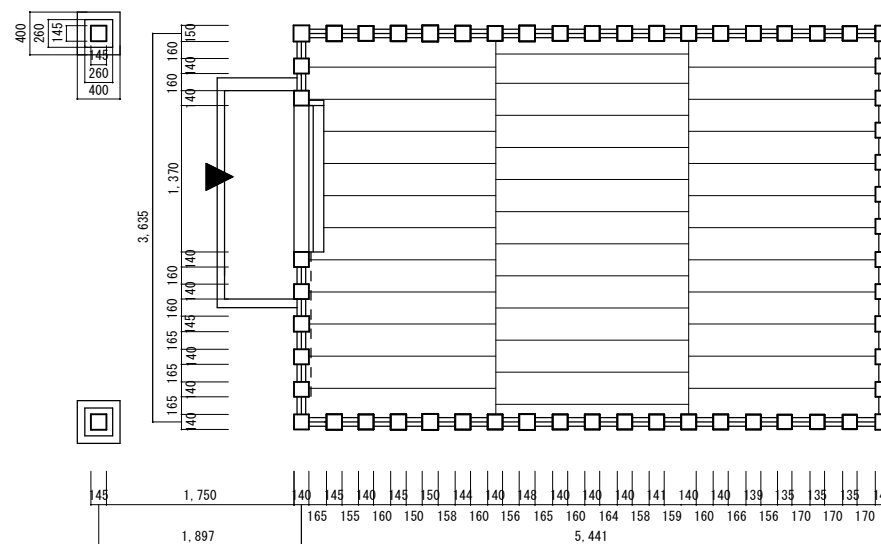
正面図 1/50



側面図 1/50

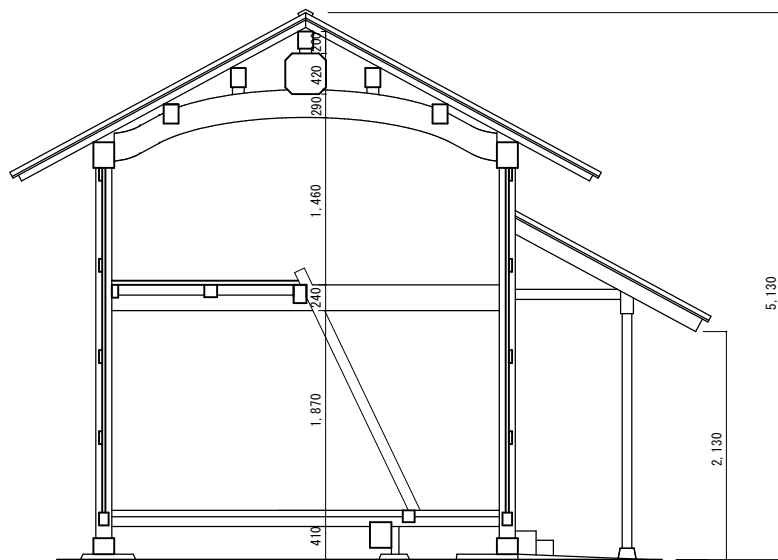


配置図

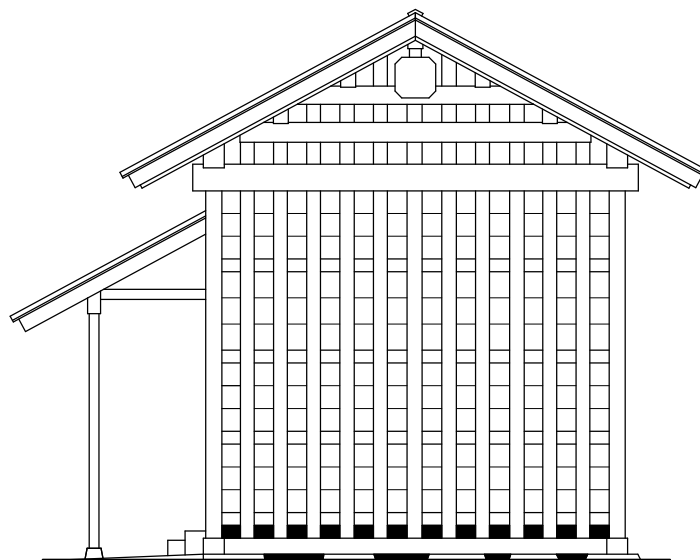


1階平面図 1/50

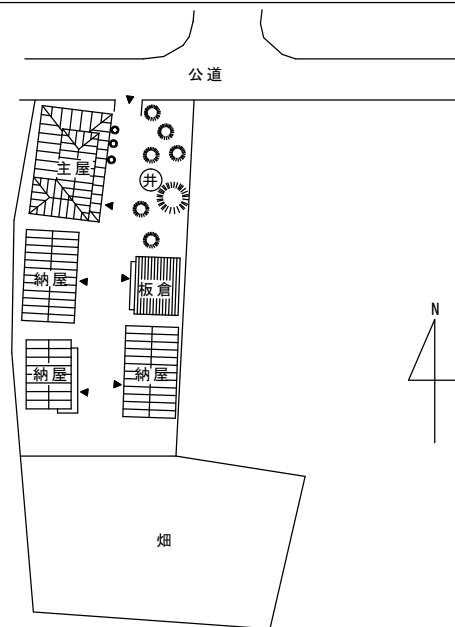
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 16 1家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月27日
調査者	鈴木、加藤、渡邊、佐々木
東北工業大学建築史研究室	



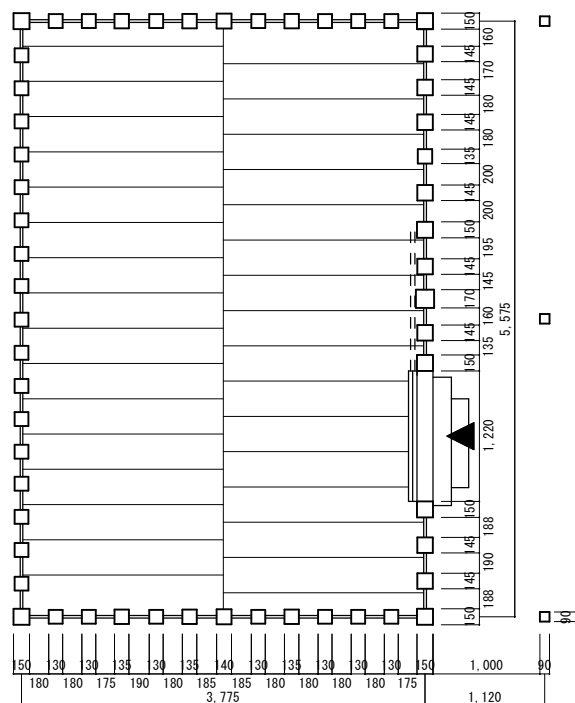
断面図 1/50 板壁厚25mm



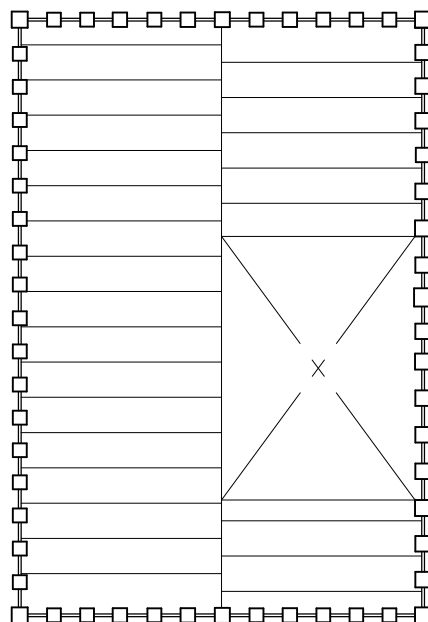
側面図 1/50



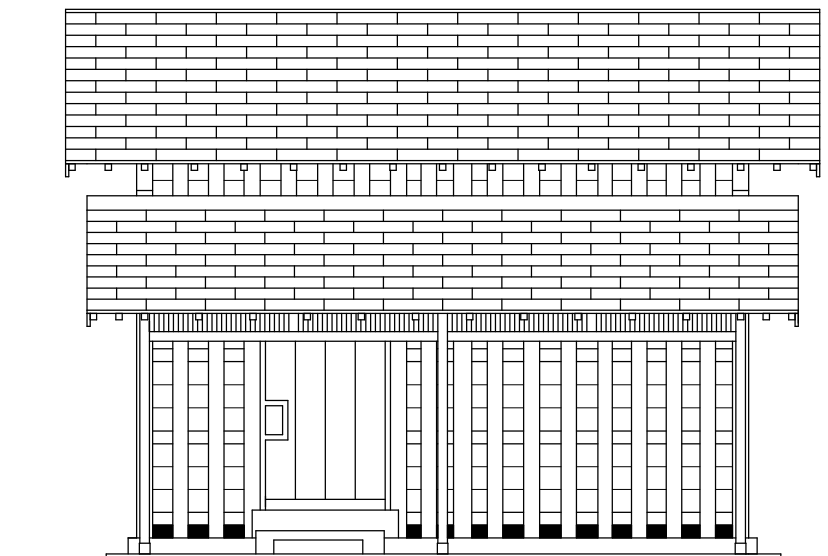
配置図



1階平面図 1/50

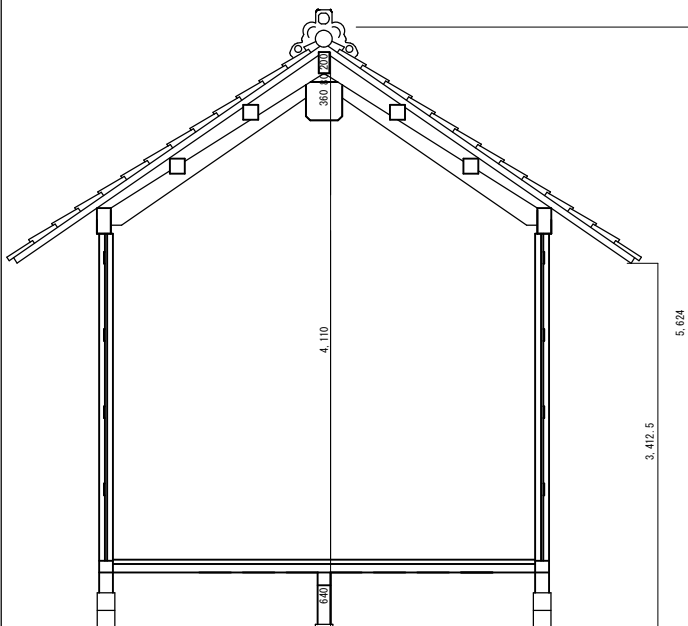


中2階平面図 1/50



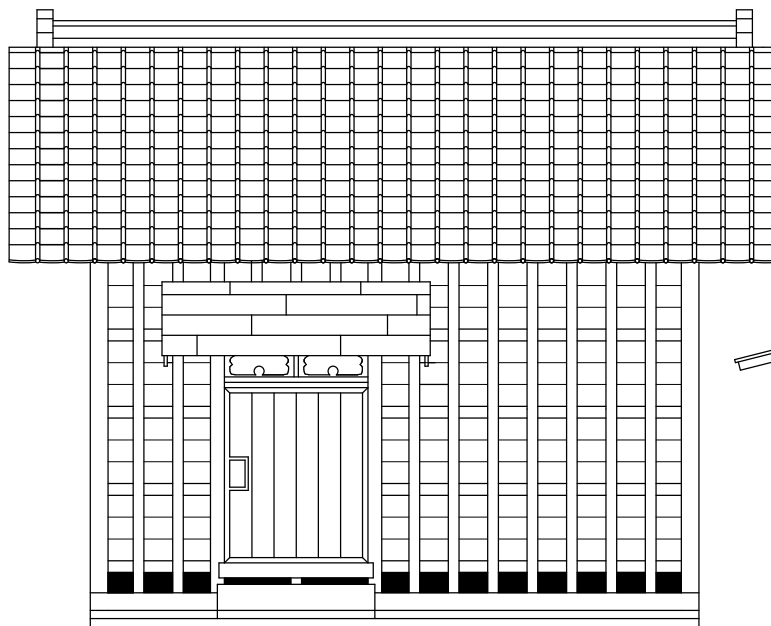
正面図 1/50

所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 17 G家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月28日
調査者	齊藤、加茂、渡邊
東北工業大学建築史研究室	

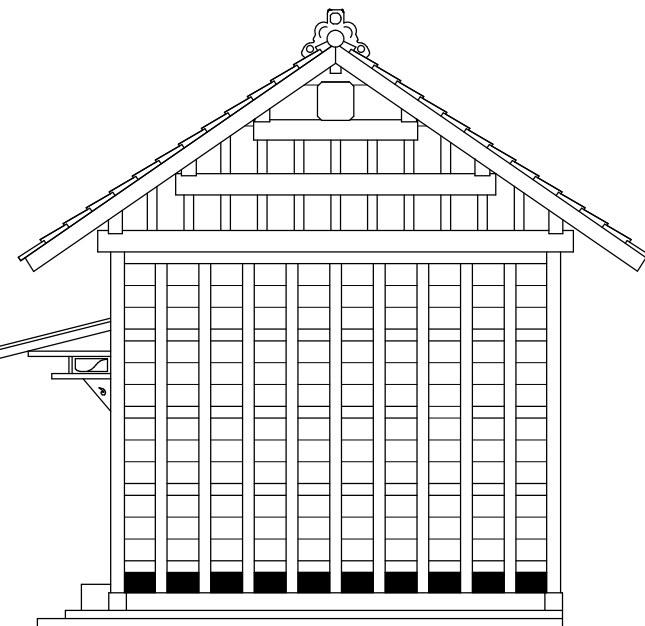


断面図 1/50

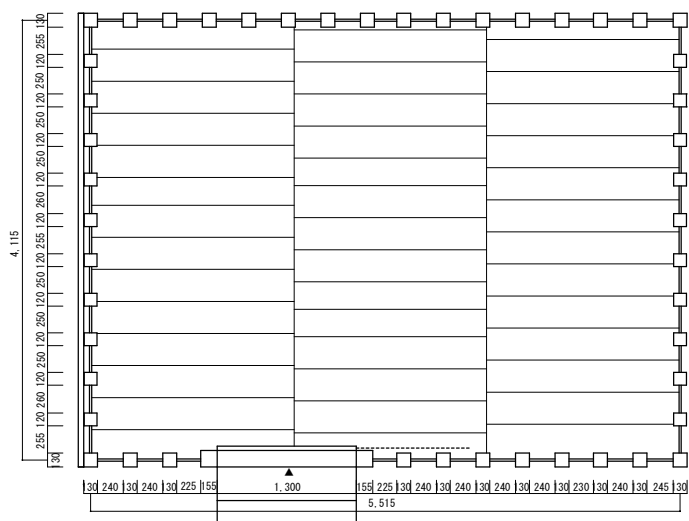
板壁厚20mm



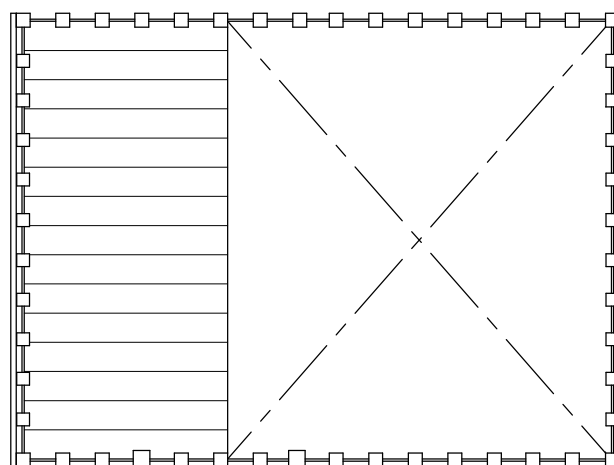
正面図 1/50



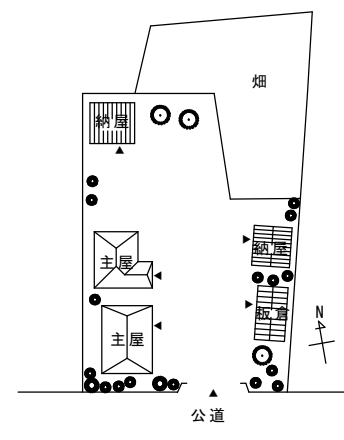
側面図 1/50



1階平面図 1/50

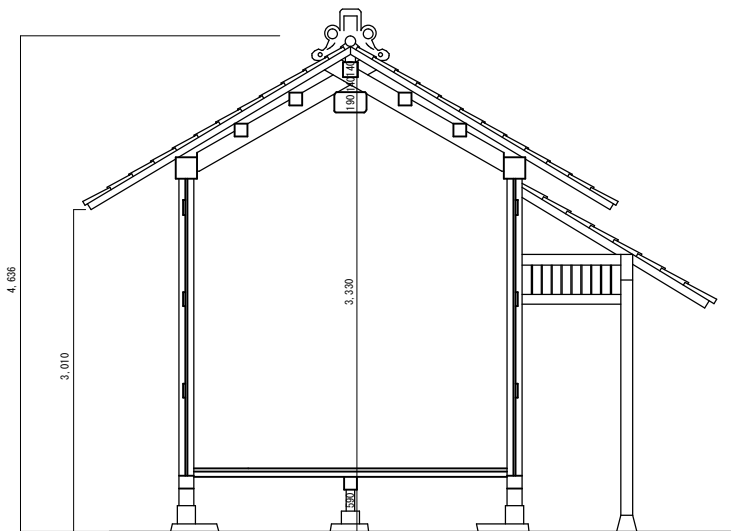


中2階平面図 1/50

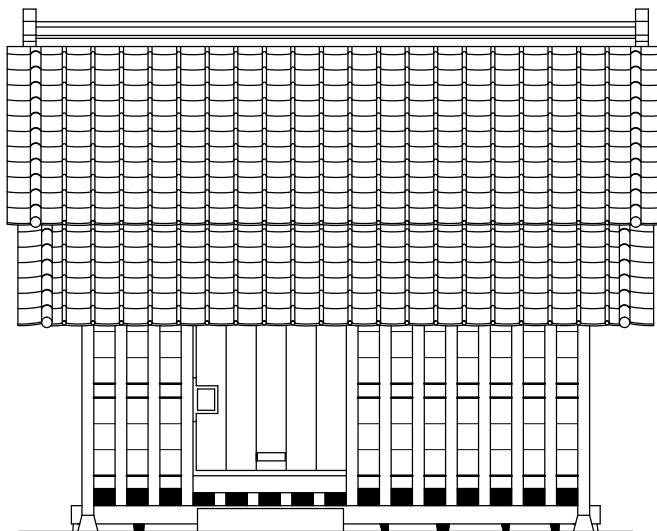


配置図

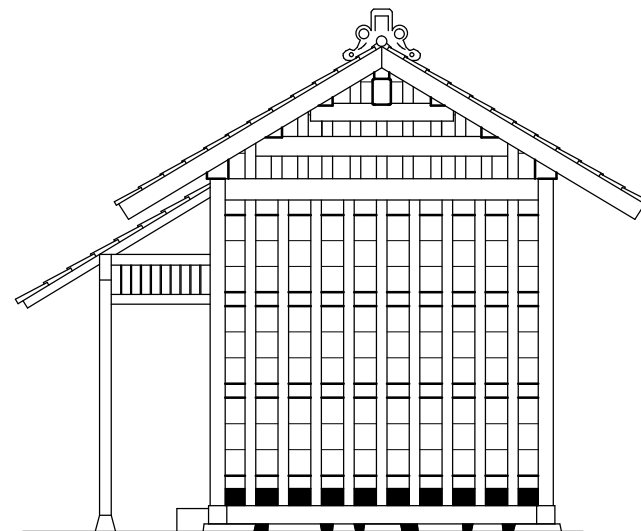
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構、所有名	No. 18 S 家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月27日
調査者	加茂、渡邊、斉藤
東北工業大学建築史研究室	



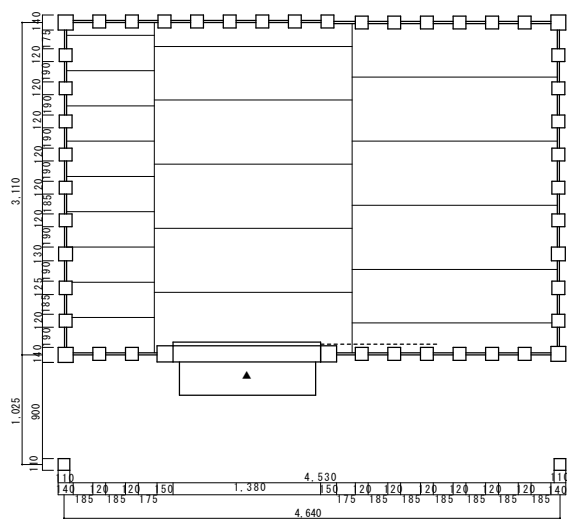
断面図 1/50 板壁厚20mm



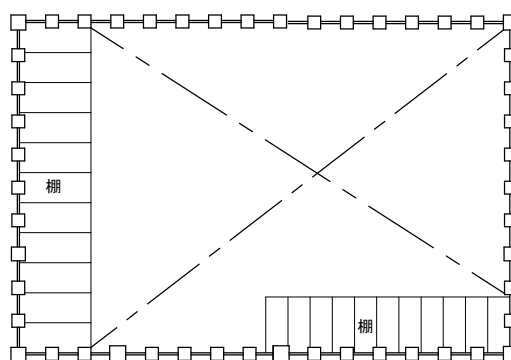
正面図 1/50



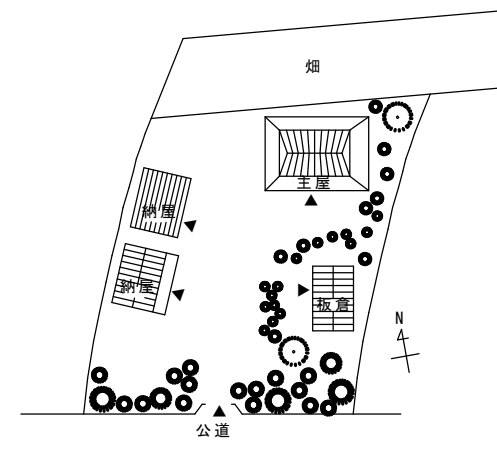
側面図 1/50



1階平面図 1/50

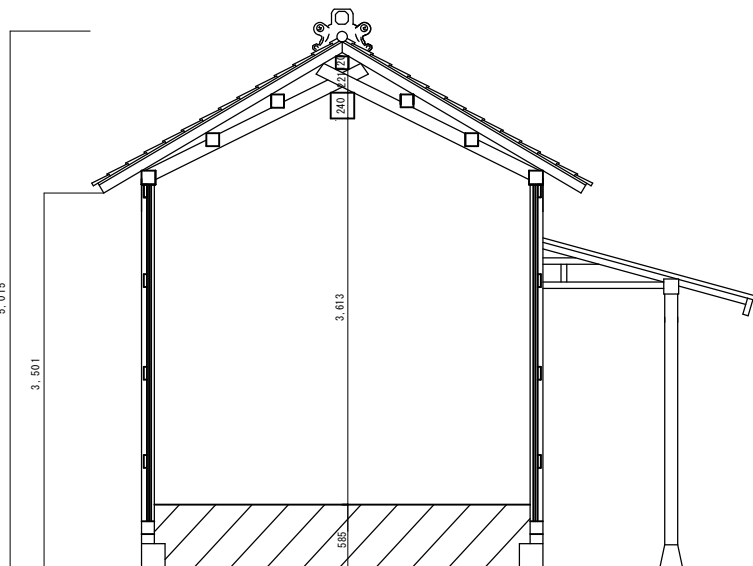


中2階棚平面図 1/50



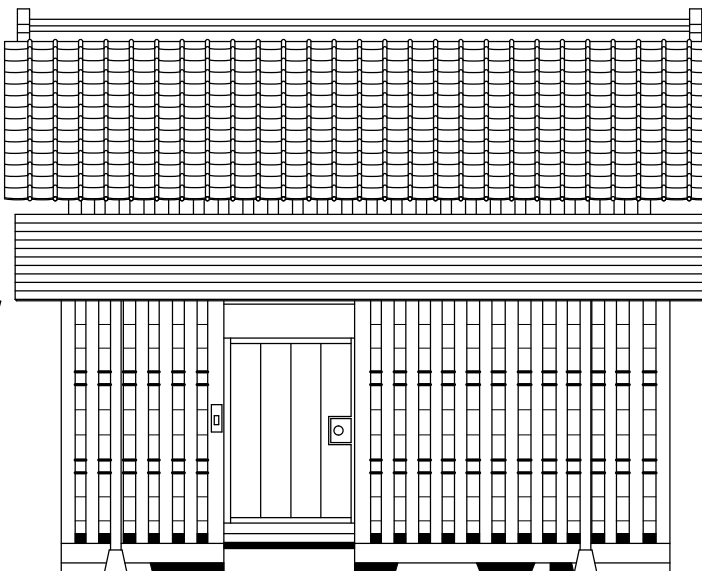
配置図

所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 19 T 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月28日
調査者	加茂、渡邊、斉藤
東北工業大学建築史研究室	

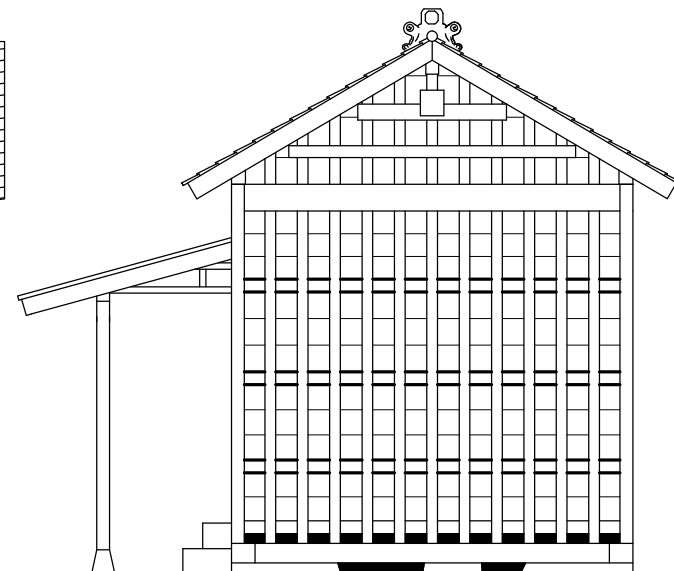


断面図 1/50

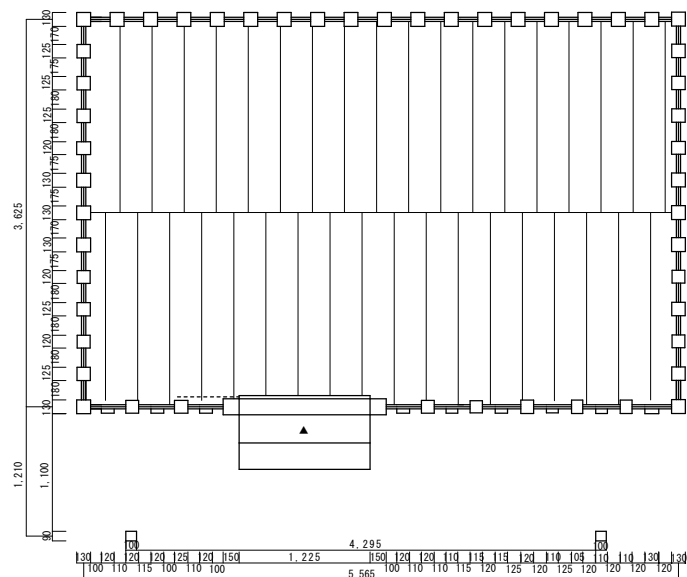
板壁厚 10 + 10 = 20mm
板壁 2枚



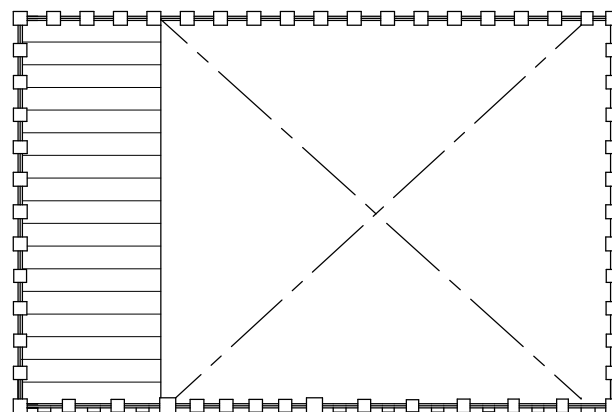
正面図 1/50



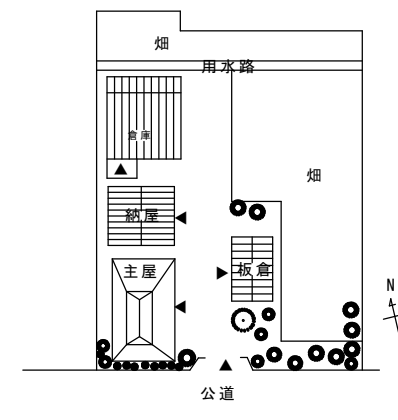
側面図 1/50



1階平面図 1/50

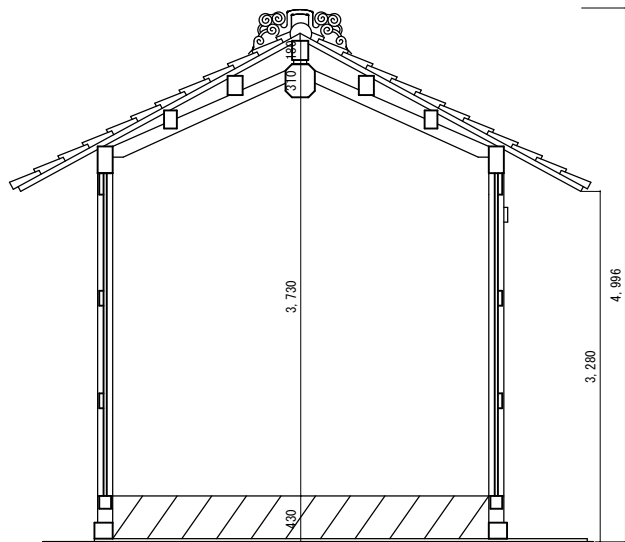


中2階平面図 1/50



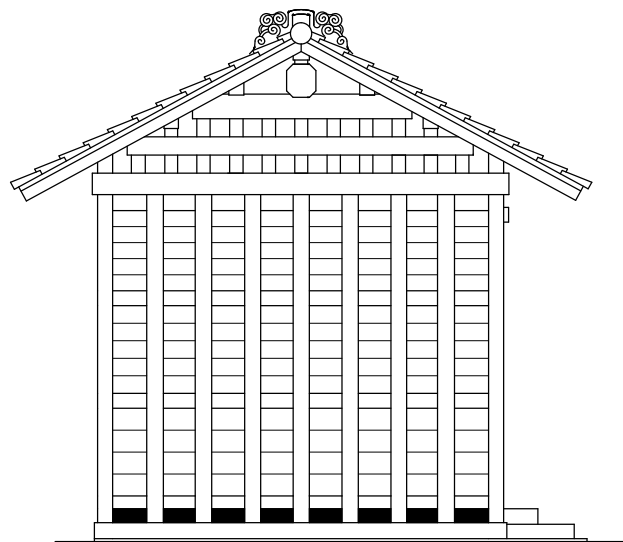
配置図

所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 20 T 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月27日
調査者	加茂、渡邊、斉藤
東北工業大学建築史研究室	

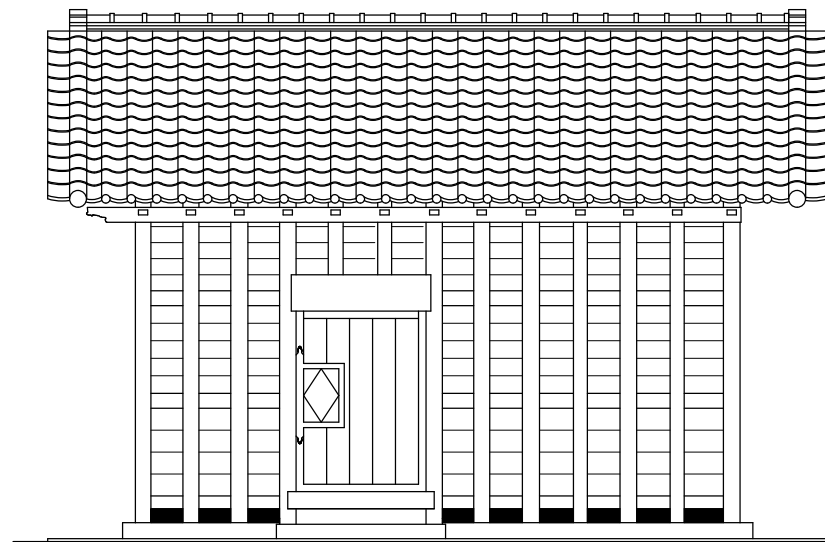


断面図 1/50

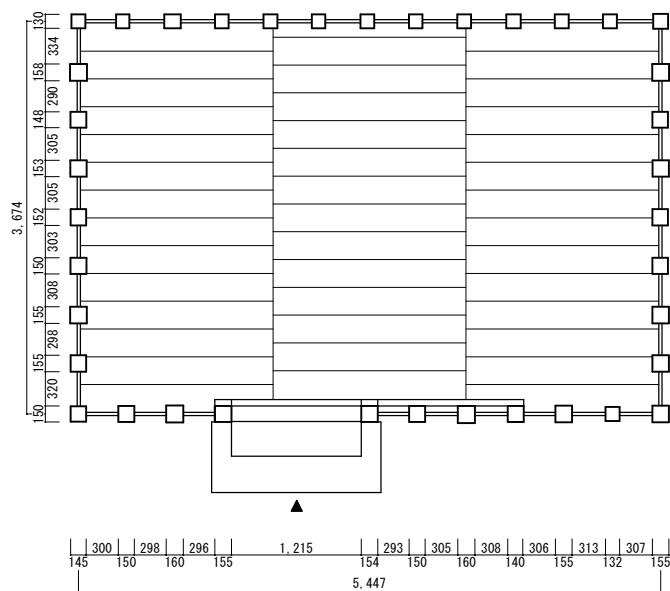
板壁厚30mm



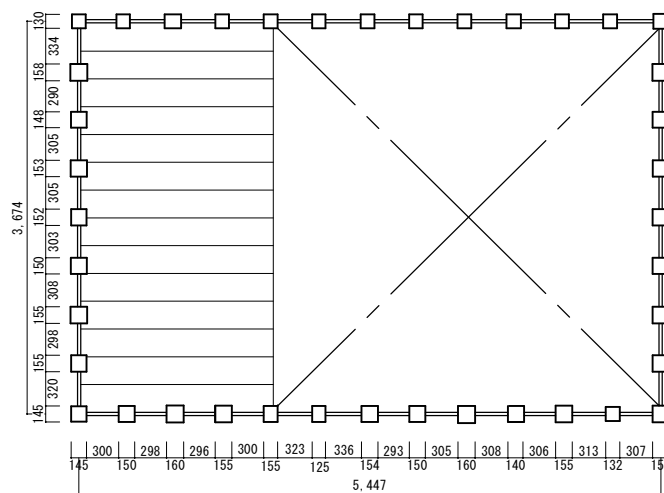
側面図 1/50



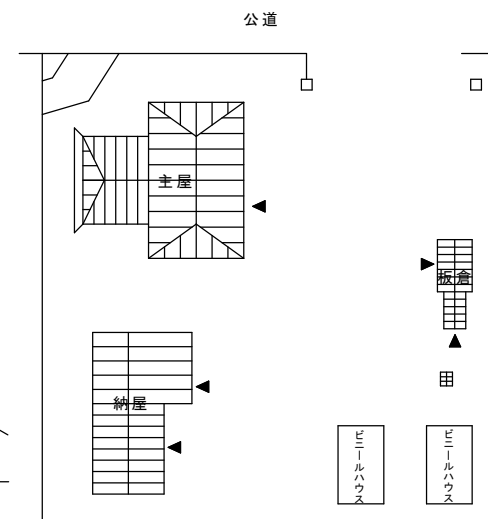
正面図 1/50



1階平面図 1/50

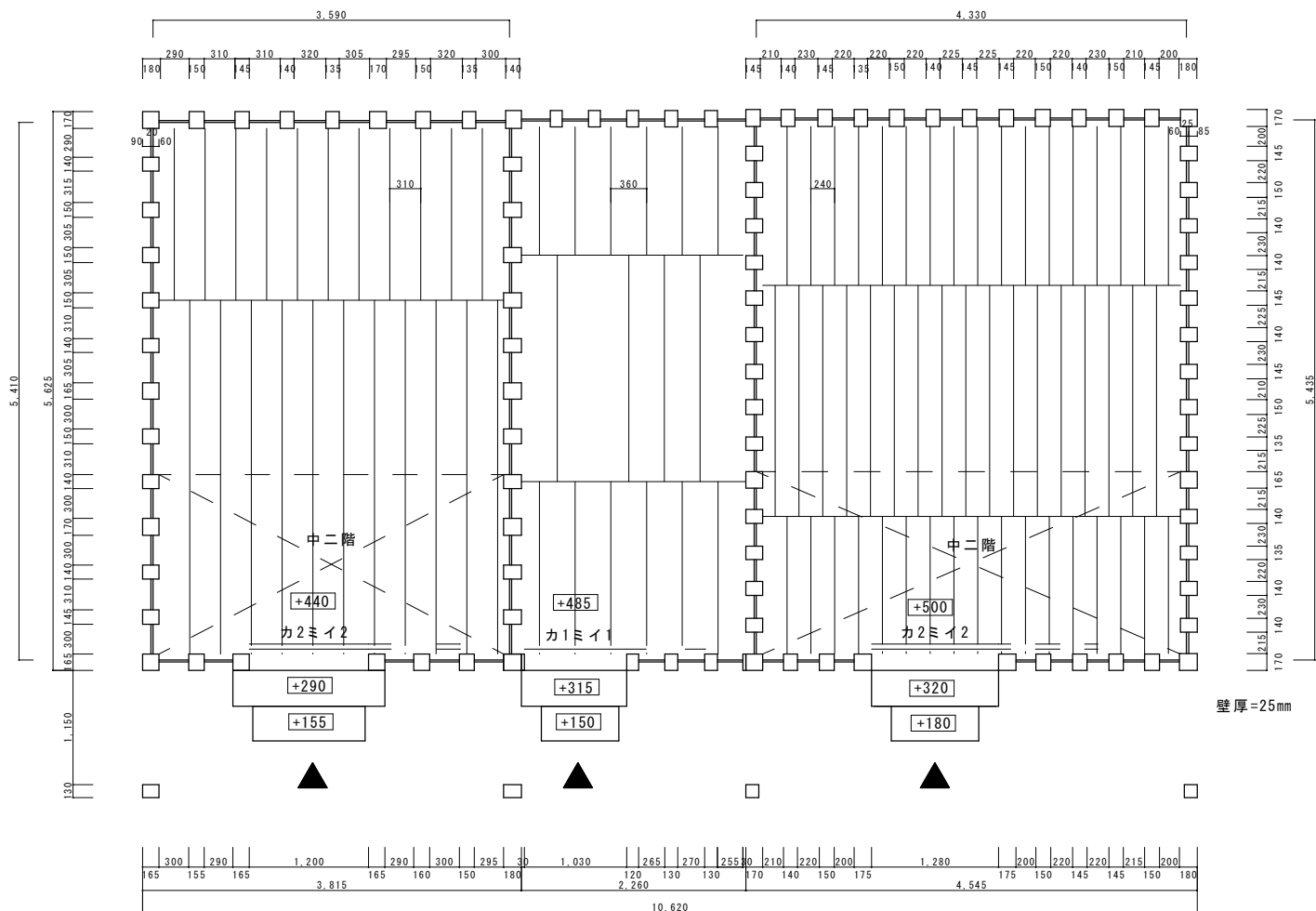


中2階平面図 1/50

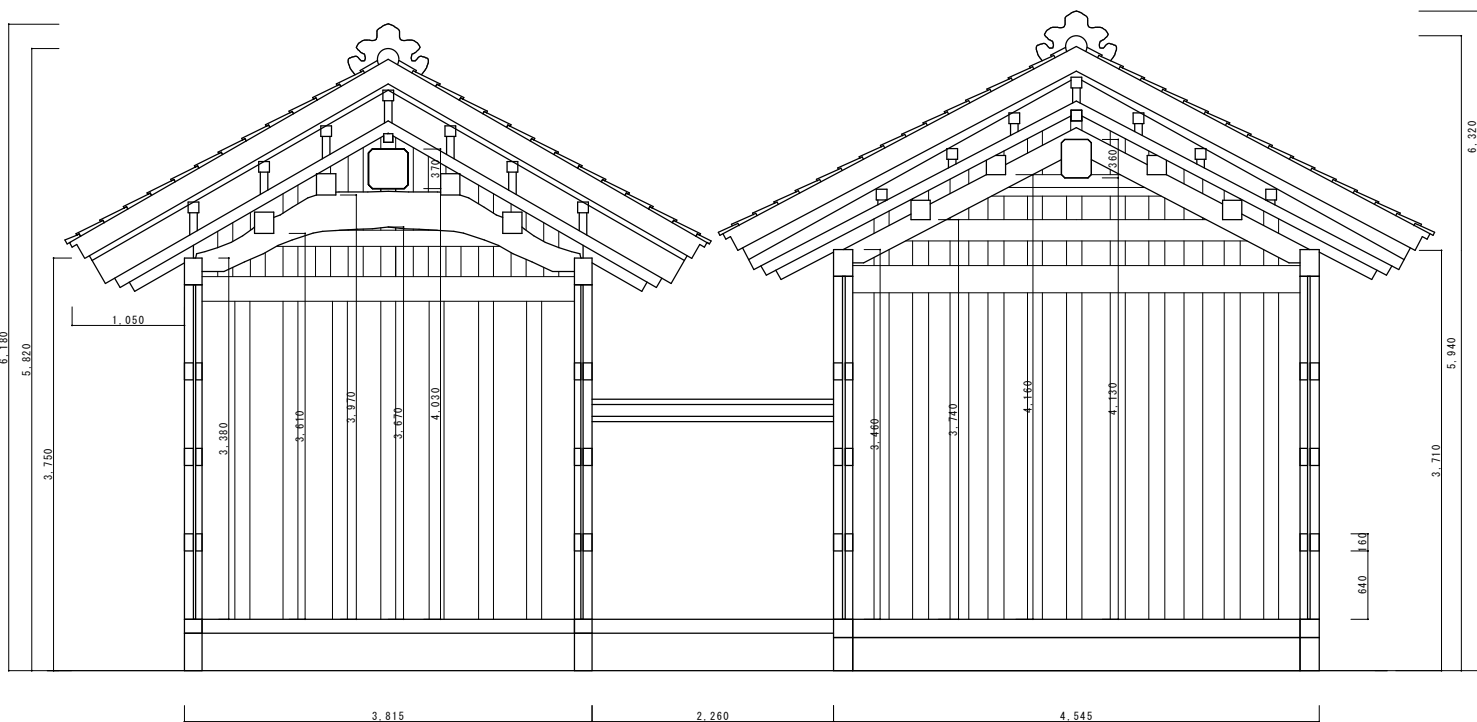


配置図

所在地	宮城県多賀城市山王
遺構, 所有名	No. 21 1 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月27日
調査者	鈴木、佐々木、加藤、渡邊
東北工業大学建築史研究室	

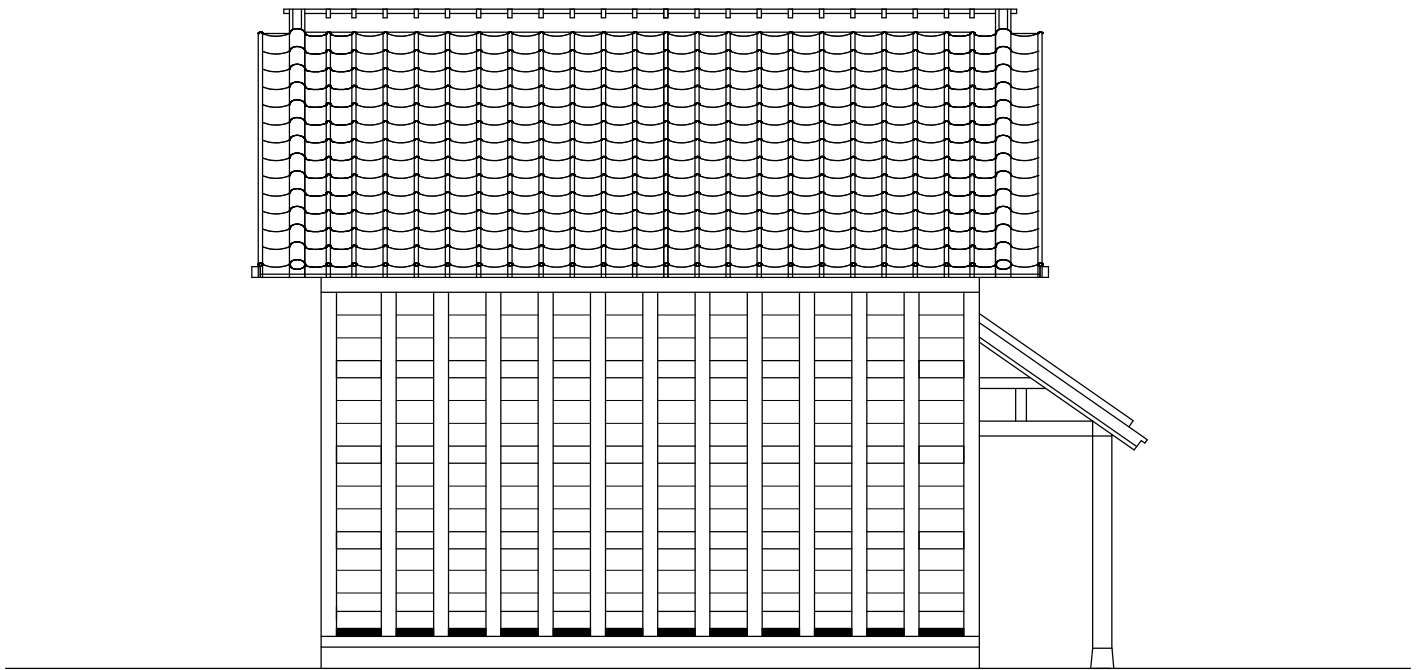


平面図1/50

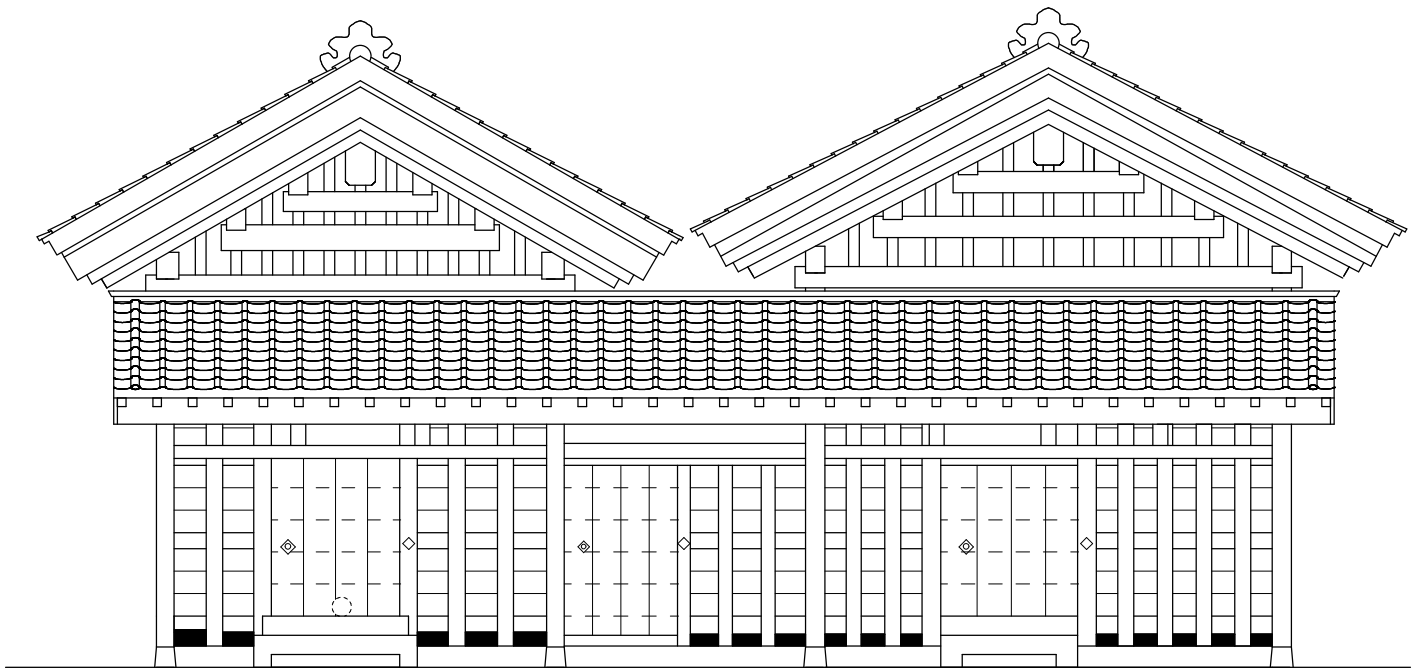


断面図1/50

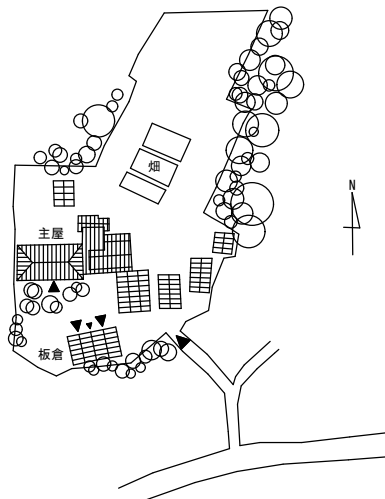
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構、所有名	No. 22-23 K家住宅板倉
図 名	平面図、断面図
スケール	1/50
調査時	2012年8月29日
調査者	渡邊、鈴木、佐々木、渡邊
東北工業大学建築史研究室	



側面立面図 1/50

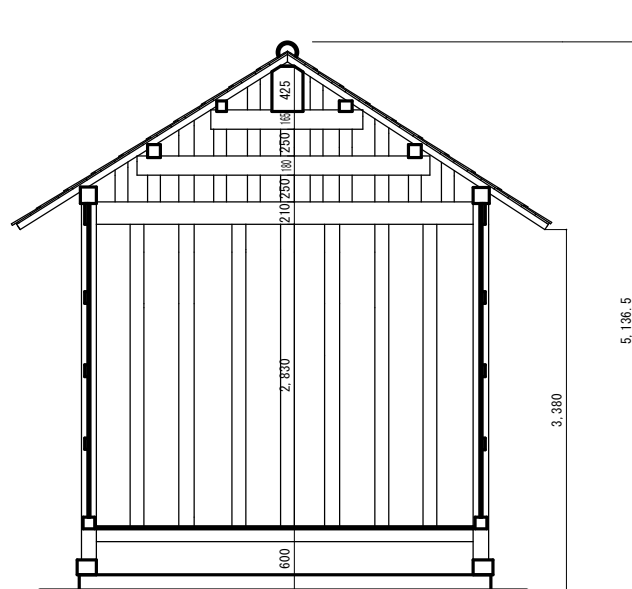


正面立面図 1/50



配置図

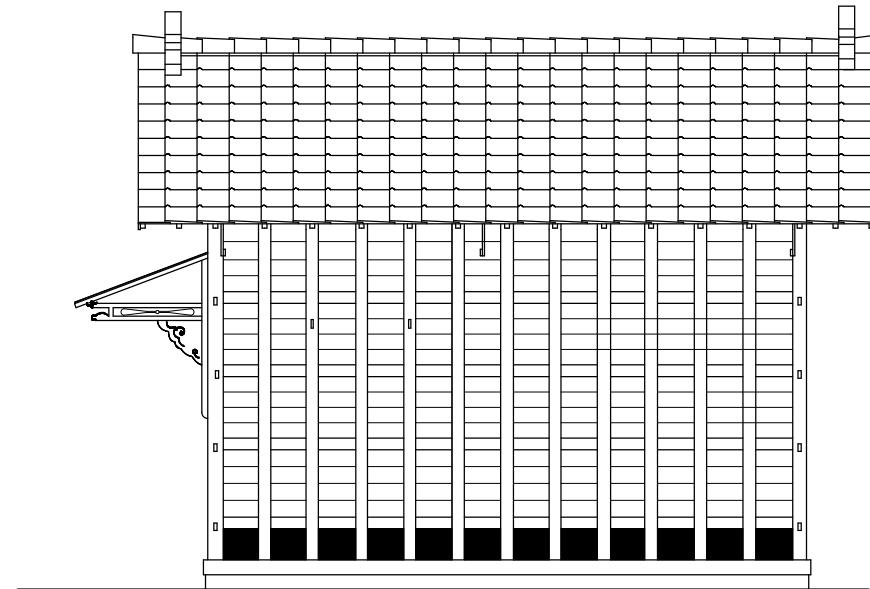
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 22-23 K家住宅板倉
図 名	正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月29日
調査者	渡邊、鈴木、佐々木、渡邊
東北工業大学建築史研究室	



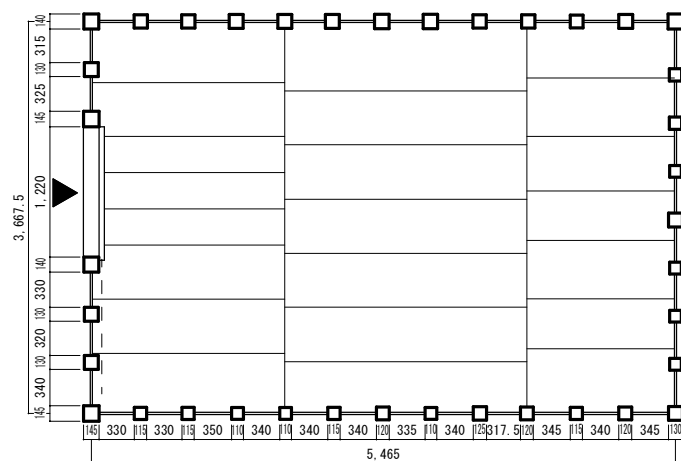
断面図 1/50



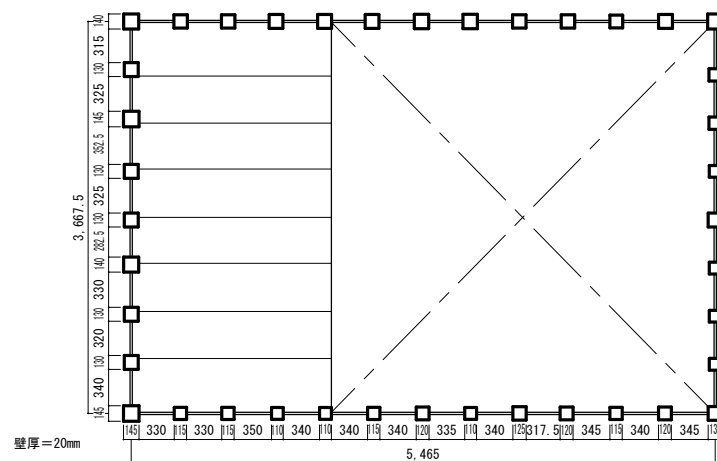
正面図 1/50



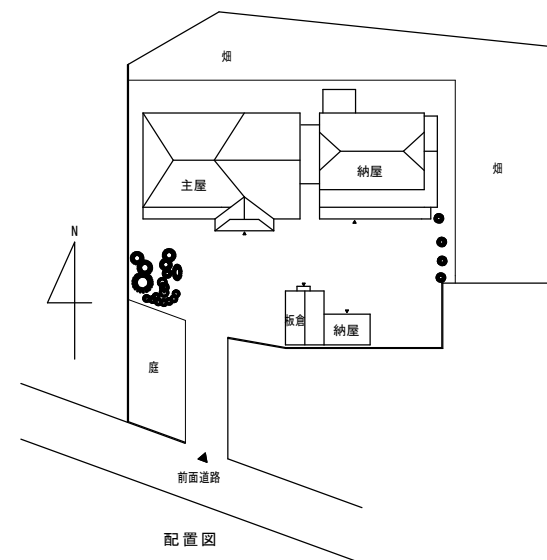
側面図 1/50



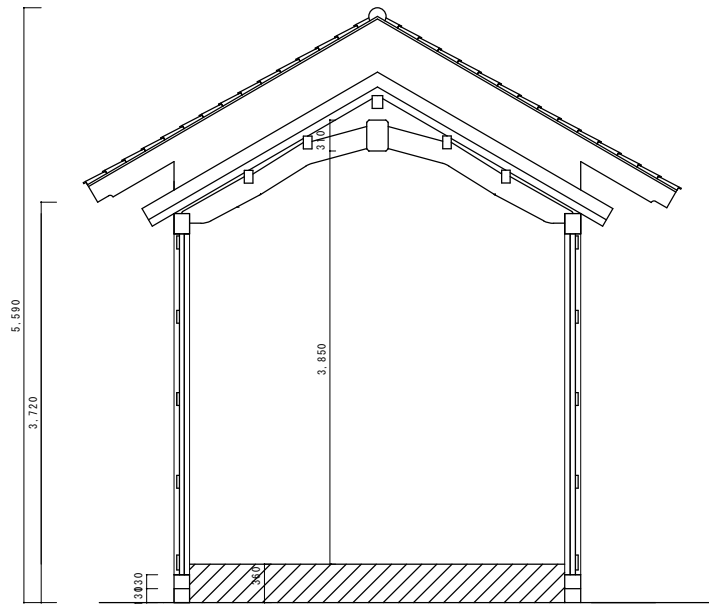
1階平面図 1/50



2階平面図 1/50

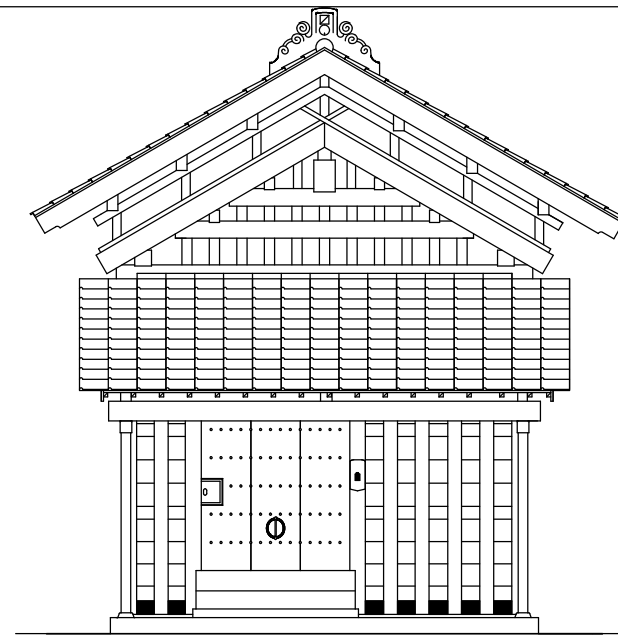


所在地	宮城県多賀城市新田
遺構, 所有名	No. 24 E 家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正面図、側面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年 9月 7、8日
調査者	東海林
東北工業大学建築史研究室	

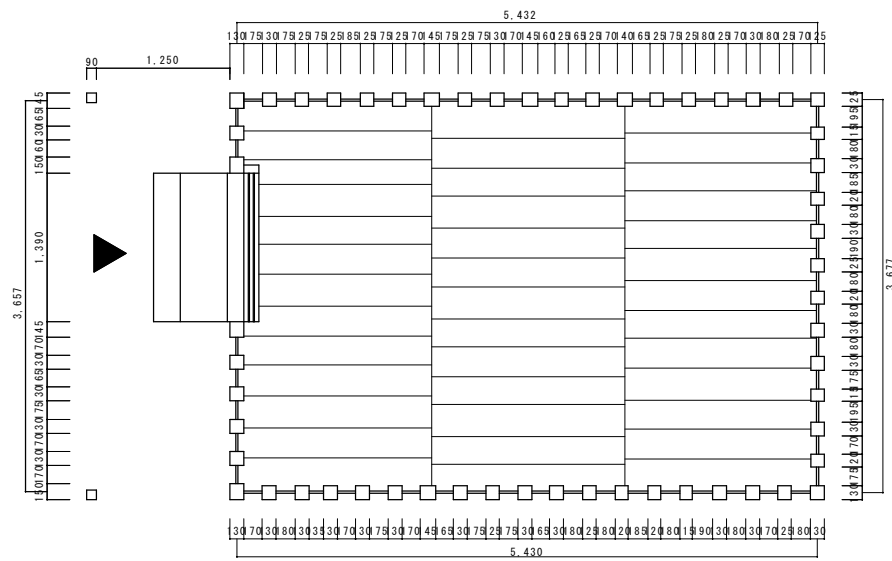


断面図 1/50

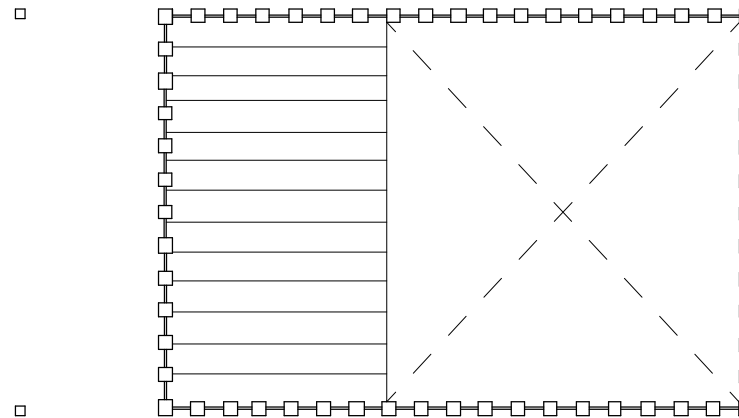
板壁厚 20mm



正面図 1/50

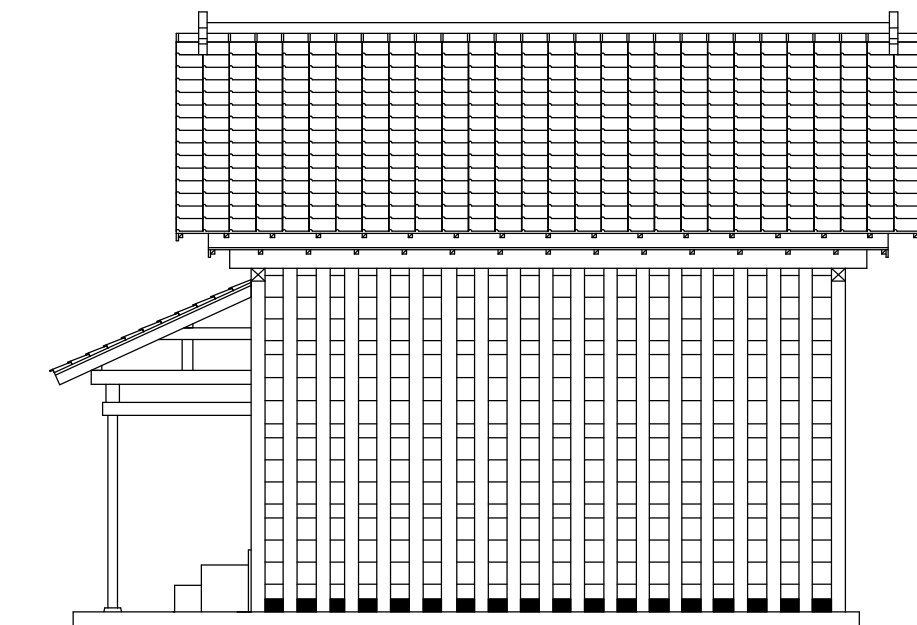


1階平面図 1/50

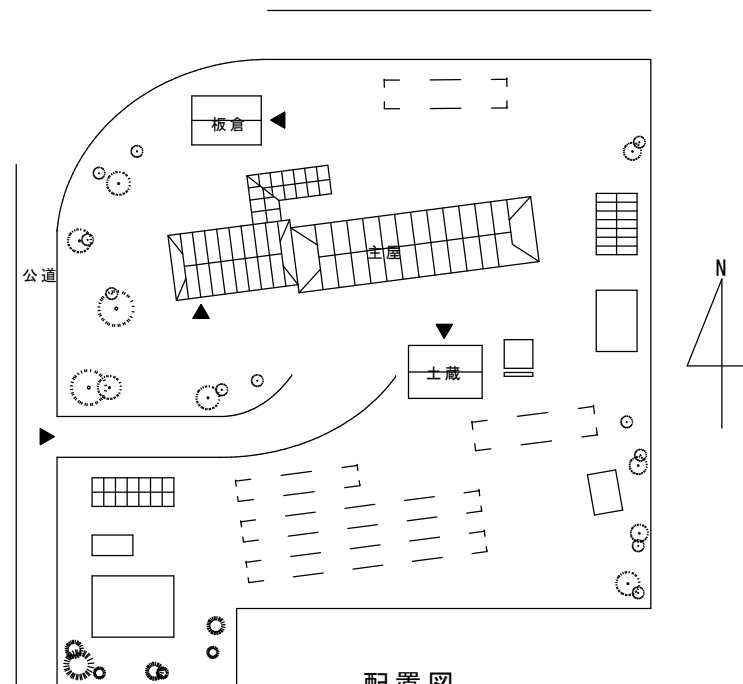


中2階平面図 1/50

所在地	宮城県多賀城市
遺構, 所有名	No. 25 K 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面側立面図
スケール	1/50
調査時	2012年8月29日
調査者	渡邊、鈴木、佐々木、加藤
東北工業大学建築史研究室	

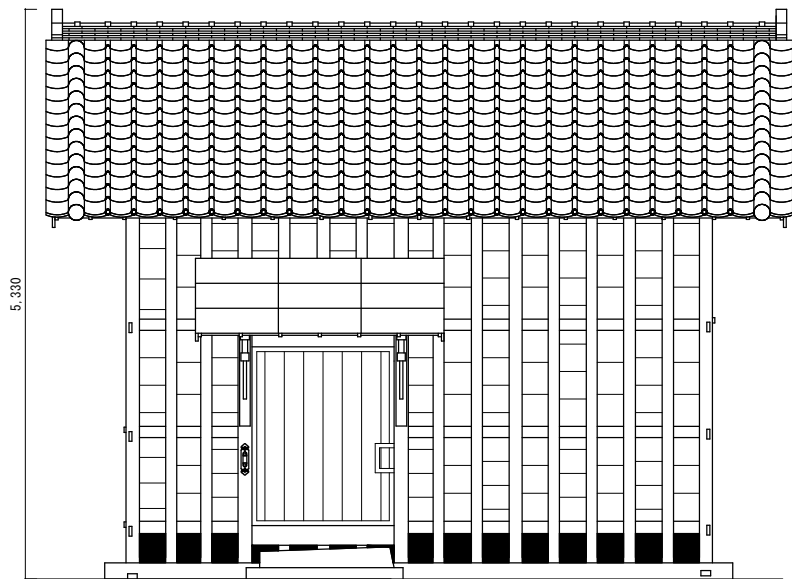


側面図 1/50

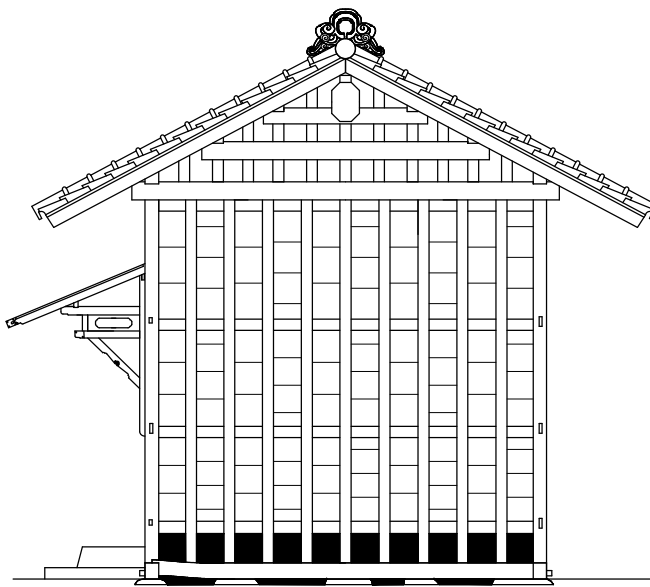


配置図

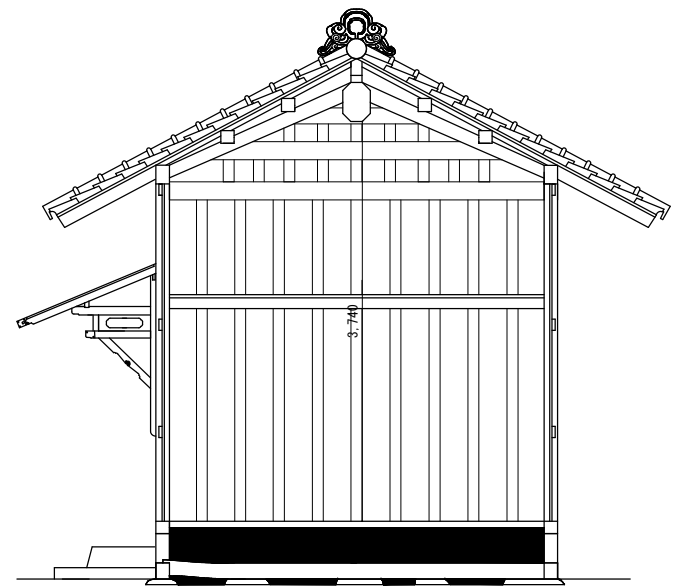
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 25 K家住宅板倉
図 名	側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月29日
調査者	渡邊、鈴木、佐々木、加藤
東北工業大学建築史研究室	



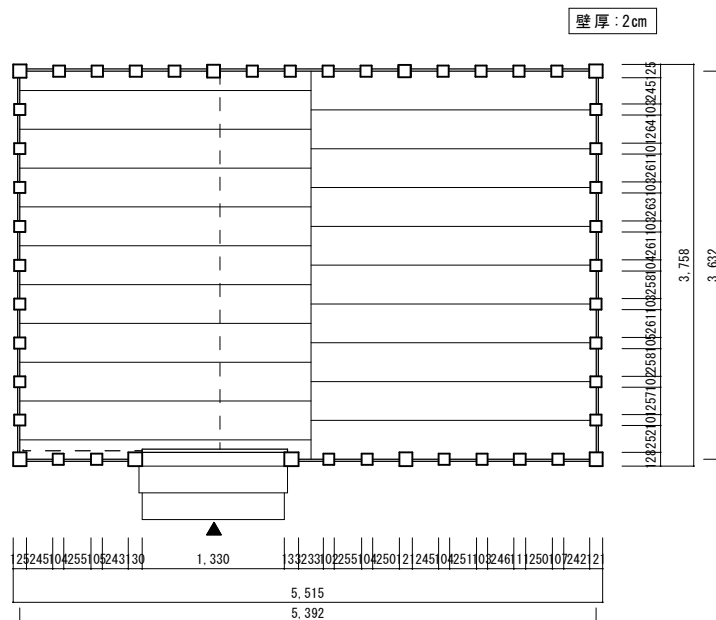
正面立面図



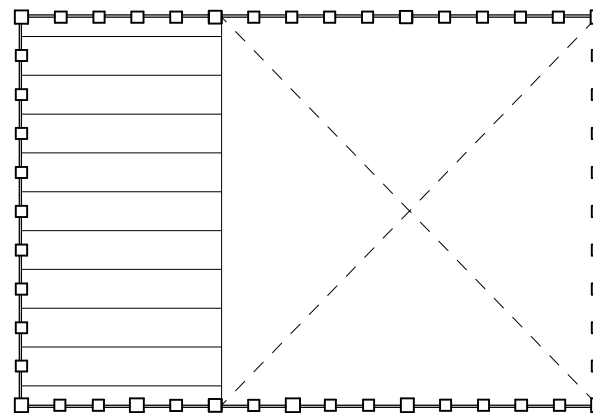
側面立面図



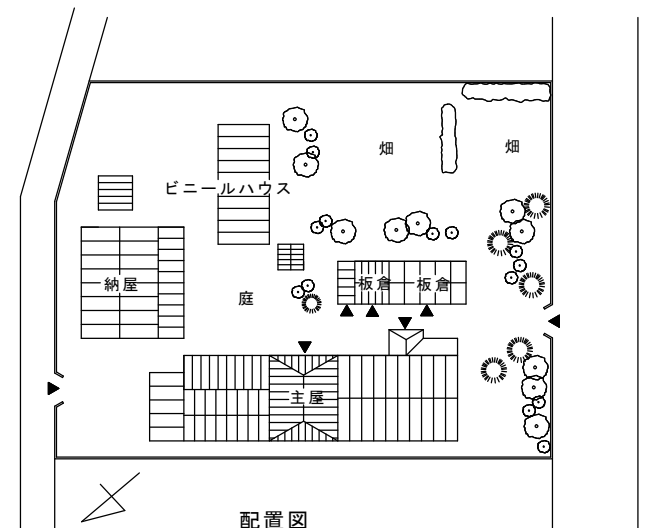
断面図



平面図

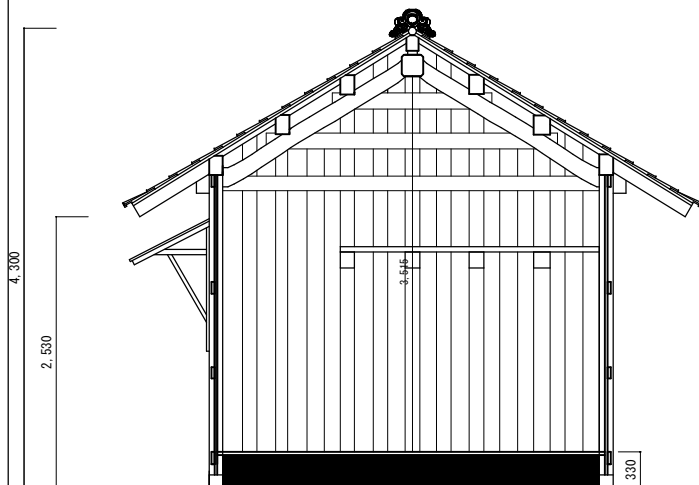


中二階平面図

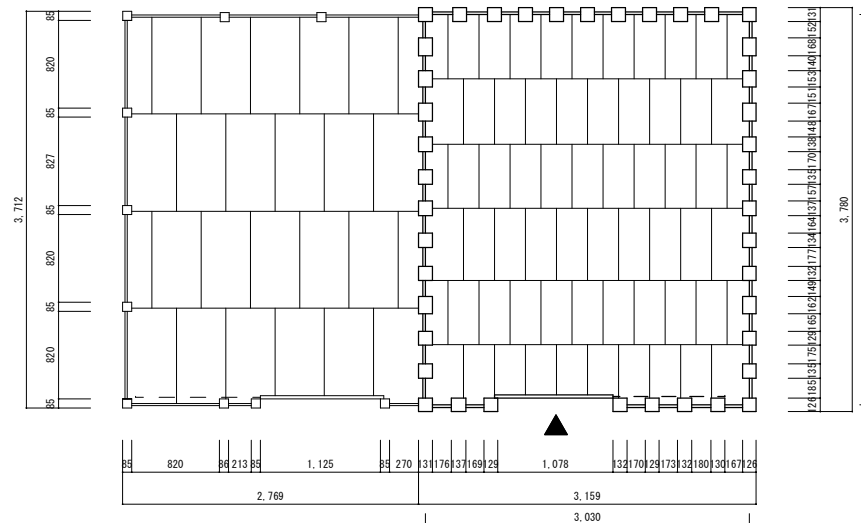


配置図

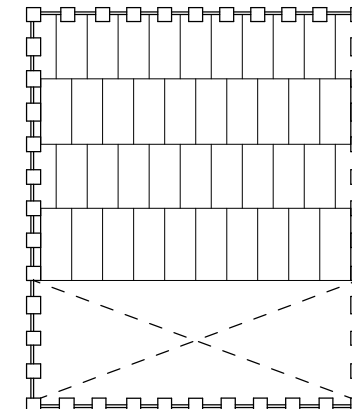
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構・所有名	No. 26 S 住宅板倉（南棟）
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月22日
調査者	山形・石崎・小西・関
東北工業大学建築史研究室	



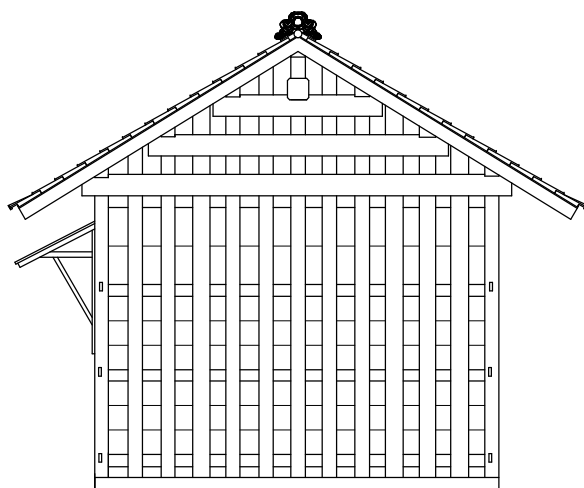
断面図



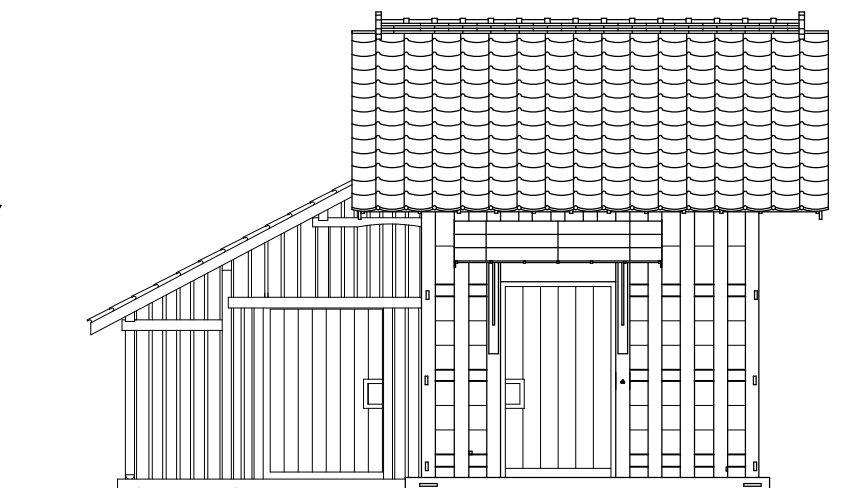
1階平面図



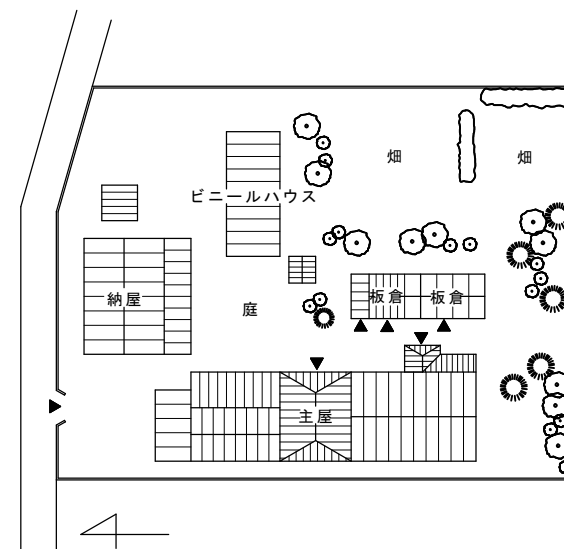
中二階平面図



側面立面図

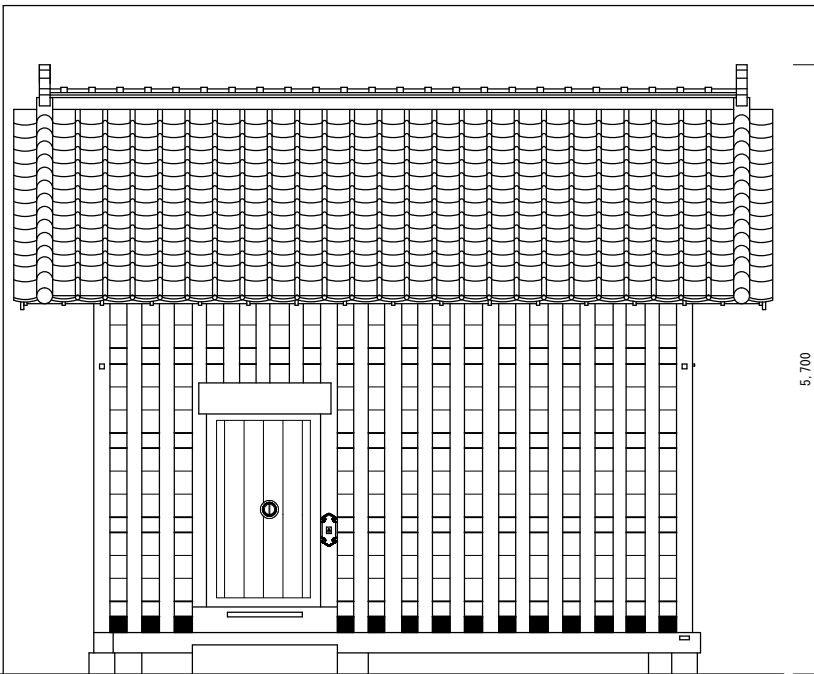


正面立面図

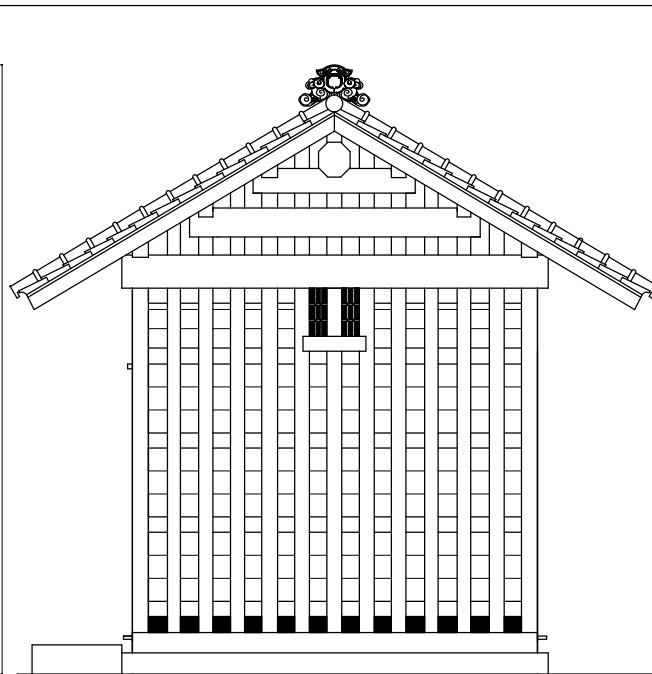


配置図

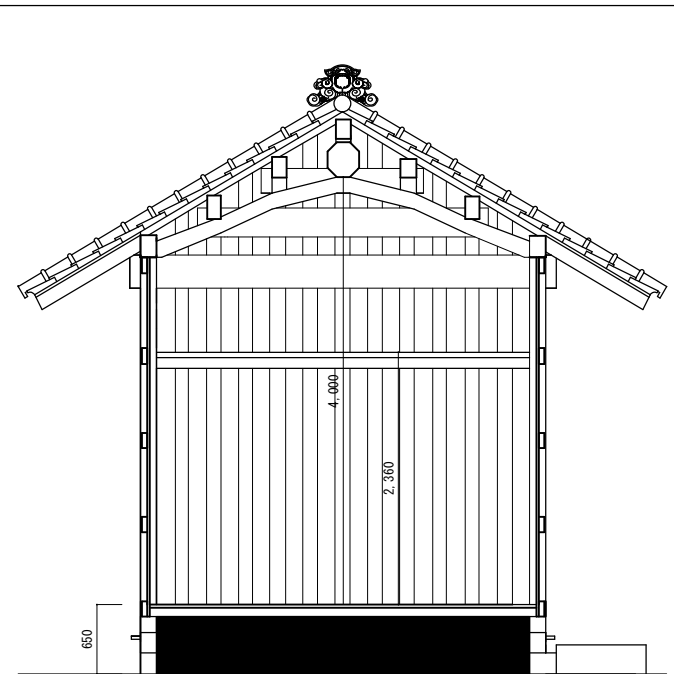
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 27 S 家住宅板倉 (北棟)
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月22日
調査者	石崎、小西、関、山形
東北工業大学建築史研究室	



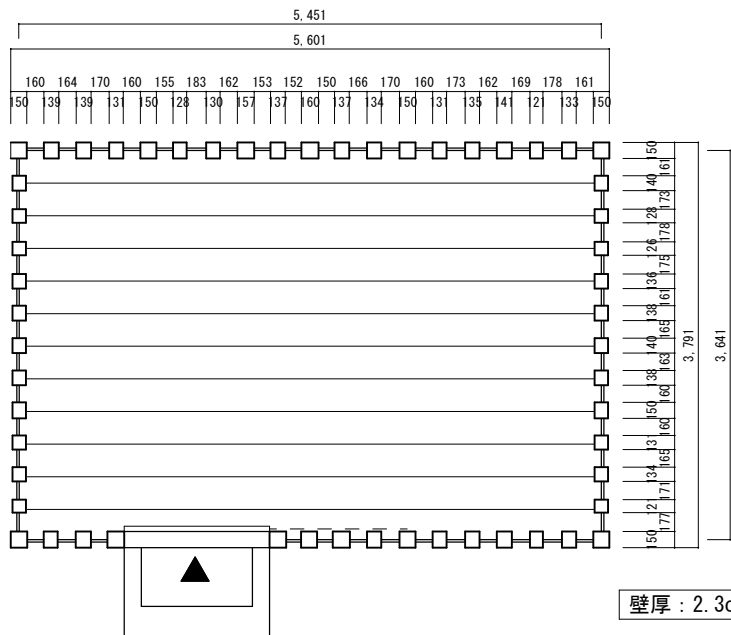
正面立面図



側面立面図

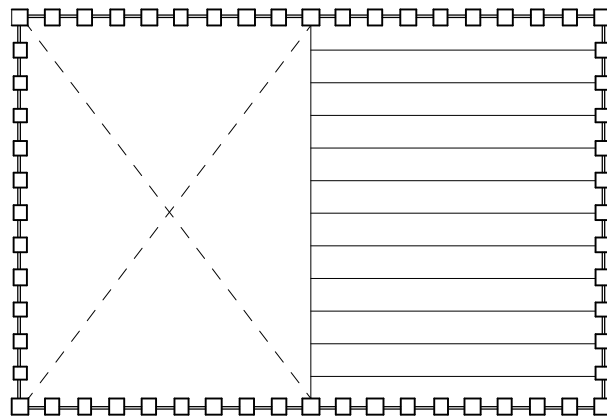


断面図

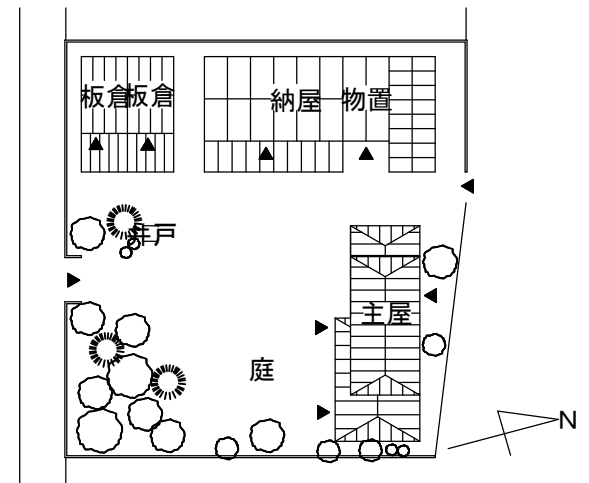


一階平面図

壁厚：2.3cm

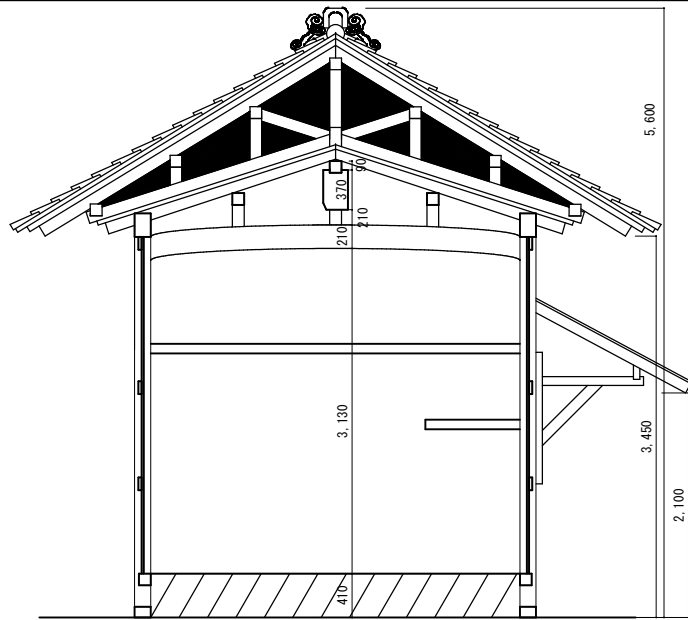


中二階平面図



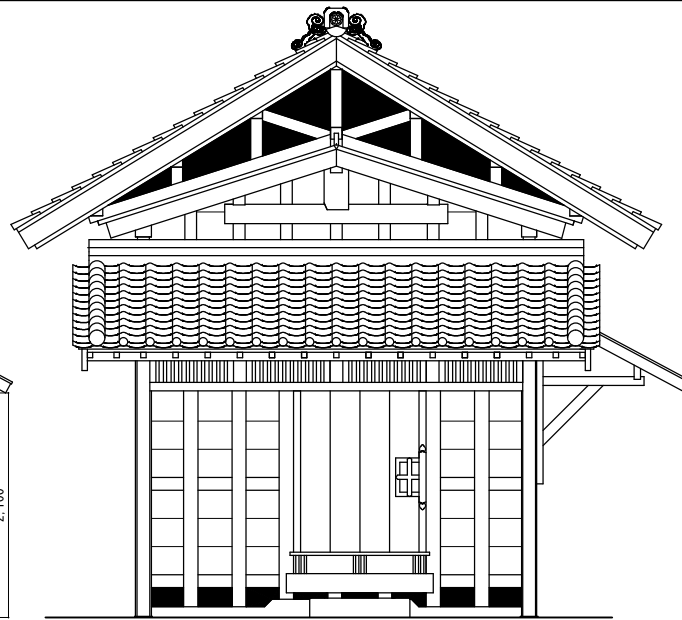
配置図

所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 28 1 家住宅板倉 (北棟)
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月23日
調査者	石崎、小西、関、山形
東北工業大学建築史研究室	

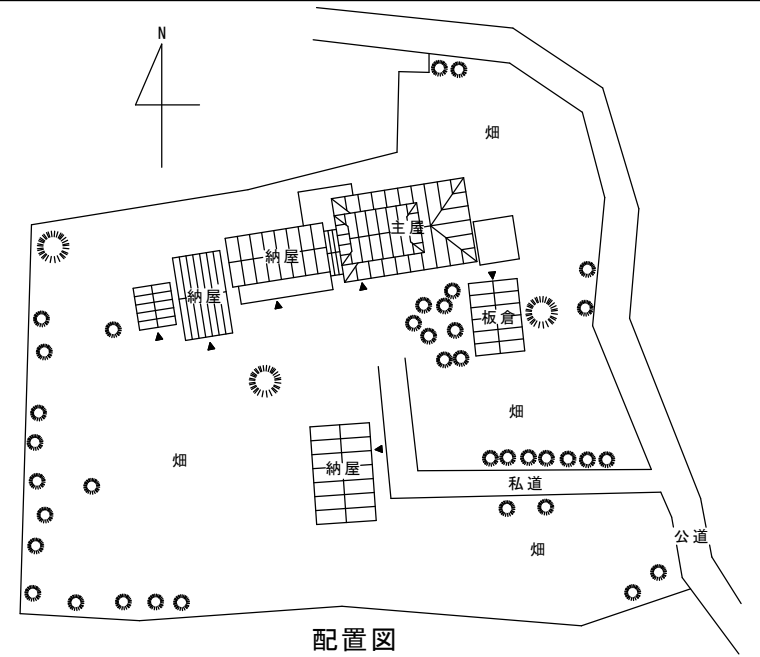


断面図 1/50

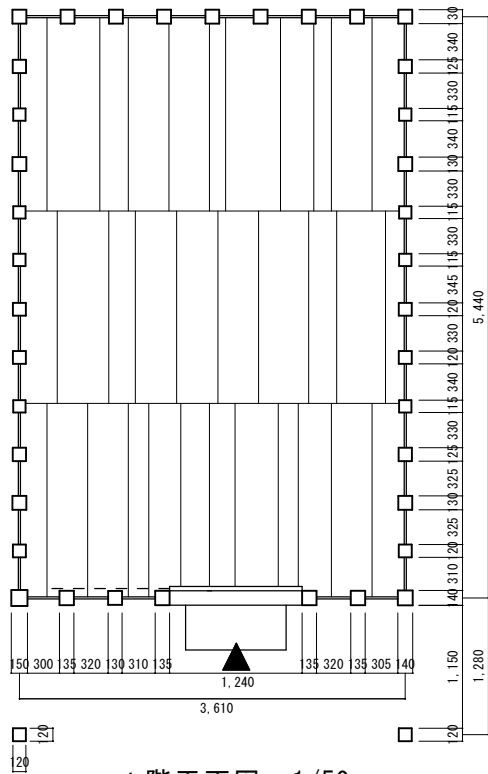
板壁厚20mm



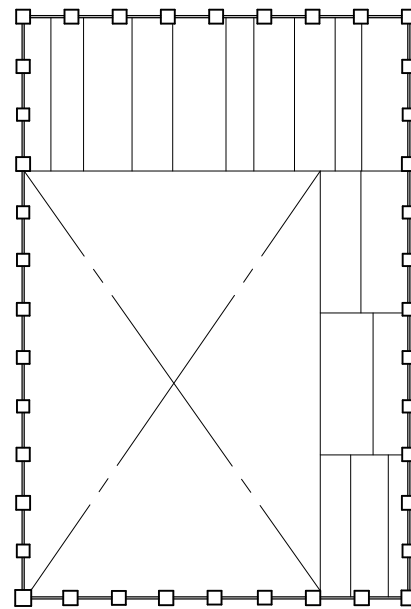
正面図 1/50



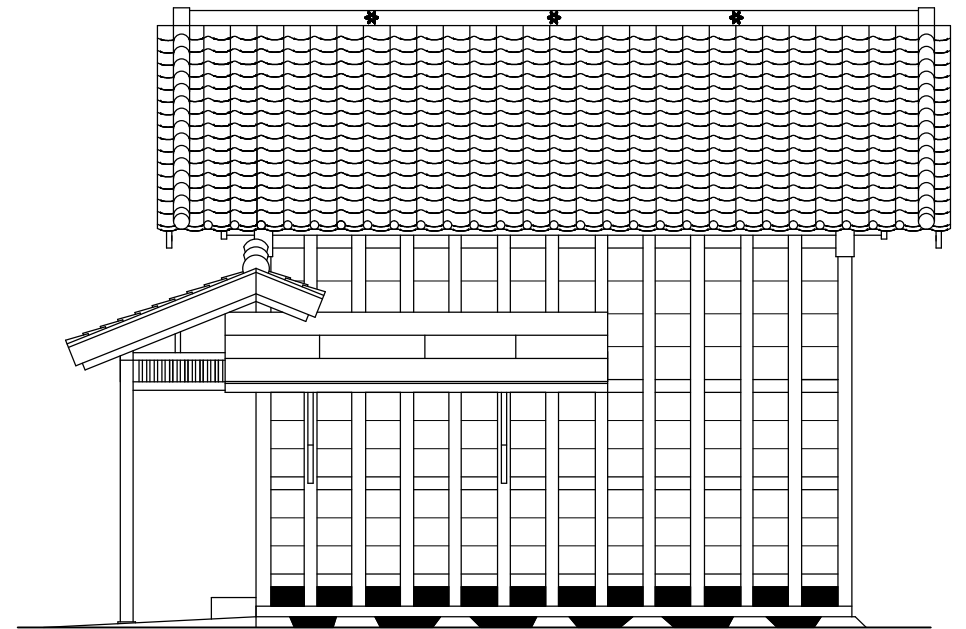
配置図



1階平面図 1/50

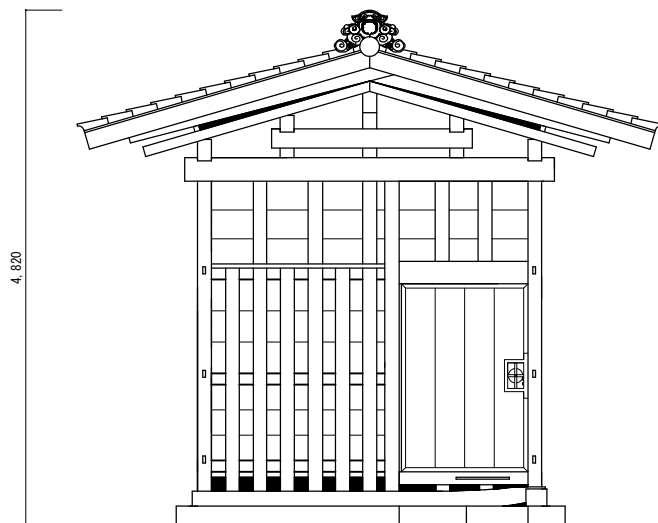


中2階平面図 1/50

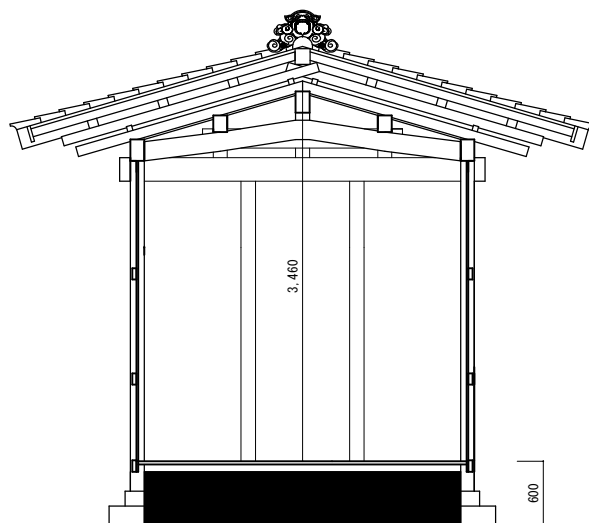


側面図 1/50

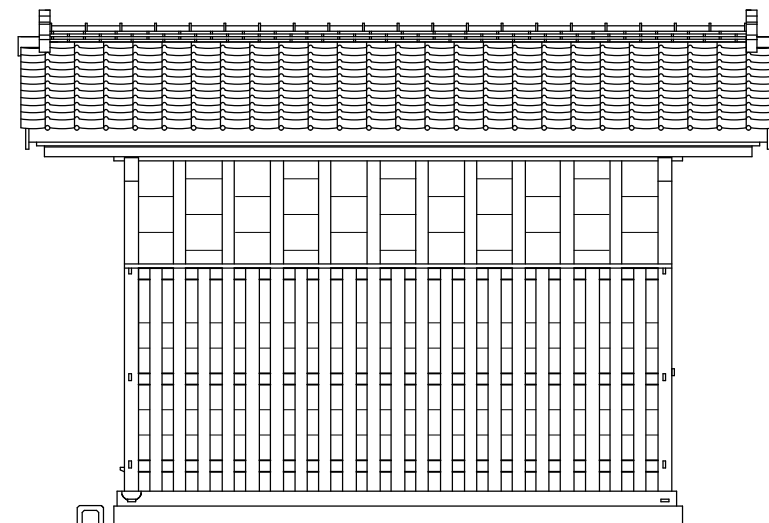
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 29 S 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年9月25日
調査者	齊藤、田尻、熊谷、渡邊
東北工業大学建築史研究室	



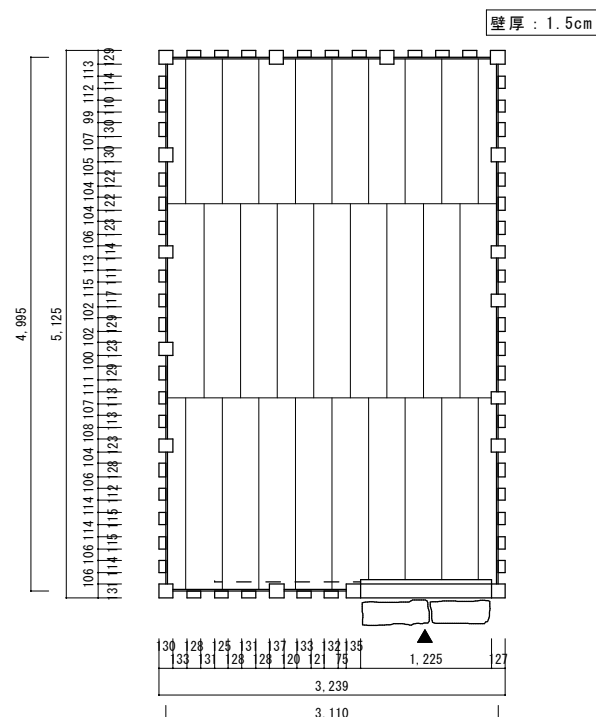
正面立面図



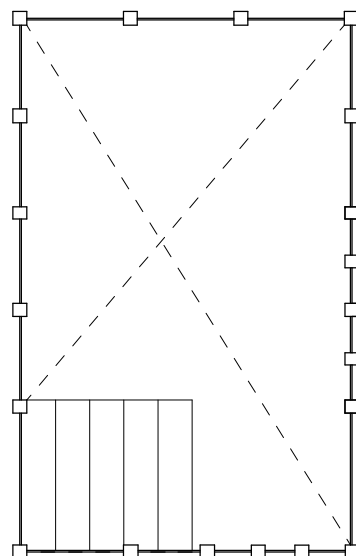
断面図



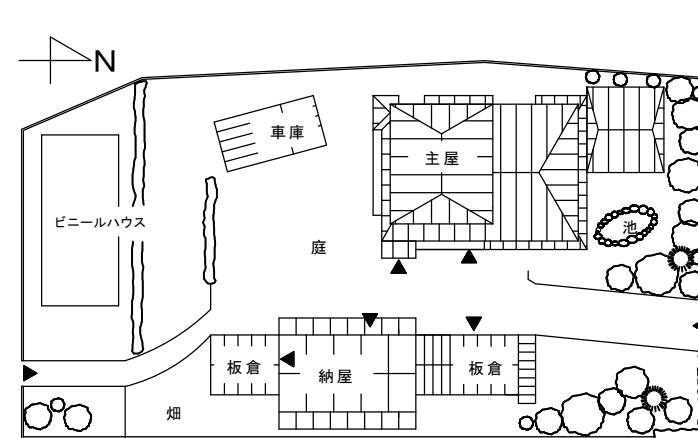
側面立面図



1階平面図

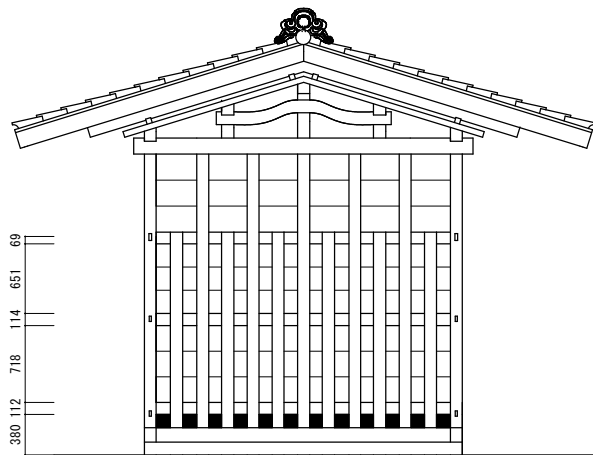


中2階平面図

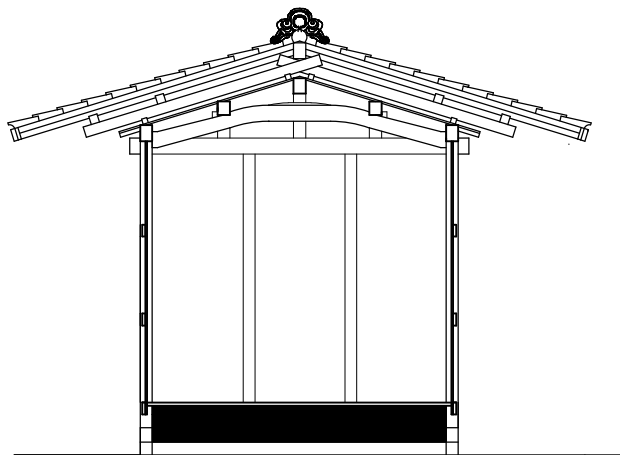


配置図

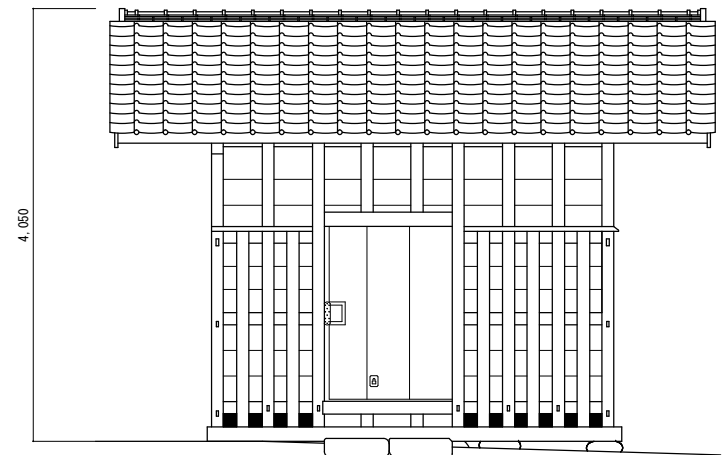
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 30 S 家住宅板倉 (南棟)
図 名	平面図、断面図、正面・側面立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年9月6日
調査者	石崎、小西、関、山形
東北工業大学建築史研究室	



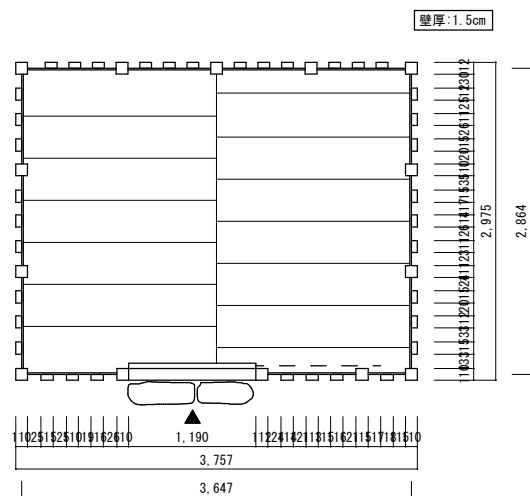
側面立面図



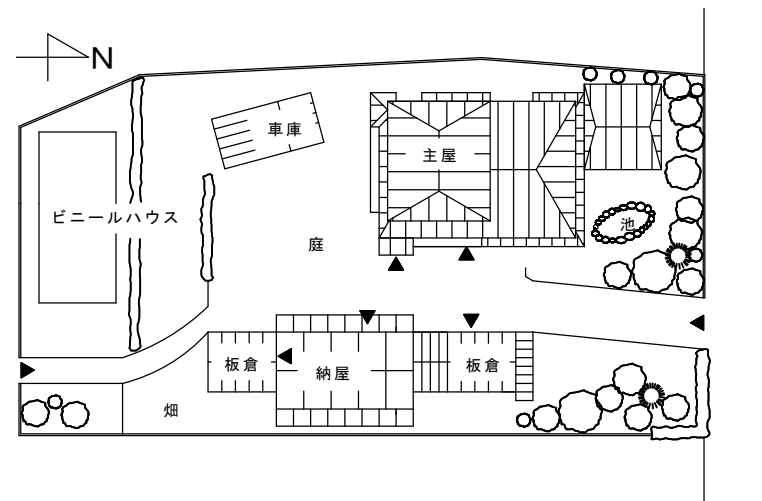
断面図



正面立面図

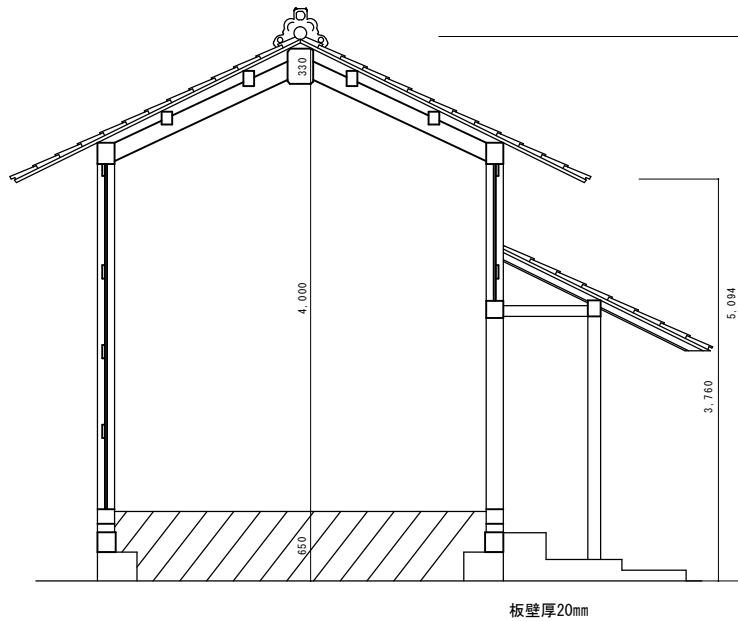


平面図

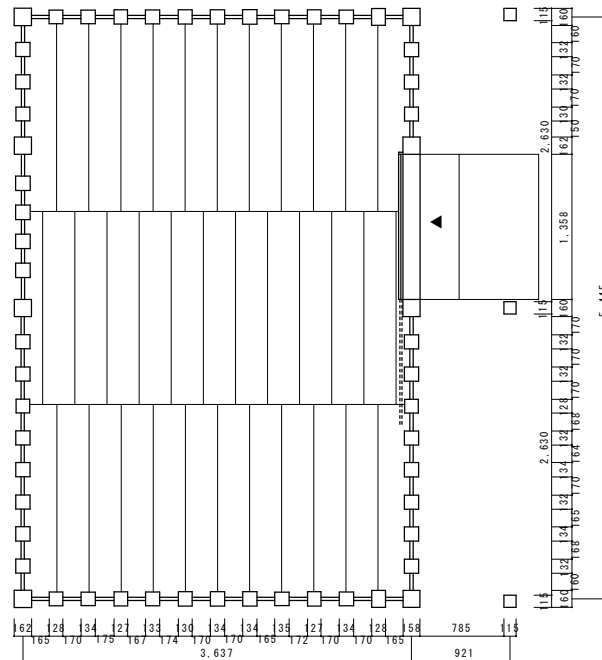


配置図

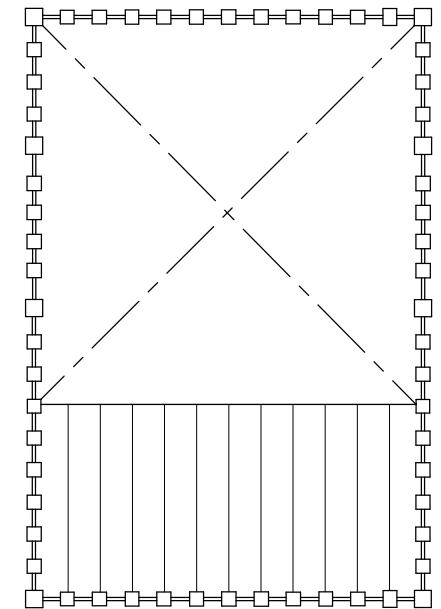
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 31 S 家住宅板倉 (北棟)
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年9月6日
調査者	関、石崎、小西、山形
東北工業大学建築史研究室	



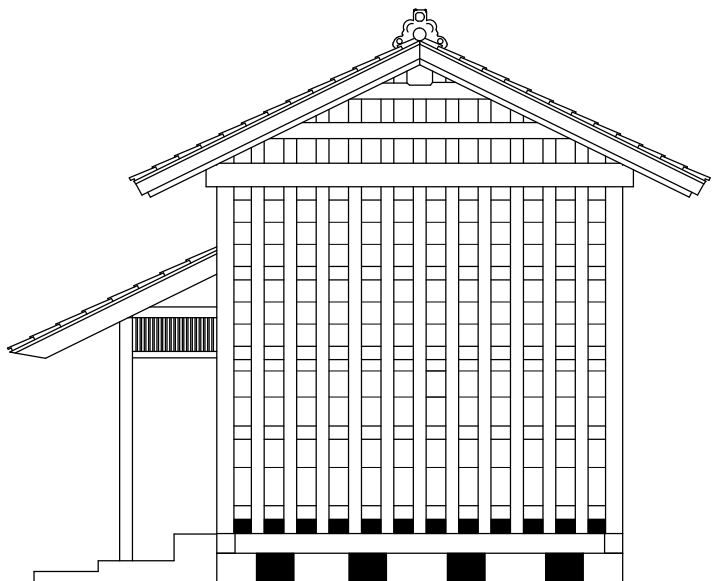
断面図 1/50



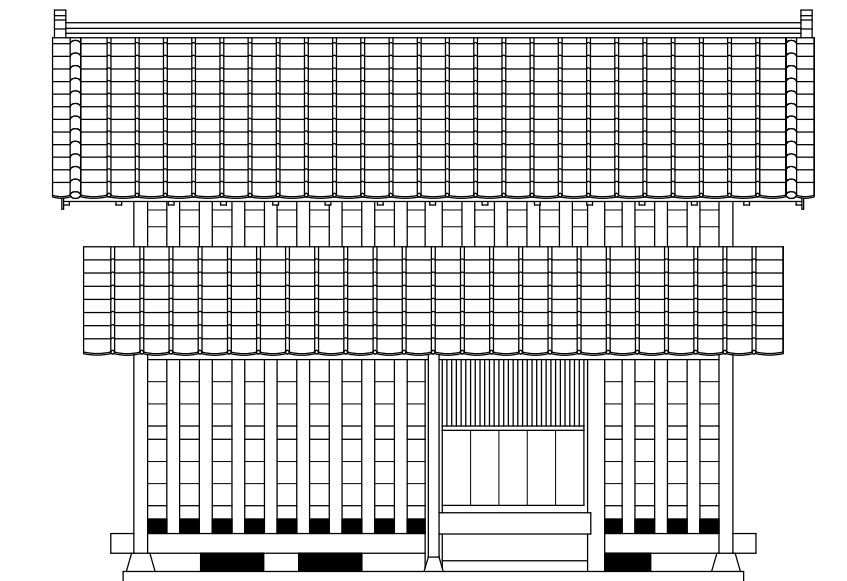
1階平面図 1/50



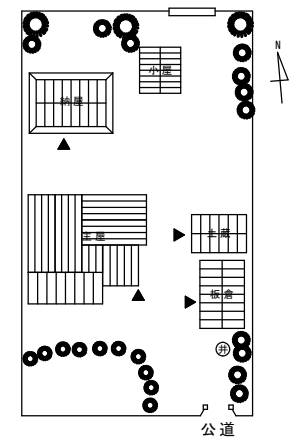
中2階平面図 1/50



側面図 1/50



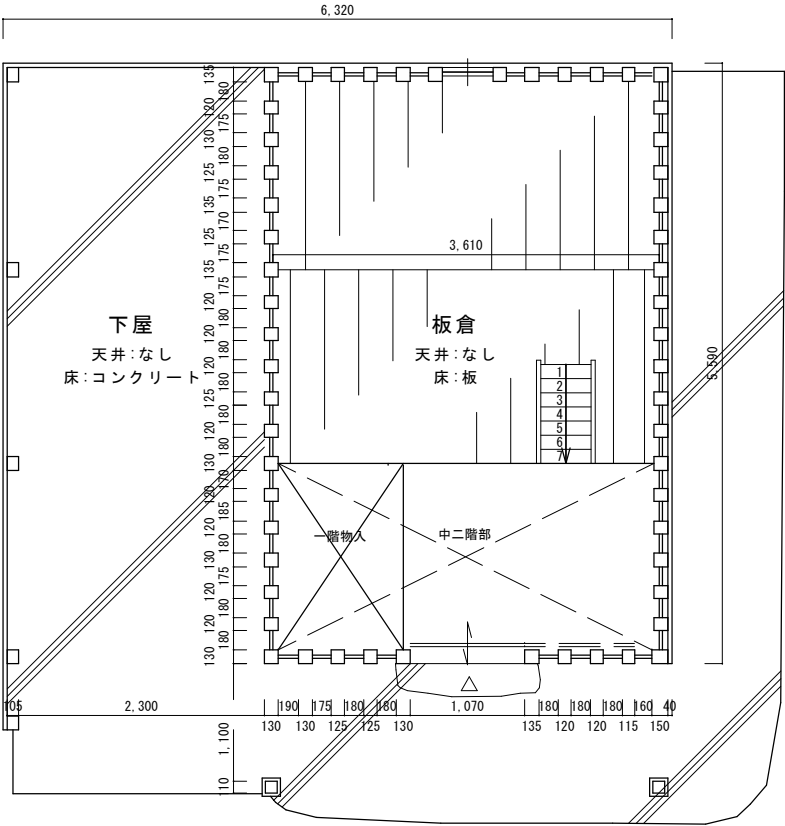
正面図 1/50



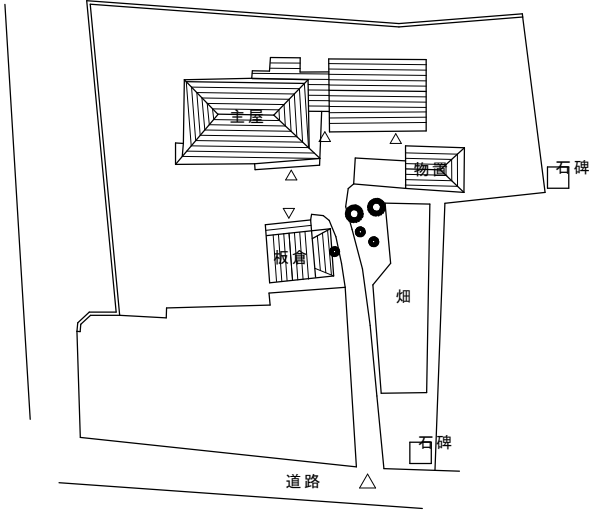
配置図

所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 32 ○家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月28日
調査者	加藤、鈴木、佐々木、渡邊
東北工業大学建築史研究室	

壁厚 = 3cm

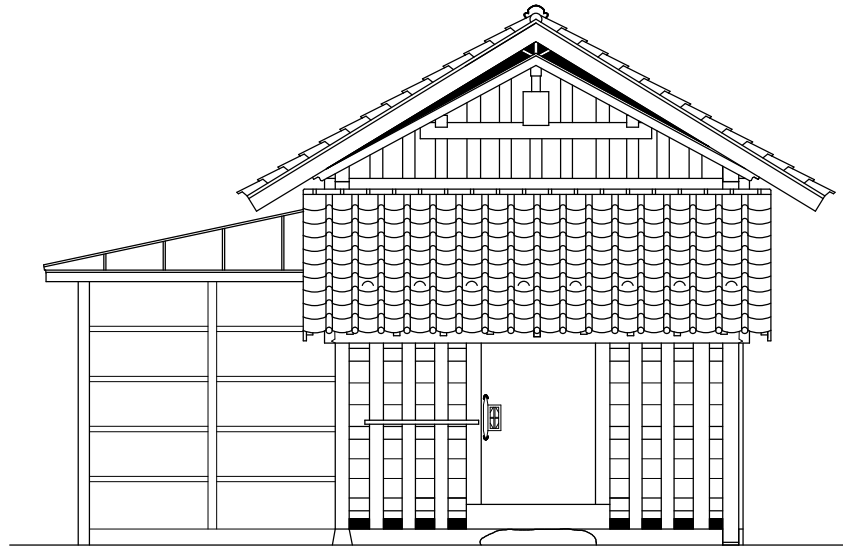


平面図

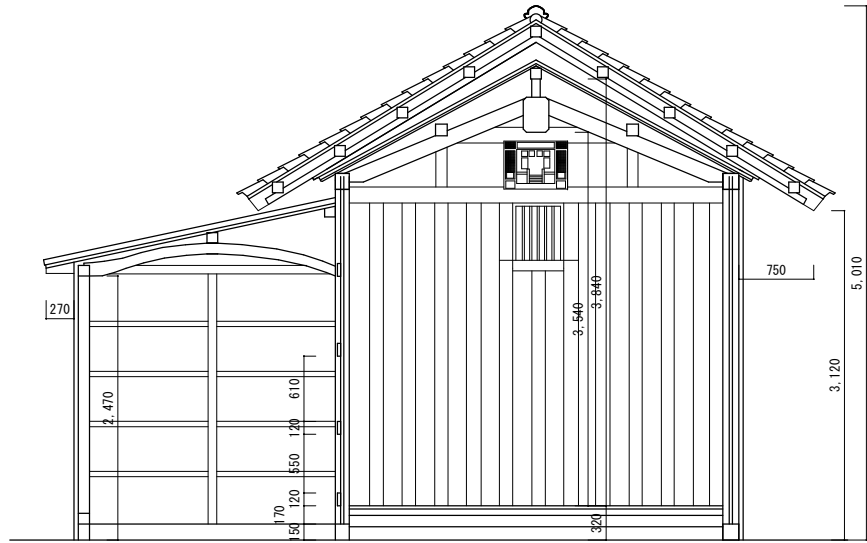


配置図

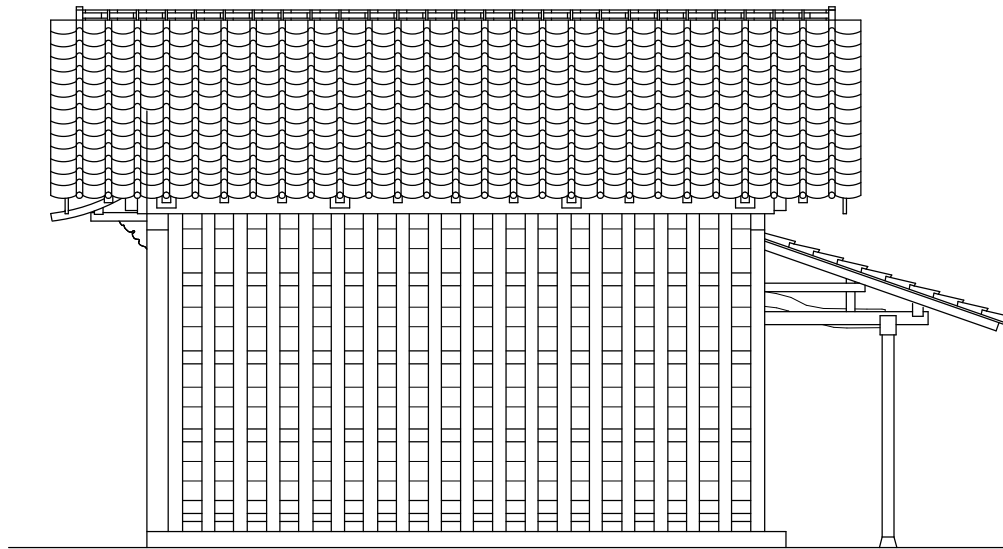
所在地	宮城県多賀城市高崎
遺構, 所有名	No. 33 T 家住宅板倉
図 名	平面図、配置図
スケール	1/100
調査時	2013年5月28日
調査者	渡邊
東北工業大学建築史研究室	



正面図

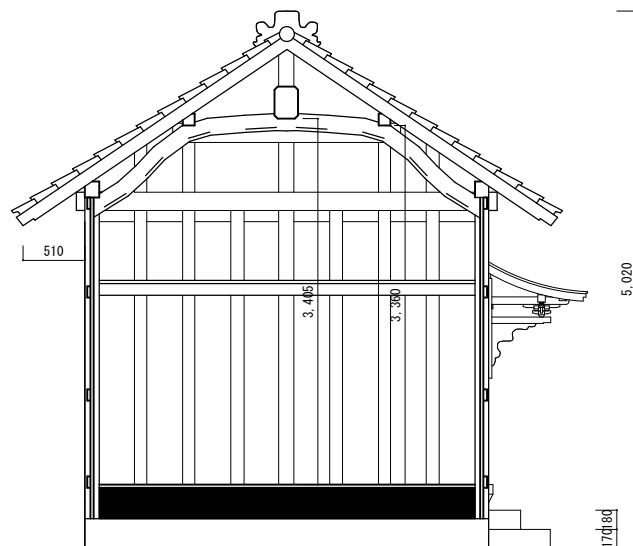


断面図

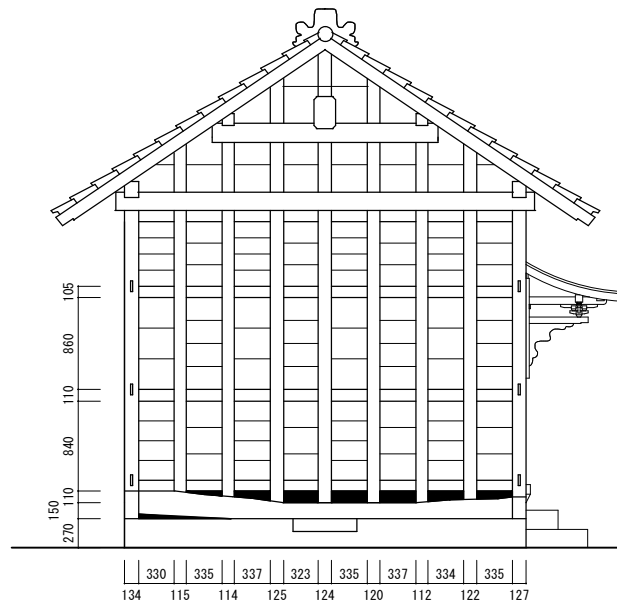


側面図

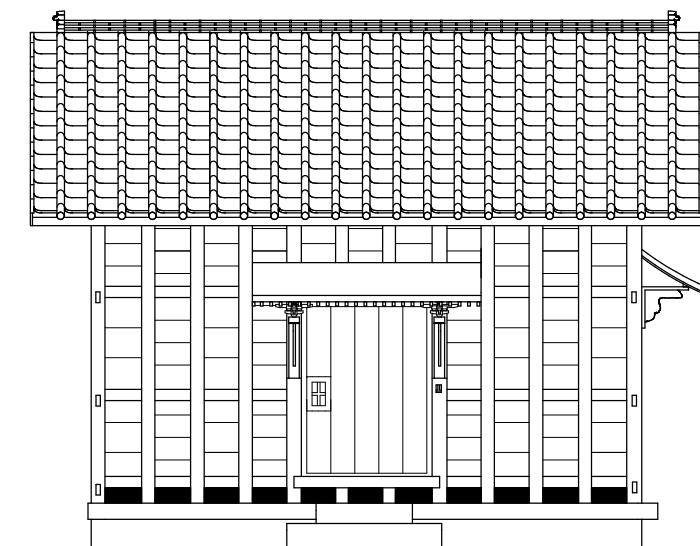
所在地	宮城県多賀城市高崎
遺構, 所有名	No. 33 T家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/100
調査時	2013年5月28日
調査者	渡邊
東北工業大学建築史研究室	



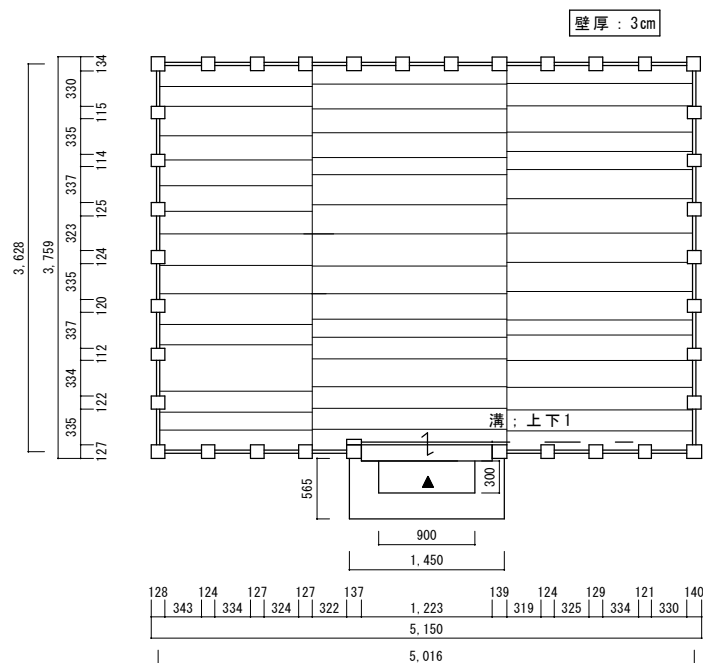
断面図



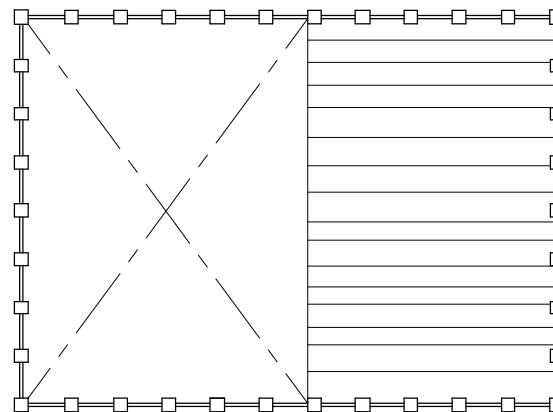
側面立面図



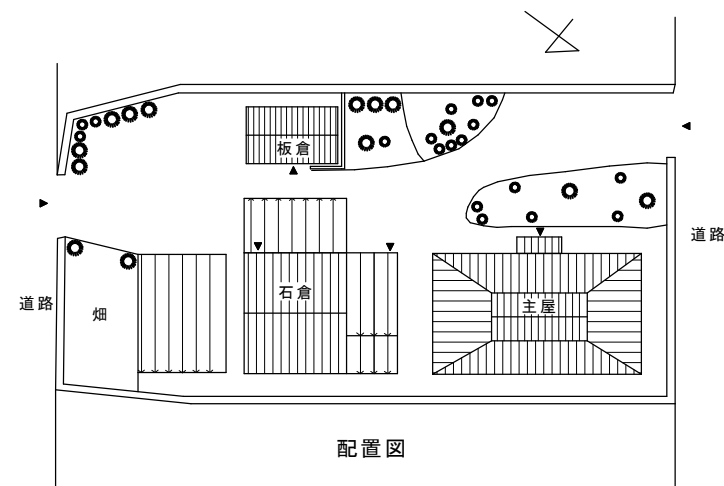
正面立面図



1 階平面図

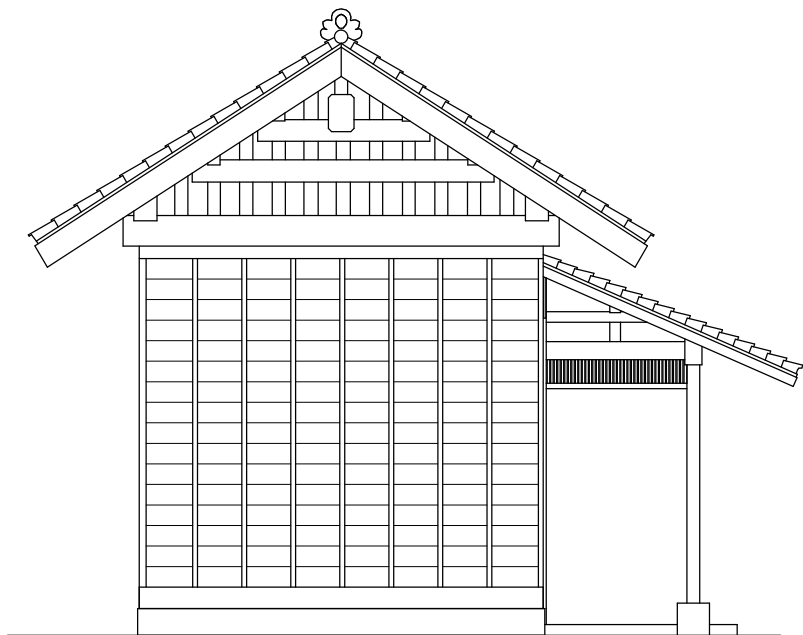


中二階平面図

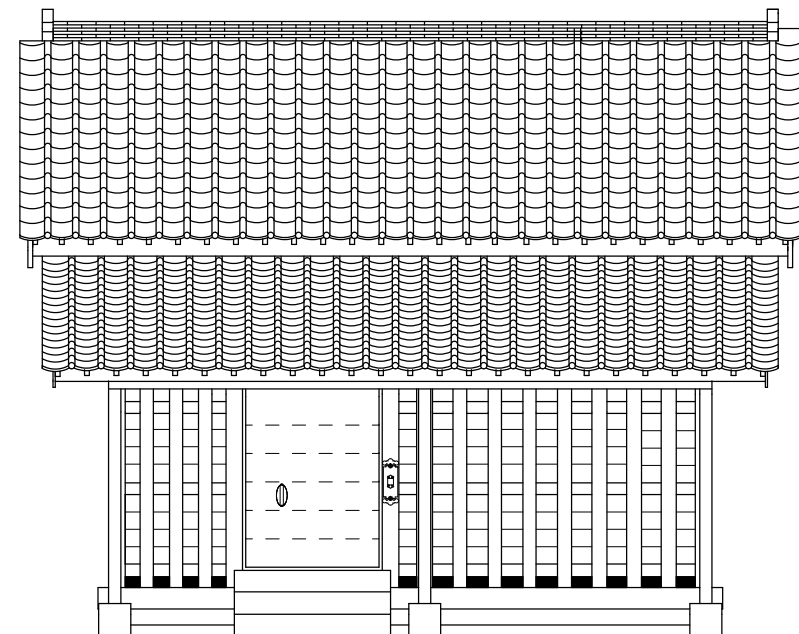


配置図

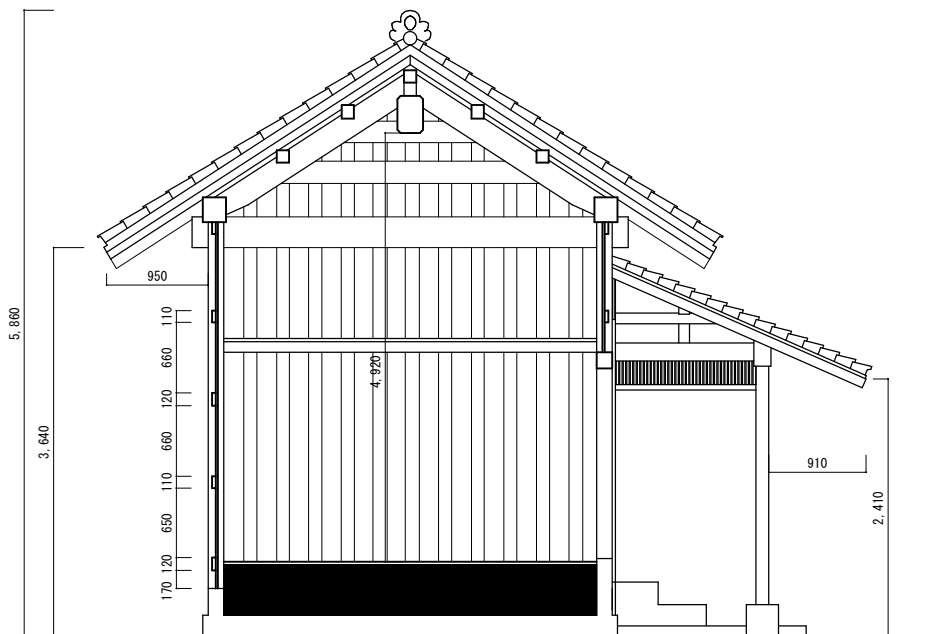
所在地	宮城県多賀城市八幡
遺構、所有名	No. 34 T 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月9日
調査者	渡邊、久米、間藤
東北工業大学建築史研究室	



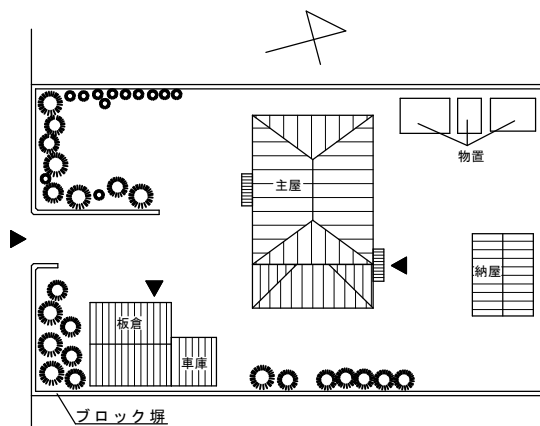
側面立面図



正面立面図

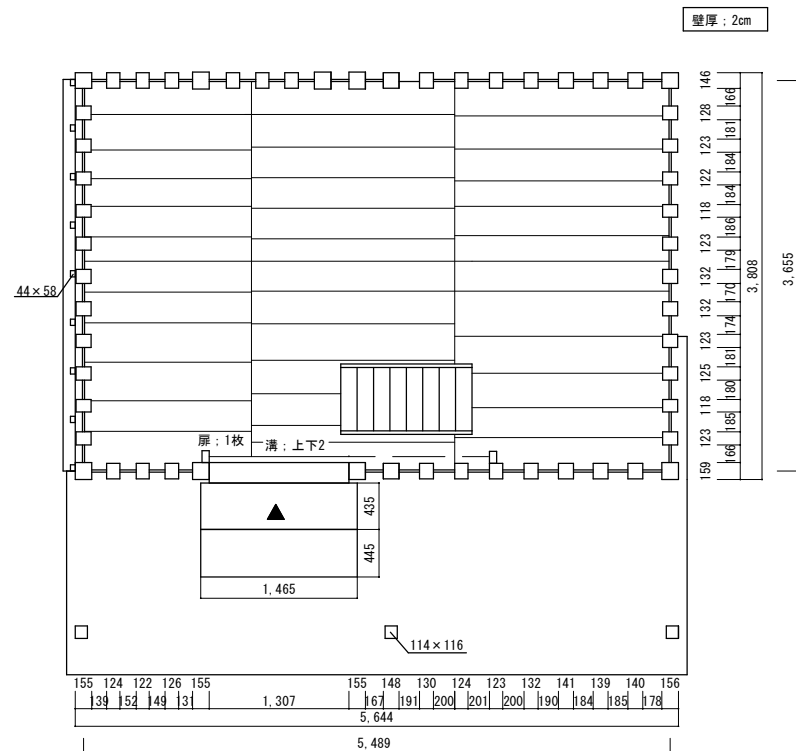


断面図

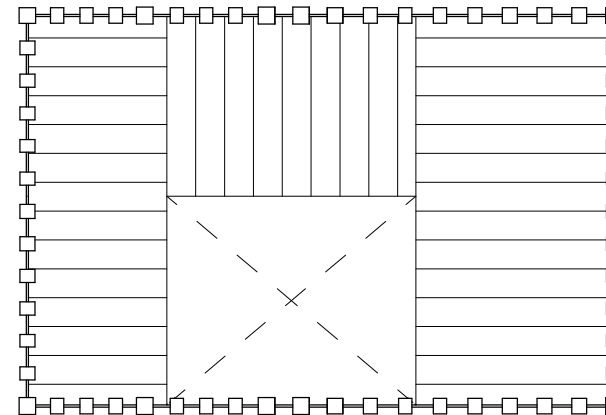


配置図

所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構、所有名	N0. 35 ○家住宅板倉
図 名	断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月23日
調査者	渡邊、間藤、久米
東北工業大学建築史研究室	

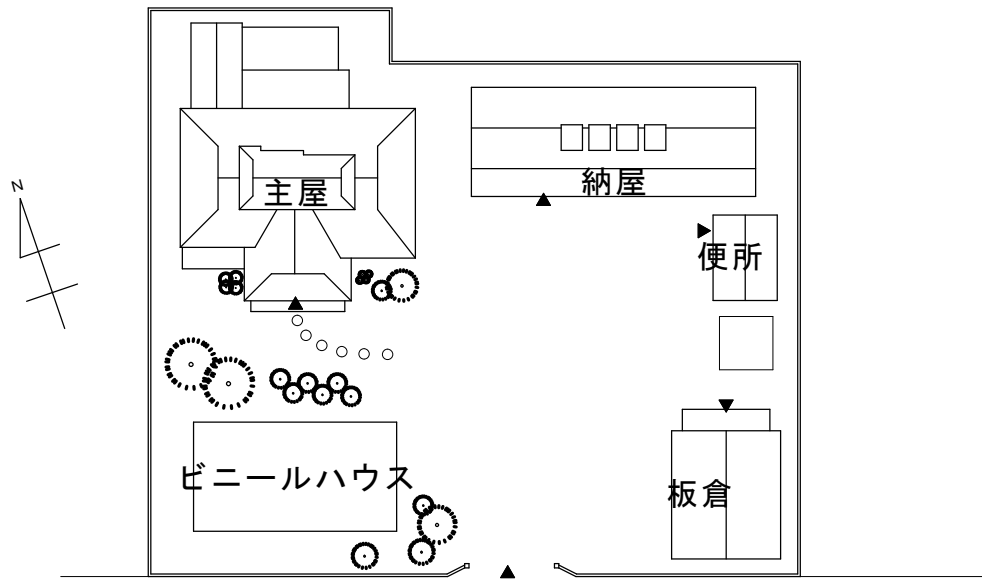


1 階平面図

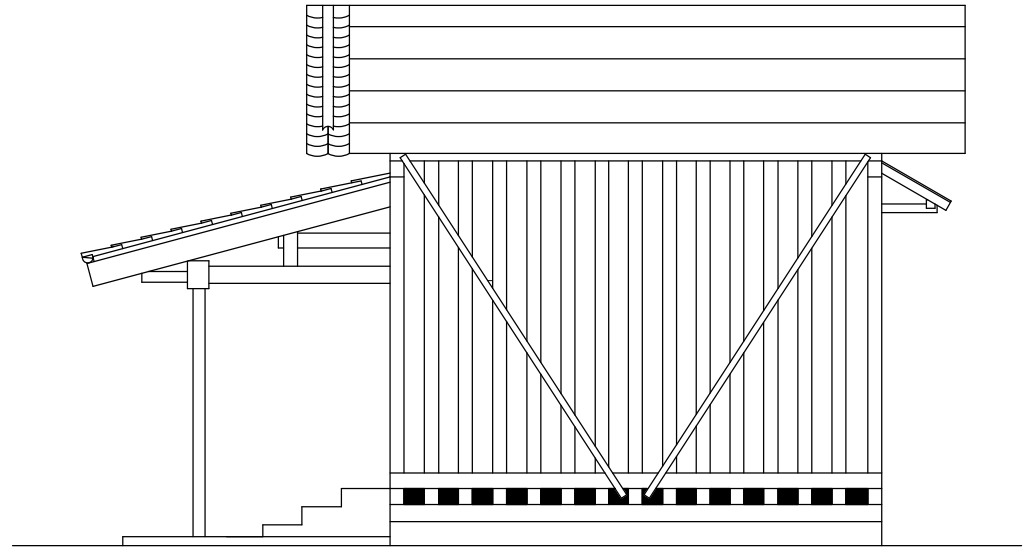


中2階平面図

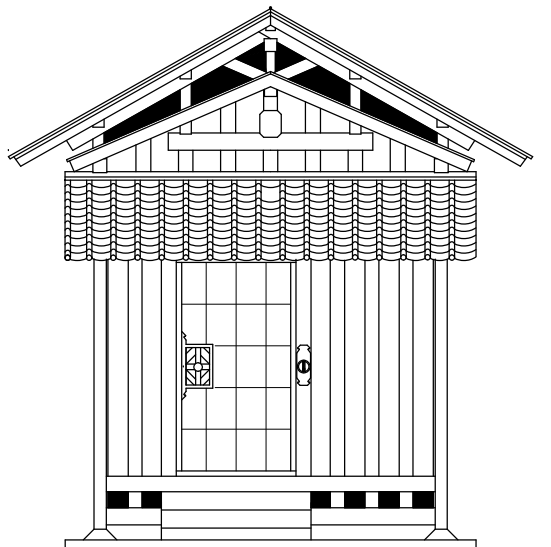
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構、所有名	N0. 35 O家住宅板倉
図 名	平面図
スケール	1/50
調査時	2013年8月23日
調査者	渡邊、間藤、久米
東北工業大学建築史研究室	



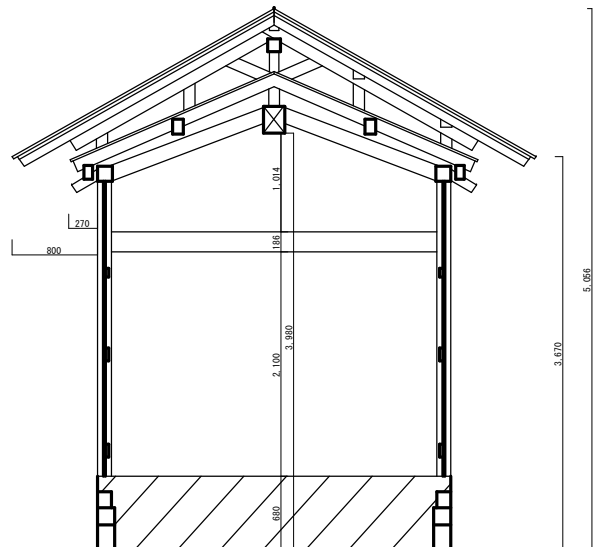
配置図



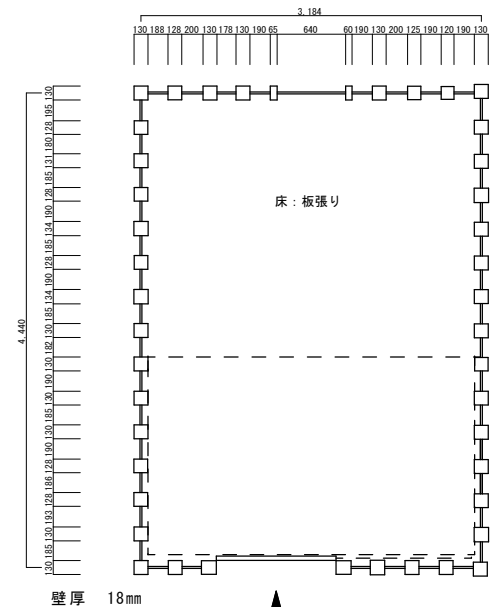
側面図 1/50



正面図 1/50

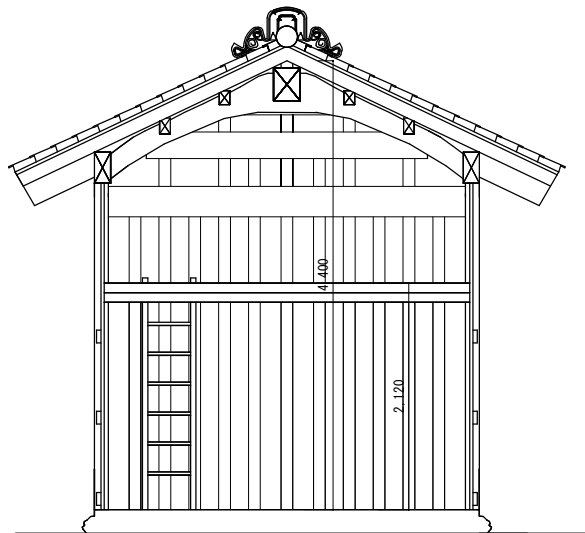


断面図 1/50

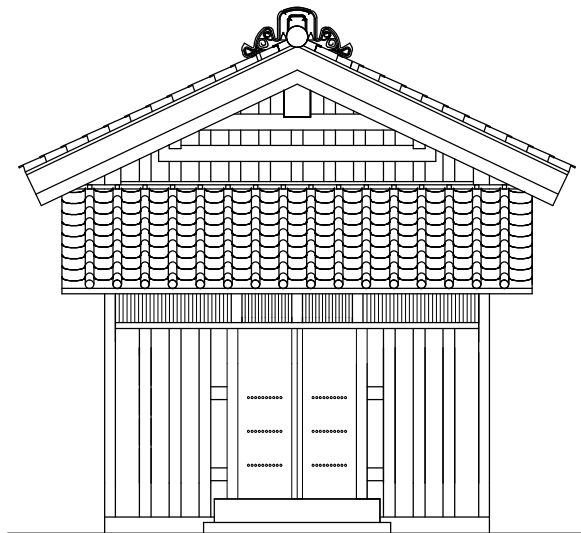


平面図 1/50

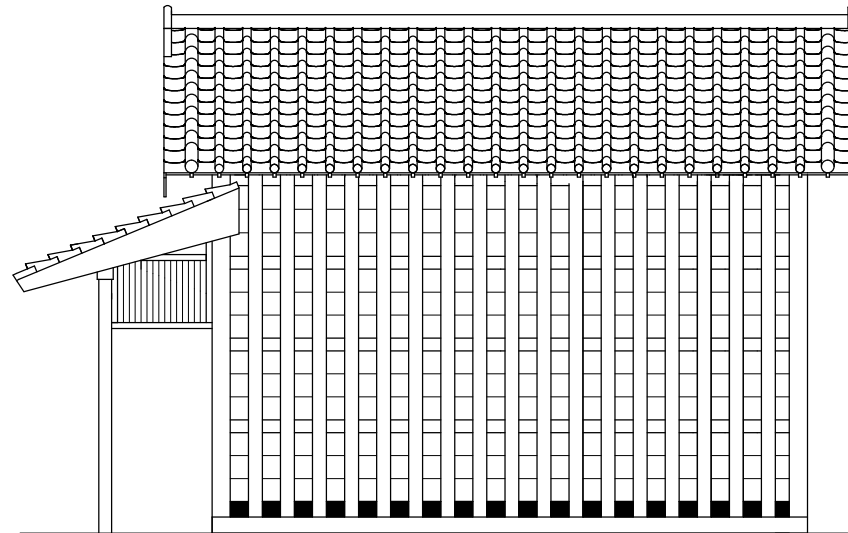
所在地	宮城県多賀城市山王
遺構、所有名	No.36 K家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正・側面立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年8月10日
調査者	豊田、東海林
東北工業大学建築史研究室	



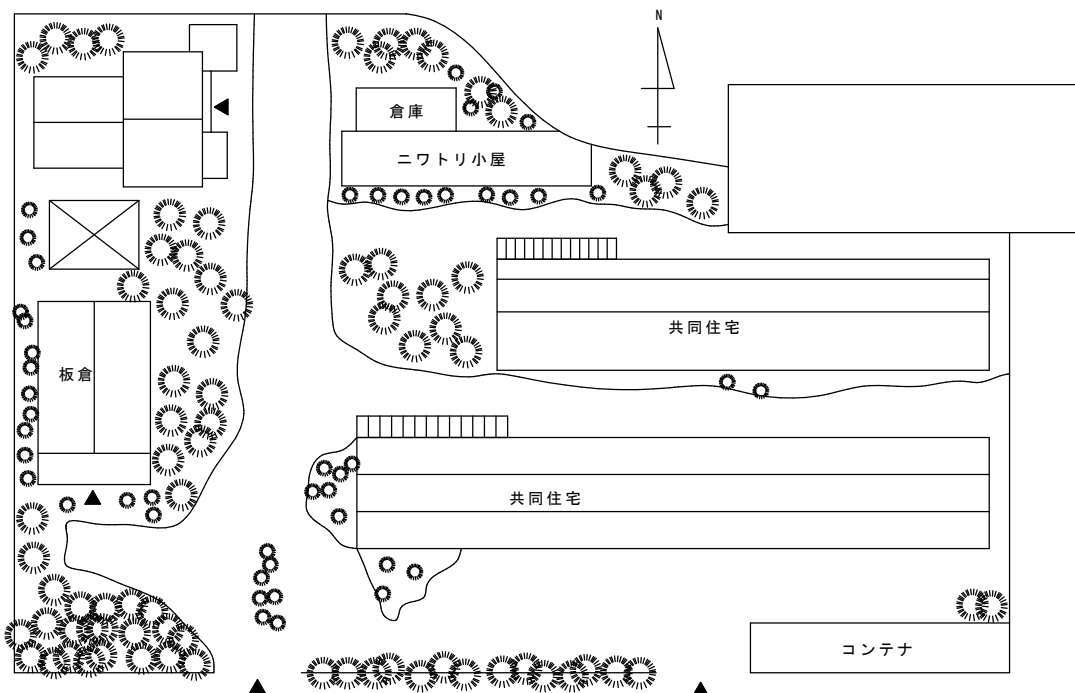
断面図 1/50



南面立面図 1/50

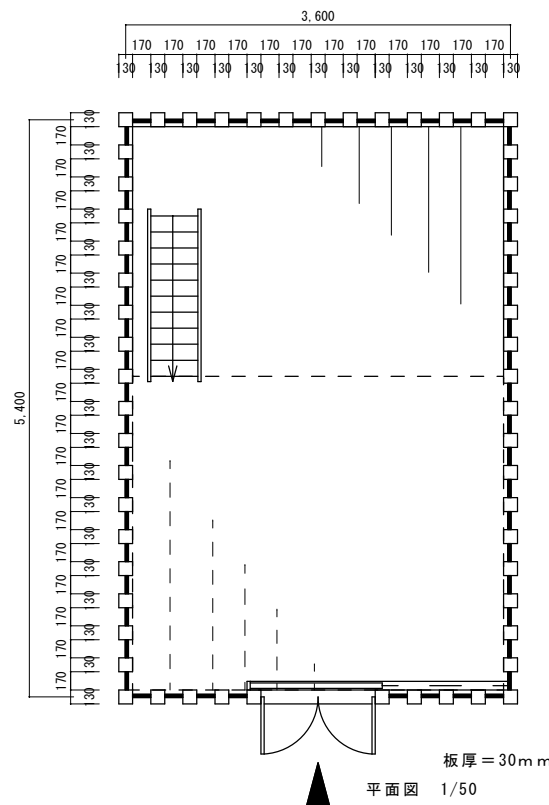


東面立面図 1/50



前面道路

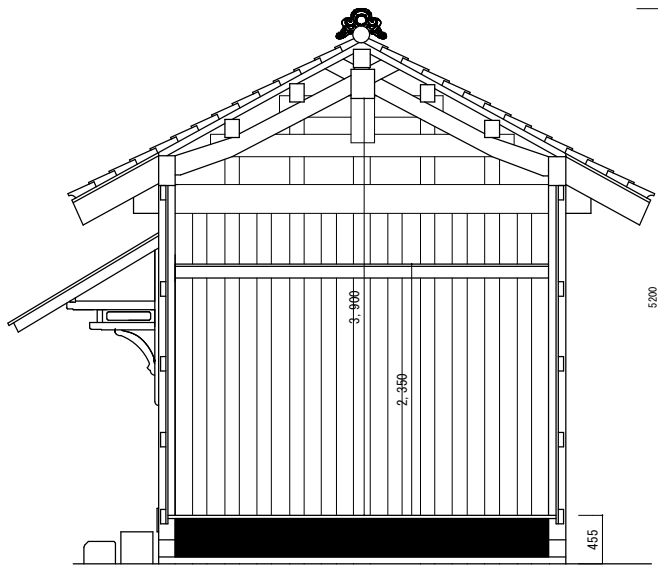
配置図



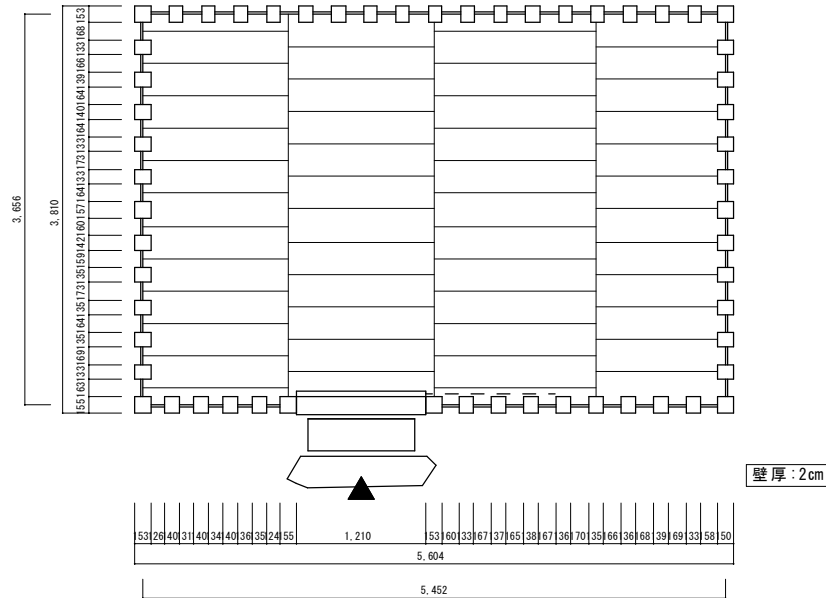
板厚=30mm

平面図 1/50

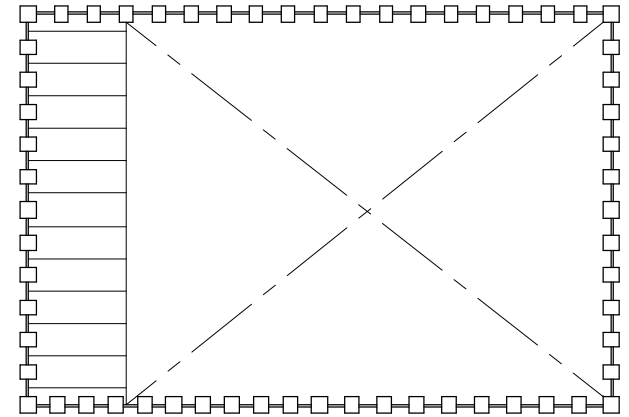
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構・所有名	No. 37 K 家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年8月11日
調査者	佐々木、大友、関根、新林
東北工業大学建築史研究室	



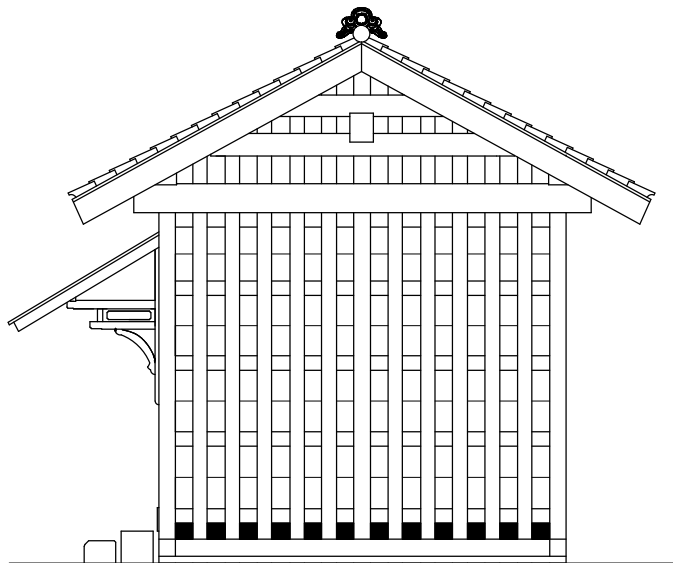
断面図



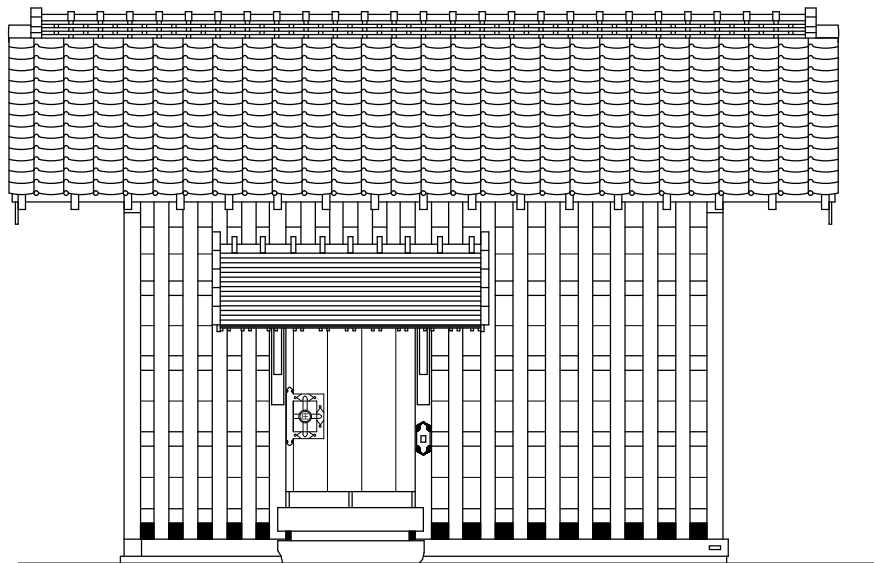
1階平面図



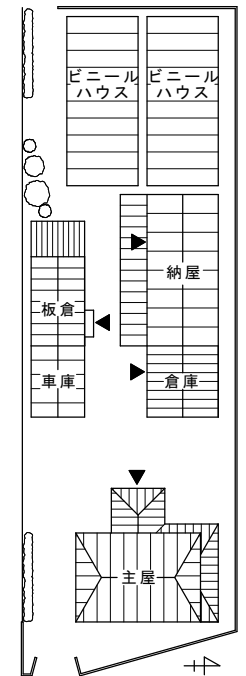
中2階平面図



側面立面図

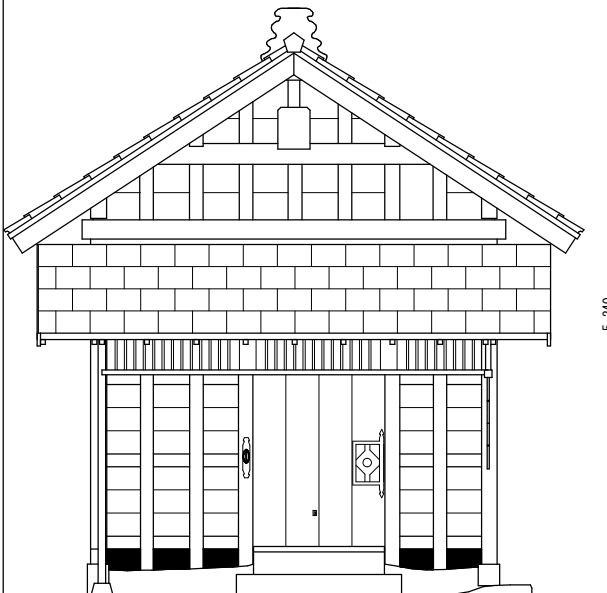


正面立面図

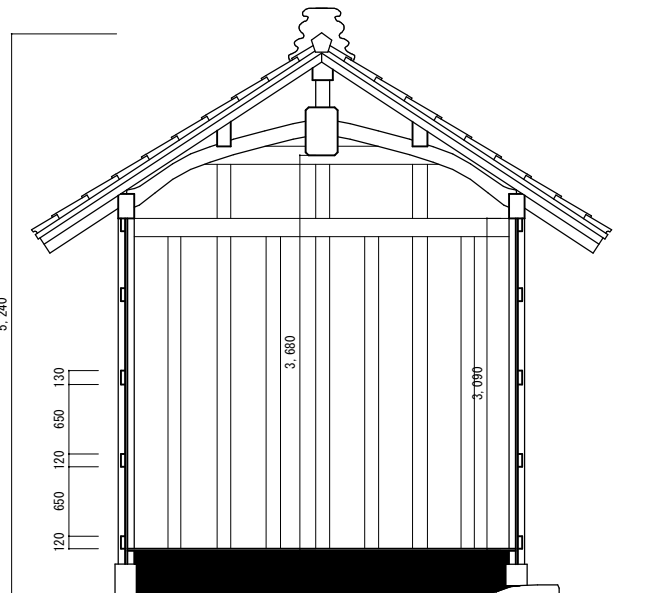


配置図

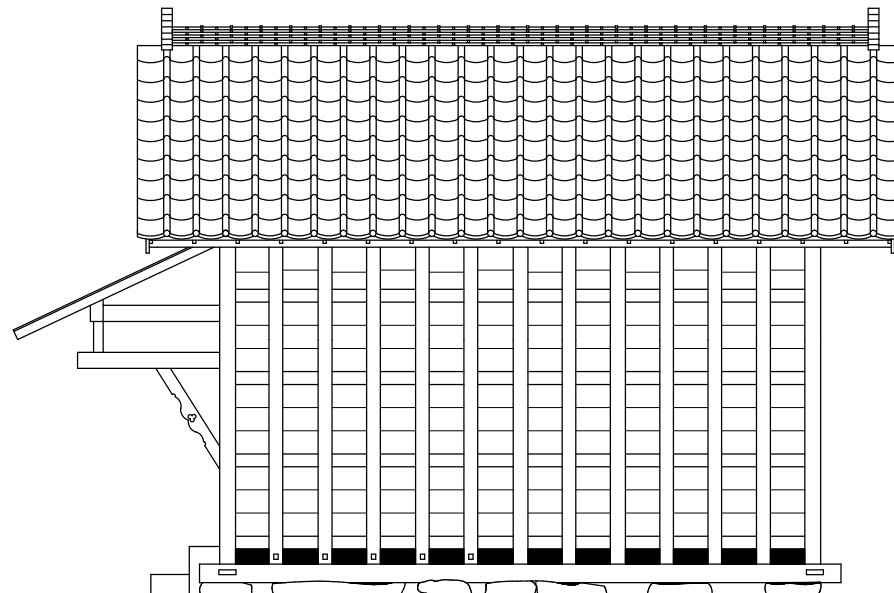
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 38 S 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月30日
調査者	石崎、小西、関、山形
東北工業大学建築史研究室	



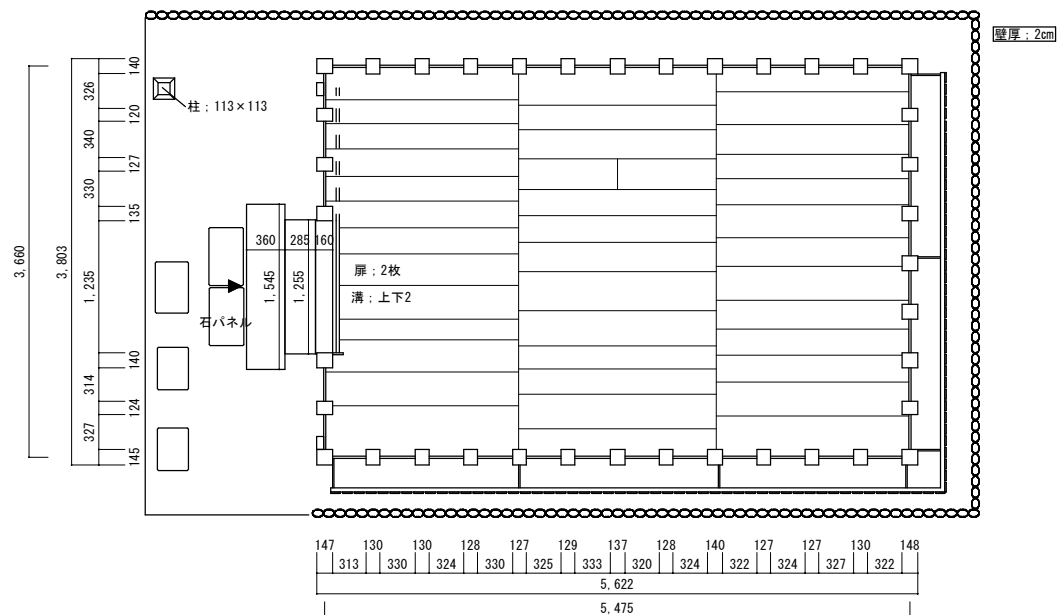
正面立面図



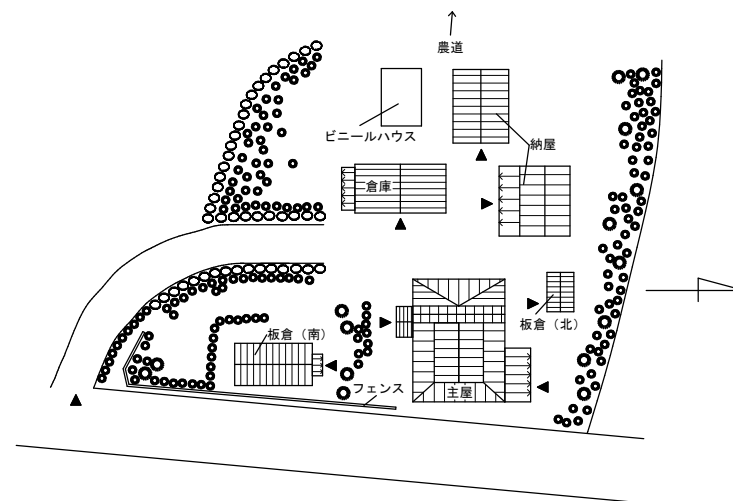
断面図



側面立面図

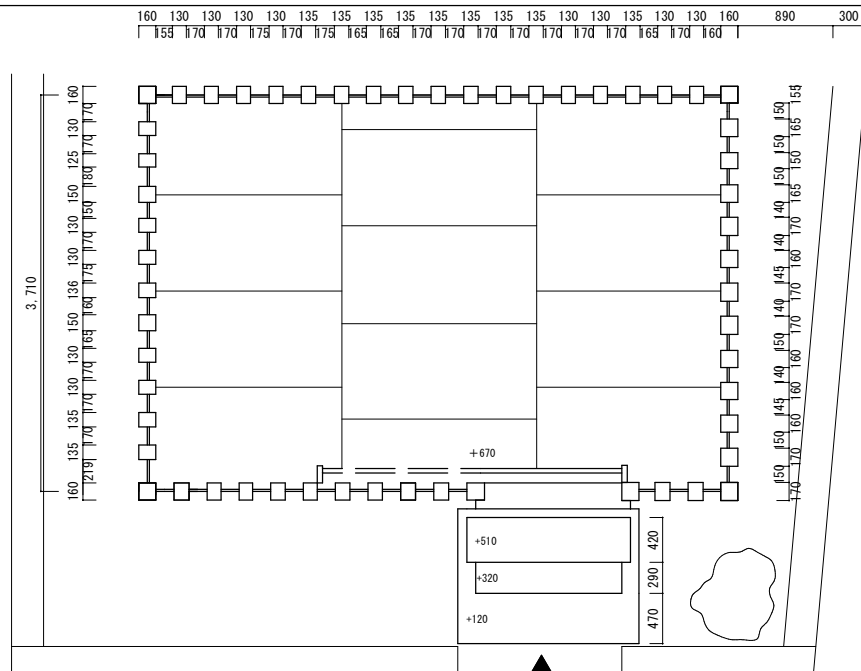


平面図

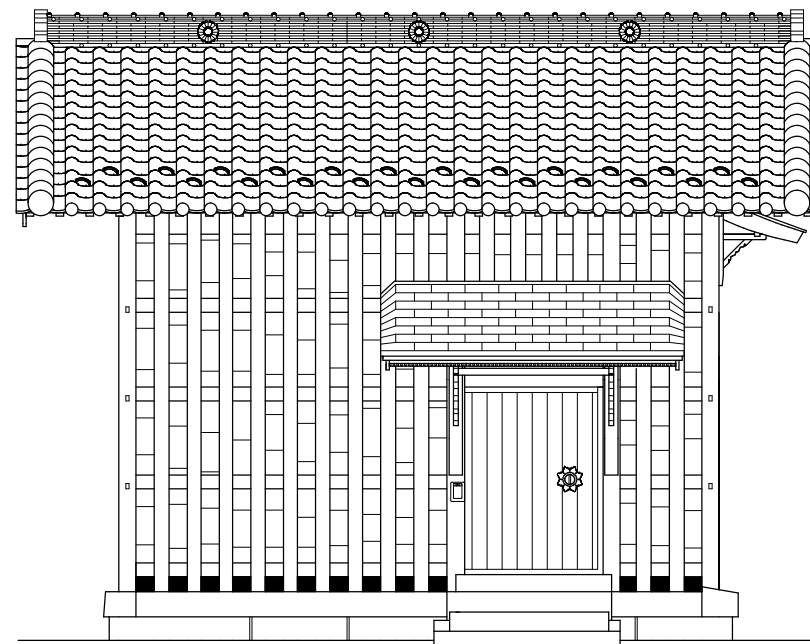


配置図

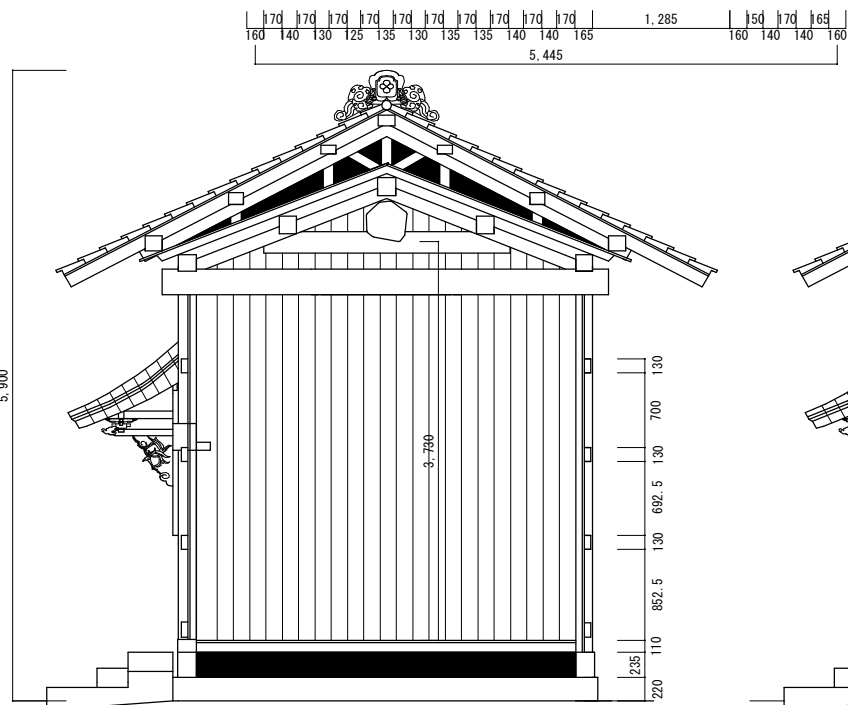
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 39 K家住宅板倉(南棟)
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月30日
調査者	渡邊、久米、間藤
東北工業大学建築史研究室	



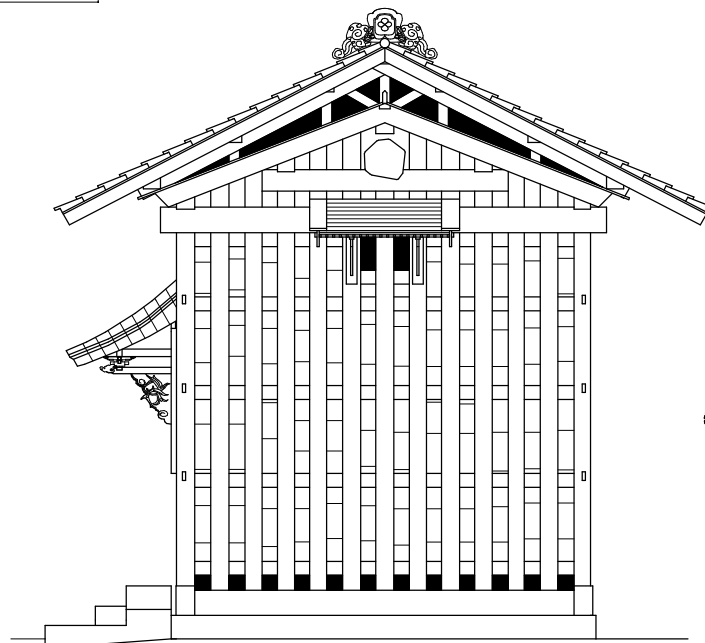
1階平面図



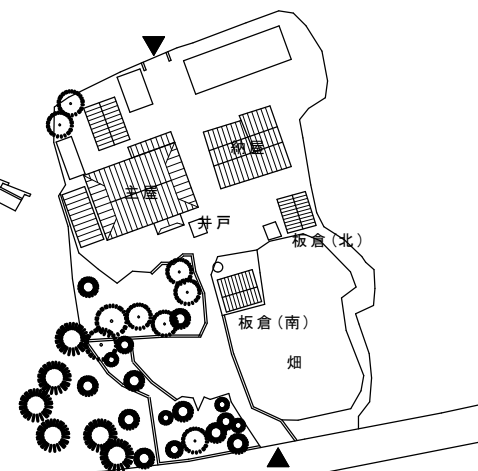
正面側立面図



断面図

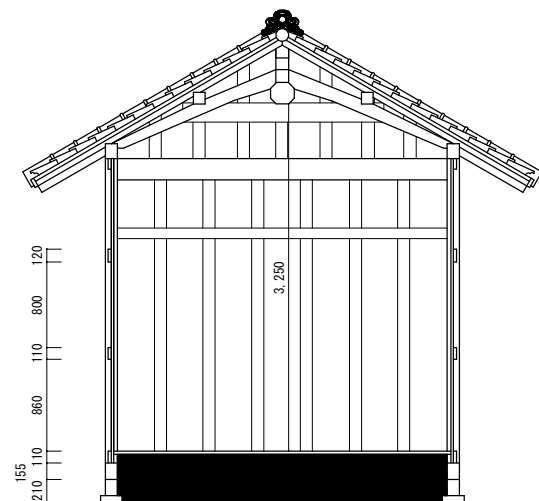


側面側立面図

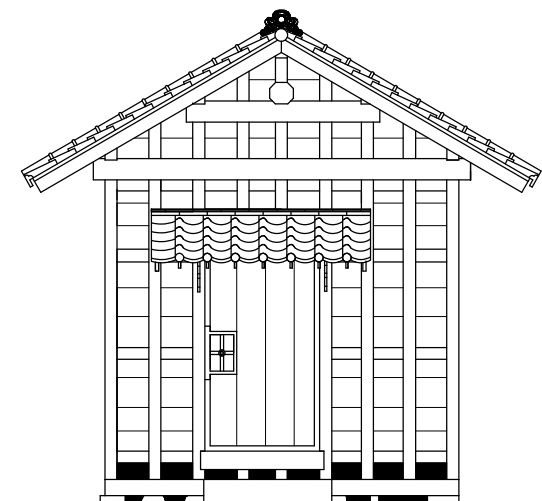


配置図

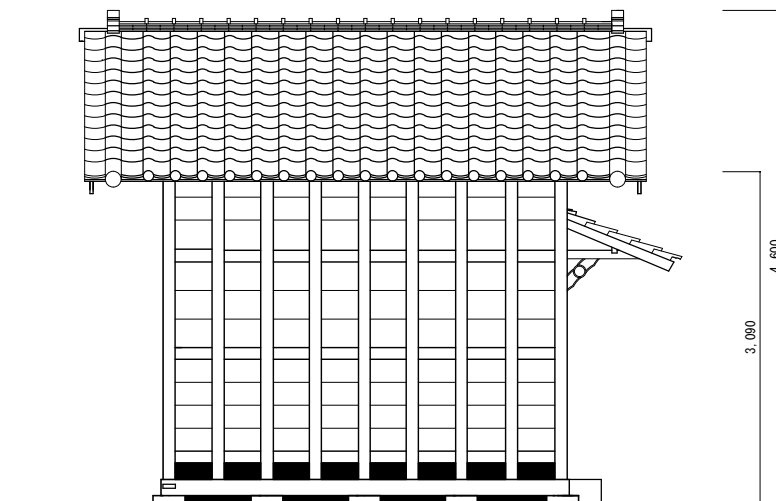
所在地	宮城県多賀城市高崎
遺構, 所有名	No. 40 S家住宅板倉(南棟)
図名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2014年8月28日
調査者	渡邊、船山、久保、古川
東北工業大学建築史研究室	



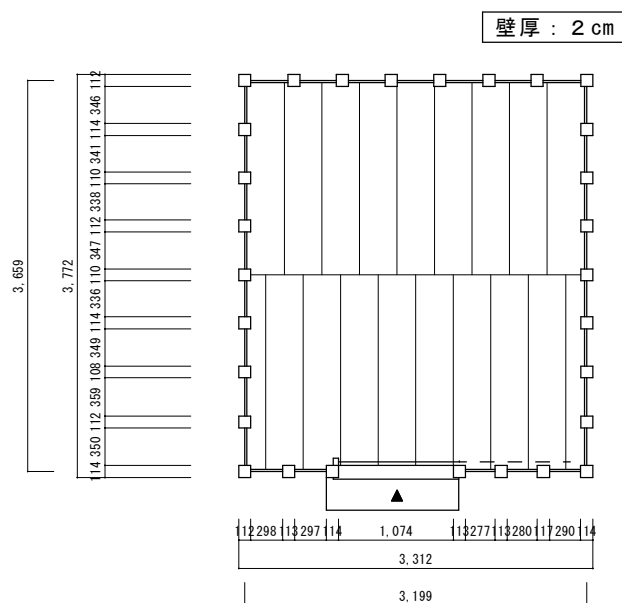
断面図



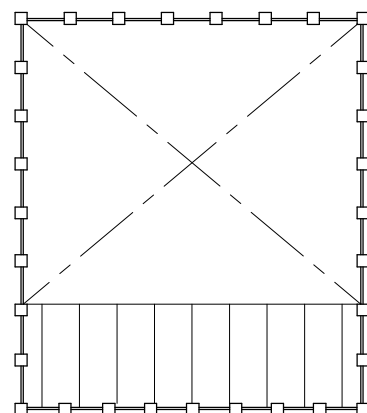
正面立面図



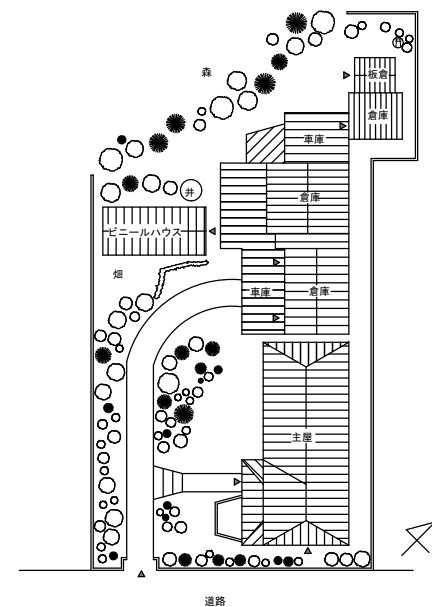
側面立面図



1 階平面図

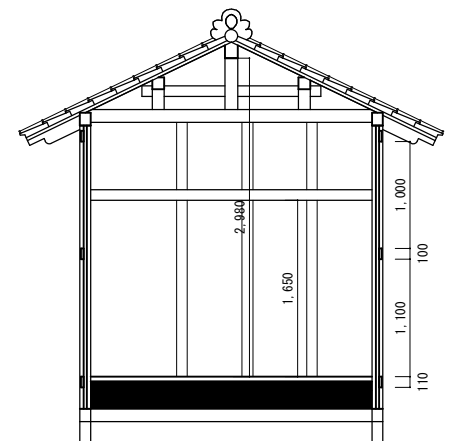


中二階平面図

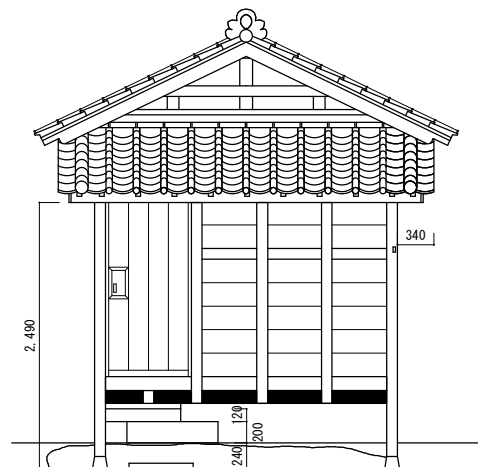


配置図

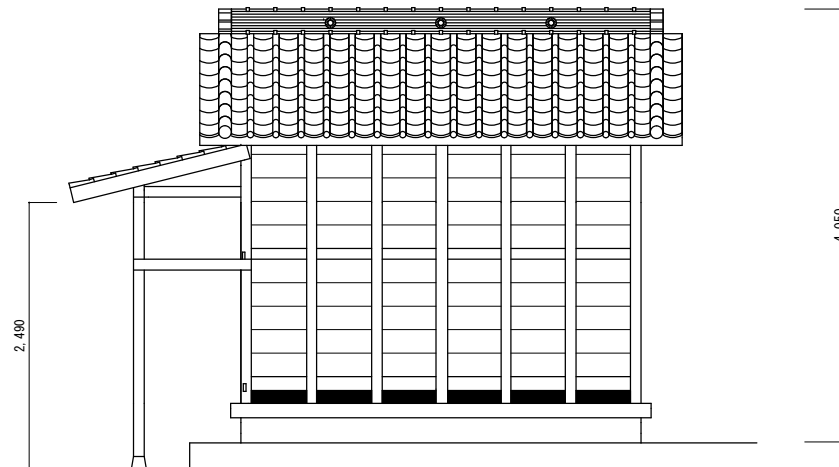
所在地	宮城県多賀城市八幡
遺構, 所有名	No. 41 W家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月9日
調査者	石崎、小西、関、山形
東北工業大学建築史研究室	



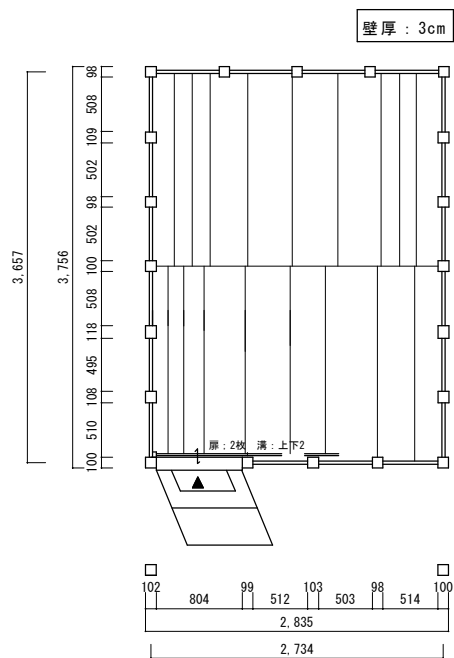
断面図



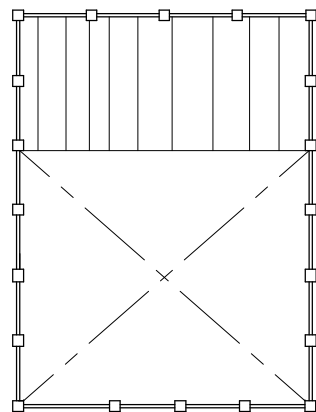
正面立面図



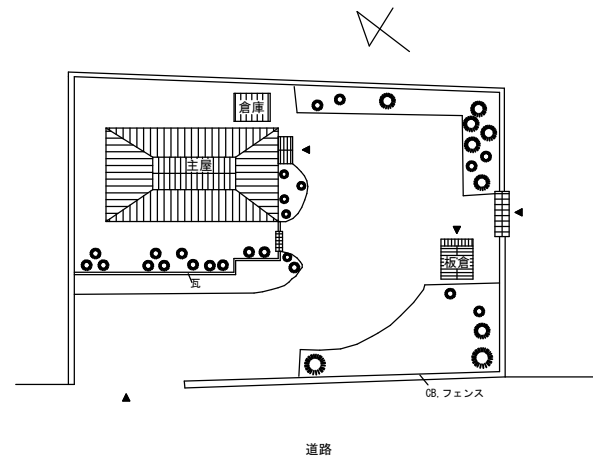
側面立面図



1 階平面図



中二階平面図

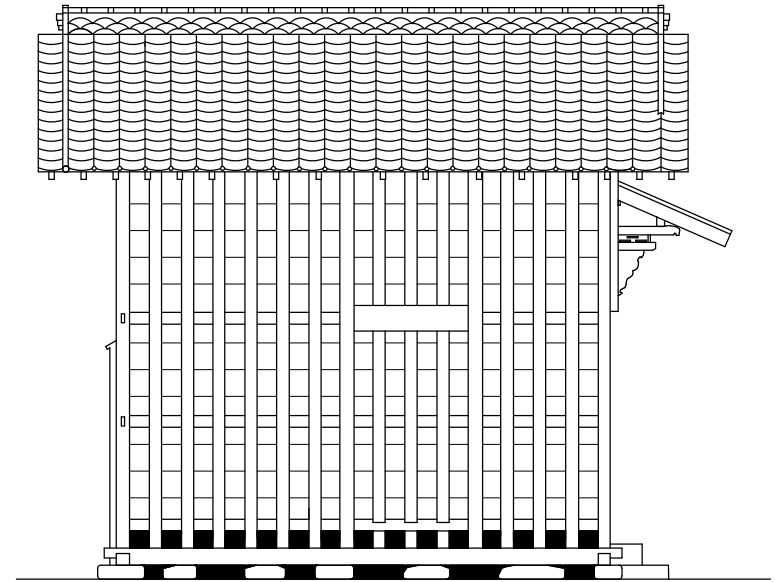
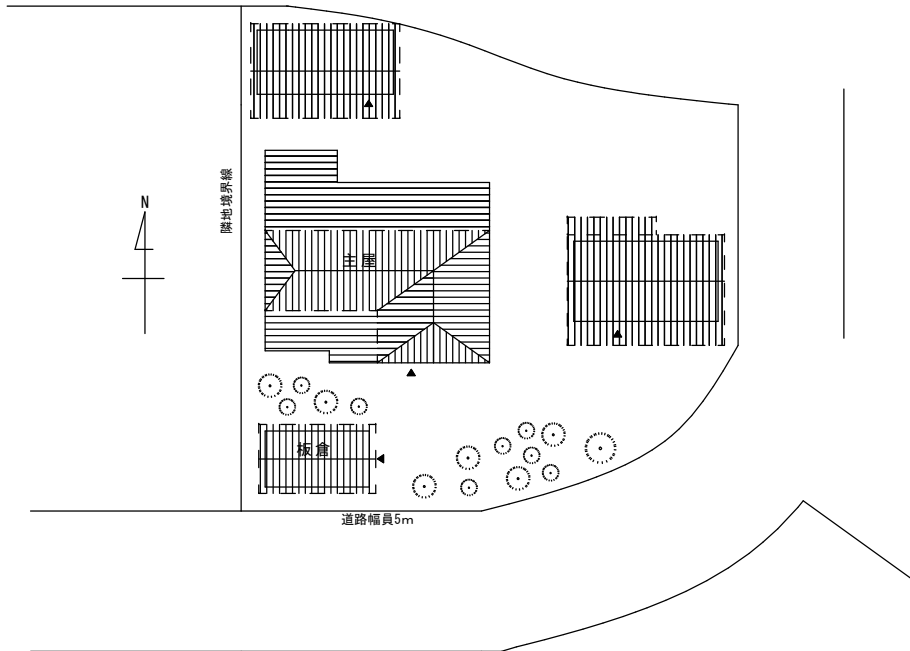


配置図

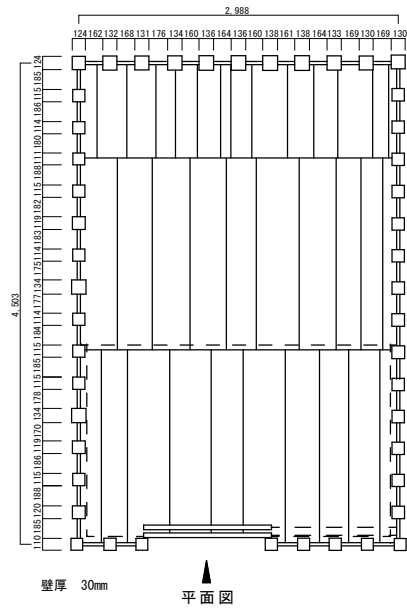
所在地	宮城県多賀城市八幡
遺構, 所有名	No. 42 T 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月9日
調査者	間藤、久米、渡邊
東北工業大学建築史研究室	



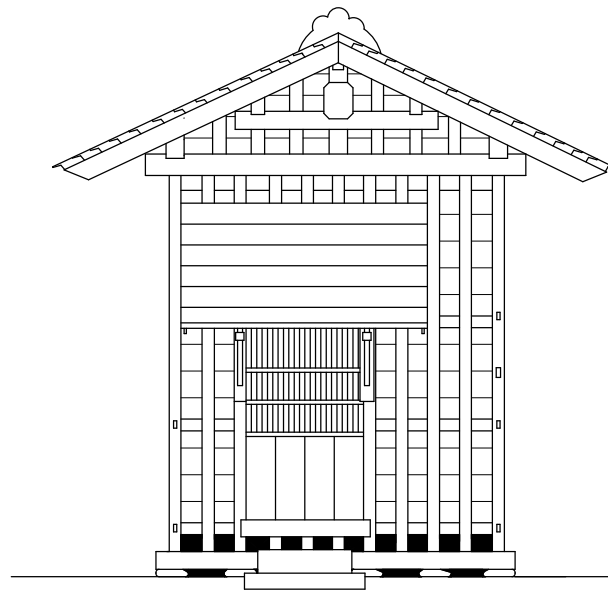
所在地	宮城県多賀城市八幡
遺構, 所有名	No. 43 G 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面図、側面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年8月10、11日
調査者	日野、東海林
	東北工業大学建築史研究室



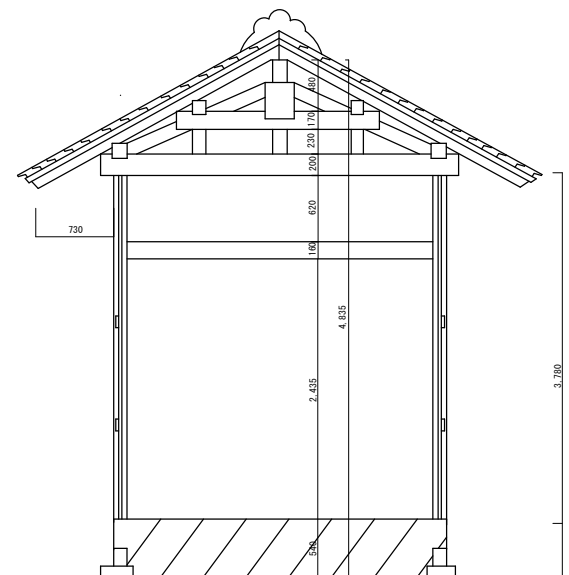
側面図



平面図

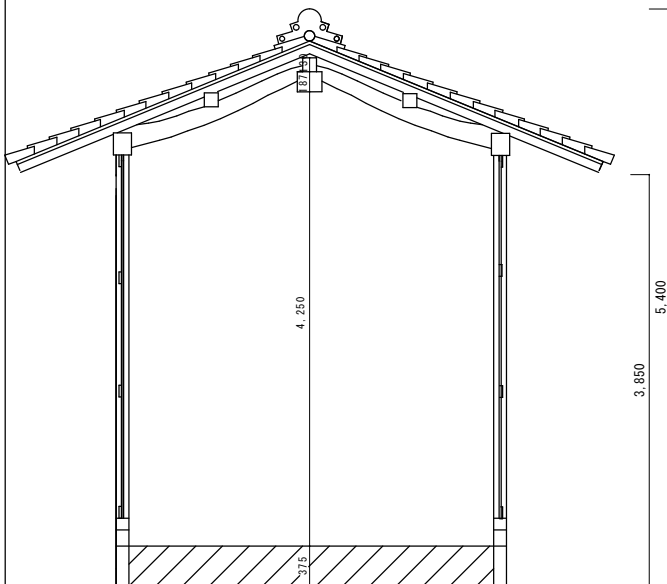


正面図



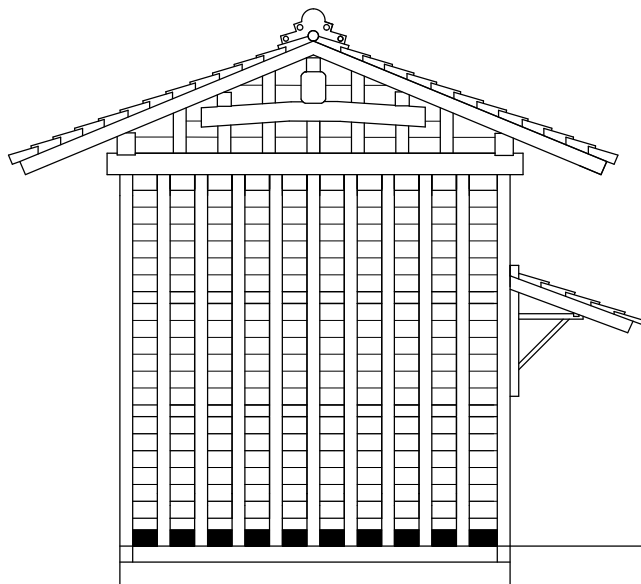
断面図

所在地	宮城県多賀城市八幡
遺構、所有名	No. 44 M家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正・側面立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年8月10日
調査者	日野、豊田
東北工業大学建築史研究室	

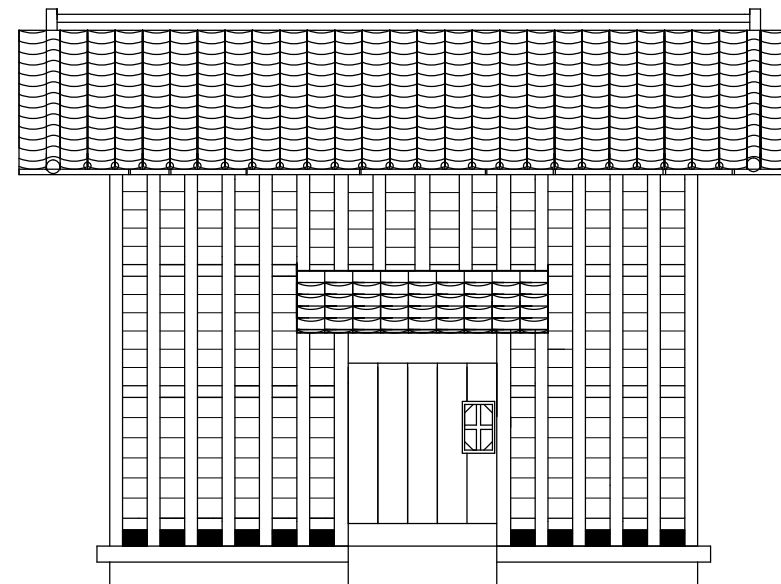


断面図 1/50

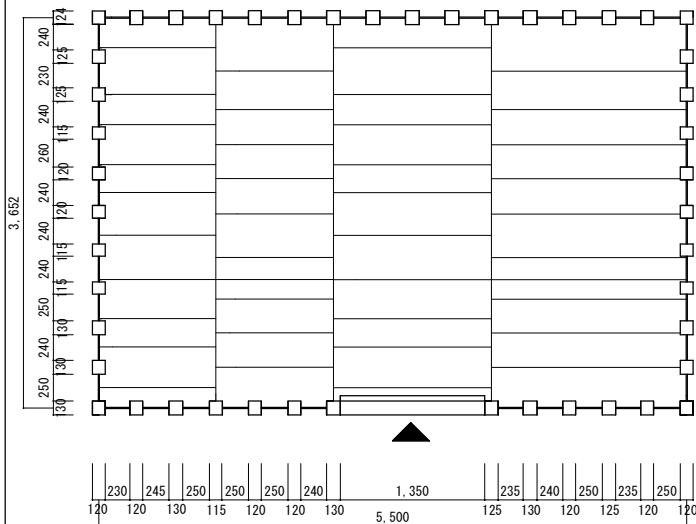
板壁厚10mm



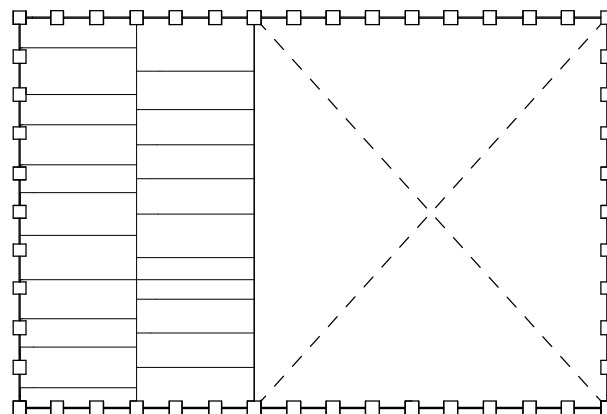
側面図 1/50



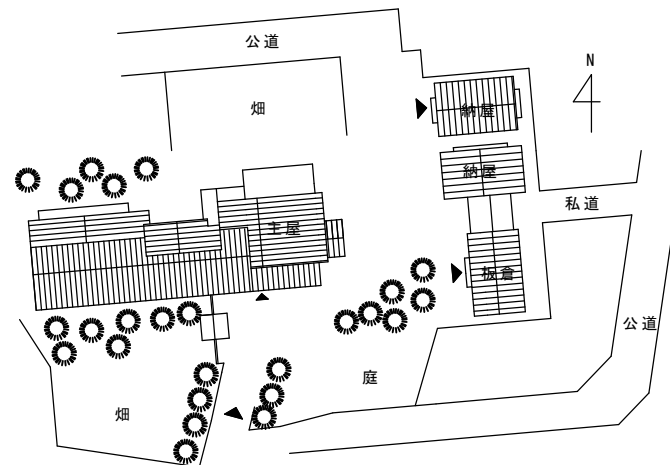
正面図 1/50



1 階平面図 1/50

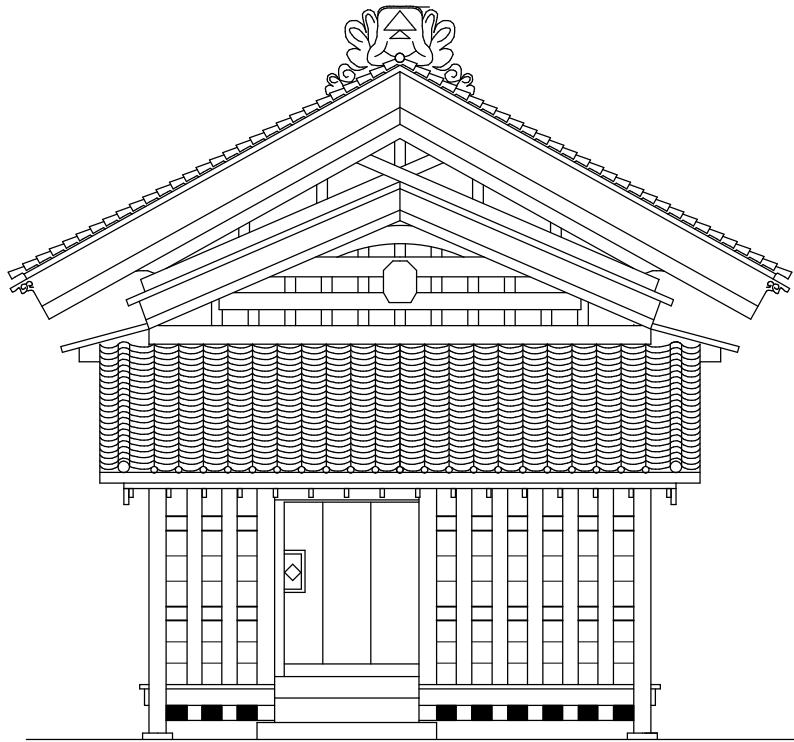


中 2 階平面図 1/50

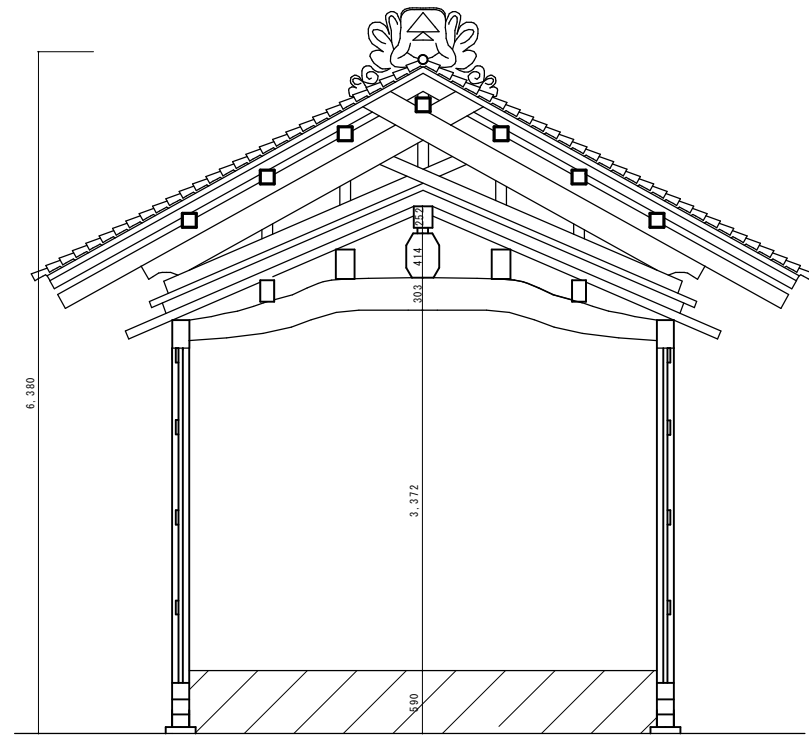


配置図

所在地	宮城県多賀城市八幡
遺構, 所有名	No. 45 T 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年8月8日
調査者	渡邊、鈴木、加藤、佐々木
東北工業大学建築史研究室	

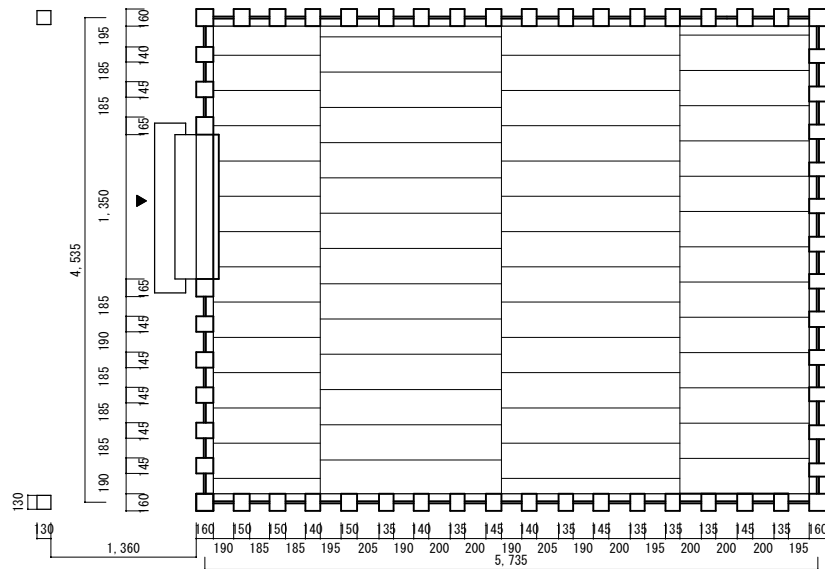


正面図1/50



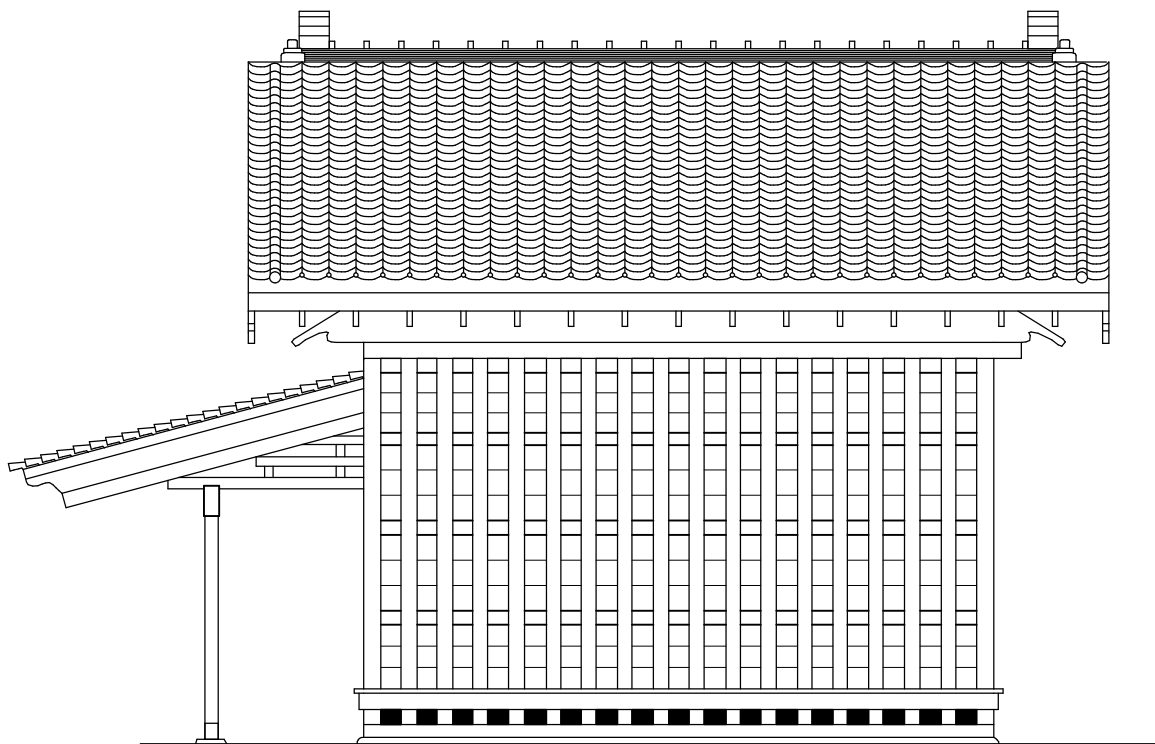
断面図1/50

板壁厚20mm

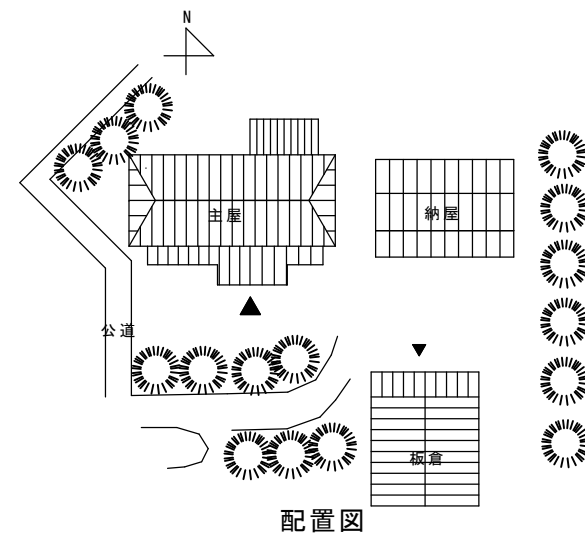


平面図1/50

所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 46 S 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面側立面図
スケール	1/50
調査時	2012年9月25日
調査者	熊谷、田尻、斉藤、渡邊
東北工業大学建築史研究室	

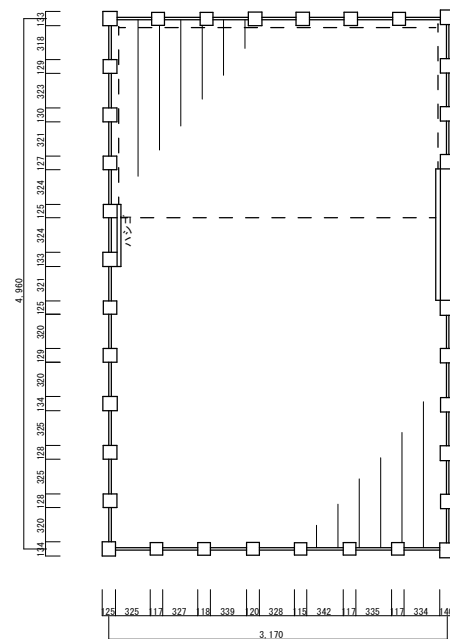
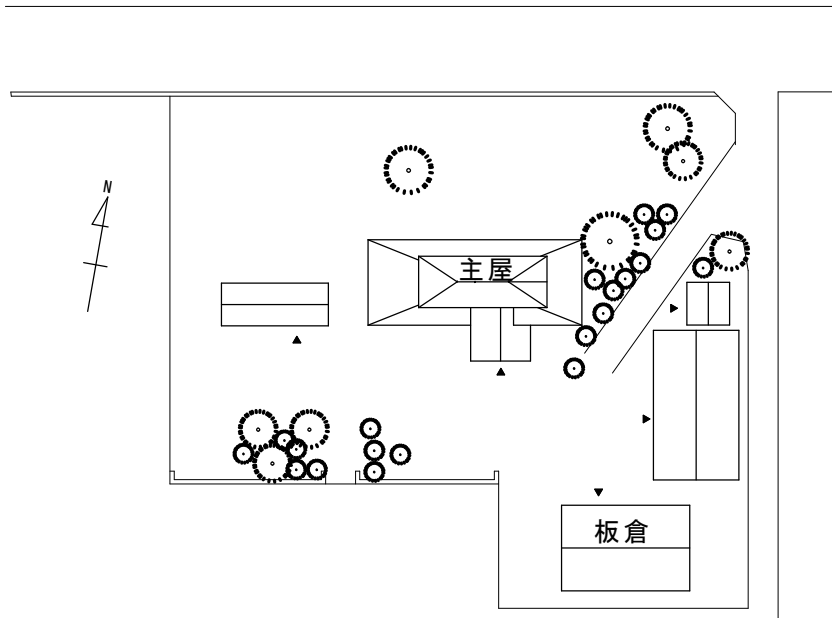


側面図1/50

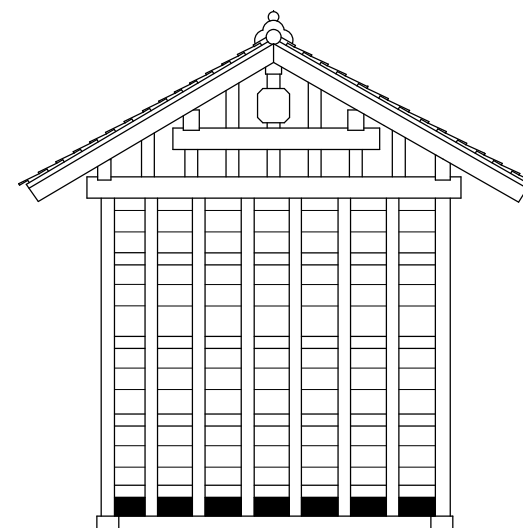
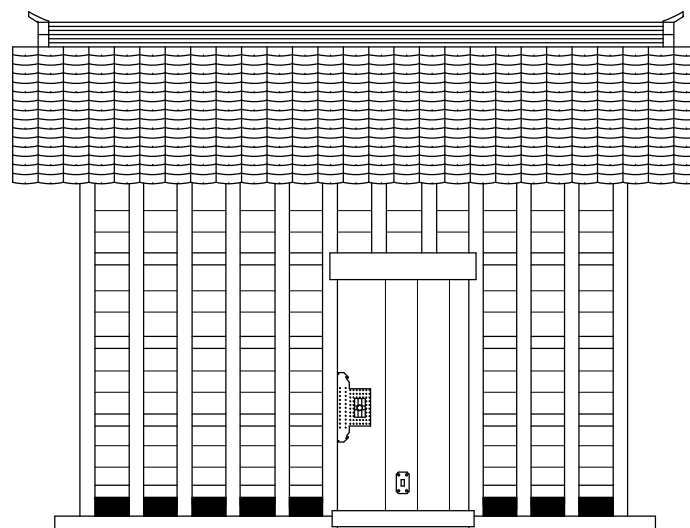
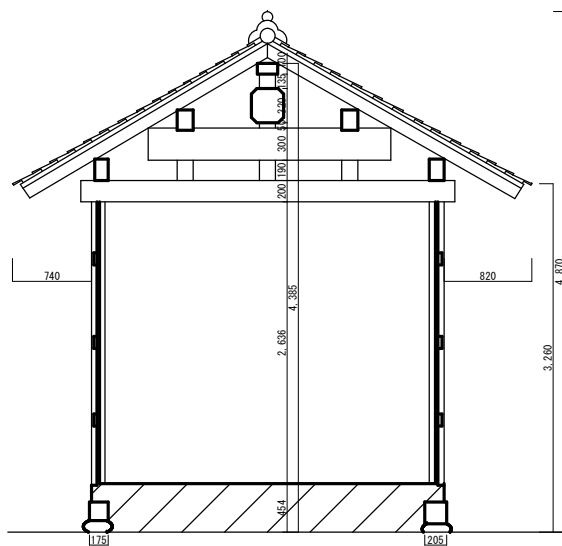


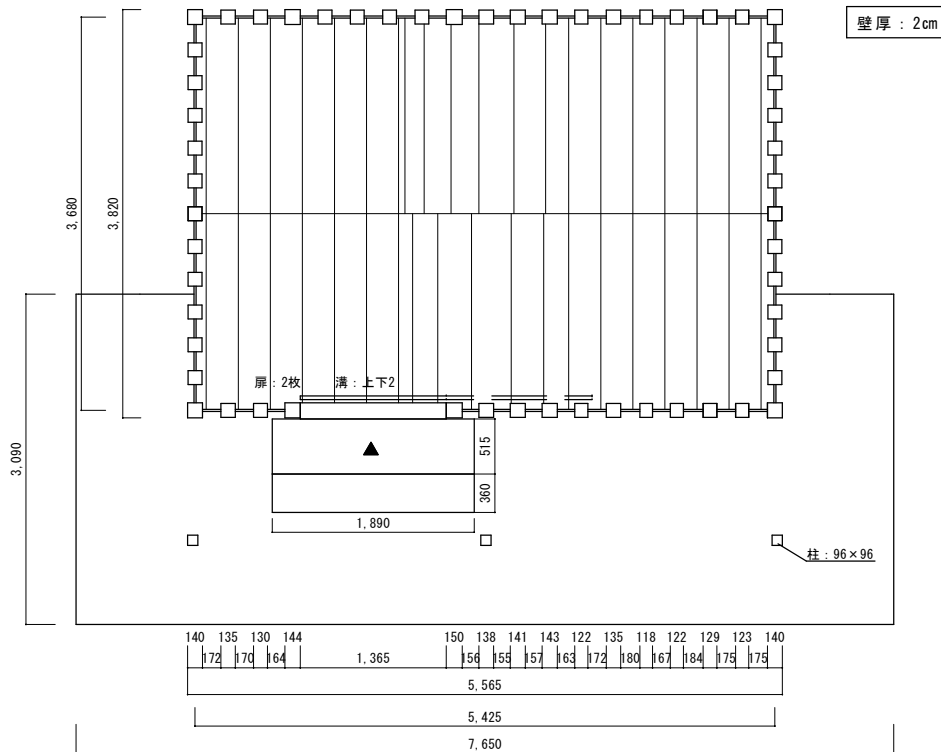
配置図

所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 46 S 家住宅板倉
図 名	側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年9月25日
調査者	熊谷、田尻、斉藤、渡邊
東北工業大学建築史研究室	

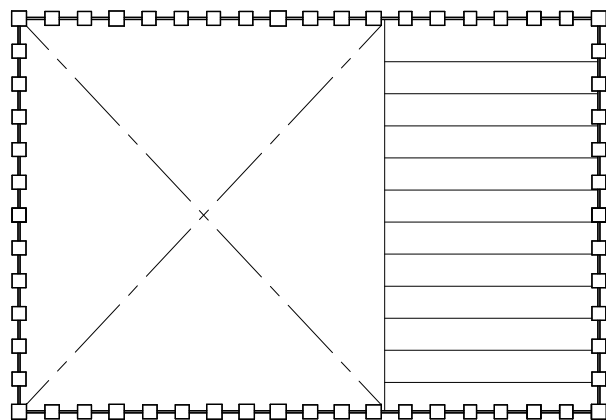


所在地	宮城県多賀城市市川
遺構、所有名	No. 47 S家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正・側面立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2011年9月10日
調査者	豊田
東北工業大学建築史研究室	

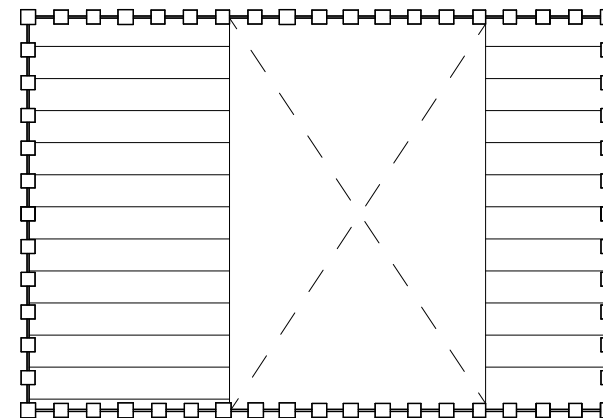




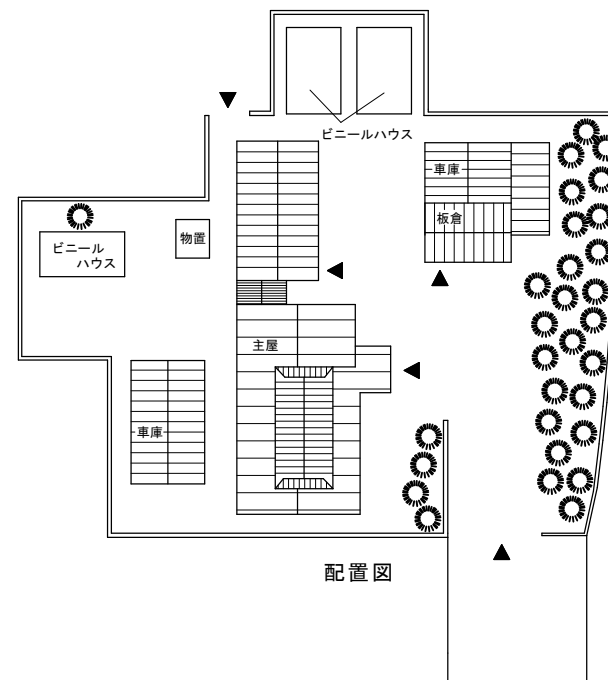
1階平面図



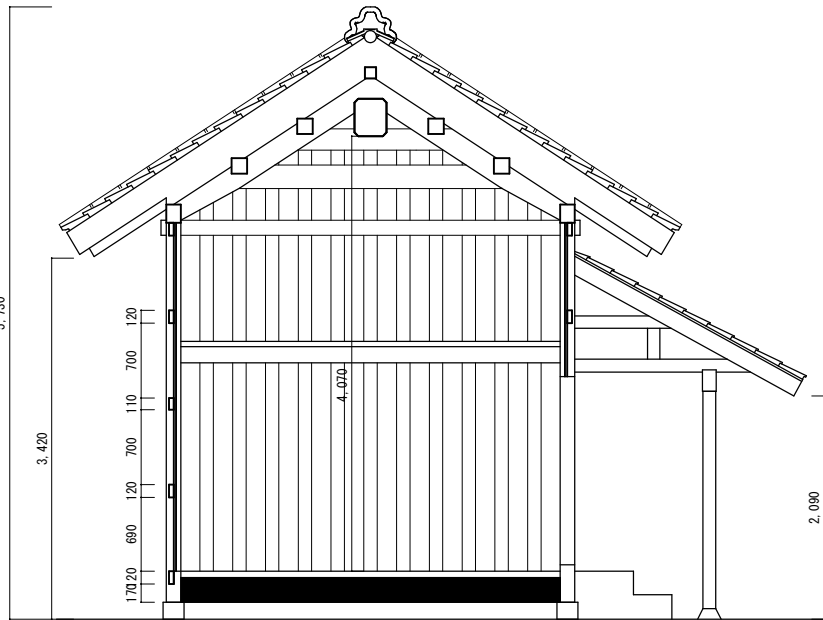
二階平面図



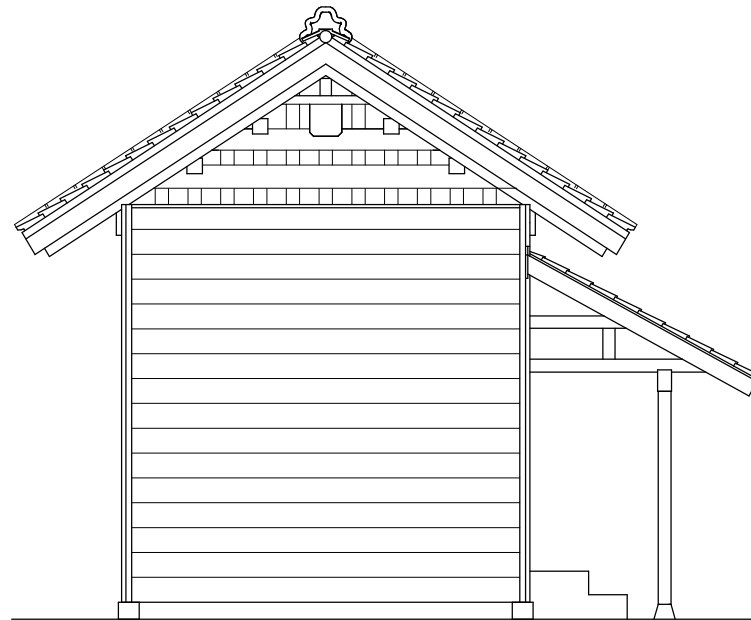
中二階平面図



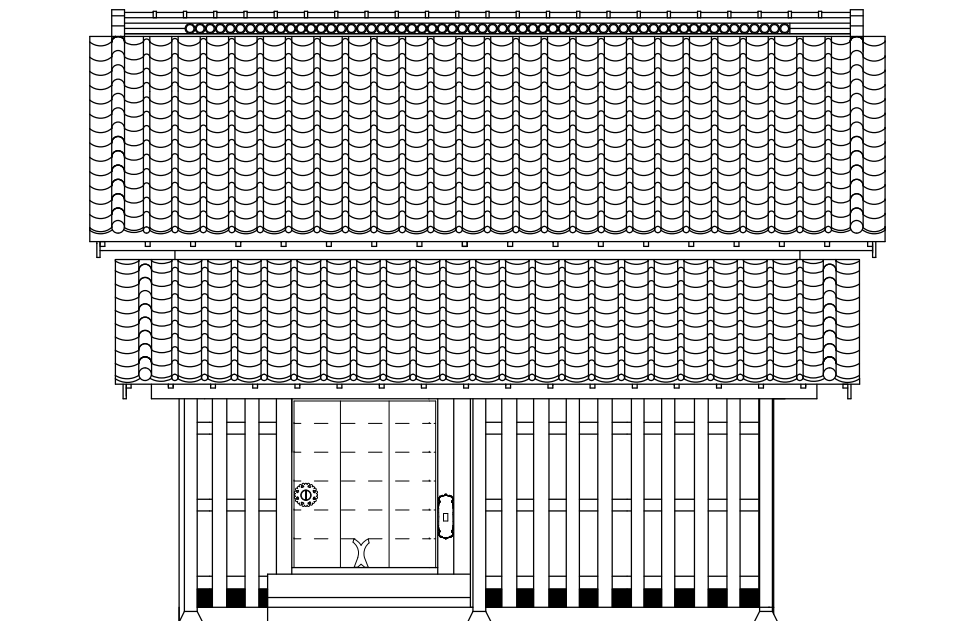
所在地	宮城県多賀城市南宮町
遺構, 所有名	No. 48 T 家住宅板倉
図 名	平面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月22日
調査者	渡邊、久米、間藤
東北工業大学建築史研究室	



断面図

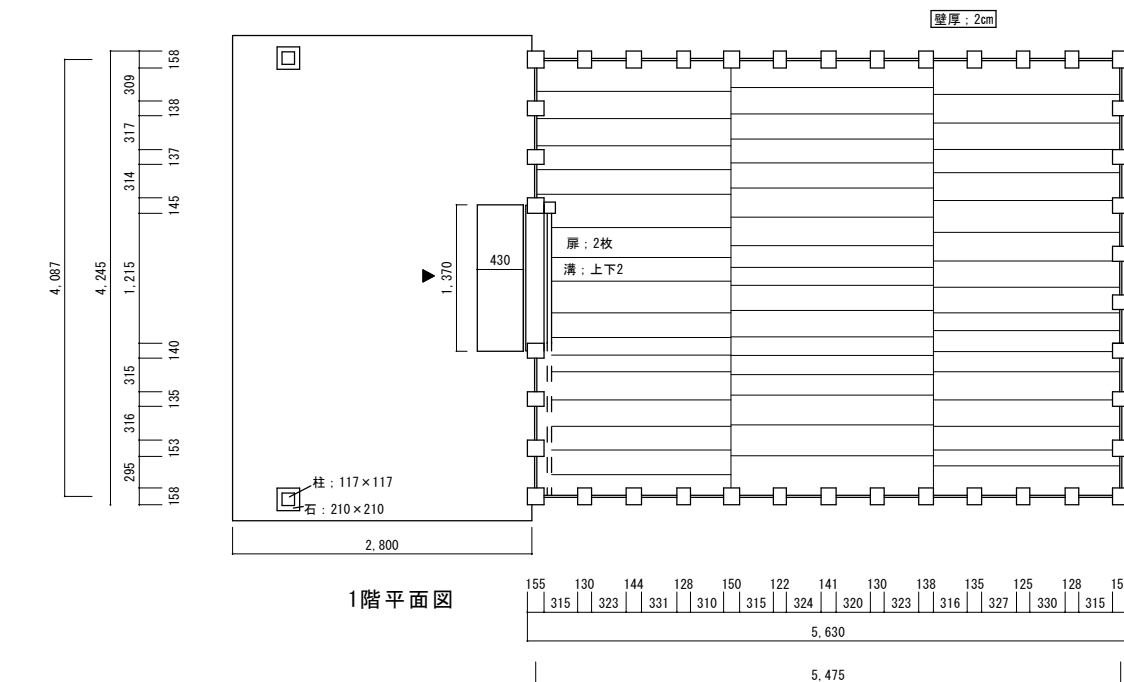


側面立面図

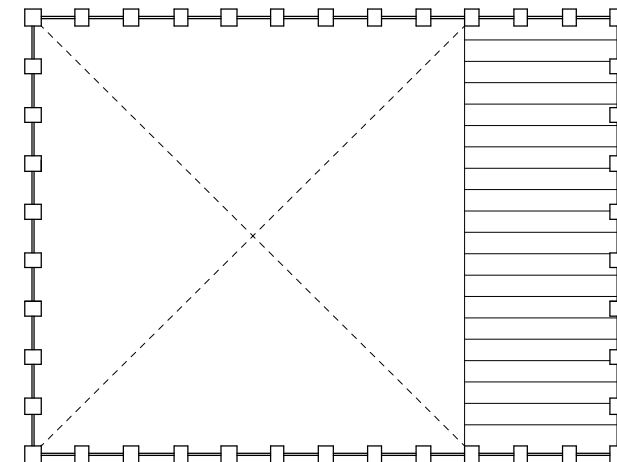


正面立面図

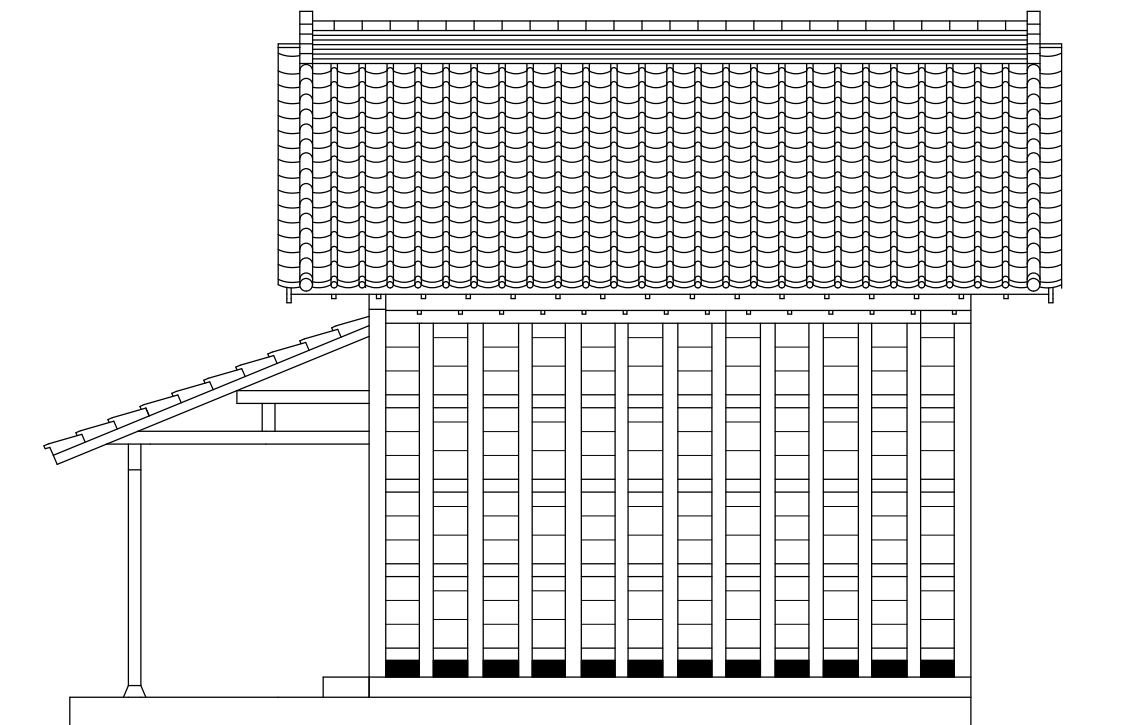
所在地	宮城県多賀城市南宮町
遺構, 所有名	No. 48 T 家住宅板倉
図 名	断面図、正面・側面側立面図
スケール	1/50
調査時	2013年8月22日
調査者	渡邊、久米、間藤
東北工業大学建築史研究室	



1階平面図

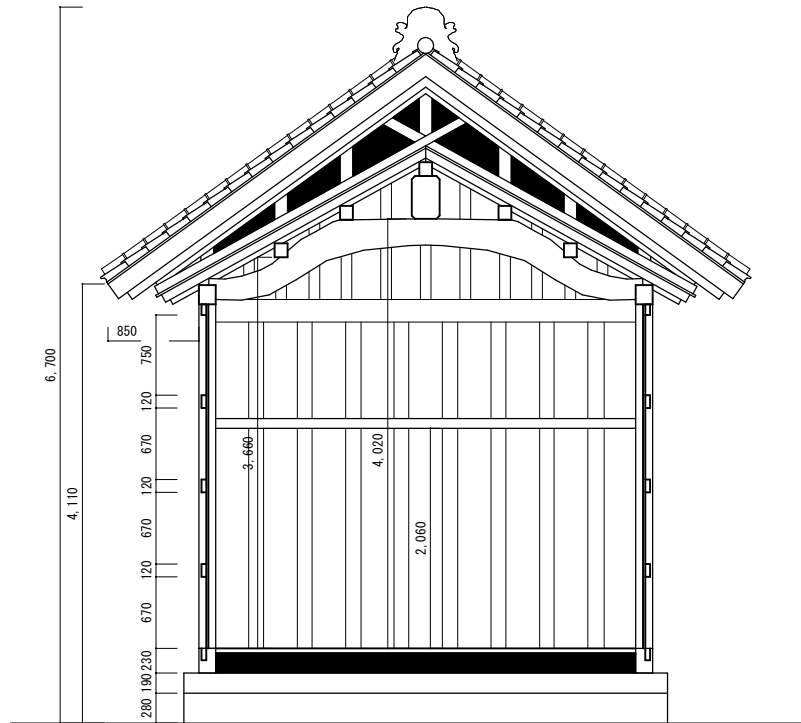


中2階平面図

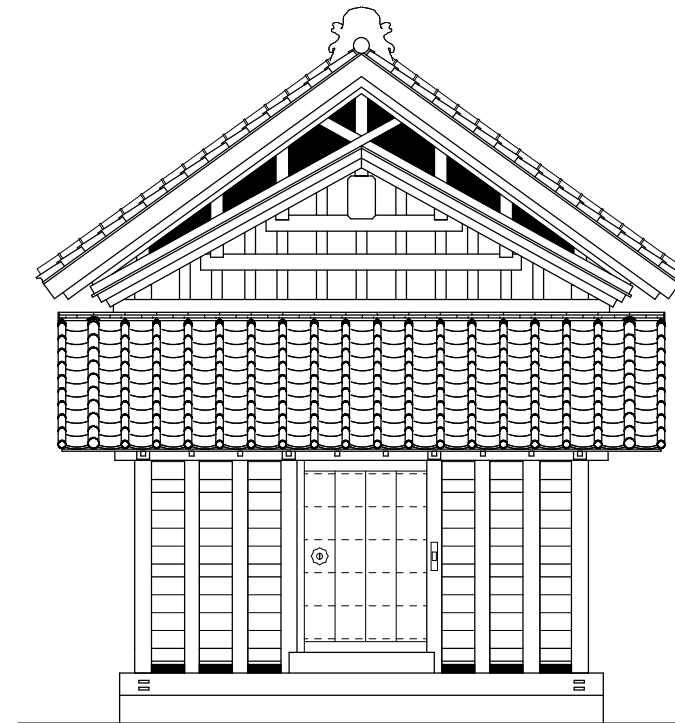


側面立面図

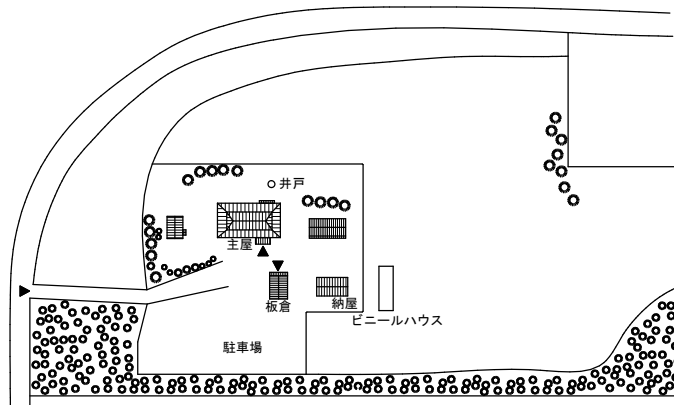
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 49 S 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図
スケール	1/50
調査時	2013年9月6日
調査者	渡邊、久米、関藤
東北工業大学建築史研究室	



断面図

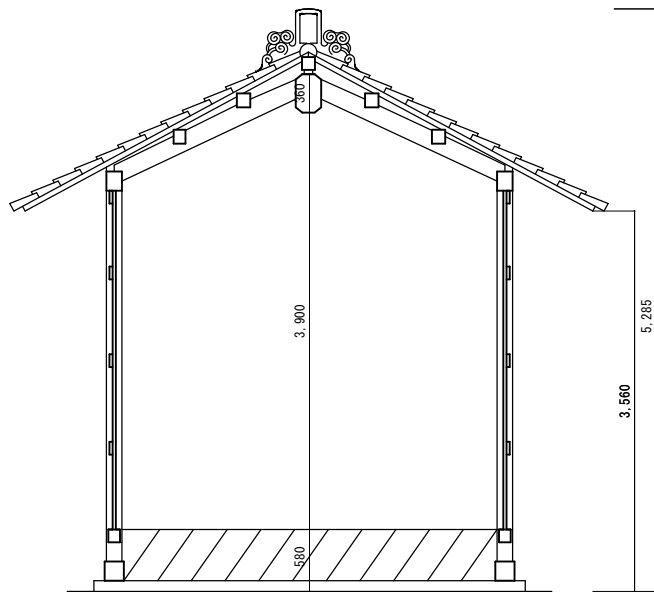


正面立面図



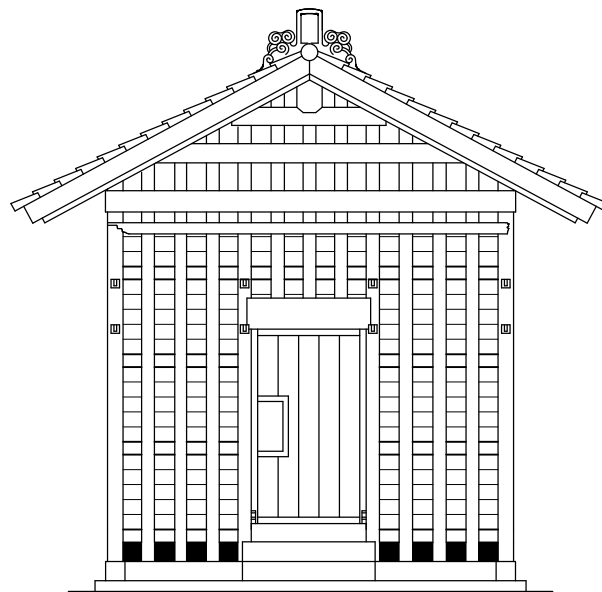
配置図

所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 49 S 家住宅板倉
図 名	正面・側面立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年9月6日
調査者	渡邊、久米、間藤
東北工業大学建築史研究室	

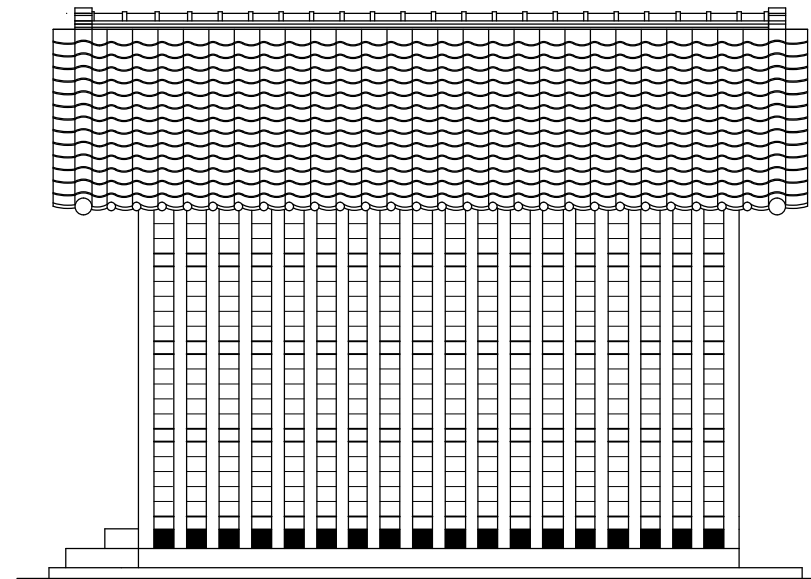


断面図 1/50

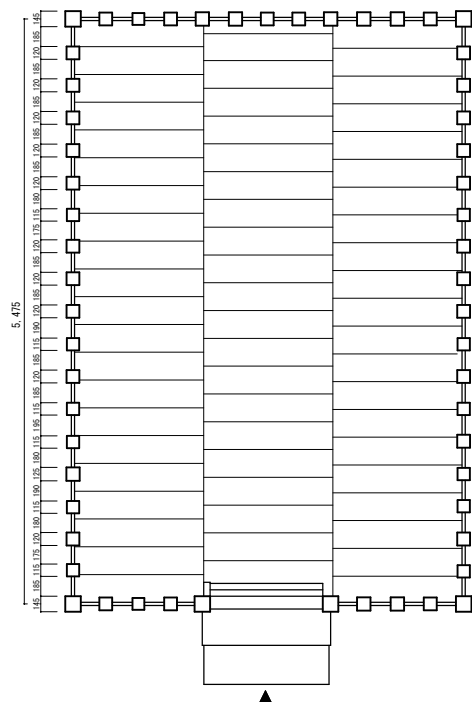
板壁厚30mm



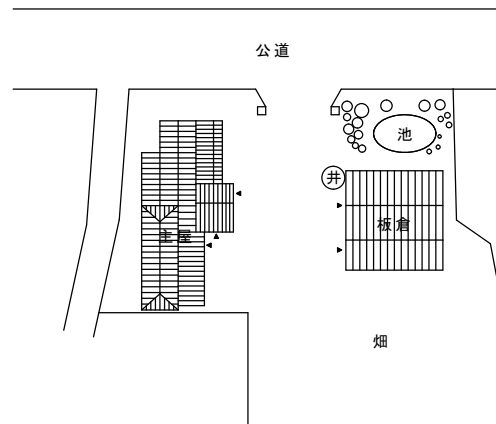
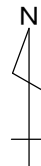
正面図 1/50



側面図 1/50

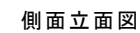
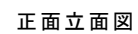


1階平面図 1/50

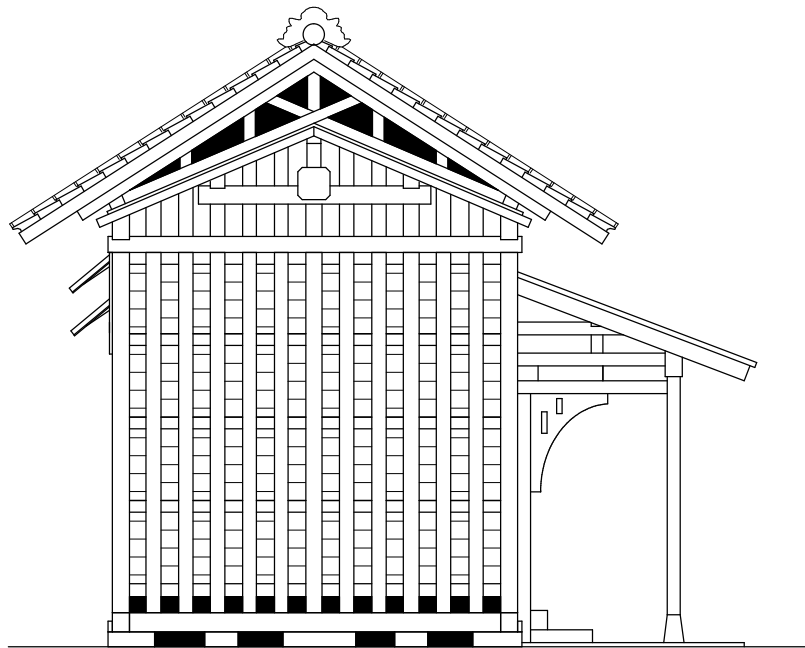


配置図

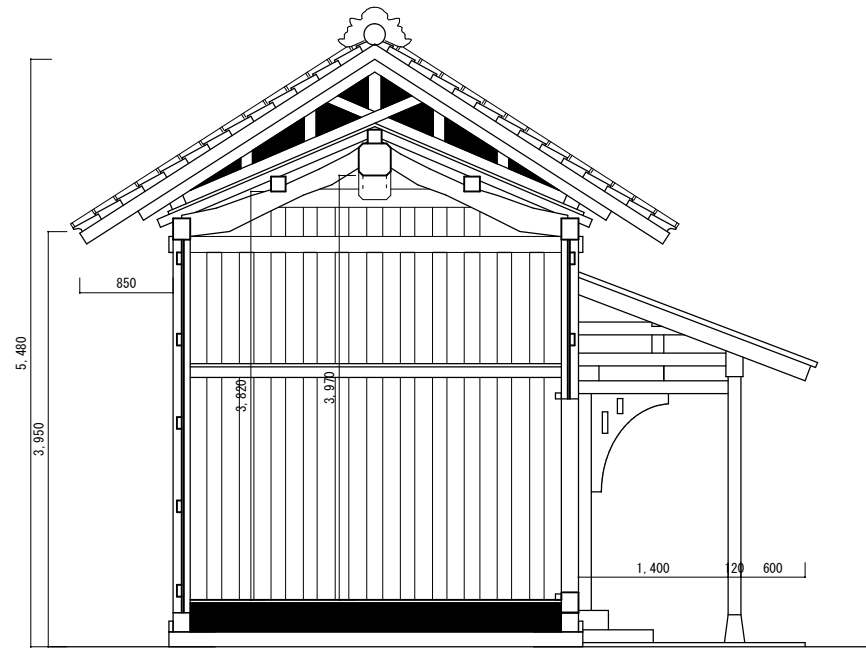
所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 50 S家住宅板倉
図名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2012年9月24日
調査者	鈴木、佐々木、加藤、渡邊
東北工業大学建築史研究室	



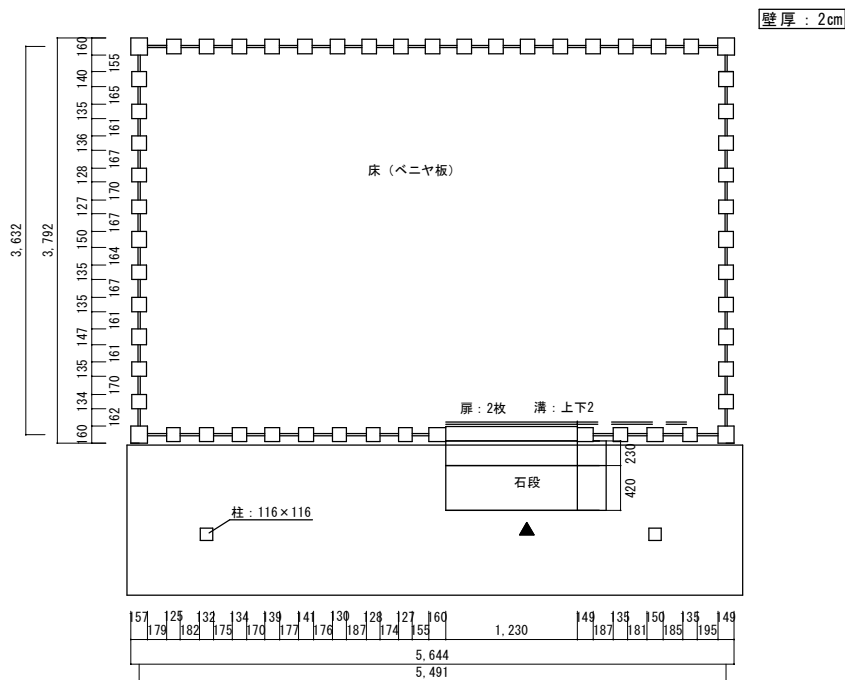
所在地	宮城県多賀城市市川
遺構, 所有名	No. 51 S 家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、正面・側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年9月6日
調査者	渡邊、間藤、久米
東北工業大学建築史研究室	



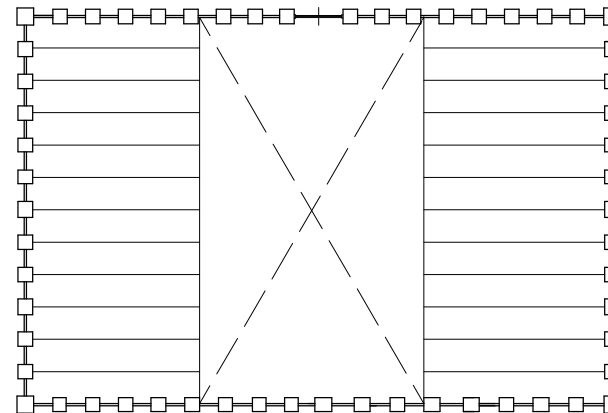
側面立面図



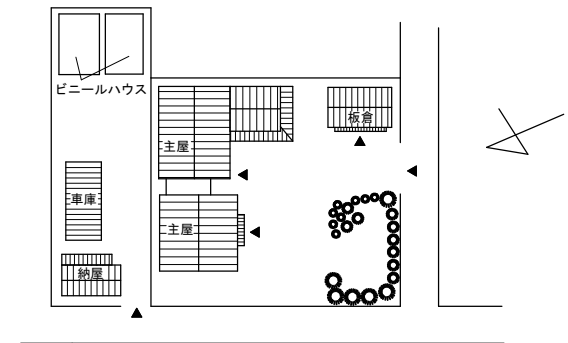
断面図



1階平面図

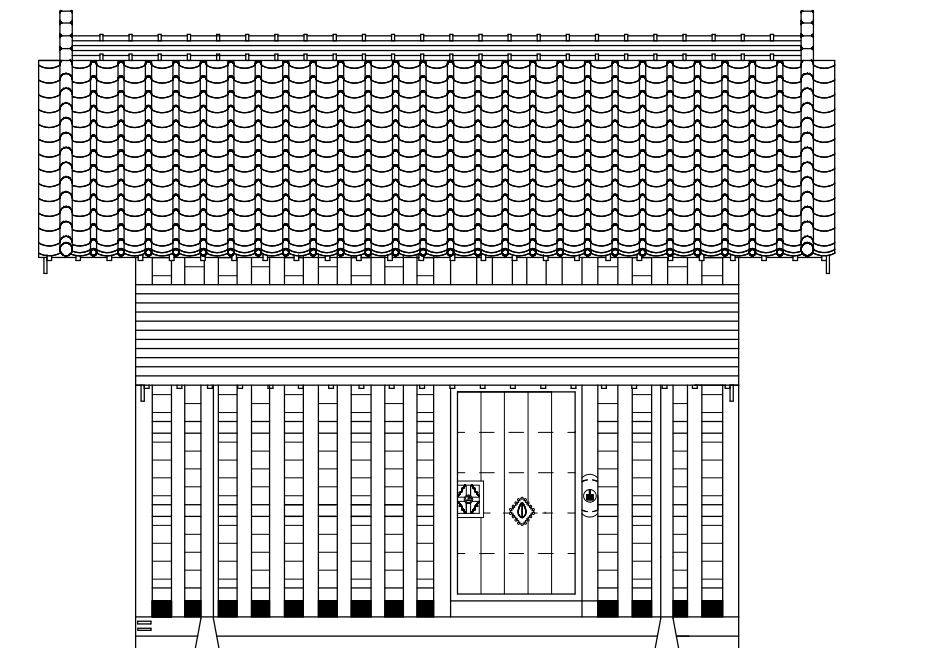


中二階平面図



配置図

所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 52 T家住宅板倉
図 名	平面図、断面図、側面側立面図、配置図
スケール	1/50
調査時	2013年8月22日
調査者	渡邊、久米、間藤、石崎
東北工業大学建築史研究室	



正面立面図

所在地	宮城県多賀城市南宮
遺構, 所有名	No. 52 丁家住宅板倉
図 名	正面立面図
スケール	1/50
調査時	2013年8月22日
調査者	渡邊、久米、間藤、石崎
東北工業大学建築史研究室	